

都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う

瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告

1999年3月

財団法人 東大阪市文化財協会

例　　言

1. 本書は都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査の概要報告である。調査地は大阪府東大阪市西岩田1丁目地内に位置する。

2. 本調査は大阪府八尾土木事務所の委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が1997(平成9)年度の45次調査と1998(平成10)年度の45-2次調査の2年度にまたがって実施した。発掘調査に伴う工事は大阪府八尾土木事務所から発注され下記の業者が行った。概要報告は本書一冊にまとめた。

・45次調査

調査期間 1997(平成9)年12月1日～1998(平成10)年3月27日

調査面積 約1091m²

施工業者 株式会社江州

調査担当 金村浩一　藤城泰(故人)

・45-2次調査

調査期間 1998(平成10)年7月22日～1998(平成10)年12月18日

調査面積 約780m²

施工業者 名倉建設株式会社

調査担当 曽我恭子　金村浩一

3. 調査の体制は下記のとおりである(1999年3月末現在)。

理事長 日吉亘(東大阪市教育委員会教育長)

常務理事 浜口英雄(東大阪市教育委員会社会教育部次長)

事務局長 中村正仁(東大阪市教育委員会社会教育部文化財課主幹)

庶務主任 上野節子

庶務部員 朝田直美　大林亨

調査補助 高良浩　今林信祐　西村和浩　内村純子　松井淳子　梶浦泰久　長谷由紀子　大西智子

辻康男　伊東達貴　杉本憲治　山本健一郎　田中正司　藤井由佳　佐藤智浩　岡本光司

本田けい子　今井喬子　武田慎平　水沼優(順不同)

4. 遺構写真は調査担当者が主に撮影し一部を池崎智詞が撮影した。

遺物写真は、株式会社スタジオG.F.プロに委託して撮影したものと、池崎智詞が撮影したものがある。

5. 本書の執筆は調査担当者と別所秀高・松田順一郎が行い、第9章はパリノ・サーヴェイ株式会社に分析を委託したものである。執筆分担は目次に示した。各執筆者の意志を尊重し、全体の統一は図らなかつた。

6. 調査にあたり堀江門也・阿部幸一・今村道雄(大阪府教育委員会)、赤木克視・後藤信義(財団法人大阪府文化財調査研究センター)、松宮昌樹(桜井市教育委員会)、西山要一(奈良大学)、低湿地遺跡研究会諸氏、古代の土器研究会諸氏他の方々からご指導、ご教示を賜わった(敬称略、順不同)。

7. 調査にあたっては大阪府八尾土木事務所建設課街路建設係(佐野行弘係長)の今井浩文・北川好章・岡安宏の諸氏を初め、若江岩田駅前地区市街地再開発事業関係者、関西電力株式会社、関電興業株式会社、博田建設、周辺市民などの多くの方々から理解と協力を得た(敬称略、順不同)。記して謝意を表したい。

目 次

例 言	
第1章 はじめに (金村浩一)	1
1 調査に至る経緯と経過	1
2 調査の方法	4
3 位置と環境	6
第2章 層序の概略 (金村)	7
第3章 弥生時代の調査成果 (曾我恭子)	13
1 弥生時代前期の遺跡地周辺の環境	13
2 調査地の層序	14
3 弥生時代中の遺構と遺物	20
1) 弥生時代前期以前から	20
2) 弥生時代前期の遺構と遺物	20
3) 弥生時代中期の遺構と遺物	52
4 小結	76
第4章 古墳時代の調査成果 (金村)	89
1 第V層	89
2 第V層上面及び層中の遺構	90
3 小結	93
第5章 歴史時代の調査成果 (金村)	97
1 近現代の調査成果・第IX(近世耕土)層上面	97
2 近世の調査成果・第VII(中世遺物包含)層上面	98
3 近世～近現代の調査の小結	101
4 中世の調査成果	101
5 中世の調査の小結	167
6 古代の調査成果・第VI(平安時代整地)層上面	170
7 古代の調査の小結	191
8 歴史時代のまとめ	194
付 協会試掘遺構等対照表	213
第6章 立会調査 (金村)	223
1 はじめに	223
2 調査の結果	223
3 小結	224
第7章 瓜生堂遺跡第45次調査地点でみられた堆積環境変遷過程と人間活動の履歴 (別所秀高)	225
1 はじめに	225
2 瓜生堂遺跡周辺の地形概観	225
3 瓜生堂遺跡第45次調査地点の堆積相	226
4 各層準の年代	229
5 堆積環境の変遷過程と人間活動の履歴	229
第8章 瓜生堂第45-2次発掘調査地でみられた古地震痕跡 (松田順一郎)	233
1 はじめに	233
2 調査地の層序と不搅乱試料採取層準	233
3 泥質堆積物の地震動による変型構造	234
4 まとめ	241
第9章 瓜生堂遺跡第45-2次調査の古環境復元 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	243
はじめに	243
1 調査地点の層序試料	243
2 分析方法	243
3 結果	244
4 考察	247

報告書抄録

都市計画道路大阪瓢箪山線は近鉄奈良線の高架化とともに大阪中央環状線(以下中環)までが供用されている。現在では市民にとって必要不可欠な道路となつており、中環以東の建設が切望されていた。一方では近鉄奈良線若江岩田駅付近の再開発事業が進行しており、中環から近鉄奈良線若江岩田駅付近までの早期開通が必要となつた。

しかし、建設予定地の一部は瓜生堂遺跡の北東部にあたり、その範囲は前述のように不明確なものであった。このため1990(平成2)年度、大阪府教育委員会(以下府教委)によって西岩田2丁目地内で建設予定地の試掘調査が実施されることとなつた(以下府試掘)。結果、中世の溝や弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代前期の遺物包含層等が確認され、遺跡がさらに広がつてゐることが判明した⁵。1996(平成8)年度には財団法人東大阪市文化財協会(以下協会)によってさらに東方の西岩田1丁目から4丁目地内で試掘調査が実施された(以下協会試掘)。結果、中世の井戸等が検出されたが、弥生時代の頗る著な遺構や遺物は確認されなかつた⁶。この試掘調査によって瓜生堂遺跡の範囲はさらに東へ拡大されることとなつた。その後、大阪府八尾土木事務所(以下八尾土木)と市教委の間で協議がもたれ、西岩田1丁目地内の発掘調査が八尾土木から協会に委託され、実施される運びとなつた。

発掘調査は当初から問題を含むものであった。協会試掘の結果によって、弥生時代の地層は調査地内に存在することが判明していたが、中世遺構の調査を主体とする現地表面から約1.5m下までを対象とした調査計画が作成された。計画実働は85日で、調査面積は1713m²、単年度事業であった。弥生時代の遺構や遺物が発見された場合について、市教委と協会の協議が不十分なまま調査に着手せざるをえず、後述のように結果的に全体の工程を遅らせる原因となつた。

1997(平成9)年12月1日から調査を開始した。協会試掘では現地表面から約1m下までを機械掘削したため上層部の様相は不明であったが、調査地中央部においては現地表面下に遺構面が存在する等、起伏に富んだものであることが判明した。1998年1月には現地表面から約1.5m下の地層から木棺を思わせる板材が発見された(図1.3)。この板材は結果的に木棺ではなかつたが、同じ地層から完形に復元できた土師器甕(図2.2)が出土し、より下層に遺構や遺物が埋蔵されている可能性が高まつた。東端では円筒埴輪を井戸枠とする井戸(図1.4)や中世の瓦質蓋を井戸枠とする井戸(図1.5)等が検出され、遺跡が調査地より東方に広がつてゐることが確実となつた。

これらの新たな事実を受けた八尾土木と協会の協議の結果、調査地の一部について現地表から約5m下までを、他の部分は1.8m下までを調査対象とすることとなり、工程も2年度にわたることとなつた。この変更に理解と協力をいただいた八尾土木諸氏に感謝したい。事務手続き上、1997(平成9)年度調査を第45次調査、1998(平成10)年度調査を第45-2次調査とし、45次調査の現場作業は1998(平成10)年3月27日に終了した。調査地より東方に於いては関西電力株式会社と関電興業株式会社による管路新設工事が行われた際に立会調査を実施し、遺構や遺物の分布を確認することができた(図1.6)。立会調査は1998(平成10)年3月30日から4月24日まで整理作業中に随時行い、土層観察と遺物採集に努めた。その後、瓜生堂遺跡の範囲は岩田遺跡に接するまで拡大されることとなつた。

45-2次調査は1998(平成10)年7月22日に開始した。上層部の近世、中世、古代の遺構を調査し、弥生時代中期の方形周溝墓を検出することができた。方形周溝墓は遺跡の最も東に位置するもので、当時の瓜生堂遺跡の広がりを検討する重要な資料を得ることができた。その重要性に鑑み現地説明会を11月7日に開催し、

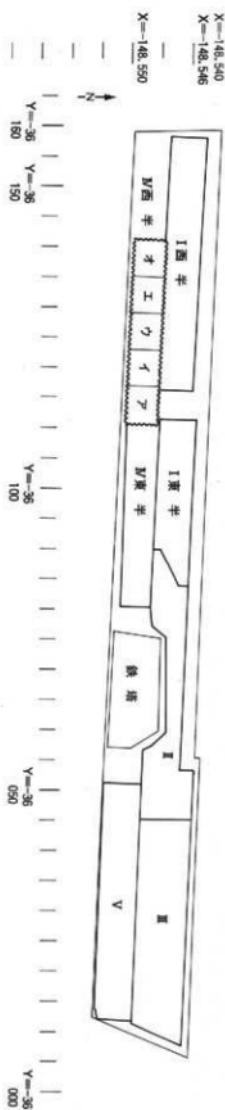


図1.8(左) 調査地区割図 ($S=1:800$)

図1.9(上) 土地条件図に表示の自然堤防 ($S=1:25000$)

約100名の参加を得た(図1.7)。現地表から約4.5m下までを掘削し、遺構や遺物は存在しないと思われた頃、弥生時代前期包含層を確認し、柱穴等の遺構を検出した。このため、調査期間は若干の遅延をみたが、弥生時代前期の集落が明らかとなる貴重な成果をあげることができた。12月13日には低湿地遺跡研究会(代表福岡澄男)による検討会が開催され、多くの教示を得ることができ、12月18日に現場作業を終了した。

現場作業終了後に整理作業を開始したが、報告書刊行を1999(平成11)年3月とされたため、不十分な整理となった。特に、古墳時代の須恵器や埴輪、管玉等を発見したが、古代以降に搅乱された状態で出土したため、ここでは報告せず、機会を改めることとした。

2 調査の方法

調査は近年の堆積層を機械によって掘削し、以下の各層ごとに人力で掘削、遺構検出に努めた。弥生時代の方形周溝墓と古代から中世の遺構の平面実測には写真測量を株式会社バスコに委託して実施し、細部の実測に使用する基準杭は株式会社サンヨーと株式会社バスコに委託して設置した。水準高はT.P.値を使用している。土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修財團法人日本色彩研究所色監修「新版標準土色帖」によった。

調査地東方の近鉄若江岩田駅周辺の再開発事業関係車両の通行を確保するため、調査地の北半を45次調査として1997(平成9)年度に、南半を45-2次調査として1998(平成10)年度に行った。調査の進行に合わせた地区名として1区から5区の名称を使用している。1区と4区は西半と東半に分けた。遺構実測は国土座標第VI系を基準とした。遺物は基本的に $X=-148,540 \sim -148,555$, $Y=-36,160$ を起点とする5



第1章 はじめに

1 調査に至る経緯と経過

瓜生堂遺跡は1966(昭和41)年から本格的な発掘調査が行なわれてきた²。初期の発掘調査はおもに瓜生堂遺跡調査会によって実施され、盛土を伴う方形周溝墓を多数検出する等、全国的に大規模な弥生時代の遺跡として周知されることとなった³。近畿自動車道建設に伴う発掘調査は財團法人大阪文化財センター(現財團法人大阪府文化財調査研究センター、以下センター)によって実施され、銅戈をはじめとする多種多様な遺構や遺物が発見されている⁴。これらの発掘調査とともに東大阪市教育委員会(以下市教委)を初めとする関係機関による調査が各所で多数実施されていたが、瓜生堂遺跡の範囲は近畿日本鉄道(以下近鉄)奈良線の南側を北限とするものとされていた。1989(平成元)年度、近鉄奈良線北側の東大阪市西岩田2丁目地内(旧近鉄玉川車庫)で大規模専門店建設に伴う試掘調査が市教委によって実施され、弥生時代中期の遺物包含層が現地表面から約3.5m下で確認された。大規模専門店工事の掘削深度が遺物包含層に至らないため本格的な発掘調査は行われなかつたが、遺跡範囲は北へ拡大されることとなった⁵。



図1.1(左) 調査地位置図 (S=1:3000)

①は府試掘、②は協会試掘地点を示す。

図1.2(上) 1998年11月5日付読売新聞(河内版)



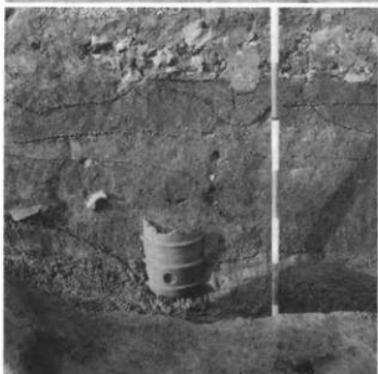


図1.3(左上) 板材出土状況(北から)
古墳時代河川1内と思われる。

図1.4(左中) 円筒埴輪を枠とする井戸付近土層(南から)
古代の井戸 SE206。

図1.5(左下) 瓦質釜を枠とする井戸検出状況(西から)
中世の SE136。

図1.6(右上) 管路新設工事立会調査風景(東から)

図1.7(右下) IV西半区現地説明会風景(東から)

m方眼の地区を設定して取り上げたが、4区西半の弥生時代の調査では東から約6mごとにアイウエオの五つの地区を設定している(図1.8)。現地表から約5m下までを調査対象とした4区西半は銅矢板打設による土留めがなされたが、他の地区は素掘りである。

遺物はすべての出土品を洗浄し、選別したものの注記を実施した。木製品を除く遺物には調査次数と出土層位等による登録番号と実測番号を注記している。遺物の写真撮影は一部を株式会社スタジオG.F.プロに委託した。木製品の一部は財



図1.10 調査位置図及び周辺遺跡分布図 (S=1:25000)

団法人元興寺文化財研究所に委託して樹種同定と保存処理を行い他は水没して保存している。自然木は試料を採取し放棄した。また、最下層から出土した自然木の樹種同定と年代測定、珪藻分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

3 位置と環境

瓜生堂遺跡は河内平野中央部に位置し、現在の地表面は T.P.+ 3 m 前後を測る。遺跡は東大阪市西岩田、瓜生堂、若江北町、若江西新町、下小阪、中小阪一帯に広がり、北は西岩田遺跡、北東は岩田遺跡、南は巨摩遺跡、南東は若江遺跡が隣接している(図1.10)。これらの遺跡範囲は行政的な区分であり、それぞれが時代とともに有機的に関係し合い現在に至っている。また、河内平野は旧大和川による堆積作用によって形成された沖積平野であり、その自然条件は縄文時代から現在に至るまで人間の営みに大きな影響を及ぼしている。各時代の生活面は洪水もしくは河川の氾濫による土砂で覆われ、覆われた土砂の上面に新たな生活面が形成される状況がこれまでの発掘調査によって知られている。

縄文時代の遺構や遺物は瓜生堂遺跡では報告されていない。南方の若江北遺跡では後期の土器が、山賀遺跡では晩期の土器が出土している⁷。

弥生時代前期の遺構や遺物は瓜生堂遺跡では若江西新町の第二寝屋川右岸付近で確認されており、今回が2例目となる。周辺の新家遺跡や山賀遺跡でも確認されており、最も古いものは巨摩・若江北遺跡で発見されている⁸。

弥生時代中期の瓜生堂遺跡は方形周溝墓や銅戈を始めとする多種多様な遺構や遺物が発見されており、活発な人間の活動が知られている⁹。

弥生時代後期の遺構は瓜生堂遺跡においては若干検出される程度である。自然環境の変化によって居住に適さなくなり、南方の巨摩遺跡や上小阪遺跡に移動した可能性が指摘されている¹⁰。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて若江遺跡から瓜生堂遺跡東部や新家遺跡には大量の土砂が堆積し、南北へ延びる微高地が形成されたようである。土地条件図には南北方向の自然堤防が表示されており、これが微高地の痕跡と考えられる(図1.9)。近畿自動車道建設に伴う調査では水田等が検出されており、瓜生堂遺跡西部における堆積作用はやや緩やかなものであったと思われる¹¹。

この微高地土上に新家遺跡や西岩田遺跡では古墳時代中期の集落が存在する¹²。瓜生堂遺跡でも井戸等が検出され、集落が存在していた可能性がある。また、巨摩遺跡や山賀遺跡では方墳が検出されている。瓜生堂遺跡では古墳は見られていないが、埴輪等が多数出土する地点が点在し、古墳が存在していた可能性が非常に高い¹³。南東の若江遺跡でも埴輪の出土が報告されており、微高地土の広い範囲に集落や古墳が分布していたものと思われる¹⁴。

古代の遺構や遺物は瓜生堂遺跡内の各地点で発見されている。「若」と書かれた須恵器片が出土しており、若江郡衙所在地とも推定されている¹⁵。しかしながら、遺跡の全体像を把握するまでは至っていない。

協会試掘によって瓜生堂遺跡内で初めて中世集落が存在することが知られた。その様相は本書に述べるとおりである。これまでの発掘調査では溝や井戸等が検出され、中世から近年まで、遺跡の大部分は耕作地として利用されてきたものと推測される¹⁶。

注 (→ P.96)

第2章 層序の概略

本調査では東西約150mに涉り現地表から約2m下までの堆積層を観察することができた。現地表面から約5m下までを対象とした調査区（4区西半）は東西約30m、南北約5mと全調査面積の約1割にすぎず、まとめて次章に述べることとし、ここでは詳細に述べない。次章と表現の異なる場合は次章の記述が優先する。

約5mに及ぶ堆積層の多くは自然の作用による堆積であるが、現地表面から約1m下までは整地や造構の構築等が著しく複雑な状況を呈していた。この状況も後述することとし、以下に下層から順に層序の概略を述べる。なお、北壁の調査は素掘りで行ったため湧水が激しく、層序の観察が不十分であったため、南壁の層序を図示した。

第I層 弥生時代前期以前の堆積層(暗オリーブ灰色砂礫)

今回調査した最も下位の地層である。一部で掘抜くことを試みたが、湧水が激しく断念した。層厚は1m以上と思われる。数点の自然木以外に遺物は出土しなかった。自然木は3180±50年前の年代が測定され(第9章)、本層は縄文時代晩期の河川と考えられる。

第II層 弥生時代前期以前の堆積層

第I層と同様な状況による堆積層と思われるが、やや様相が異なる。上面では弥生時代前期の造構を検出している。

第III層 弥生時代前期堆積層

数層に分層される。弥生時代前期の土器、木製品等が出土した。

第IV層 弥生時代中期堆積層

数層に分層される。方形周溝墓や溝等を検出している。

第V層 植物遺体層とオリーブ色粘土の互層

第III層最上面の方形周溝墓を覆う。これまでにも瓜生堂遺跡の各地点で弥生時代周溝墓を覆う地層として報告されている。第V層との層境はやや漸移的である。

第VI層 粗砂・中粒砂・細砂・シルト・粘土層

数層に分層される。第IV層との層境はやや漸移的である。流水による堆積と考えられる。詳細は第4章を参照されたい。

第VII層 平安時代整地層

古代の土器や古墳時代の埴輪等を多く含む。上面で古代から中世の造構を検出した。下位の第V層が砂質である地区では砂質を呈し、シルト質である地区ではシルト質を呈する。本層は検出した造構の構築に伴う整地層と考えられる。

第VIII層 中世整地層

下位の第VI層が低い部分を埋めるように分布し、調査区中央付近の第VII層が高い部分には見られなかった。東部では中粒砂混黒色シルトを呈し、西部では上位の第V層と同色、同質であった。古代の土器等を多量に含む。上面で中世の造構を検出した。本層も検出した造構の構築に伴う整地層と考えられる。

第V層 中世遺物包含層

土器等の細片を多量に含む。上面で近世の遺構を検出した。数層に分層できるが、調査区全体に広がる層はない。大きく2層に分けられ、下層は上層に比して土器等をより多く含む。第V層上面遺構の最上部に堆積している例があり、中世遺構廃絶後の整地層と考えられる。上層は鉄分の沈着や乾痕が観察されることや含まれる遺物が細片であること等から、耕作土あるいは耕作に伴う整地層と考えられる。

第VI層 近世耕土層

土器等の細片を多量に含む。ガラス等の近代以降の遺物を含まないため近世の耕作土層と思われる。本層より上層は機械によって除去した。

第VII層 近世～現代耕土層

第VII層と同様に土器等の細片を多く含む。上部には近現代の遺物が多く含まれるが、下部ではガラス等の近代以降の遺物がほとんど出土しなかった。このため、近世から現代まで同じ地層で耕作が継続されたと考えられる。

第VIII層 マサ土層

調査区西部と東部の低い平坦面を埋め、調査区中央の高い平坦面とを均一にするものである。ラミナ状の縞模様が観察され流水による堆積層と酷似していた。出土遺物はほとんどないが、前土地所有者の言から1960年代後半頃に盛られたものと思われる。

第IX層 表土・現代耕土・盛土・擾乱土層

本層の上面は東から西へ緩やかに低くなっている。



図2.1 河川1出土の須恵器平瓶



図2.2 河川2内の発出土状況（西から）

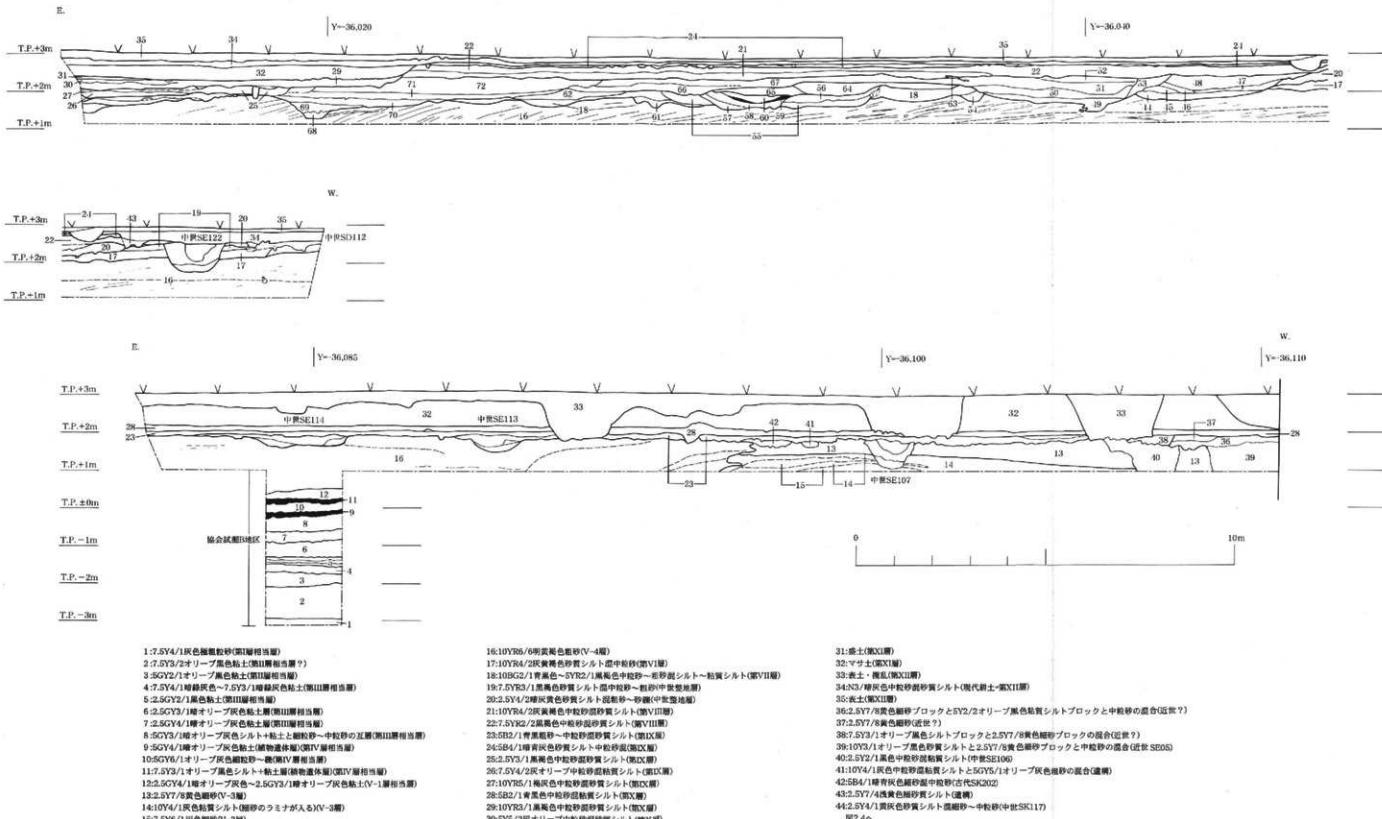
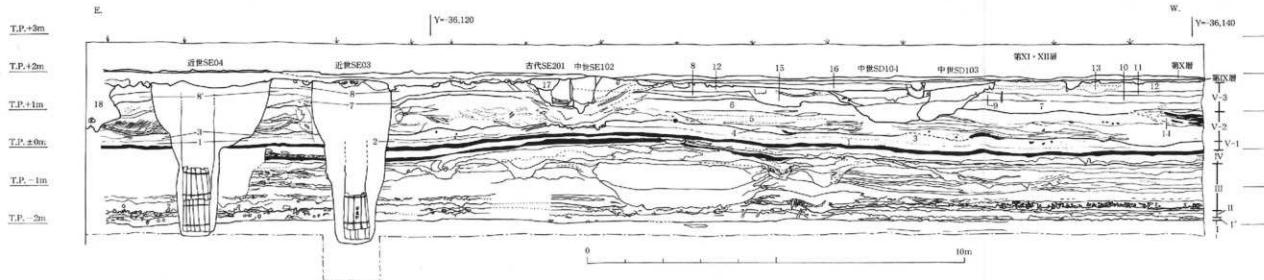


図2.3 調査区東部(5区・4区東半)南壁土層図(S=1/100)



46:10Y3/1褐色色砂質シートとSV4/灰色砂質シートの混合(中世SK117)

46:10Y3/1褐色色砂質シートとSV4/灰色砂質シート(中世SK117)

47:SY4/1褐色色砂質シート(中世SK117)

48:2.SV4/2褐色色砂質シートとSV4/4褐色色砂質シート(中世SK117)

49:SK2/1褐色色砂質シートとSV4/4褐色色砂質シートブロックの混合(中世SD114)

50:2.SV4/1褐色色砂質シート・混砂跡・中段砂(中世SD114)

51:10Y3/2褐色色砂質シートブロックの混合(中世SD114)

52:10Y3/2褐色色砂質シートブロックの混合(中世SD114)

53:10Y3/2褐色色砂質シートの混合(中世SD114)

54:SY7/1オーリーブ褐色色砂質シート(中世SD113-1)

55:SY5/1褐色色砂質シート・混砂跡(遺構A)

56:10Y2/1褐色色砂質シート(遺構A)

57:SY2/1褐色色砂質シート・混砂跡(遺構B)

58:7.SY2/1褐色色砂質シート(遺構B)

59:SY2/1褐色色砂質シート(遺構B)

60:SY2/1褐色色砂質シート(遺構B)

61:ND/1褐色色砂質シート-G2/1褐色色砂質シートと灰砂の混合(遺構C)

62:SY3/1褐色色砂質シート(中世SK102)

64:やや赤れど2.SY7/6褐色色砂質シート(中世SK102)

65:2.SY7/6褐色色砂質シート(中世SK102)

66:2.SV3/2褐色色砂質シートとSV4/2褐色色砂質シートブロック(中世SD115)

67:2.DY3/2褐色色砂質シートとSV4/2褐色色砂質シート(中世SD115)

68:ND/2/褐色色砂質シートと灰砂の中段砂質シート(中世SD118)

69:ND/2/褐色色砂質シートと灰砂の中段砂質シートとSV4/3褐色色砂質シートブロックの混合(中世SD118)

70:2.SY8/4褐色色砂質シートブロックと10Y2/1褐色色砂質シートブロックと堆砂の混合(中世SD118)

71:10Y4/2褐色色砂質シート(中世SD118)

72:10Y8/8褐色色砂質シートブロックと2.5Y7/4褐色色砂質シートブロックと7.5YR4/4褐色色砂質シート(中世SD118)

砂質シートの混合(中世SD118)

1:10Y3/1オーリーブ褐色粘土(V-1層)

2:10Y3/1オーリーブ褐色粘土(V-1層)

3:10Y2/1褐色粘土-粘土(V-1層)

4:2.2Y8/0黄色～2.5Y7/1灰白色中粒砂～細砂(V-2層)

5:2.2Y8/0黄色～2.5Y7/1灰白色中粒砂(V-2層)

6:10Y7/2褐色色砂質シート(2層)

7:10Y7/2褐色色砂質シート(2層)

8:10C4/4褐色色砂質シート(V-3層)

9:2.5Y7/0褐色色砂質シート(V-3層)

10:7.5Y5/1褐色色砂質シート(鉢分岐第V-3層)

11:7.5Y5/1褐色色砂質シート(鉢分岐第V-3層)

12:2.5Y7/0褐色色砂質シート(鉢分岐第V-3層)

13:7.5Y5/0褐色色砂質シート(鉢分岐第V-3層)

14:7.5Y7/7灰白～灰褐色砂質シート(川口1)

15:8HSG/2褐色色砂質シート(川口2)

16:近世SD02

17:中世SD106

18:中世SE105

黒塗りは植物遺体です。

図2.4 調査区西部(4区西半)南壁土層図(S=1/100)

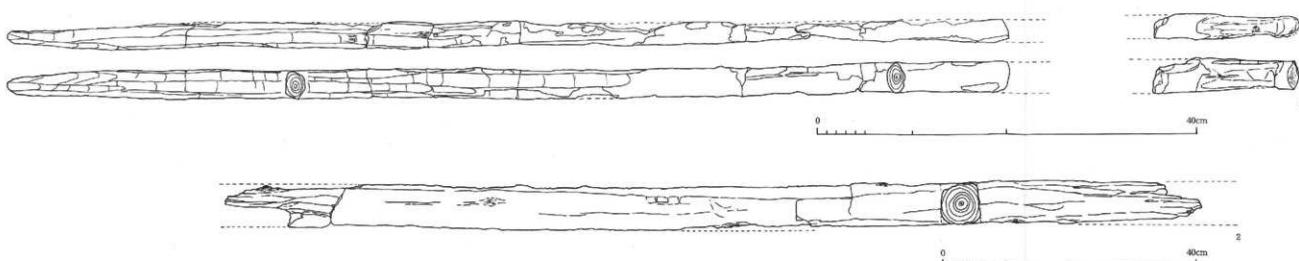


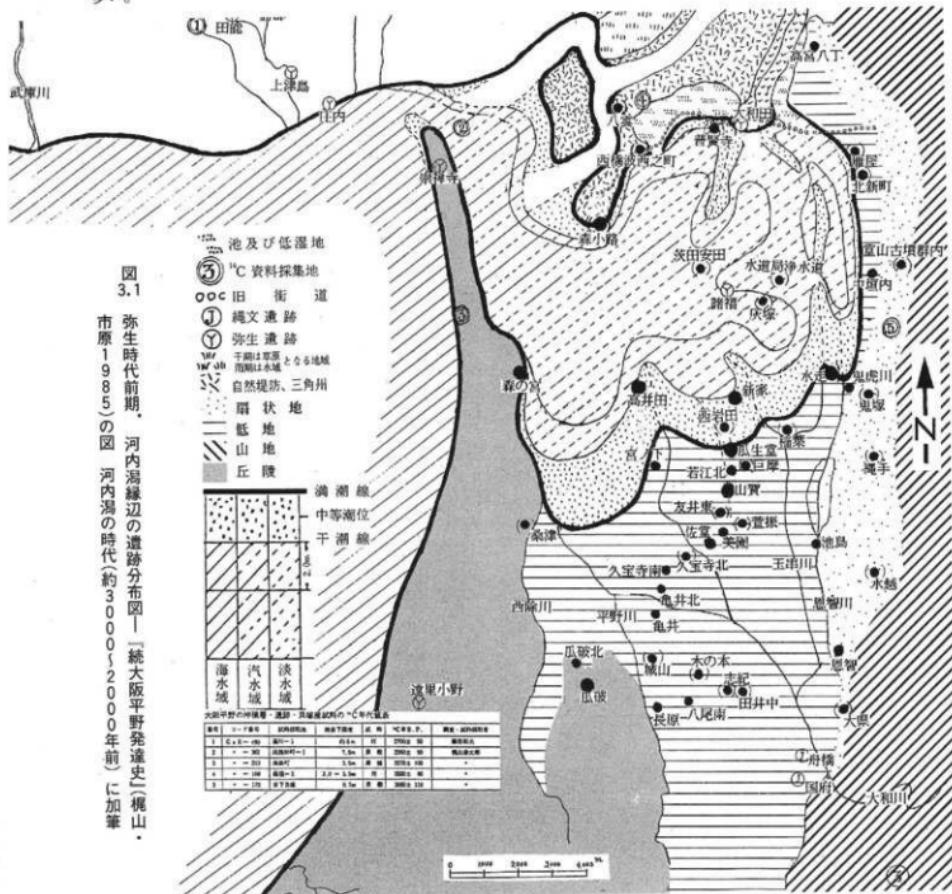
図2.5 第V層出土木製品(1はS=1/4, 2はS=1/6)

第3章 弥生時代の調査成果

1 弥生時代前期の遺跡地周辺の環境

当遺跡地周辺の遺跡については、勧業大阪文化財センターによる河内平野を縦断する近畿自動車道建設に伴う大規模な調査などで明らかにされてきた。1996年、同センターの巨摩・若江北遺跡調査では、弥生時代前期にいち早く人々が活動した跡として、畿内最古の遺物を伴う住居跡が確認された¹。一方、宮ノ下、水走、鬼虎川、鬼塚、植付の各遺跡では繩文時代晚期後半の土器と弥生時代前期前葉～中葉の土器が共伴して出土している²。さらに弥生時代前期中葉以降の遺跡には山賀、友井、佐堂、久宝寺、池島などの各遺跡³があげられる。また当時の河内緩辺線の瓜生庄跡では、弥生時代後葉からの人々の活動跡が確認されている⁴。同時期の周辺遺跡には新家、西岩田、美園などの各遺跡があげられる⁵。

今回の調査は瓜生堂遺跡の北東端部にあたる地点で、弥生時代前期の遺物を伴った住居跡と考えられる遺構を検出した。遺物は前期のなかでも中葉のものが多い。



2 調査地の層序

調査地の層序を観察するために、調査地区のIV区西半の東、南、西側でセクションを残して断面図(図3.2~3.4)を作成した。ここでは本章で報告する弥生時代の調査に焦点を会わせ、レベルがT.P.約-2.5m~+1mの層序について述べる。

レベルがT.P.約+1mから上の層には旧河道の厚い砂の堆積層が認められた。これより上の層は酸化土壤である。レベルがT.P.約+1~0.5mの間の堆積層は青灰色の還元層で、T.P.約+0.5mから下位に黒色粘土層が2~3層認められた。調査地区の中央ではレベルがT.P.約+0.3mで弥生時代中期の方形周溝墓の墳頂部が検出された。さらに下層のT.P.約-1.6mの黒色シルト~粘土層からは弥生時代前期の土器が出土した。すぐ下位の中~細粒砂層~調査地の西側の1/3ほど範囲から弥生時代前期の遺構面を検出した。遺構の分布が途切れる東側にはレベルがT.P.約-1.6m位で当時の干涸の溝間帯、潮上帶跡が認められ、多くの生痕化石の観察ができた。なお断面観察用の堆積層は湧水や、また旧河道の砂の堆積が脆くしばしば崩壊し記録のとれない箇所があった。

IV区西半の全域に認められたレベルがT.P.約+1mから上層の弥生時代後期以降~古墳時代の旧河道の堆積層は以下のとおりである

[1] 10Y4/2オリーブ灰色極細砂、シルト、シルト質粘土の互層が認められる。

間に炭化物を含んだ植物遺体層が数本挟まれている。

[2] 5Y7/4浅黄色粗粒砂、中粒砂~細粒砂層(トラフ型斜交層理)…古墳時代前期から6世紀にかけての河道

次に下層堆積土の層序を下位からみていく。

◆断面Aの堆積層(東壁断面)

1層 5G Y4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂・中・細粒砂層の互層に7.5Y4/1灰色中・繰縞~粗粒砂を含む…旧河道の堆積

2層 2.5Y3/1黒褐色極細粒砂層と5G Y6/1オリーブ灰色砂層のラミナ、炭化木が混在、生痕…旧干涸の溝間帯

3層 2.5Y3/1黒褐色極細粒砂層~粘土…旧干涸の潮上帯

(4層 西側でみられた5Y4/1灰色シルト質粘土層と5G Y6/1オリーブ細粒砂層はない)

5層 7.5Y3/1オリーブシルト質粘土層…弥生前期の遺物を含む。

6~7層 7.5G Y4/1暗緑灰色シルト質粘土層・地震による変形構造が認められる。

8層 10Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土層

9層 10Y5/2灰色シルト質粘土層

10層 7.5Y4/2灰色オリーブシルト質粘土層

11層 10Y5/2灰色粗~細粒砂層、極粗粒砂・粘土塊が挟まる。

12層 7.5Y4/1灰色シルト質粘土層

13層 7.5Y2/1黒色シルト質粘土層(腐植化した土壤)

(14層 西側でみられた2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土層はない)

15層 7.5Y3/1黒色シルト質粘土層(植物遺体の薄層が何枚も重なる層)・地震による変形構造が認められる。

16層 10Y4/1灰色シルト質粘土層、間に白黄色の結核を多量に含む。

17層 10Y2/1黒色シルト質粘土層(植物遺体の薄層が何枚も重なる層)

◆断面Bの堆積層(南壁中央部断面)

1層 5G Y4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂・中・細粒砂層の互層に7.5Y4/1灰色中・繰縞~粗粒砂を含む…旧河道の堆積

2層 2.5Y3/1黒褐色極細粒砂層と5G Y6/1オリーブ灰色砂層のラミナ、炭

- 化木が混在 生痕…旧干渴の潮間帯
- 3層 2.5Y3/1黒褐色板細粒砂層～シルト質粘土層、生痕…旧干渴の潮上帯
- 4層 5G Y6/1オリーブ細粒砂層～粘質シルト…弥生前期の遺物を含む
- (5層) 10Y3/1オリーブ黒色細粒砂層～シルト、木質遺物の炭化物多い。生痕…弥生中期の溝状落ち込み1
- (6層) 10Y3/1オリーブ灰色粘土質シルトと中粒砂…旧河道1一下層
- (7層) 7.5Y3/2オリーブ黒色～7.5Y7/1灰色粗～中粒砂層、西側に中粒砂・細砂・粘土のラミナが斜め上方へ堆積する。…旧河道1一上層
- (8層) 10Y3/1オリーブ黒色シルト質中～細粒砂層～粘質シルトに中疊～細疊混じり…方形周溝墓1のベース面
- (9層) 黄褐色・灰青色中粒砂を中心に中～細粒砂、大・中疊混じりの極粗粒砂層…方形周溝墓1の盛土
- (10層) 黒褐色シルト粗～細粒砂層…腐食した土壤…方形周溝墓1の表土
- 15層 10Y2/1黒色シルト質粘土層(植物遺体の薄層が何枚も重なる層)
- 16層 10Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土層、間に1～2cmほどの植物遺体の薄層が数本挟まる。
- 17層 10Y2/1黒色シルト質粘土層(植物遺体の薄層が何枚も重なる層)
- ◆断面Cの堆積層(南壁断面～西壁断面)
- 1層 5G Y4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂・中・細粒砂層の交互層に7.5Y4/1灰色粗粒砂～細・中疊を含む…旧河道の堆積層
- 2層 5Y4/1灰色粘質細粒砂中に中疊～極粗粒砂混じり…弥生前期の遺構のベース面
- (3層 東側でみられた2.5Y3/1黒褐色細粒砂層～粘土層…潮上帯はなくなる。)
- 4層 2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土層に細疊～極粗粒砂混じり…弥生前期の遺物を含む。
- 5層 7.5Y2/2オリーブ黒色シルト質粘土層、木質遺物、炭化物を多く含む。…弥生前期の遺物を含む
- 6層 10Y4/1灰色シルト質粘土層
- 7層 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土層(炭化物、アシの腐植化した土壤) 地震により下層の粘土が火焔状に引き上げられている。
- 8層 2.5G Y4/1オリーブ灰色粘土質シルトと中粒砂・細粒砂層の葉層の互層、やや下位に薄い植物遺体のラインが走る。
- 9層 5G Y4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土層
- 10層 7.5G Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土層に極粗～粗粒砂、植物遺体の薄層を挟む。踏み込み跡が認められる。
- (11層) 下層 7.5Y3/2オリーブ粘質シルトの薄層を挟む。粘土塊混じり、踏み込み跡が認められる。…旧小河道
- 上層 5G Y5/1オリーブ灰色粗粒砂層～5Y4/3浅黄色細粒砂
- 12層 10Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土層中～細粒砂混じり、間に1～2cmほどの植物遺体の薄層が挟まる。
- 13層 10Y3/1黒褐色シルト質粘土層(腐植化した土壤)
- 14層 2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土層(断続的に植物遺体の薄層が挟まる。)
- 15層 10Y2/1黒色シルト質粘土層(植物遺体の薄層が何枚も重なる層厚)・地震による砂脈が認められる。
- 16層 10Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土層、間に1～2cmほどの植物遺体のラインが数本挟まる。下層の粘土層に地震による変形構造が認められる。
- 17層 10Y2/1黒色シルト質粘土層(植物遺体の薄層が何枚も重なる層)

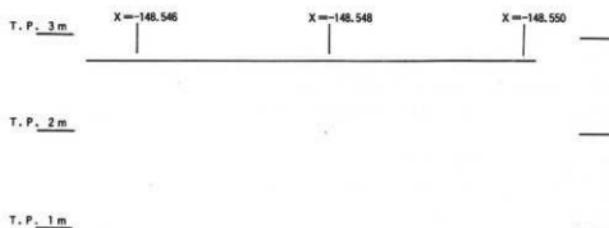


図3.2
弥生時代後期以前、
瓜生堂遺跡調査地の堆
積層の東側断面実測図

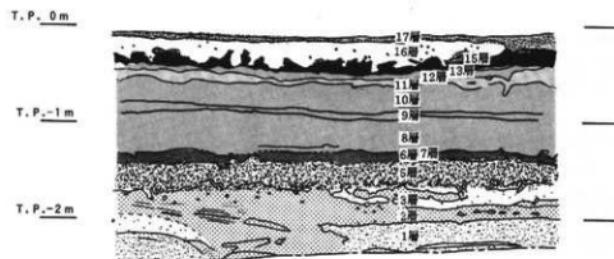
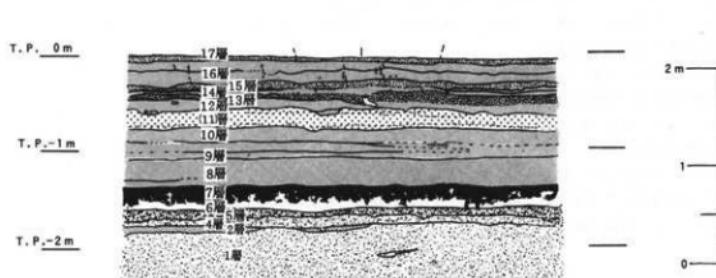


図3.3
弥生時代後期以前、
瓜生堂遺跡調査地の堆
積層の西側断面実測図



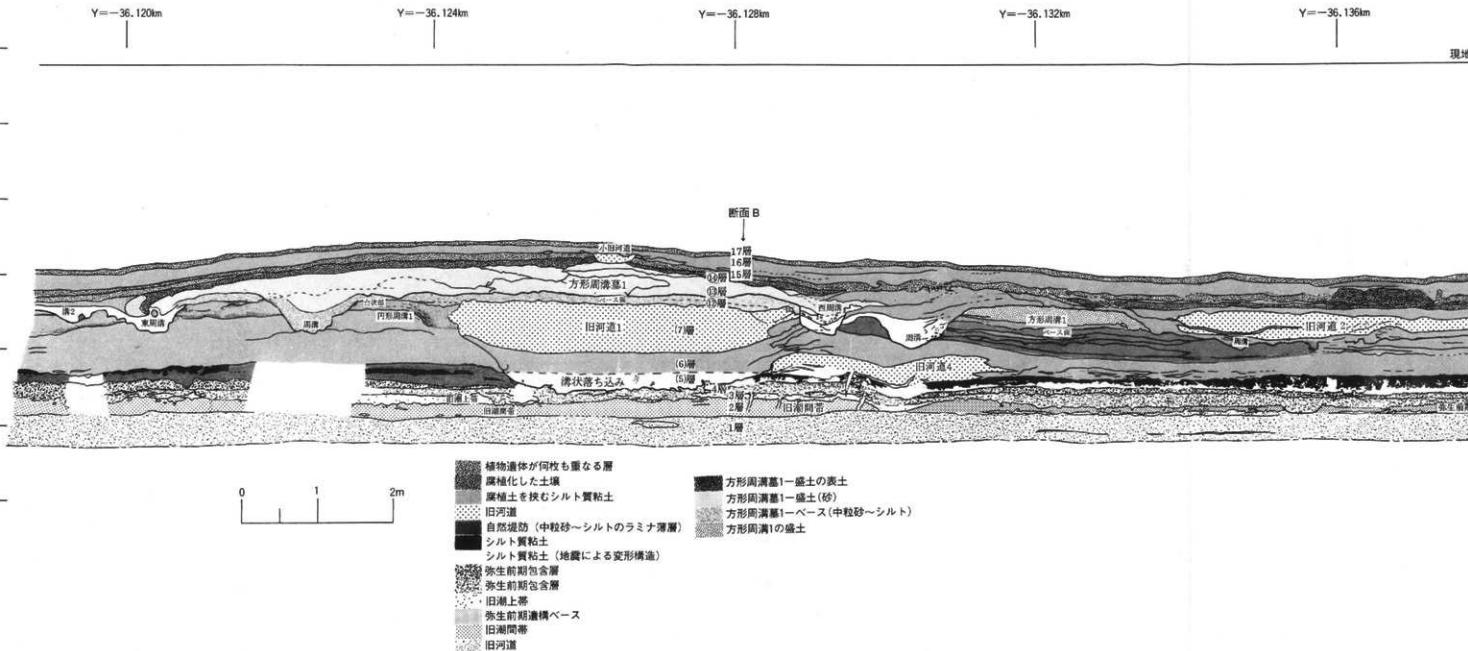
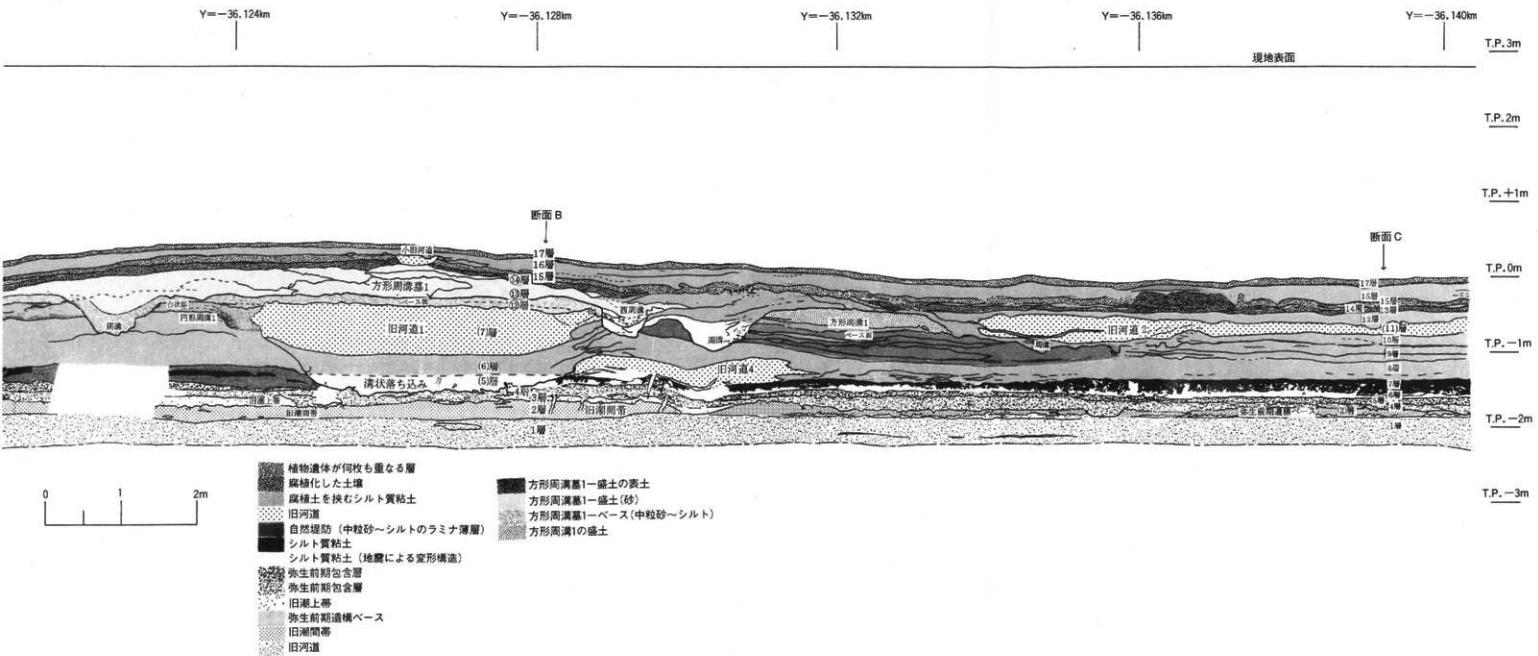


図3.4 弥生時代の瓜生堂遺跡調査地の堆積層の南側断面実測図



)南側断面実測図

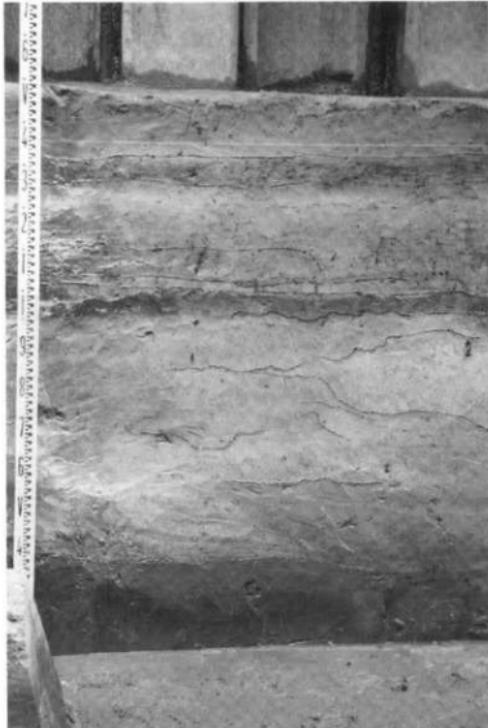


図3.5(左上)

弥生時代中期～後期。
(エ)地点の堆積層の断面
—水糸は T.P.0m —



図3.6(右上)

弥生時代前期以前～中期。
(オ)地点の堆積層の断面
—水糸は T.P.-1.5m —



図3.7(下)

弥生時代前期以前～中期初頭。
(ア)地点の堆積層の断面

3 弥生時代の遺構と遺物

調査地のIV区西半分を東から5区画(ア・イ・ウ・エ・オ)に分け、この名称で遺構の分布、遺物の出土位置を表した。調査地南側に断面観察用の畦を残した。

1) 弥生時代前期以前から

弥生時代前期前の砂堆積層と旧干潟

調査深度がT.P.約-1.8mの下層で、粗粒砂の厚い堆積層(17層)がIV区西半(ア～オ)地区のほぼ全体に認められた。旧河道の堆積物と考えられる。調査の掘削最深度はT.P.約-2.3mで、堆積物の層厚は調査地の東北部に向けて薄くなる部分や、途切れる箇所が認められた。西北部での下層のボーリング調査用の亜鉛管は、砂層の堆積層が厚い上に湧き水が激しくて約2m以上は挿されず、層厚の規模が確認できなかった。

據大阪文化財センターによる西岩田遺跡の調査では、レベルがT.P.約-2mの下位に1mの層厚の粘土を含む灰色砂疊層、T.P.約-3m付近に多量のセタシミを含む灰白色砂疊層が確認されており、遺物を含まない層であるが縄文時代晚期に比定されている⁶。

1層の上面には弥生時代前期頃の潮間帯(金村・松田・別所1998)⁷の砂層が約20～50cmの厚みで堆積し、東に向かって層厚を増している。さらに(ア～ウ)地区では潮上帯の砂層が約20～30cmの層厚で認められたが、(エ～オ)地区では潮上帯の砂層はみられない。この潮間帯は調査地より南方にさらに広がると考えられる。またこの潮間帯の断面には生痕化石が認められた。

2) 弥生時代前期の遺構と遺物

2-1) 弥生時代前期の遺構

(エ～オ)地区の当時の潮間帯の、レベルがT.P.約-1.7m前後の細砂層上面の平坦面で住居跡と考えられるピット群と土坑を検出した。遺構は座標軸がY=-36.130kmから調査地の西端までの間に集中して分布しているのが認められた。遺構のベースは緑灰色細砂層が堆積しており、この層準について株パリノ・サーゲイの分析では「潮間帯でも潮上帯に近い場所に位置していたこと」、「資料に珪藻化石がすくなかった」、「海水準の微妙な変動により、潮上帯のような状態になる時期があり」と推察されている(第9章247ページ参照)。座標軸がY=-36.130kmから調査地の東側には当時の潮上帯の砂層の堆積が認められる。

また今回の調査地のすぐ西側の府教委の試掘調査地点からは弥生前期の土器が出土しているが、北側にあたる、第44次試掘調査地点の地下5mの掘削深度内で

図3.8 弥生時代前期。

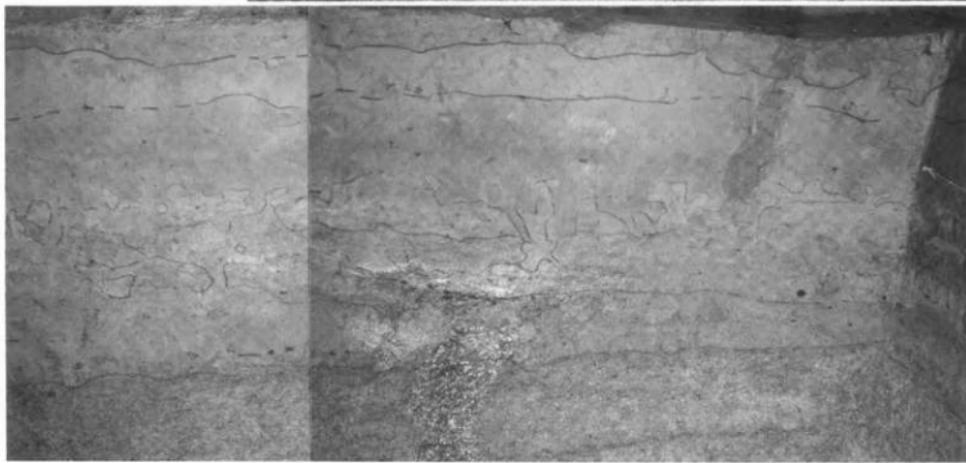
(ア)地点の干潟の生態痕(堆積層の東側断面 西から撮影)



図3.9 弥生時代前期以前、IV区西半
調査地最下層面—T.P.-2.3m—地表下
5 m



下図3.10 弥生時代前期、(ア)地点の干潟の生態痕がみられる堆積層の南側断面—水系は T.P.-1.5m—(北から撮影)



は、弥生時代の遺構が検出されていない⁶。従って、今回遺構を検出した地点は集落の北東側のはずれになることも考えられる。

各遺構内と遺構面の上層の黒色粘土層から弥生時代前期の土器が多く出土した。遺物包含層はIV区西半の調査地全体に広がり、遺構面の東側の地点の包含層は下位が茶黒色粘土層である。

ピット群には柱根の痕跡は認められなかつたが、調査地の北側で、埋土の断面に薄い炭層を3枚挟むピット(直径0.8×0.65cm)を検出した。このピットは炉跡と考えられ、この周辺で半円を描くピット(p2-1・2-2・2-3・2-4)と半円の中心部にあたる地点でピット(p2-5)を検出した。これらのピットは径約5.1mの平地式住居の半棟分の柱穴と考えられる(住居跡2)。この炉跡のすぐ南東の床面にあたる場所から木炭が出土した。これらのピット群の南西側から深さ5~6cmの浅い土坑(s-k2)を検出した。この土坑は住居跡2の周溝になるかもしれないが、途中で切れている。土坑内にはピット(p5)がある。住居跡2の南東側で、床面が一部重複する5個のピット(p1-1~p1-5)と、そのすぐ東側からピット(p1-2)を検出した。前者は径約2.8mの円状に並ぶ柱穴(住居跡1)の、後者は出入り口用の柱穴と考えられる。さらに平面では周溝を検出できなかつたが、住居跡1の南東にあたる断面観察用の畦で深さ7cm、幅60cmの溝らしい痕跡を確認した。この周溝があつたと考えられる東側にピット(p1-6・1-7)とその周辺から踏み込み跡を検出した。さらに住居跡1の柱穴と考えたピットのなかで、(p1-3)は他のピットに比べると深く、この(p1-3)を併用した1棟分としてピット(p1-3・p4-p5・p6)と西南地点の側溝にピットを追っていくとこれらのピットも住居跡の柱穴と考えられる(住居跡3)。住居跡2と1、住居跡2と3の床面は一部重複する箇所があり、古い順に住居跡3・1・2となりそれぞれ若干の時間差がみられる。遺構面全体は灰色系を呈し、南側はやや堅く紋まり、北側に向かって粗粒砂混じりになる。住居跡の床面は細緻の安定した層厚で周囲に比べると褐色がかつた色相を呈し、わずかに違いがみられる。

1966年の第1・2次調査では多くの不規則なピットが検出されており、「弥生前期の包含層の下層1.5m以上の砂層になっていることから、もとこの地を流れている河州であったところに集落が成立し年中氾濫の絶えない低湿地にあって住居を何回も建てなおしたと考えられ、その形式は高床住居か、平地式住居のどちらかである」と考えられている⁷。浜田氏は「瓜生堂遺跡では北西部の第2寝屋

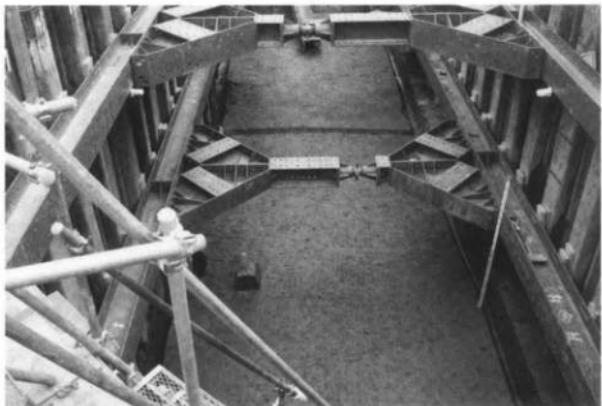


図3.11 弥生時代前期。シルト質粘土層(第13層)上面—T.P.-1.6m—(西から撮影)

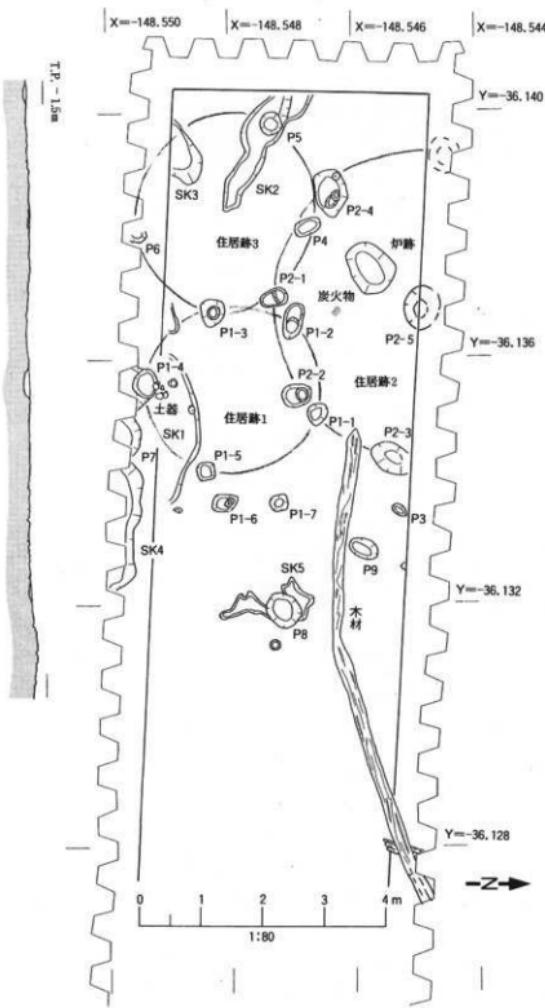


図3.12 弥生時代前期。(ウ～オ)地点検出の遺構の平面実測図と堆積層の南側断面実測図

図3.13 弥生時代前期。(オ)地点の堆積層の南北の断面、下層は前期中葉以前の旧河道の堆積層(西から撮影)



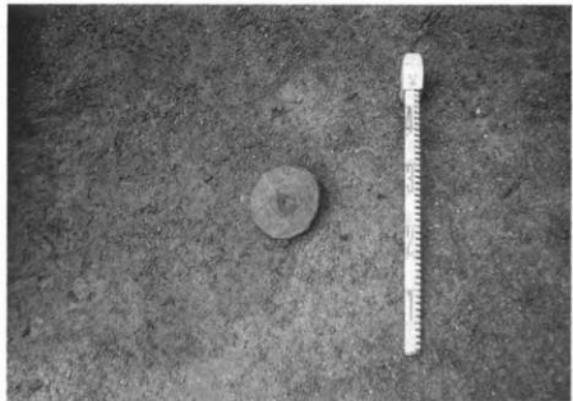


図3.14(上) 弥生時代前期. (オ)地点のビット
2—4と蓋の検出状況(北から撮影)

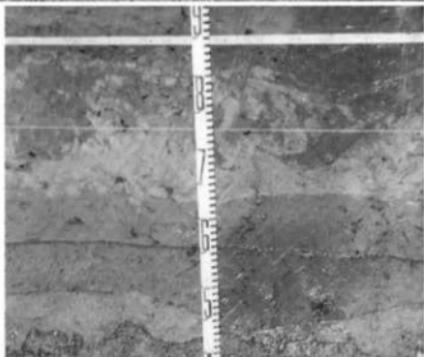


図3.15(中) 弥生時代前期. (オ)地点検出の遺構ビットの堆積層の断面—水系はT.P.-1.5m
—上層は前期末から中期初頭の地震動により変形した堆積層(北から撮影)

図3.16(下) 弥生時代前期. (ウ～オ)地点の遺構の検出状況(西から撮影)

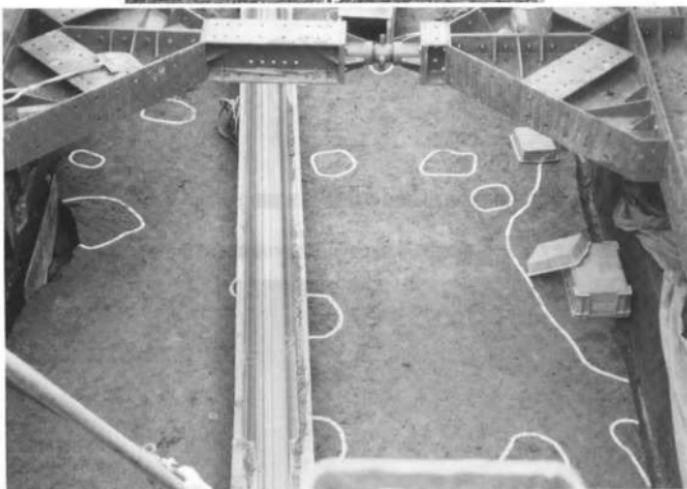


図3.17 弥生時代前期。
(オ)地点のピット1—3の
堆積層の断面
(北から撮影)

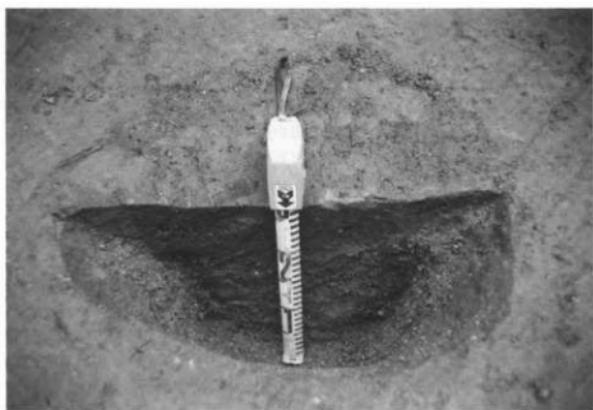


図3.18 弥生時代前期。
(オ)地点のピット2—2の
堆積層の断面
(北から撮影)



図3.19(下) 弥生時代前期。
(ウ～オ)地点検出の住居跡
—堆積層の南側断面の水糸
は T.P.-1.5m —
(東から撮影)



川改修に伴う調査(C地点)で前期後半(畿内第1様式新段階)の集落が検出されているが、空間的に広がりを持たない。」(1997年)¹⁰と述べられているが、今回検出した前期の集落も東には広がらず、当時の低湿地の環境下ではC地点の集落と同じく空間的には点的な存在であったのかどうか改めて考えさせられる知見を得た。

今回検出したピットを柱穴と考えるには深度が浅く、C地点2に比べるとピットの数が少ない。これは床面の上層面がたえず潮干水などの影響下にあって、床面が削られたりして浅くなつたものと考えられる。また炉跡をもたない住居跡1・3は水辺での、仮屋など短期間の使用目的のものだったかもしれない。あるいは短期間で放棄せねばならない事情があったことも考えられる¹¹。

床面には後の干涸の時期のものと考えられる動物の足跡などが確認された。(ウヘエ)地区の北側の地点で、北東から西の方向に細木を數本敷いた上に直交させた小枝が打ち込まれた大型の木材が出土した。北東側は、弥生前期から中期初頭の南北に走る溝状落ち込み1の砂層内に潜り込み、端部は矢板に切られている。西側の部分はピット群を検出したベース面に横たわって出土した。樹種はアカガシ亜属で補正年代3180±50の鑑定結果を得ている(第9章参照)。現全長は8m余、径25cmを測る。流木を湿地帯の木道に使用した可能性も考えられる。1966年の第1・2次調査¹²でも南北に走る溝附近で大型の木が出土している。



図3.20 弥生時代前期。
(ウヘオ)地点検出の住居跡1と床面の鳥などの生態痕跡—堆積層の南側断面の水系はT.P.-1.5m—
(北から撮影)

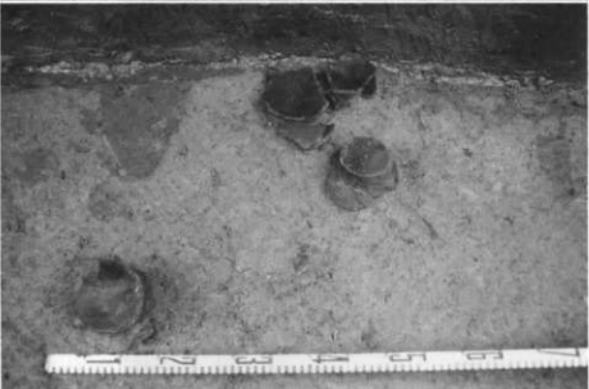
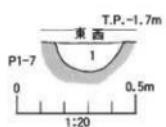
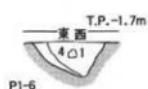
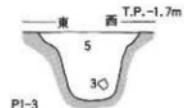
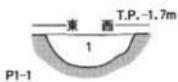


図3.21 弥生時代前期。(オ)地点の住居跡内出土土器(北から撮影)

図3.22 弥生時代前期。
(ウ～オ)地点検出の住居跡1
一ピットの断面実測図



- 1 : 5 Y3/1オリーブ黒色粘土層
- 2 : 2,5Y3/1黒褐色粘質砂～シルト
- 3 : 10Y4/2オリーブ灰細砂層
- 4 : 7,5Y4/2灰オリーブ細砂
- 5 : 5 Y3/1オリーブ黒色粘土層
(アシなどの植物を含む)

図3.23 弥生時代前期。(オ)
地点のピット1-1(南から撮影)



図3.24 弥生時代前期。(オ)
地点のピット1-2(東から撮影)

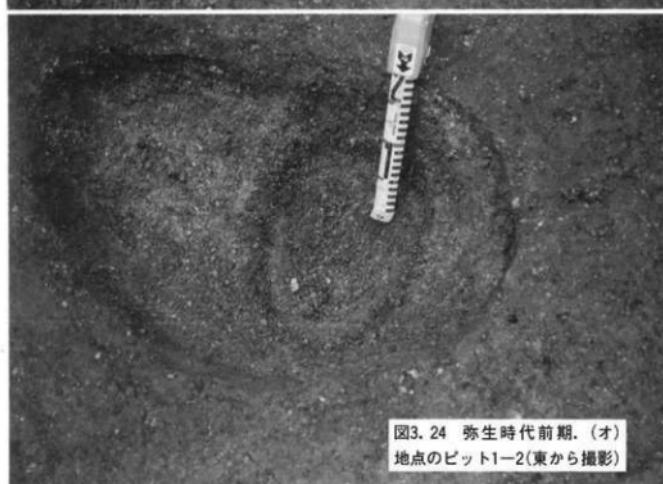


図3.25 弥生時代前期。(オ)地
点のピット1-3(南から撮影)

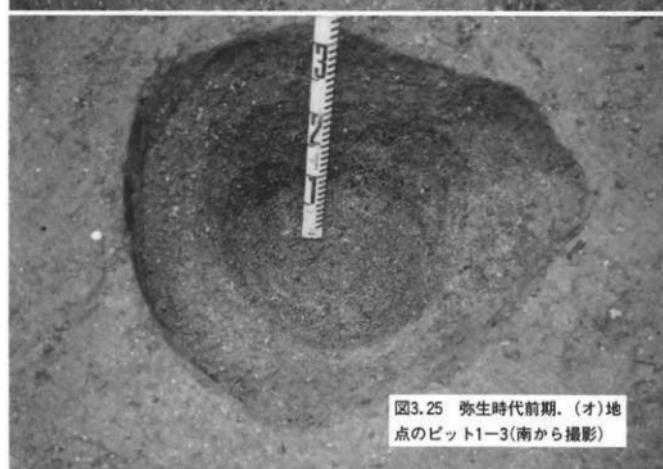


図3.26 弥生時代前期。
(オ)地点の住居跡2
(南から撮影)



図3.27 弥生時代前期。
(ウ)地点のピット1-6
(南から撮影)

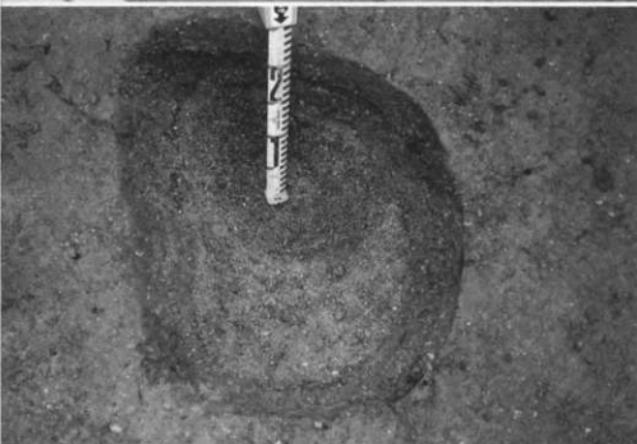
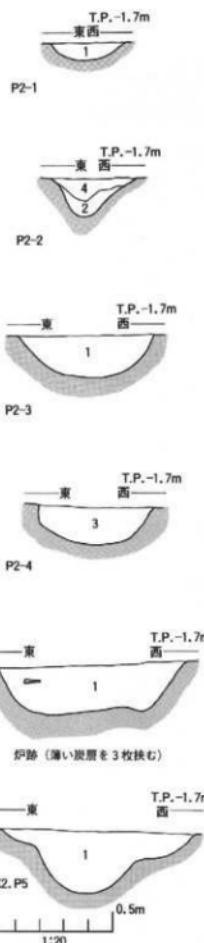


図3.28 弥生時代前期。
(ウ)地点のピット1-7
(北から撮影)



図3.29 弥生時代前期.
(才)地点の住居跡2一ピット
の断面実測図



1 : 5 Y3/1オリーブ黒色粘土層
2 : 7.5Y3/1オリーブ黒色細砂層
細～中レキ混り
3 : 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土層
細～中レキ混り
4 : 5 Y3/1オリーブ黒色粘土層（細砂含む）

図3.30 弥生時代前期. (才)地点
のピット2-2(南から撮影)



図3.31 弥生時代前期. (才)地点
のピット2-4(東から撮影)

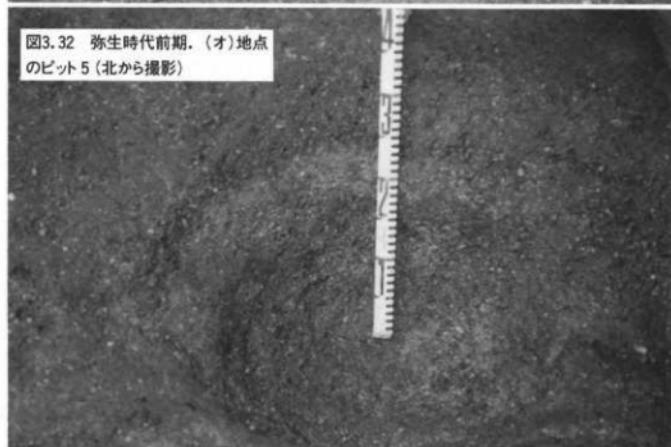


図3.32 弥生時代前期. (才)地点
のピット5(北から撮影)

図3.33(左上) 弥生時代前期。(ウ~オ)地点検出の遺構面(東から撮影、西側に土坑1、南東側に木材)

図3.34(右上) 弥生時代前期。(オ)地点の土坑2とピット5(東から撮影)

図3.35(左下) 弥生時代前期。(ウ~オ)地点の木材の出土状況—東半分(西から撮影)

図3.36(右下) 弥生時代前期。(ウ~オ)地点の木材の出土状況—西半分(東から撮影)

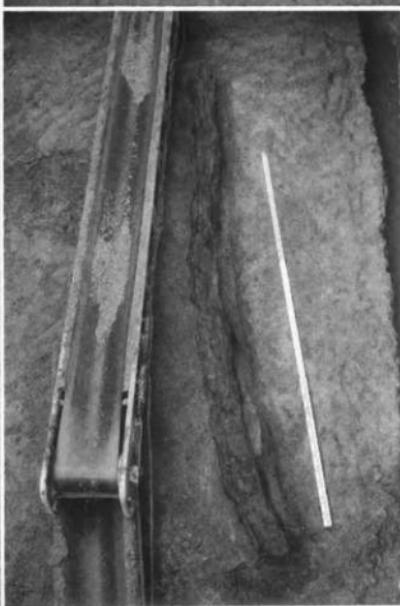
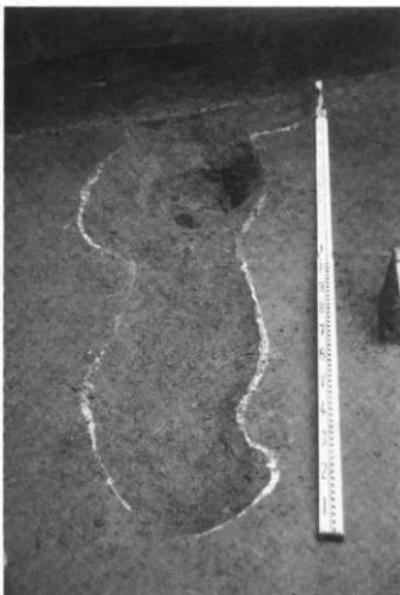
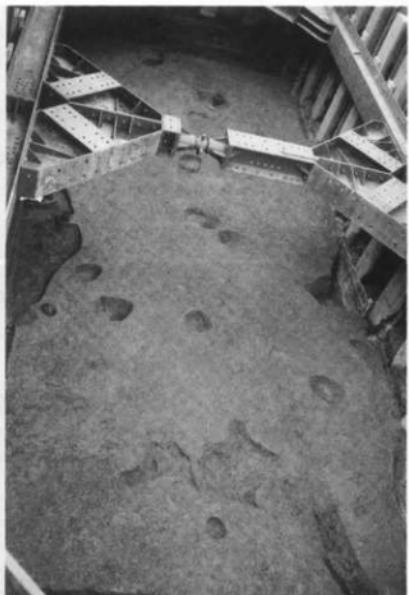




図3.37(左上) 弥生時代前期. (イ)地点の
壺の出土状況

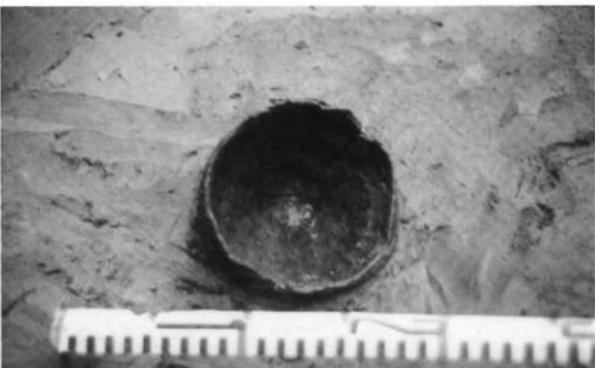


図3.38(右上) 弥生時代前期. (ウ)地点の
鉢の出土状況



図3.39(右中) 弥生時代前期. (イ)地点の
壺底部などの出土状況

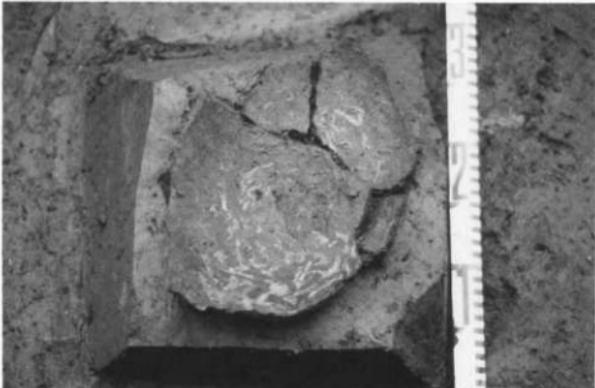


図3.40(右下) 弥生時代前期. (エ)地点の
壺底部の出土状況

2-2) 弥生時代前期の出土遺物

出土した遺物は土器1~63、土製円盤64、粘土塊⑤~⑩、土鍤65、木器66~68、サスカイトの破片、炭化物、骨片、動物の歯②、木の実・葉などである。

実測図と写真図版の遺物番号は同一にしており、写真図版のなかで数字を○で囲っている遺物は実測図がないものである。

土器

土器には壺・甕・鉢・高杯・蓋・無頸壺・瓶形土器などの器種が認められる。器種構成は弥生前期の他遺跡の類例と同じく壺、甕で9割以上を占める。

土器の様相を概観すると形態的には壺などの口縁部があまり抜がらないものや、土器の各部位の境界に段がみられるなど古い属性をもつものが認められる。土器の胎土には粗粒砂を多量に含んでおり、角閃石を含む生駒西麓産のものが全体の8割ぐらいを占める。以下、特に記さないものは生駒西麓産の胎土の土器である。壺、鉢、甕はそれぞれ形態別に、瓶形土器は穿孔法で数タイプに分類ができる。

- ・壺の形態は次のような4タイプに分けられる。壺の各部位の名称は、下位から底部・体部・肩部(頸部と体部の間の部位)・頸部(=くびれ部からほぼ直に立ち上がる部位)・口縁部に分けて記している¹⁾。

壺a = 体部が下位から上位まで丸く張り出し、外湾気味に内傾する肩部から

屈曲して短く立ち上がる頸部に口縁部が少し聞くもの(壺10・7・13・25)。
壺b = 外湾気味に内傾する肩部から真っ直ぐ立ち上がる頸部に口縁部がやや広く聞くもの(壺11・26)。

壺c = 体部からやや内湾気味に内傾する肩部の上位はあまりすぼまらずに頸部に続き、幅広のごく短い頸部に口縁部がわずかに聞くもの(壺14・28)。

壺d = ほぼ直線的に内傾する肩部にくびれ部のみのごく短い頸部から口縁部が聞くもの。大型のものがみられる(壺30・31)。

- ・鉢は3タイプに分けられる。

鉢a = 直口の碗型のもの(40・44)。

鉢b = 体部からなだらかに口縁部が聞くもの(1・42)。

鉢c = 丸みをもつ体部から肩部がすばり屈曲して口縁部が外反するもの(41・43)。

- ・甕の大部分は体部から口縁部が斜め上方に外反する。

甕a = 口径が体部の最大径より大きいもの(48~52・55・56・58)

甕b = 体部の最大径が口径より大きいもの(53・57・59)。

- ・瓶形土器は甕の底面の中央部に孔が穿たれたものだが、穿孔法は3種類に分けられる²⁾。完形のものはなく、底部のみ残存している。

瓶形土器a = 錐状の工具で穿孔するもの。

瓶形土器b = 打ち欠きで穿孔するもの。

瓶形土器c = 錐状の工具と打ち欠きを組み合わせて穿孔するもの。

<遺構内出土土器>

S K 1 内出土土器：住居跡1内の南側床面で検出したSK 1内から弥生時代前期の鉢1、甕2、甕底部3、瓶底部4、甕底部5がかたまって出土した。

鉢1は体部から口縁部がわずかに外反するもの(鉢a)。調整は外面体部と内面の上位には横方向の、下位には縱方向の後に横方向のヘラ磨きが認められる。口径34.4cm。甕2はほぼ直立する体部から口縁部が外反するもの(甕a)。口縁端部にヘラ削み目文、肩部にヘラ引き沈線文を3条もつ。体部内面には板ナデの当たり痕が認められる。口径17.6cm、胴径14.2cm。甕底部3は外面にヘラ磨き、内面

にヘラナデ調整が認められる。瓶形土器底部4は底面が内外面から穿孔されたもの(瓶b)。内外面ともにハケ目の後にナデ調整が認められる。内面には煮焦げが付着している。底径8cm。包含層内からも瓶形底部が数個体(図3.65-66)出土しており、3種類の穿孔法のものがみられる。壺底部5の外面はハケ目の後に板ナデとヘラ磨きの調整が認められる。壺2の胎土は生駒西麓産以外のもの。

P 9内出土土器：壺6は口縁端部に面をもつもので外面にナデとハケ目調整が残る。口径19.5cm(復原値)。色調は灰白色を呈し、胎土は生駒西麓産以外のもの。

炉跡内出土土器：壺7は頸部が肩部から屈曲して立ち上がり、口縁部が聞くものの(壺a)。口縁部には孔が1個穿たれている。頸部と肩部の境界に削り出し突帯文をもち、突帯の下部がナデつけられている。調整は内外面ともにヘラ磨きが認められる。口径16.2cm。胎土は生駒西麓産。壺底部8は小破片だが底面から体部にむかって大きく折がるもの。内面に激しい磨耗がみられる。

P 2-4上面出土土器：壺9はピットの西端の上面で内面が上向きになって出土した(図3.14)。形態は笠形を呈し、つまみ部の中央には縱方向の孔が穿たれている。外面の調整は周縁に沿って、また内方に交差させたアトランダムなヘラ磨きが認められる。外側から内面にかけてわずかに煤が付着している。口径11.8cm。

土坑内出土土器：壺①は口縁部と頸部の境界に削り出し突帯をもつもの。

＜黒色シルト質粘土層内出土土器＞

黒色シルト質粘土層内から壺、甕、無頸甕、高杯、鉢、瓶形土器などが出土した。器種構成は壺、甕が主体で他の器種は少ない。図示した土器はそれぞれの器種および同形態の代表的なものである。その他、口縁部、底部、文様片などを写真図版に掲載した。壺、甕、鉢はタイプ別に記載する。

壺a-10は出土土器のなかで唯一、完形に復原できたもの。底部はやや上げ底風である。口縁部の2箇所に円孔1個が穿たれている。施文は頸部に深い溝状のヘラ描き沈線文が2条施され、沈線文のすぐ下にはヘラ磨き調整で段差をついている。体部の上位には、肩部との境界に4条のヘラ描き沈線文が施されている。内外面全体はヘラ磨きで仕上げられており、肩部には横方向のヘラ磨きの後には等間隔に間を開けて縱方向にも磨きが施されている。口径13.8cm、器高26.6cm、胴径25.8cm、底径8cm。13は口縁端部の上面にヘラ描き沈線文、下位に刻み目文が施され、やや締まった頸部と口縁部の境界には、ヘラ描き沈線文が1条付けられた後に横ナデ調整、その下部は縱方向のヘラ磨きで突帯状に削り出されている。25は頸部と肩部の境界に断面三角形の貼り付け突帯がみられ、突帯の上下がナデつけられている。口径は13が15cm、25が14.8cm。

壺b-11は頸部と肩部の境界に粘土を貼り足した段が形成され、基部に沈線文が付加されている。外面にはハケ目調整と内外面共にナデ調整のちの、ヘラ磨きが口縁端面まで認められる。26は体部が大きく帳り出しているもの。頸部に削り出し突帯、肩部と体部の境界に削り出し段が形成され、それぞれの部位に浅細のヘラ描き沈線文3条が加配されている。内外面ともヘラ磨き調整。口縁部には孔が11は2個一対、26は1個穿たれている。口径は11が16cm、26が16.7cm。

壺c-14・28は頸部と肩部の縦ぎ目に段が造られ、28は段の基部に沈線文が付加されている。体部上位と肩部の境界には14・28とともに沈線文が、14の体部中位には連弧文が、28には沈線文が施されている。内外面ともに横方向のヘラ磨き調整が認められる。口径は14が16.5cm、28が17cm。

壺d-30は大型品で口縁端部には太いヘラ描き沈線文、肩部に沈線文が3条施されている。外面にはヘラ磨き調整が認められる。31は口縁端部に沈線文が巡らされた小型のもの。胎土に角閃石は含まれていない。

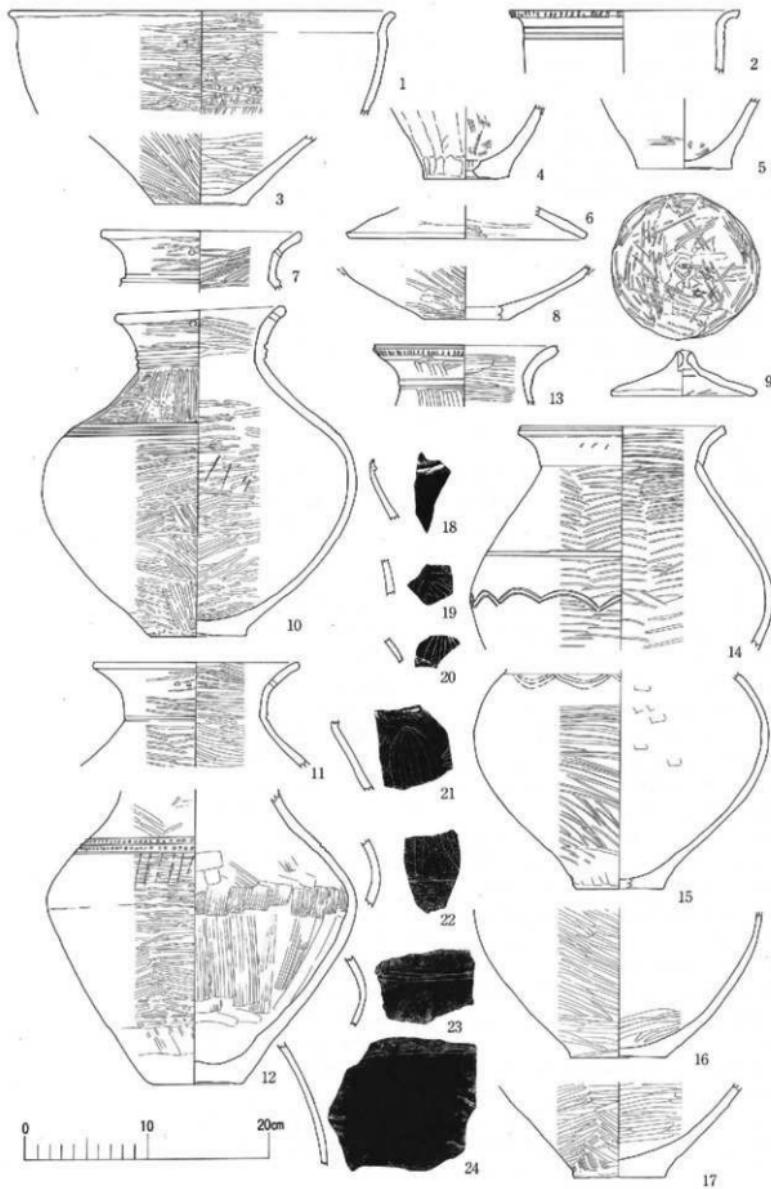


图3.41 弥生時代前期、土器実測、拓本図

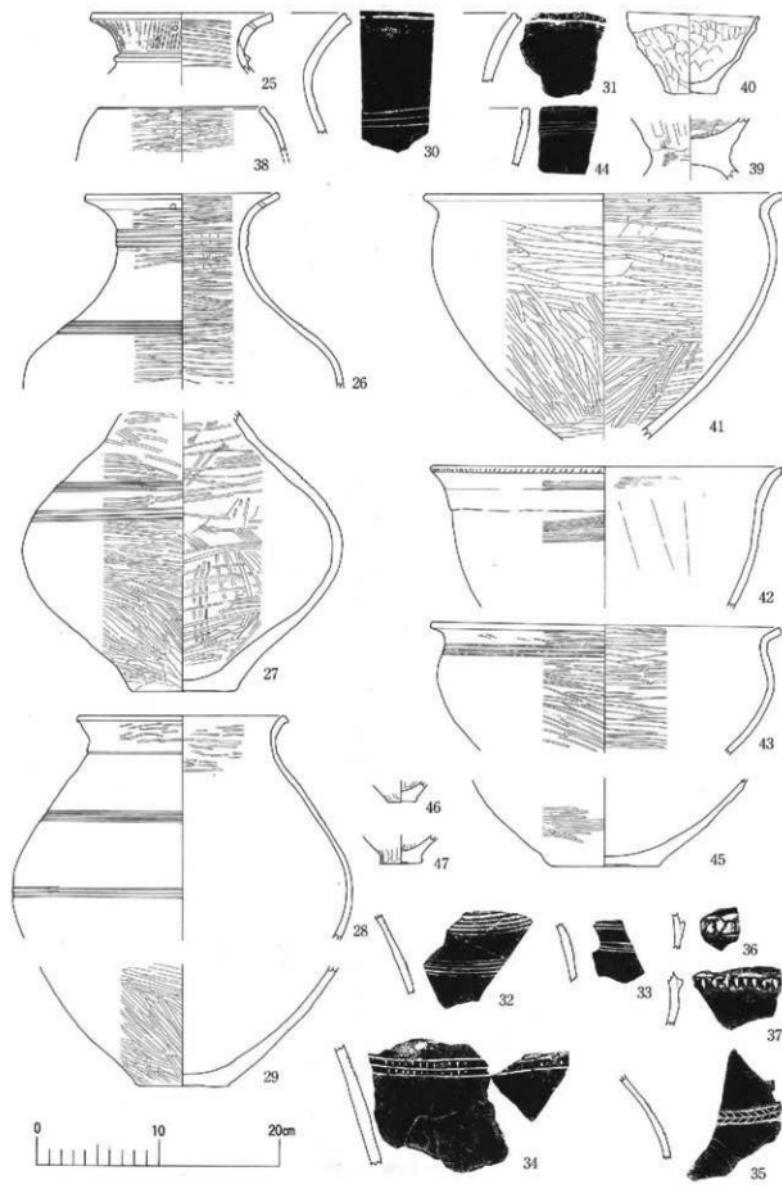


図3.42 弥生時代前期土器、実測、拓本図

その他の壺-12・27は口頸部を欠くもの、15は口縁部～肩部を欠くもの、16・17・29は底部、18は肩部、19～24、32～37は体部の文様片である。

12は底部から体部中位まで直線的に外傾して立ちあがり、体部中位で屈曲して肩部に続く丈高のもので、肩部と体部の境界には沈線文3条とその間に刺突文が施されている。外面にはヘラ磨きの上から部分的にナデ調整、内面体部には板状原体の当たり痕が残るナデとハケ目調整が認められる。15は球形の体部をもつ。肩部と体部の境界に沈線文状の窪みが巡らされ、その下位にはヘラによる上向きの3本の重孤文がみられる。体部外面にはヘラ磨き、底部外面と体部内面には板状工具によるナデの当たり痕が認められる。体部器高17.8cm、胴径24.3cm、底径7.2cm。27は体部の中央が丸く張り出し、3条の沈線文が巡らされている。胎土は壺26に似るが器壁は厚手である。内外面ともヘラ磨き調整が認められる。18の肩部片は粘土帯を貼り付けて段状に形成されている。19～22は木葉文が施されており区画線は19が2条、22が1条認められる。21は段の下に8本の線による木葉文を縱位と横位に連続に描かれているもので類例は少ない⁵。23は浅細の3条のヘラ描き沈線文と4条以上の縱線文が認められる。24は5本の線による木葉文を主軸に、その下位に重孤文と区画線が描かれている。32、33はヘラ描き沈線文が2帶施され、34はヘラ描き沈線文の間に、間欠的にヘラ刻み目文が加配されている。35はヘラ描き沈線文の間に途中で方向が逆転する有輪縫文がみられ、その下部に2本線の下向きの重孤文が施されている。32・35の胎土には角閃石が含まれていない。

彩色土器①は残存状態が悪く文様が不鮮明である。器表面には下地に黒色物質が塗布されており、赤色顔料の平塗りの線の文様がわずかに認められる。

無頸壺38は薄手で直口するもの。内外面ともにヘラ磨き調整が認められる。無頸壺はこの1点だけ出土している。

高杯39は杯部の下位から脚部の上部が残存しているものである。直口の杯部がつくものと考えられる。内外面ともにハケ目調整の原体の当たり痕が認められる。

鉢a～40は小型品。器面には多くの指押さえとナデ調整がみられる。体部外面の2箇所と、口縁部内面に粘土の接合痕が認められる。底部裏面には貝殻条痕状の削りがある。口径10.6cm、器高6.5cm、底径4.2cm。44は口縁部上面に極細のヘラ描き沈線文が1条、体部に4条施され、内外面共にヘラ磨き調整が認められる。

鉢b～42は口縁端面にヘラ刻み目文が施され、体部上位に形骸化した段が認められる。外面の体部上位には細かいハケ目。下位と内面の体部には板ナデ調整が認められる。外面全体には薄く煤が付着している。口径28.8cm、胴径24.4cm。

鉢c～41は丈高の体部で内外面ともにヘラ磨き調整が認められる。外面全体に煤が付着している。口径28.8cm、胴径24.4cm。43は器高が鉢41に比べると低く、肩部にヘラ描き沈線文が3条加配された削り出し突帯をもつもの。内外面ともに細い幅のヘラ磨き調整が認められる。口径28.6cm、胴径27.6cm。

その他一器種不明の小型の底部46、47がある。壺の底部とも考えられる。底面の器壁は厚く、外面にヘラによるナデ調整が認められる。

壺a～壺は形態がタブレットタイプで、施文は口縁端部に刻み目文をいれるものが多い。肩部には無文様のものと、段、ヘラ描き沈線文、刺突文、竹管文、圧痕文がみられる。調整はハケ目と板ナデがみられる。48は体部の内面に板ナデの調整が認められる。外面には煤が付着している。口径17.6cm、胴径16.2cm。49は胴径とはほぼ同じくらいに口縁部が開くもの。壺の調整は通例、縱方向のハケ目が多いなかで、49は横方向の調整が認められる。口径20.8cm。胎土には角閃石が含まれていない。50は体部に6本/1cmの鮮明なハケ目の調整痕が認められる。体部外面に煤が付

着し、内面底部に煮焦げが残る。口径22.4cm、胴径11.4cm。51は口縁端部の幅がやや狭い面に、ヘラ刻み目文が施され、肩部のヘラ描き沈線文の下部をハケ目調整で段状に形成されている。口径25cm、胴径22.4cm。52は口縁部がやや外消しながら開き、端面は幅広である。外面には煤が付着している。口径18.8cm、胴径16.5cm。54は外面に幅広のヘラのナデ調整が認められる。55は外面に横方向のヘラ磨き調整が認められる。56は体部の下部の方が器壁が厚くなるもの。58は体部にヘラ描き沈線文が3条施され、間に刺突文が巡らされている。外面には煤が付着している。59は口縁部がやや厚く、肩部には沈線文が3条巡らされているが溝幅は一定でない。上段の沈線文の間には竹管文が施されている。

壺 b-53は口径33cmの大型品。57は b 形態の壺のなかで他のものと比べると幅が不均一な沈線文が施されている。外面には煤が付着している。

60~63は口縁部を欠くもの。60はヘラ描き沈線文と三角形の形をした圧痕文が、61は沈線文と梢円形の押捺文が施されている。62は幅広のヘラ描き沈線文が横位に5条、斜め位に4条施されている。今回の出土品のなかでは沈線の本数が一番多い。63は削り出し突帯をもつもの。

壺底面③はヘラによる1本線が記号文式に刻まれている。底面の創跡④は大きさが6×3.5mmである。創跡はその他、底部の断面などにも認められた。

次に以上の土器の主な特徴をまとめてみる。

- ・形態的には壺の体部がやや丈高で頸部の立ち上がりは短く、口縁部はあまり大きく開かないものが多い。
- ・施文では壺などの各部位の境界に施された段、ヘラ描き沈線文、削り出し突帯、貼り付け突帯や、その他ヘラ刻み目文、竹管文、押捺文、刺突文、ヘラ描き木葉文・重弧文、赤色顔料による彩色したものなどが認められる。
- 段は粘土の離き目が段状に残るもの他に、ヘラ描き沈線文を施した後にすぐ下の部位をヘラ押さえや、ヘラで削りとて段状に形成したもの、ハケ目調整やヘラ磨きの段階で作り出しているものなどが認められる。
- ヘラ描き沈線文には単独のものと、削り出し段・突帯の上面や基部に施すものの、沈線間に押捺文・綾杉文を組み合わせるものなどが認められる。
- 刻み目文が付加された断面三角形の貼り付け突帯、多条あるいは2帯以上のヘラ描き沈線文などの新相の属性をもつ土器は少なく、小破片のみに少し認められた。
- ・煤の付着部位は壺と鉢の外面全体と体部以下や、鉢41の口縁部にまで認められる。内面の煤の付着部位は底面から体部にかけてのものと、底面には付かず、体部に焦げ付きがみられるものがある。壺と考えられる底部内面にも煤が付着するものがある(図3.64)。これらは上部が削れてから煮炊き用に使われたものかもしれない。壺のなかで全く煤の付着が認められない49は、土器の胎土が在地産のものでない。他地方の物産品を入れて搬入されたものだろうか。壺の底面中央部に孔が穿たれ、他の用途に転用されたと考えられる土器の内面壁には磨滅痕が認められるものがある。

土器の時期は形態、施文などを前期の土器出土例に照合すると、若江北遺跡をはじめとする弥生前期古段階の資料より新しい属性をもつものが認められ、山賀遺跡の前期中段階の資料には似ており、この時期のものと考えられる⁶。

土製品

土製円板64は、沈線文1条とヘラ磨き調整が残る土器の体部片の周囲が打ち欠かれたもの。直径5.8cm。重量は33.25g。胎土には角閃石が含まれる。

土鍤65は球形を呈し、中央に棒状の原体で穿孔されている。表面に叩き目痕が認められる。生駒西麓産以外の胎土。径は4cm、孔径は0.8cm、重量は56.45g。

粘土塊⑤～⑩は色調が灰褐色と橙乳色のものがある。鉱物の含有は肉眼では認められない。橙乳色のものには、土器の微小片を粘土中に混和材として入れるシャモットが混じる。粘土塊の外面や内部には稜状の筋がついている。重量は⑤が40.40g、⑥が40.50g、⑦が26.55g、⑧が22.90g、⑨が9.20g、⑩が31.65g。磨滅のためか丸みをもち、⑤・⑥は一握りの大きさの投弾状を呈す。粘土塊は熱を受けているものと考えられ、これらは「焼土塊」とも呼ばれている¹⁷⁾。

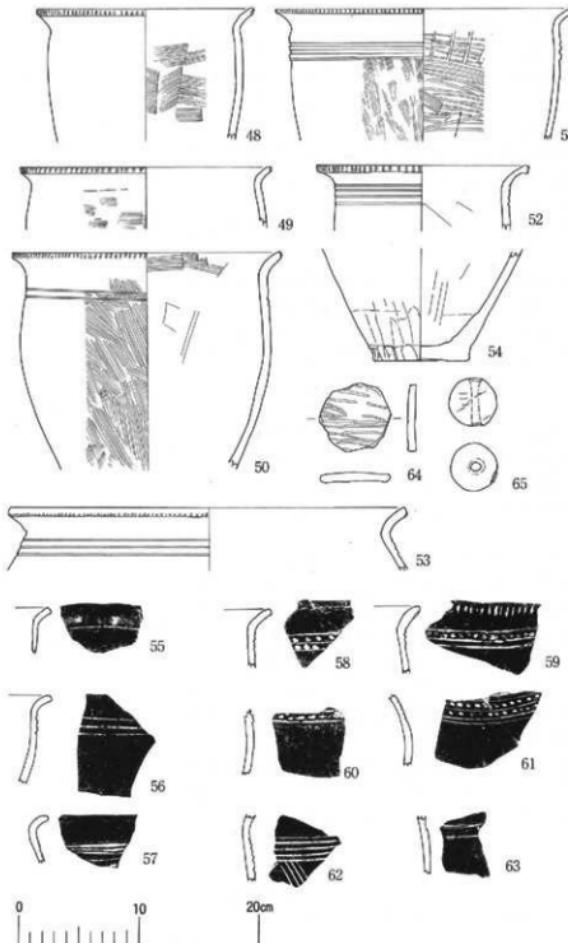


図3.43 弥生時代前期、土器・土製品実測図、拓本図

木器

高杼66は杯部と脚部の裾部の小破片である。杯部は外湾しながら開き、口縁部の内側が段状に削り出されている。脚部の内面に削りの加工痕が認められる。内外面とも炭化している。口径24.4cm、脚径21.8cm(復原値)。樹種は杯部がサクラ節、脚部がクスノキ。もし同一個体とすると組み合わせ式が考えられる。

弓67は半分が欠損している。中央部から端部にかけて細く削られ、端部には両側面から繰り込みをいれ、弓弭が作り出されている。最大幅は1.3cm。樹種はカヤ。

用途不明木製品68は半剖材に加工されたもので一端を欠く。一面の上端部から6.8cmまでの間は1cmぐらいの幅を丁寧に削り落として段状につくられ、他面には2箇所に凹面状の粗いタッチの削り込みが認められる。最大幅4.8cm。最大厚3cm。樹種はツゲ。

以上の木器以外にも用途不明の加工痕を残すもの、自然木、炭化木などが多量に出土している。

自然遺物

イノシシの歯、骨片、大型植物遺体、広葉樹の実・桃殻などの出土をみた。

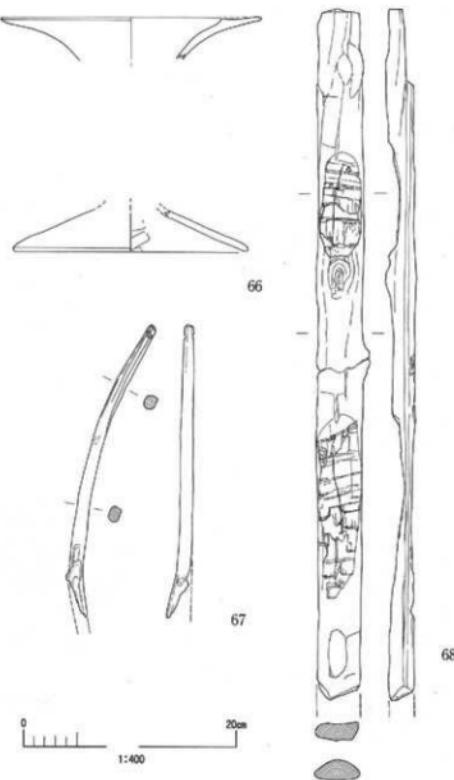


図3.44 弥生時代前期、木器実測図



9



10



28



26



15



12



①



②

図3.45 弥生時代前期。

蓋9、壺10、壺26、壺胴部2.27、壺28、壺胴部15、赤彩文土器片①、イノシシの齒②



41



50



54



40

図3.46 弥生時代前期.

鉢41、壺底部54、壺50、
鉢40



③



④



64



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

図3.48 弥生時代前期.

粘土塊

(ウ)地点出土⑤、⑩、
(エ)地点出土⑥～⑨

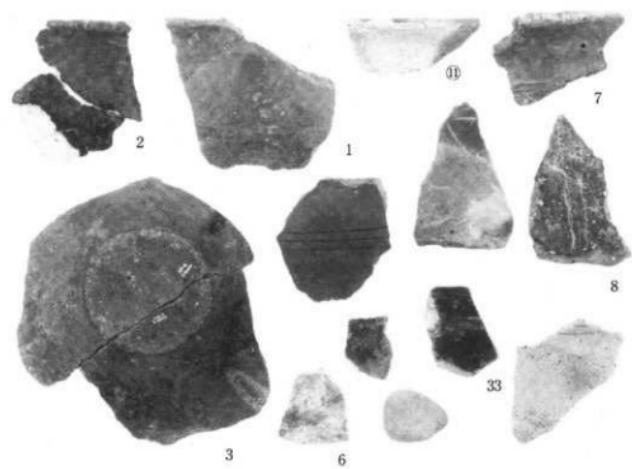


図3.49 弥生時代前期。
(ウ~オ) 地点検出のピット
内出土土器



図3.50 弥生時代前期。
壺(1)

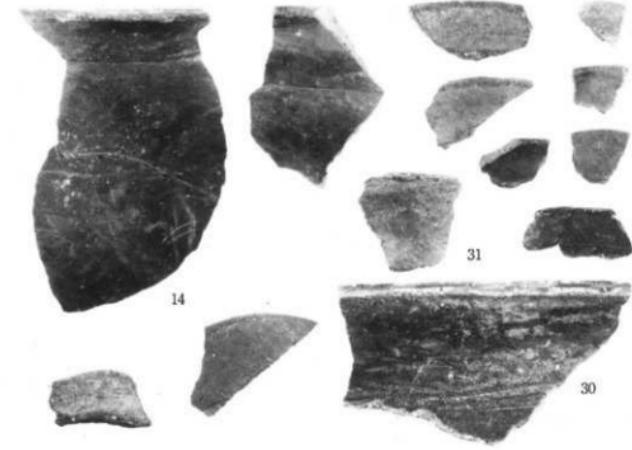


図3.51 弥生時代前期。
壺(2)

図3.52 弥生時代前期.
壺(3)



図3.53 弥生時代前期.
他地方産の胎土の土器



図3.54 弥生時代前期.
へら書き文、貼り付け突帯
文を施している破片

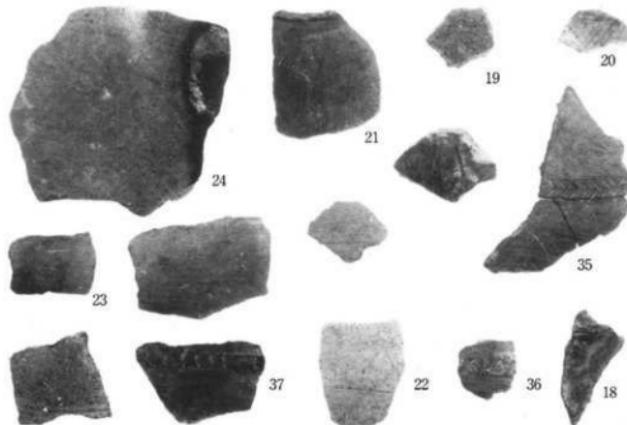


図3.55 弥生時代前期.
鉢、高杯、無頸壺、蓋

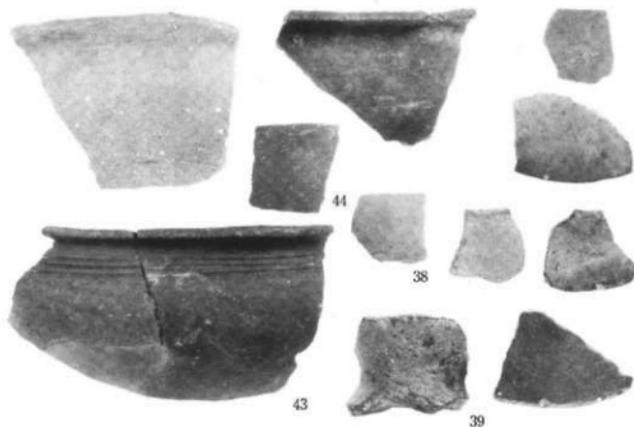


図3.56 弥生時代前期.
壺、鉢

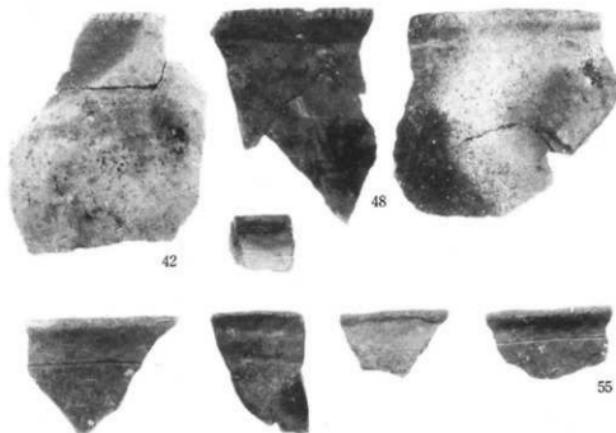


図3.57 弥生時代前期.
甕(1)

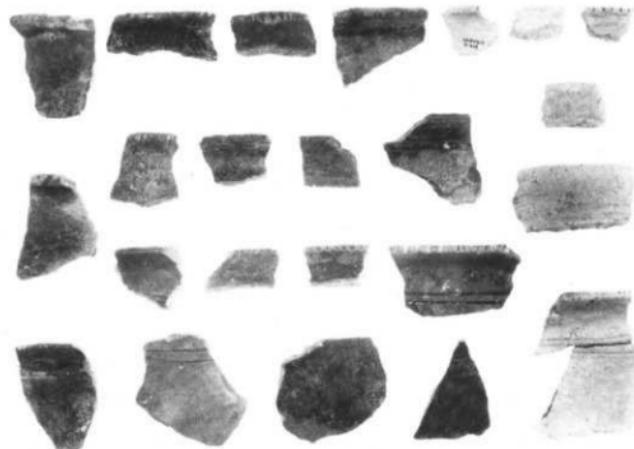


図3.58 弥生時代前期.
(工)地点出土一括土器

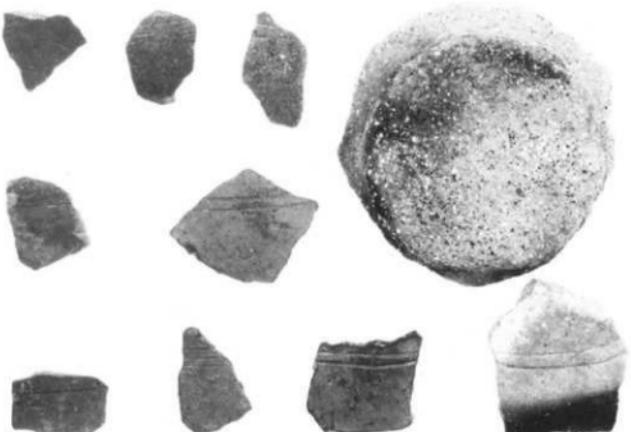


図3.59 弥生時代前期.
甕(2)

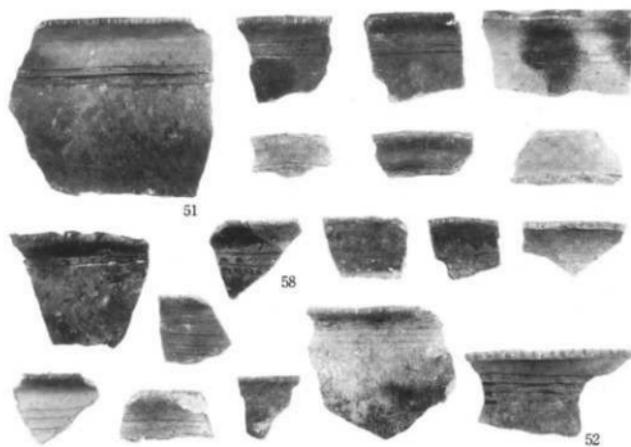


図3.60 弥生時代前期.
甕(3)

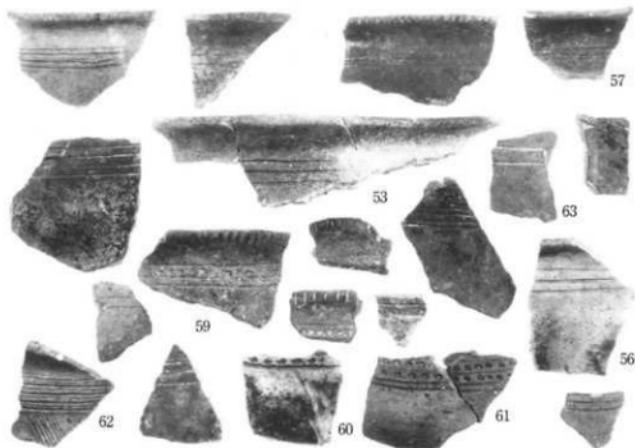


図3.61 弥生時代前期。
(ウ~オ) 地点の遺構面の上
層(第14層)出土土器



図3.62 弥生時代前期.
壺破片

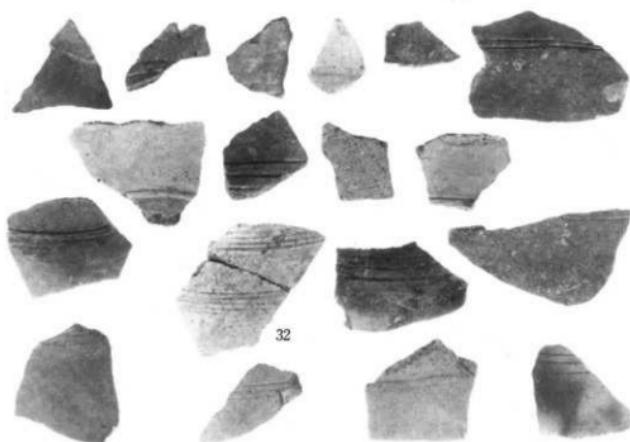


図3.63 弥生時代前期.
壺体部片

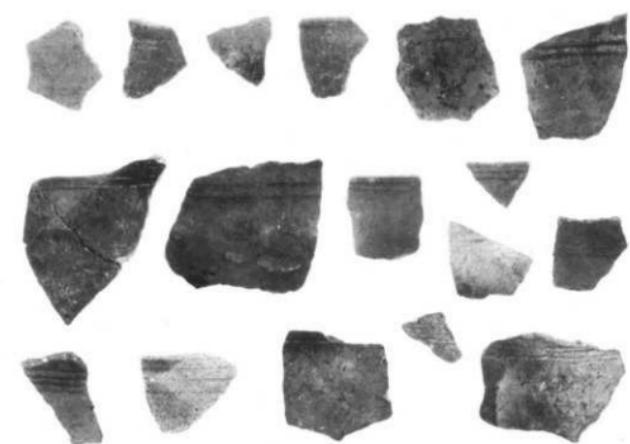


図3.64 弥生時代前期.
壺底部

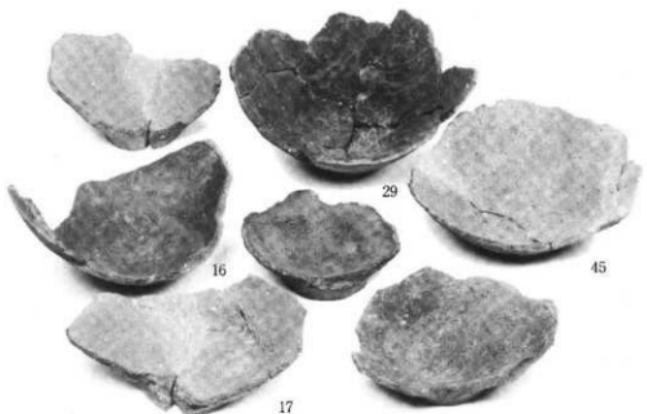


図3.65 弥生時代前期.
瓶、壺底部外面

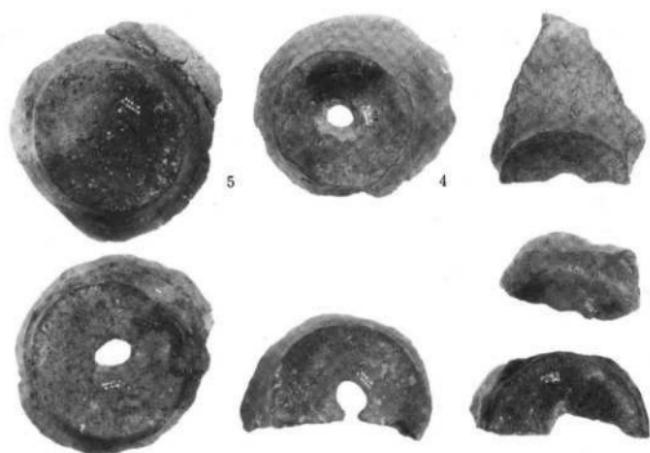


図3.66 弥生時代前期.
瓶、壺底部内面

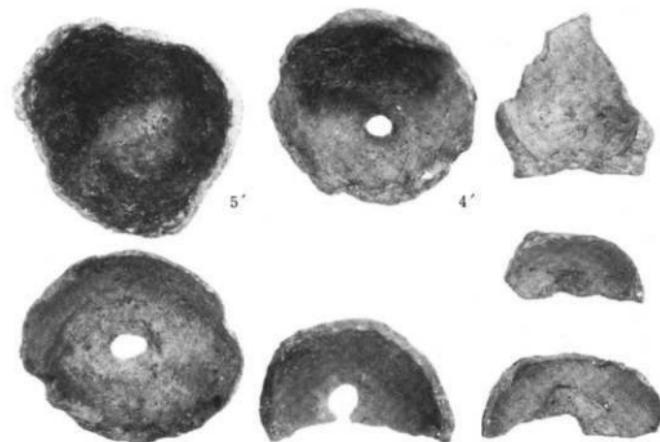


図3.67 弥生時代前期.
壺、甕底部外面(1)

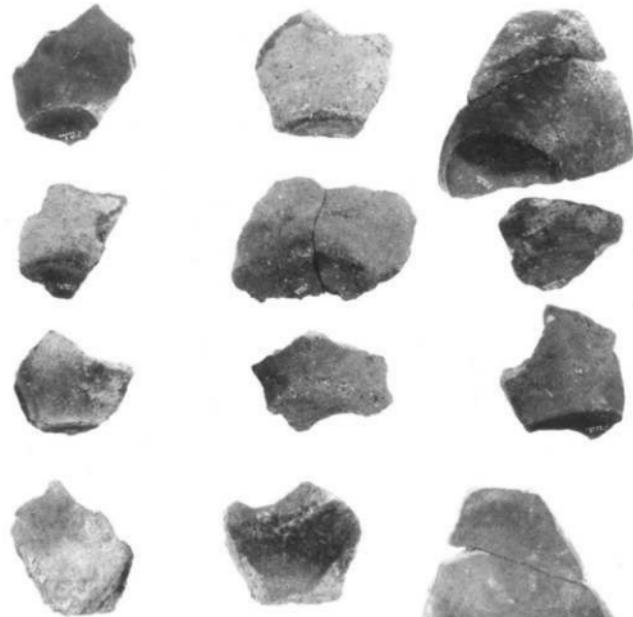


図3.68 弥生時代前期.
壺、甕底部内面(1')

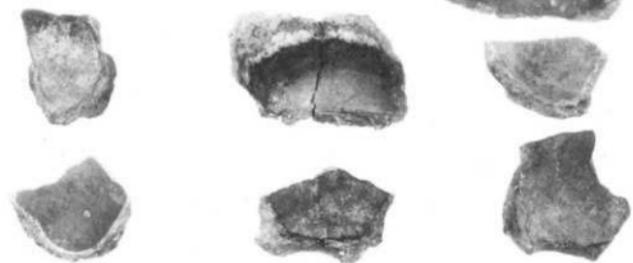
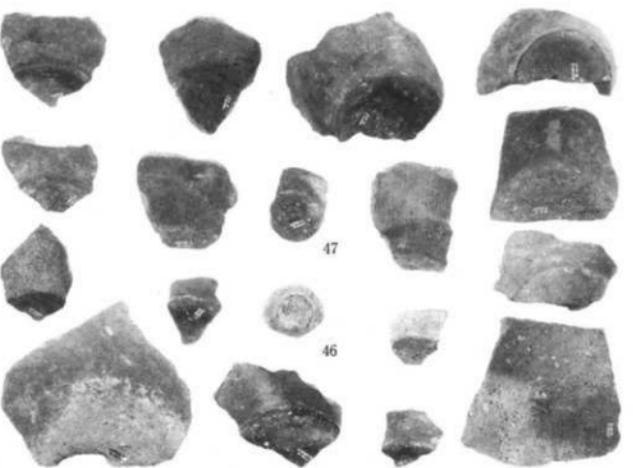


図3.69 弥生時代前期.
壺、甕底部(2)





66

図
3.70

弥生時代前期・木製高杯の杯部と脚部 66、木製弓 67 と角材、用途不明木製品 68、土鍾 65



67



65



68

図3.71 弥生時代前期～中期。
(オ)地点の地震動により変形
した堆積層の南側断面1－水
糸は T.P.-1.5m



図3.72 弥生時代前期～中期。
(オ)地点の地震動により変形
した堆積層の南側断面2－水
糸は T.P.-1.5m

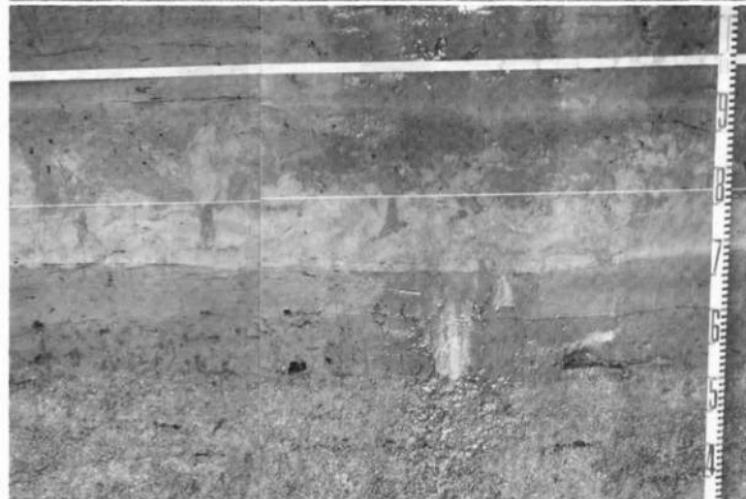
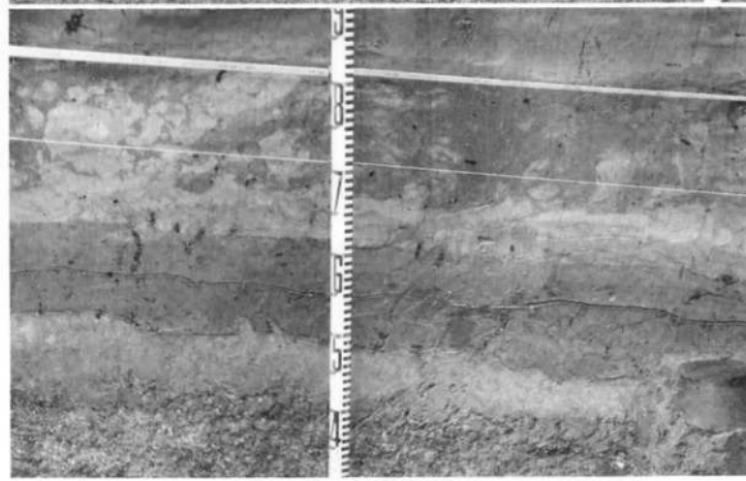


図3.73 弥生時代前期～中期。
(オ)地点の地震動により変形
した堆積層の南側断面3－水
糸は T.P.-1.5m



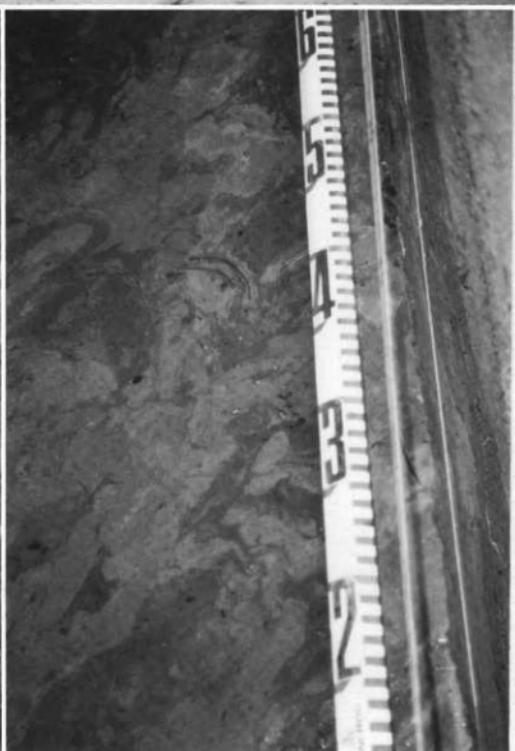
2-3) 地震の痕跡(図3.71～3.76)

弥生時代前期の遺構面の上層(シルト～粘土層)で、弥生時代前期～中期の時期に起こったと考えられる地震による土層の変形構造がみられた。

図3.74(右上) 弥生時代前期～中期、(オ)地点の地震動により変形した堆積層の南側断面4—水系はT.P.-1.3m

図3.75(左下) 弥生時代前期～中期、(オ)地点の地震動による変形した堆積層の水平断面

図3.76(右下) 弥生時代前期～中期、(オ)地点の地震動による変形した堆積層の水平断面



3) 弥生時代中期の遺構と遺物

調査地全体のレベルがT.P.約-0.6mから-1.6mの間には、イネ科の植物の茎の化石、植物根やその跡跡が認められるオリーブ灰色粘土層に、連続しないシルトと粗粒砂の互層、連続性のよいシルトと部分的にかか細粒砂の薄互層、砂層のラミナなどが観察された。後背湿地および自然堤防の堆積層と考えられる。粘土層中には团子状の砂、角礫状の粘土の間に粗粒砂を含むものなどが認められた。検出した遺構は溝・落ち込み、方形・円形周溝、方形周溝墓と旧河道である。

(エ・オ)地区ではレベルがT.P.約1.6mから-1.4mの間のシルト～粘土(泥質堆積物)に地震動による変形構造がみられた(開放型フレーム構造-松田1997th)。

溝状落ち込み1 (ウ)地区の中間地点で検出した。幅3.6mを測る。西側の旧河道の流れ込みかもしれない。上位には旧河道の砂が堆積している。下位には炭化物が多量に含まれる細砂層～シルトが堆積し、最下層には生痕が多く認められた。溝内からは弥生前期～中期初頭の土器が出土した。遺物は前期の土器が多く、中期の土器が少し含まれる。壺69は頸部に櫛推き直線文、厚手の口縁端面に櫛推き波状文が施された中期初頭のもの。壺70は体部に粘土の繊維目による段をもつ前期古段階のもので、色調は白黄色を呈す。胎土には角閃石を含まない(図3.80)。

溝2 (ウ)地区の中期の遺構面の東端で、幅60cmの浅い溝2を検出した。溝内

図3.77 弥生時代中期。(ウ)地点検出の溝1の平面実測図、堆積層の断面実測図

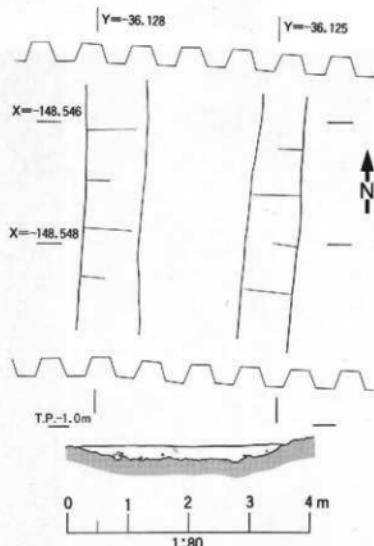


図3.78(上) 弥生時代中期。溝1の検出状況
(東から撮影)

図3.79(下) 弥生時代中期。溝1の堆積土層
の断面図。T.P.-1.5m (北から撮影)



には黄褐色の砂が堆積していた。

方形周溝1（エ）地区で後背湿地の堆積層上面に中粒砂～粗粒砂混じりの暗緑灰色の粘質土を盛土にして周溝をもつ遺構を検出した。盛土の上位は土壤化するまえに、上位と西側から北側にかけて約3分の1が西の旧河道2により侵食されおり、平面では検出できなかった。そのため断面観察用の南竪の堆積層で遺構の規模などを確認した。

盛土上面のレベルはT.P.約-0.44m、東西の現存長は2.15mを測る。調査地内では主体部を検出していないため、方形周溝かどうかは断定できない。東周溝の規模は幅1.15m、深さ0.4m。溝内には盛土が流れ込み、細粒砂～中粒砂混じりのオリーブ灰色粘質土に、中粒砂や团子状の粘土が部分的に挟まれている。西

図3.80 弥生時代中期、（ウ）地点の溝1内出土
中期の壺69、前期の壺70実測図

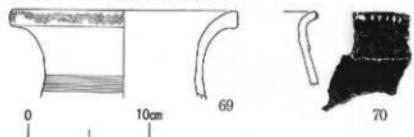


図3.81 弥生時代中期、（ウ）地点の溝1内出土
壺69、壺70



図3.82(上) 弥生時代中期、（ウ）地点の溝1の堆積層
の断面、下位は下から弥生時代前期中葉以前の旧河道、
弥生時代前期干潟の堆積層の断面—水糸はT.P.-1.5
m—(北から撮影)



図3.83(下) 弥生時代前期、（ウ）地点の溝1の下層に
生態痕がみられる弥生時代前期の干潟の堆積層の断面
—水糸はT.P.-1.5m—(北から撮影)



図3.84(上) 弥生時代中期。
(オ)地点検出の方形周溝1の堆積層の断面—水糸はT.P.-0.5m—
(北から撮影)

図3.85(下) 弥生時代中期。
(オ)地点検出の方形周溝1の東周溝の堆積層の断面—水糸はT.P.-0.5
m—
(北から撮影)

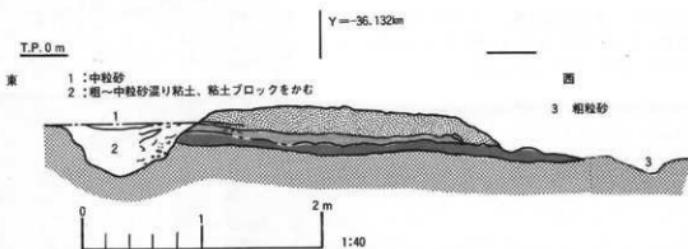


図3.86 弥生時代中期。(オ)地点検出の方形周溝1と東周溝、西周溝の堆積層の断面実測図

周溝には旧河道2の砂が埋まり、下位には東周溝と同じく盛土の砂が堆積している。

円形周溝1 (ウ)地区の円形周溝1は粘土層に溝が円形に切られたものである。西側の台状部は旧河道1の粗粒砂で浸食されており、下位の粘土層がオーバーハングしている。また遺構は平面の南側が調査範囲外につづくため、検出できた範囲は全体の1/4ぐらいである。周溝の規模は上部の幅が1.44m、底部幅が0.4mを測る。台状部のレベルはT.P.約-0.30mで溝部の半径が約4.5m、周溝底から台状部までの高さは約52cmを測る。東側の傾斜部は階段状を呈する。台状部の上面で遺構全体を確認できなかったが、南側の断面に小ピットが認められた¹⁶。

周溝は方形周溝墓1の溝で切られているが、溝が交差して離れる北側角の肩部付近から、抉りをもつ有頭木製品が出土した。かなり摩滅しており加工痕はあるが残っていない。木製品は円形周溝1に伴うものと考えられ、なんらかの祭祀用具だったかもしれない。最長幅6cm、最大幅2.4cm。樹種はヒノキ。

旧河道調査地内では低湿地によくみられる旧河道が流路をかえて何本も認められた。旧河道1は(ウ)地区の弥生前～中期の溝状落ち込み1の上層に流れ込み、東側の円形周溝1の粘土層を切り込んでいる。上位には極粗粒砂が堆積し、下位から上位西端部にかけて、粘土とシルトの斜交稟理の堆積層が認められる。旧河道2は(エ)地区の方形周溝1の西溝を削り込み、方形周溝墓1の西側へ流れている。(ア)地点で検出した旧河道3は同時期のものと考えられる。旧河道4は(エ)地点で検出したが、東側を溝1と旧河道1で削られている。

方形周溝墓1

方形周溝墓1は(ウ)地区において、墳丘の南半分と北東の角は矢板で切断され

図3.87 弥生時代中期。(イ)地点出土の抉りをもつ有頭木製品



図3.88 弥生時代中期。(イ)地点出土の抉りをもつ有頭木製品の実測図

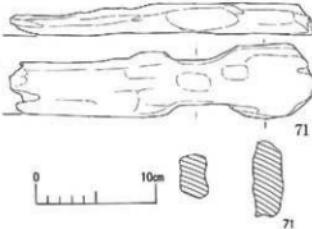


図3.89 弥生時代中期。(イ)地点検出の円形周溝1の平面実測図、方形周溝墓1の東周溝の平面実測図と各堆積層の断面実測図

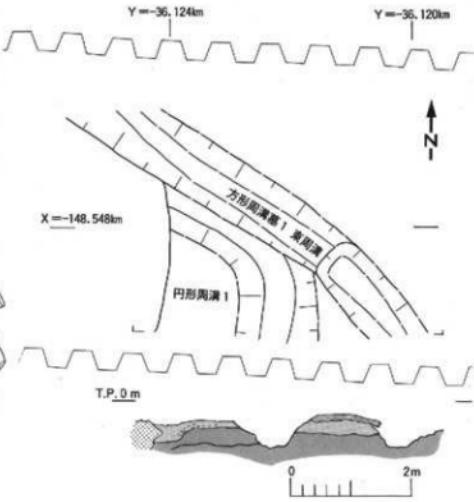


図3.90 弥生時代中期。
(イ)地点の円形周溝1の下位の水平面
(北から撮影)



図3.91 弥生時代中期。
(イ)地点の円形周溝1の下位の水平面
(北西から撮影)



図3.92 弥生時代中期。
(イ)地点出土の挟りをもつ有頭木製品



図3.93 弥生時代中期。
(イ)地点の円形周溝1
の堆積層の断面(北から
撮影)

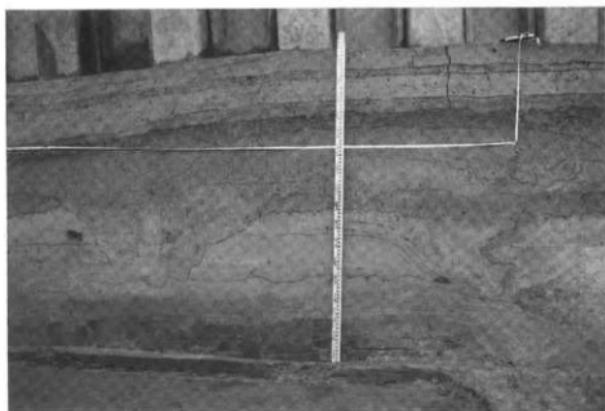


図3.94 弥生時代中期。(イ)地点の円形周溝1の東周溝の断面実測図

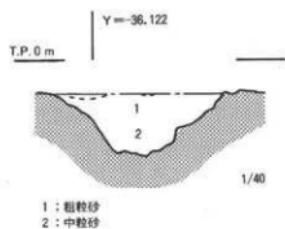


図3.95 弥生時代中期。(イ)地点の溝2の検出状況(南から撮影)

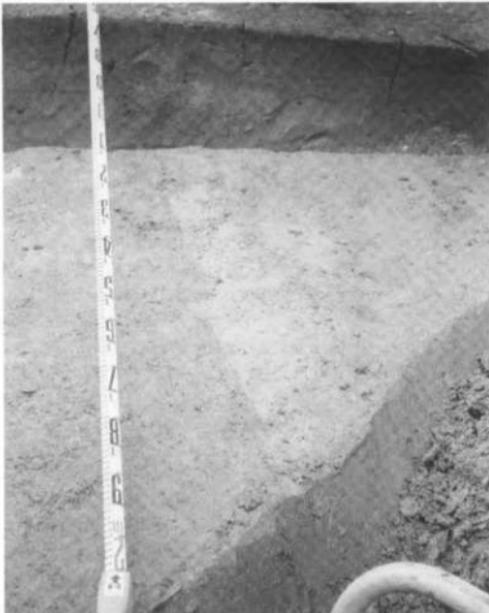


図3.96 弥生時代中期。(イ)地点の溝2の断面実測図(埋土は粘土ブロック
をかむ粗粒砂)

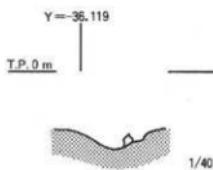
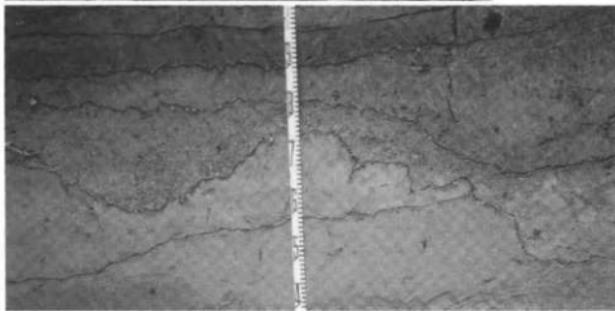


図3.97 弥生時代中期。(イ)地点の溝2
の堆積層の断面(北から撮影)



ていたが、全体の約1/2とその主体部1基が検出された。座標軸はY=-36.120km・X=-148.545kmからY=-36.130km・X=-148.550kmの範囲に位置する。

規模：墳丘の主軸は北西から南東に走り、長方形を呈すると考えられる。規模は周溝を含めて全形を復原すると約12×8mになる。検出した周溝の現存幅は東側が約8m、西側が約5.2mで、墳丘の裾部の現存幅は東側が約7.2m、西側は約4.8mを測る。墳頂部の最高部のレベルはT.P.約+0.28m、溝の最深部がT.P.約-0.82mである。墳丘の高さは周溝底から約1.1mになる。墓はベースの中疊～細疊混じりオリーブ黒色シルト質中～細粒砂から粘質シルト層を整地して、周辺の砂を約56cmぐらいの高さまで盛りあげて築造されている。

周溝：周溝には盛土が流れ込み、規模を確認するのには困難をきたした。

東周溝は造成時にはベース面から底部までは約52cmほど、U字形に掘り下げており、周溝底のレベルはT.P.約-0.76cmになる。周溝の上部幅は約0.84m、底部幅は約0.40m前後を測る。南側の方の周溝内には盛土の砂が広く流失していたため、最初、周溝の底部まで掘り切れずに陸橋部があるものと誤認していた。中央から北側にかけての周溝は下位の円形周溝1の溝を切っている。周溝内の下位には墳丘の砂と向かい側のベース面の砂が流れ込み、その上に盛土から流失した砂が堆積している。上位には腐食粘土層がみられる。周溝底面は暗緑褐色の中粒砂層である。

西周溝は造成時にはベース面から底部までを約40cm前後掘り下げておらず、周溝の南半分ぐらいがU字形を呈する。北半分の周溝の盛土側はベース面を屈曲させて掘り下げているが、向かい側は旧河道2の粗粒砂の堆積層に当たるためか、逆「へ」の字形を呈している。上部幅は約1.0m、底部幅は約60cm前後を測る。周溝底はやや南よりの地点で深くなり、レベルはT.P.約-0.82mぐらいである。周溝内の盛土側には砂が流れ込み、上位に腐植化した粘土が堆積している。向かい側の南よりの箇所には旧河道のシルトから粘土のラミナの堆積層が、北側の方には底部から旧河道の疊混じりの中粒砂～粗粒砂の堆積層が認められる。

盛土：方形周溝墓の上層は腐植遺体混じりの粘土層がなだらかな丘陵を呈しており、下層の遺構を予測しながら掘り進めることができた。墳頂部のほぼ中央で黄褐色の粗粒砂が堆積する南北方向に流れる旧小河道を検出した。盛土の表土は黒褐色の粗粒砂混じりの砂質土が土壌化しており、この土層の厚みは一定でない。先述したが、盛土を検出した際には、土壤化した盛土の表土部分が流失しており、周縁は原形より約60～70cmほど大きくなっていた。

築造は、レベルがT.P.約-0.36m前後の中～細疊混じりのオリーブ黒色砂質土を整地した層厚が約16cmの堆積層をベースに始めている。ベース面は北西へ少し傾斜し、全体に中央より周縁部の方が若干低くなるように整地されている。東側ベース面の下層の円形周溝1の溝にあたる下位には砂を埋めた後に、墳丘の裾部を丸く形成しながら砂を半分位まで被せている。盛土に使われた砂質土は青灰色や黄褐色、灰色などを呈する周辺の砂を集め、西側から積み上げられたものと考えられる。東側の盛土には黄褐色の砂混じりのオリーブ色の砂、西側の盛土には黄褐色の砂が多くみられた。

盛土の形状は、墳丘上面ではレベルがほぼT.P.約0m付近まで緩やかになだらかな曲線を描くが、この高さから裾部まではきつい傾斜を呈し、その傾向は特に東側の方が強い。盛土の砂の周溝への流れ込みは2～3回有ったことが窺えられる。

主体部：埋葬施設は、中心の座標軸がY=-36.125km・X=-148.549kmで、方形周溝墓の台状部の中心軸に平行しており、ほぼ中央に位置する。墳頂部の旧小河道の東側にあたる。墳頂部の表土から約20cm掘り下げたレベルがT.P.約+0.04

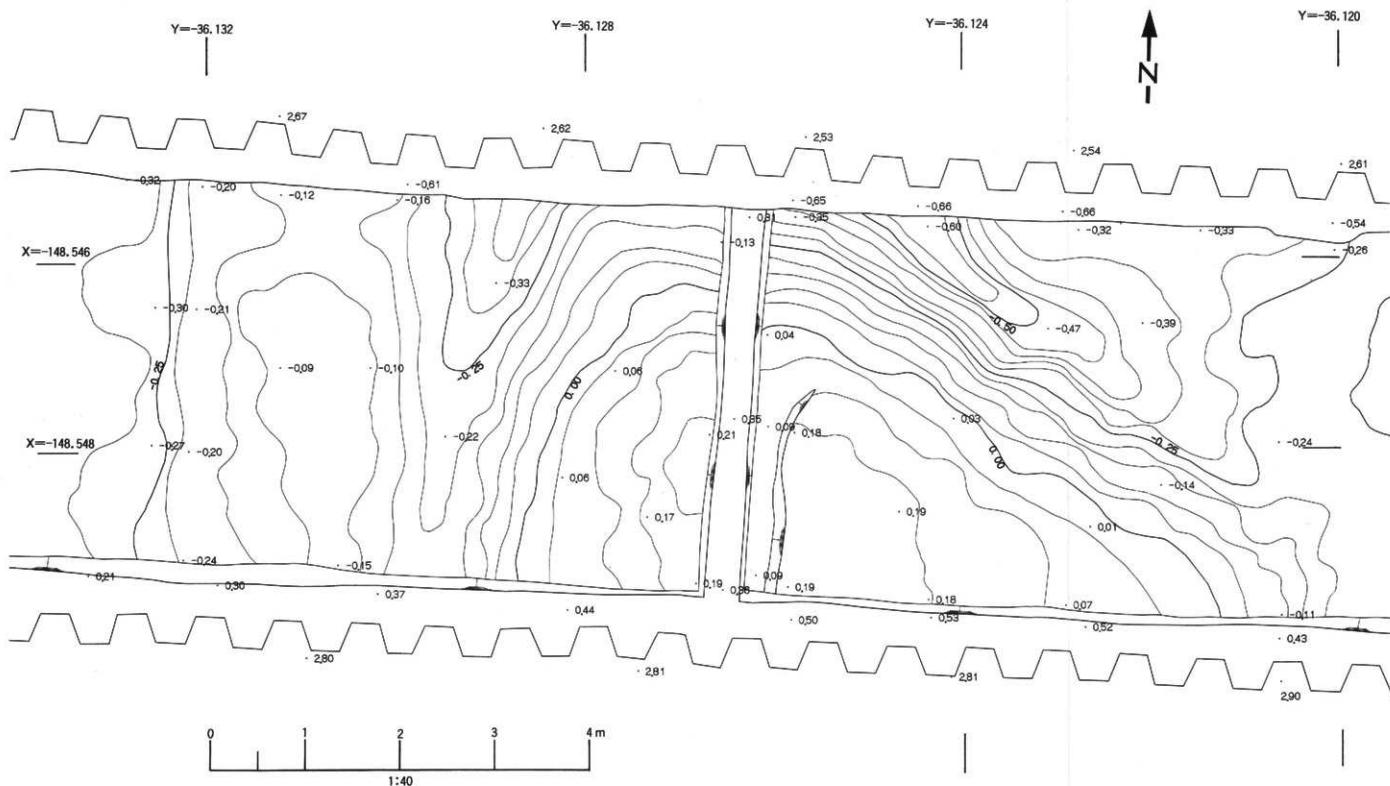


図3.98 弥生時代中期、(イ～エ)地点検出の方形周溝墓1の等高線図(1)…空撮図

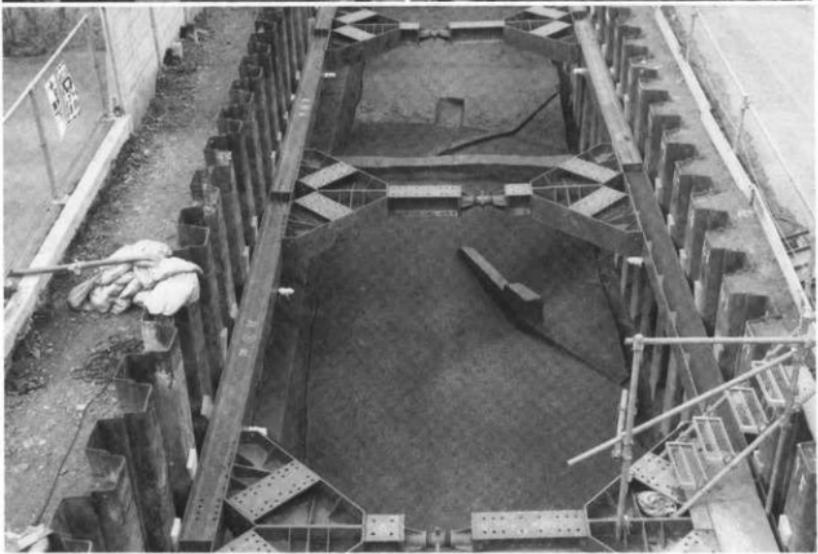
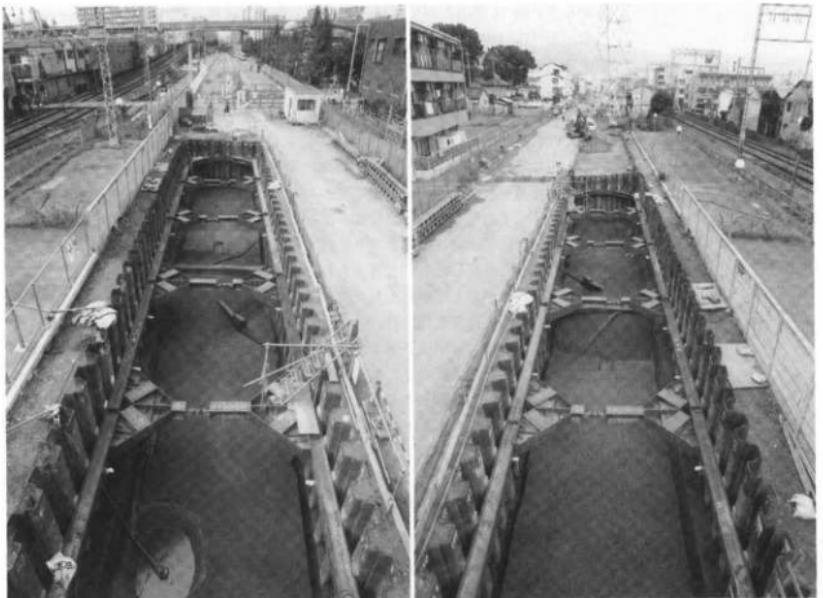


図3.99(左上) 弥生時代中期。(イ~エ)地点検出の方形周溝墓1の全景と西側の近景(東から池崎撮影)

図3.100(右上) 弥生時代中期。(イ~エ)地点検出の方形周溝墓1の全景と東側の近景(西から池崎撮影)

図3.101(下) 弥生時代中期。(イ~エ)地点検出の方形周溝墓1の全景(東から撮影)

mからT.P.約-0.28mの間で木棺の天井板、側板、底板のそれぞれ一部分を検出した。天井板は中央部がなく2枚に割れている。側板は南側のみの極一部、底板は中央部に当たる箇所が残存していた。木棺の天井部をはずすとアシの葉の付着がみられた。木棺の規模は残存値が長さ88cm、幅38cm、高さ18cmを測る。現存する材のなかで一番厚い箇所は約5cmである。棺内には粗～細粒砂の堆積層がみられ、人骨、遺物は認められなかった。

主体部の墓壙域は埋土と周囲の土層の差異が認められないため確認するのは非常に困難であった。天井板を検出してからも墓壙の検出のため、砂層の重なり具合を精査し、予測しながら慎重に掘り進めたが判明しなかった。底板まで掘り上げて検討した結果、墳丘の砂を盛り上げて墓を築造した直後ぐらいに墓壙を掘り、木棺を組立て埋葬したものと考えられる。樹種は各部材ともコウヤマキである。以上の遺構のなかで土器が出土した溝1は弥生時代前期～中期初頭のものといえる。方形周溝墓1、方形周溝(墓?)1からの遺物の出土はみられず、円形周溝1から出土した木器も時期は不明である。方形周溝墓1の時期は、調査地の西側での1990年の府教委の試掘調査の堆積層との照合、これまでの瓜生堂遺跡の各調査の成果から弥生時代中期後半のもの³⁰、方形周溝1、円形周溝1、溝2は方形周溝墓が築造される前の中期中葉～後葉のものと考えている。



図3.102(上) 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1一墳頂部の旧
小河道(東から撮影)

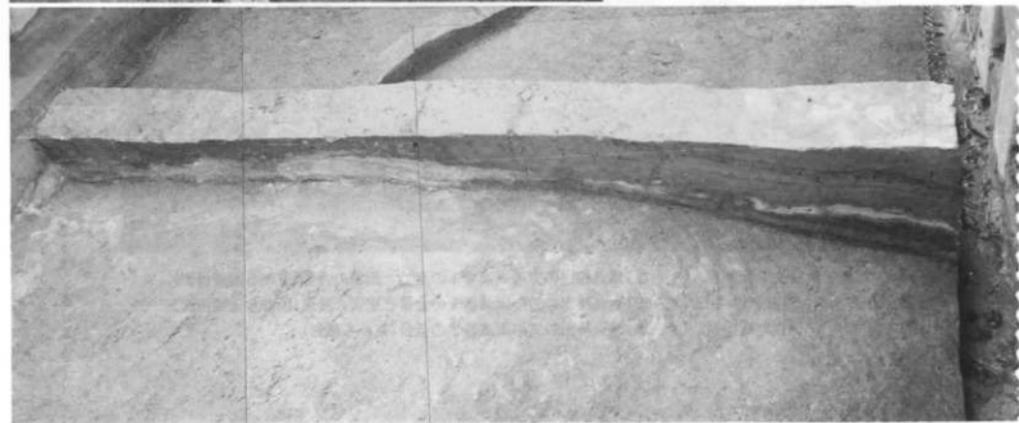


図3.103(下) 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1一墳頂部の旧
小河道底及び堆積層の南北断面(東か
ら撮影)

図3.104 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1
—木棺蓋の検出状況
(南から撮影)

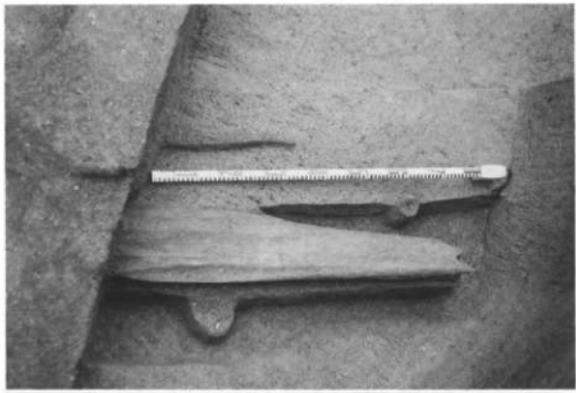


図3.105 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1
—木棺蓋の検出状況
(東から撮影)



図3.106 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1
—木棺蓋の検出状況
(北から撮影)

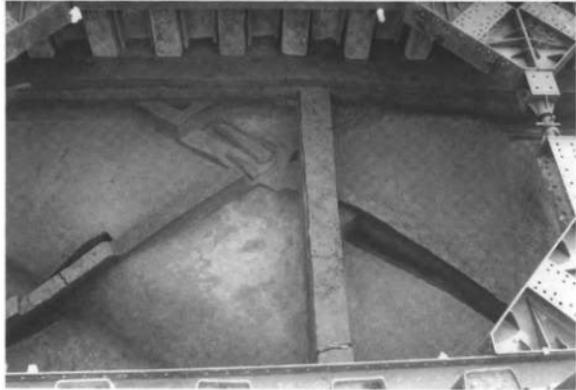


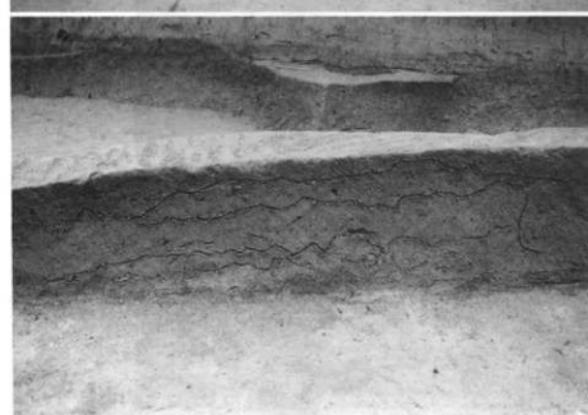
図3.107 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1—木棺蓋の検出状況、盛土の断面(南東から撮影)



図3.108 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1—盛土の断面
(北東から撮影)



図3.109 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1—盛土の断面
(北東から撮影)



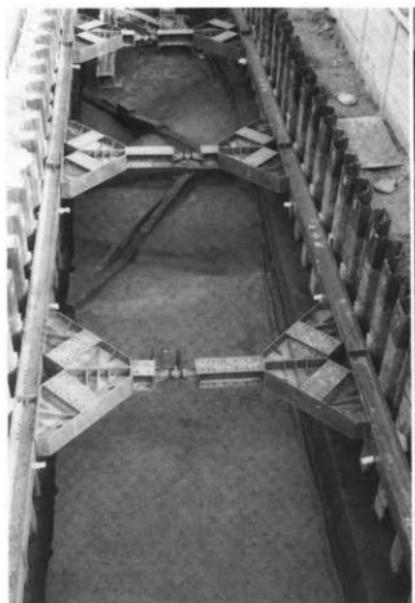


図3.110(左上) 弥生時代中期。(ア～オ)地点の方形周溝墓1－木棺蓋を検出した水平面の全景
(西から撮影)



図3.111(右上) 弥生時代中期。(イ～ウ)地点の方形周溝墓1の木棺蓋を検出した水平面の東側
(西から撮影)



図3.112(右下) 弥生時代中期。(ウ)地点の方形周溝墓1の木棺蓋直下の堆積土(北東から撮影)

図3.113

弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝
墓1－西側の盛土の
上層水平面に認めら
れる植物根茎跡の検
出の状況



南東

北西

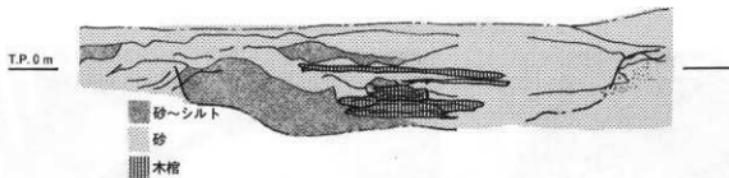


図3.114 弥生時代中期. 方形周溝墓1—木棺
と南東から北西側の堆積層の断面図

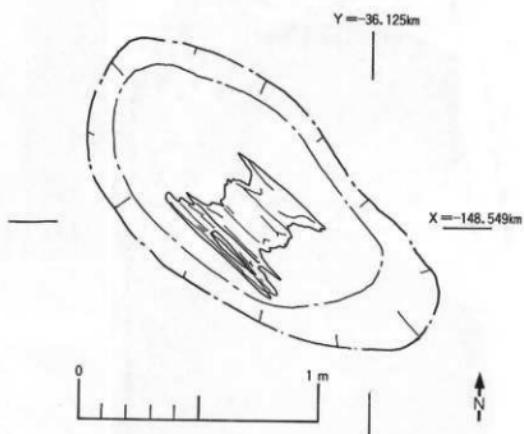


図3.115 弥生時代中期. 方形周溝墓1—木棺の平面実測図

図3.116 弥生時代中期. (ウ)地点の方形周溝墓1—木棺の側板と底板の検出状況(東から撮影)



図3.117
弥生時代中期.
(ウ)地点の方形周
溝墓1—木棺の側
板と底板の検出状
況(南東から撮影)

図3.118 弥生時代中期。

(ウ)地点の方形周溝墓1—盛土・西周溝の堆積層の
北西から南東の断面実測図



図3.119 弥生時代中期。

(イ～ウ)地点の方形周溝墓1—盛土・東周溝の堆積
層の東北から南西の断面の断面実測図

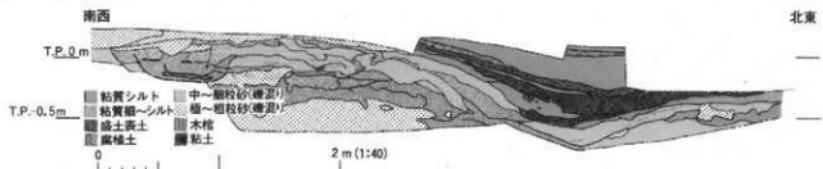


図3.120 弥生時代中期。

(イ)地点の方形周溝墓1—東周
溝の堆積層の断面(北から撮影)

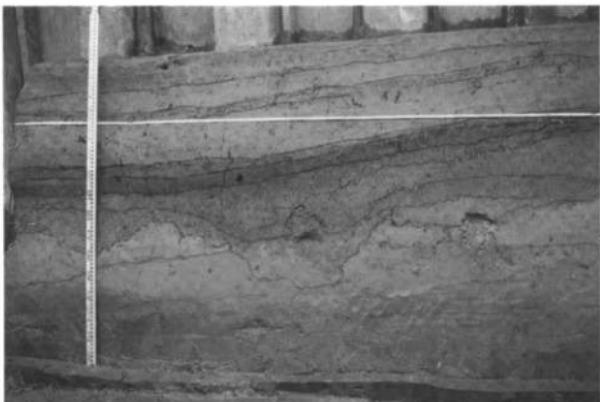
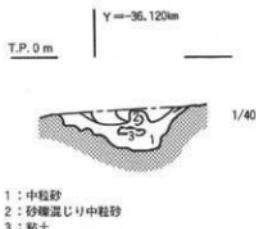


図3.121 弥生時代中期。

(イ)地点の方形周溝墓1—東周
溝の堆積層の断面(北から撮影)



図3.122 弥生時代中期。

(イ)地点の方形周溝墓1—東周
溝の堆積層の断面(南から撮影)



図3.123(上) 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1—西周溝の堆積層の断面(北から撮影)

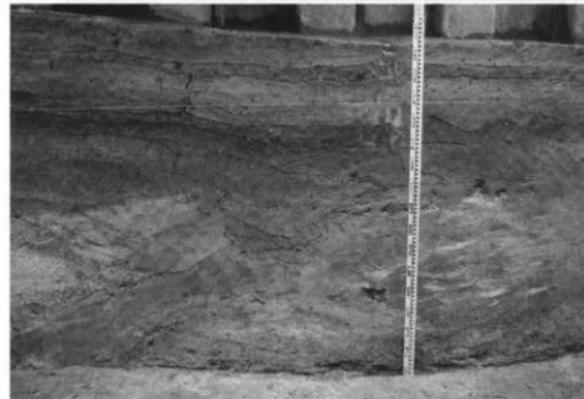


図3.124 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1—西周溝の堆積層の断面—水系はT.P.0m—(北から撮影)

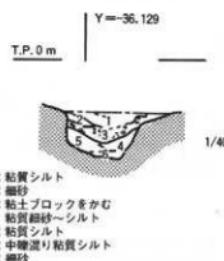


図3.125 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1—西周溝の断面実測図



図3.126 弥生時代中期。
(イーエ)地点の方形周溝墓1—基盤層の全景(西から撮影)

図3.127 弥生時代中期. (イ)地点の方形周溝墓1—東側基盤層の水平面に認められる植物根茎痕(北から撮影)



図3.128 弥生時代中期. (ウ~エ)地点の方形周溝墓1—基盤層の西側(西から撮影)

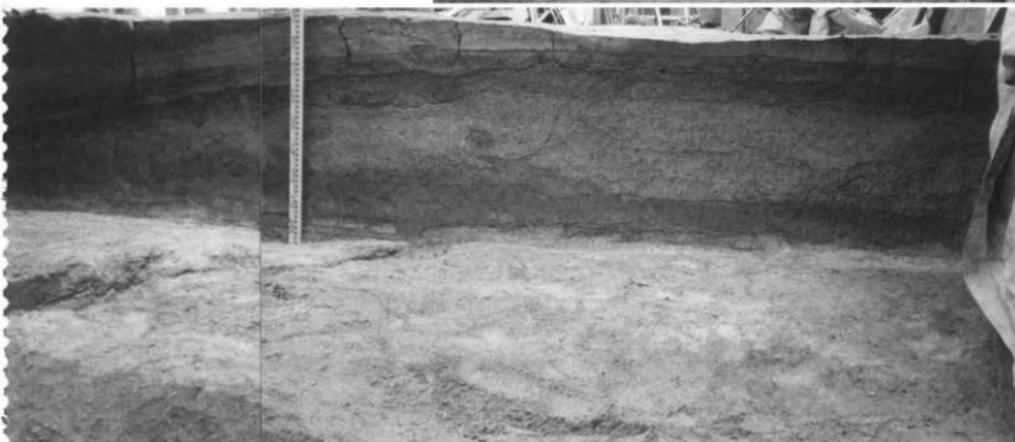


図3.129(下) 弥生時代中期. (ウ)地点の方形周溝墓1—基盤層より下位の旧河道の砂層の水平面と盛土堆積層の南北の断面(西から撮影)

図3.130 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1の下層の泥層から盛土堆積層の南北の断面(西から撮影)

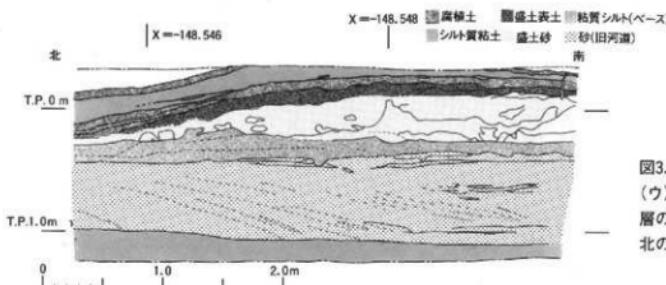


図3.131 弥生時代中期。
(ウ)地点の方形周溝墓1の下層の泥層から盛土堆積層の南北の断面実測図



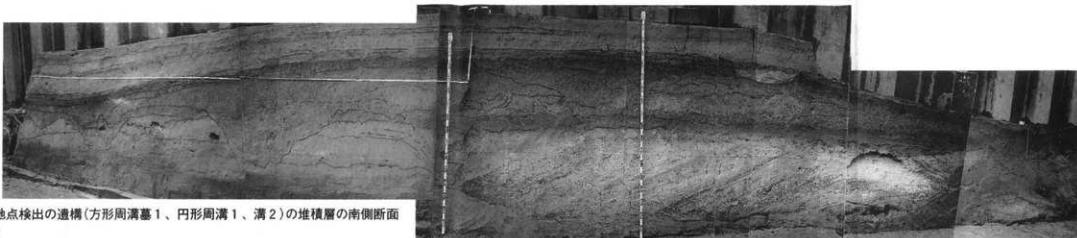


図3.133 弥生時代中期、(イヘウ)地点検出の遺構(方形周溝墓1、円形周溝1、溝2)の堆積層の南側断面
—水糸はT.P. 0 m—(北から撮影)

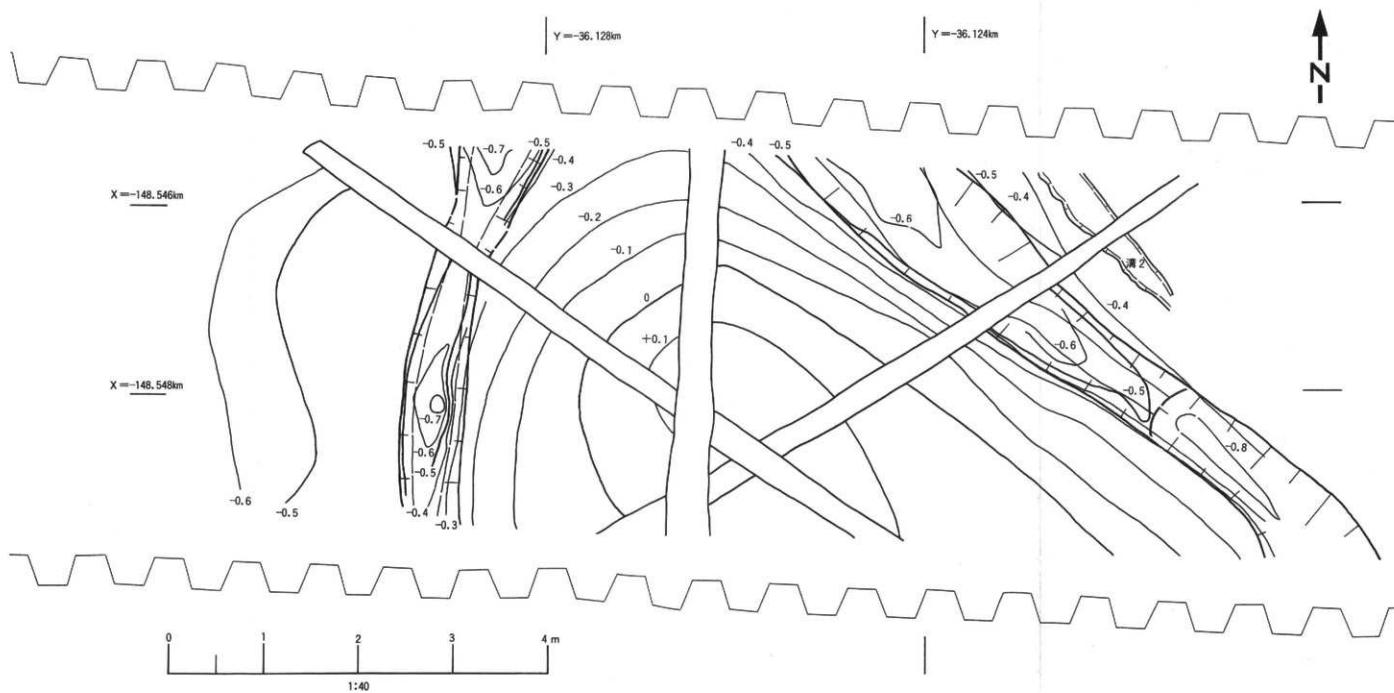
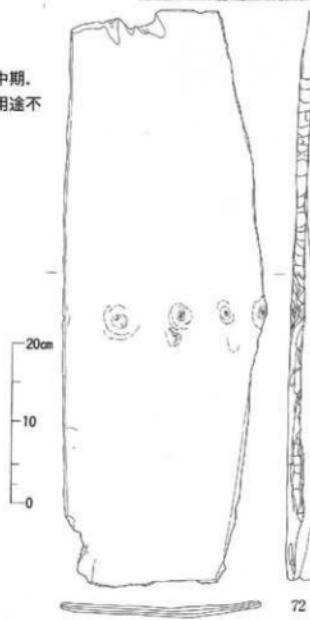


図3.134 弥生時代中期、(イ～ウ)地点の方形周溝墓1の等高線図(2)

図3.135 弥生時代中期。
黒色粘土層内出土の用途不明木器の検
出状況(西から撮影)



図3.136 弥生時代中期。
黒色粘土層内出土の用途不明木器の実測図



用途不明木器(図3.135～3.137)

弥生中期の旧河道に流されたと考えられる用途不明木器が出土した。表皮に近い部位を縱割りにして板状に仕上げられている。板の中央に瘤の痕跡が5個並ぶ。1側面は中央の瘤の場所を頂点とする山形を呈している。この側面には面取り風の細かいタッチの削り痕が認められる。他の側面は直線を呈し、面は丸みをもつ。樹種はクスノキ。

図3.137 弥生時代中期。黒色粘土層内出土
の用途不明木器





図3.138 弥生時時代中期～後期。

(ア)地点の地震動により変形した堆積層の東側断面(1)と水平面—水系は T.P. 0 m —



図3.139 弥生時時代中期～後期。

(ア)地点の地震動により変形した堆積層の東側断面(2)—水系は T.P. 0 m —



図3.140 弥生時時代中期～後期。

(ア)地点の地震動の変形作用を受けた堆積層の水平面

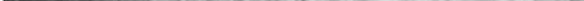
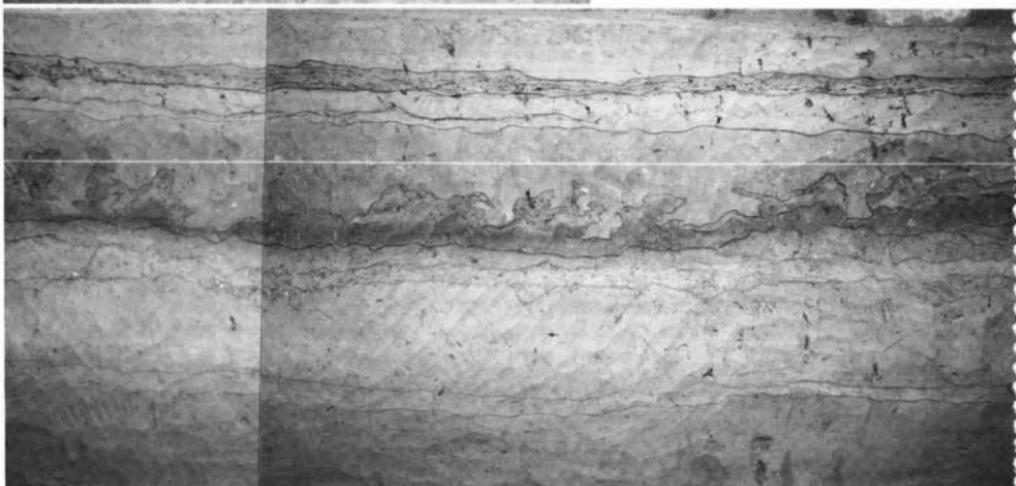


図3.141 弥生時時代中期～後期。

(ア)地点の地震動により変形した堆積層の東側断面(3)—水系は T.P.-0.3m —



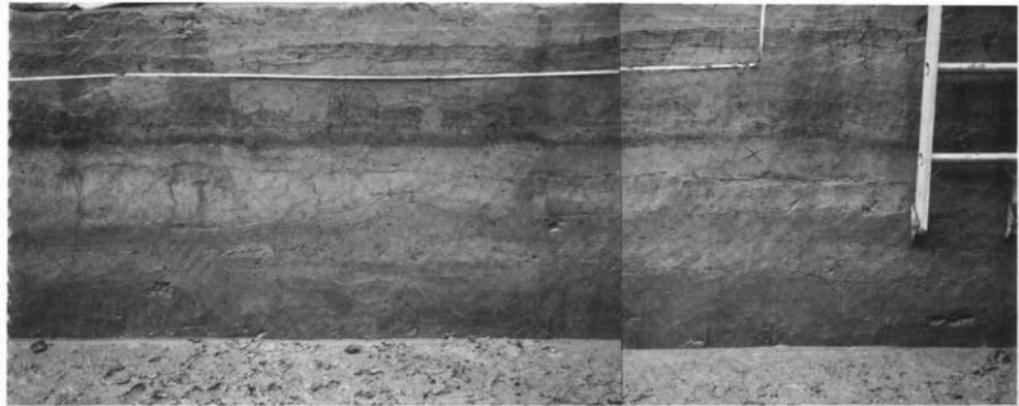


図3.142 弥生時時代中期～後期。
(オ)地点の地震動により変形した堆積層の南側断面—水糸はT.P. 0 m—



図3.143 弥生時時代中期～後期。
(オ)地点の地震動により下層から噴出した砂—T.P.-0.3m—

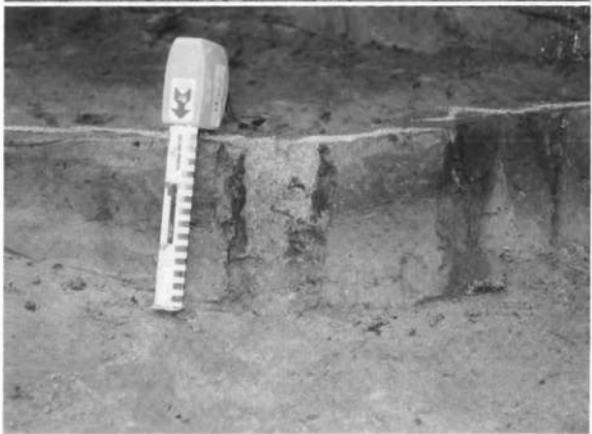


図3.144 弥生時時代中期～後期。
(オ)地点の地震動により下層から噴出した砂の断面

地震の痕跡(図3.138～3.144)
弥生中期から後期の時期に起こった地震による土層の変形構造が認められた。

4 小結

今回の調査では、大阪府教委や当協会の試掘結果から予測されていた弥生時代中期後半の墓の検出ができ、さらに下層で弥生時代前期の住居跡と考えられる遺構を検出した²。また弥生時代前期から後期までの間に起こった地震動による変形構造の層位が数カ所観察できた。

弥生時代前期

遺構：瓜生堂遺跡では、1966年の寝屋川の改修工事に伴うC地点の調査で弥生時代前期の遺構が検出されてから久しい。C地点の調査では、南方100mぐらいのところまで弥生時代前期の遺物の包含層が続くこと、50mぐらいのところまで部分的に貝層が露出し、北方20~30mぐらいの範囲までの遺物包含層があることが明らかになり、その結果、南北150mがこの地点の遺跡の範囲とされた。さらに弥生時代前期の遺構（土壙、ピット）も多く検出された。遺構はC地点のレベルがT.P.約-0.5mの微高地の青灰色砂層で検出されている²。

今回の調査地では、レベルがT.P.約-1.8mの干潟上面の粗粒砂混じりの灰色粘質細粒砂層から弥生時代前期の遺物を伴う遺構を検出した。また遺構の分布の切れるすぐ東側一体には当時の潮上帯の砂と泥の薄い堆積層に生痕がみられる。河内潟の沿岸近くまで進出して営まれた生活のベース面が、絶えず沿岸の潮流流の影響を受けていたことは、遺構面に鳥の足跡などが残されてることからわかる。このように遺構の上面には砂が剥りまた流れたりしているため、柱穴の深さは、当初もう少し深いものであったと考えられる。

パリノサーヴェイ係に依頼した珪藻分析によると、弥生前期の遺構面は「河口付近に位置しており」、「潮間帯でも潮上帶に近い場所」、「後背地には乾燥地が迫っている」、「海水準の微妙な変動に起因する」地形と記されている。

弥生時代前期の住居跡は壁溝をもたないが、ピット群を3棟分検出した。その内の1棟には炉跡を伴う。低湿地遺跡での建築物は掘立柱建物が通例で、平地式建物の検出例は少ない。当時の古環境を考え合わせると、立地条件の良好な時期に平地式建物が建てられたが、ピット数もあまり多くないことから、短期間の住居の跡とも考えられる。さらに検討が必要と考えている。

これらのピット群は調査区の西側にあたり、区区西半の1/3ぐらいの範囲に分布していた。今回の調査地につづく西側の大坂府の試掘調査でも前期の遺物の包含層が確認されており、さらに住居域が広がることも考えられる。この前期の遺構を検出した北東隅から巨木が出土した。同じような木材がC地点の1次・2次調査でも出土している。今回の巨木には摩滅痕が見られず、下部に細い材が直交して出土したことから木道の可能性があるが、加工前の材とも考えられる。パリノサーヴェイ係に依頼したC¹⁴の測定では補正年代3180±50の結果がでている。

遺物：遺構面および遺構面の上層から弥生時代前期の土器が出土した。

完形になるものは壺1点である。他の残存する部位のなかで、時期がはっきりする壺などを観察すると、口縁部はあまり括がらないもの（口径が13~17cm弱ぐらい）、段をもつもの、削り出し突堤の基部に沈線文を付加したものなど前期前葉の属性をもつものがみられる。さらに細いヘラ描き沈線による木葉文・重孤文、沈線文が刻まれ、沈線文の本数は4条まで（一番多い5条のものが壺・壺各1点にみられる）の少条沈線が施されているなど古い特徴を持つものが多い。一方、形態的には前期最古の特徴である体部と「頸部」のはっきりした境界はなくなり、「頸部」が体部に一体化してしまうもの、また口縁部の下位に短く立ち上がる部位=頸部が認められるものなどに少し新しい属性が認められる。

現場では黒色粘土層とその下層の茶黒色粘土層に分層して遺物をとりあげたが、

図3.145 弥生時代前期。
土器セット 壺、甕、鉢、蓋、高杯、
瓶、無頸壺

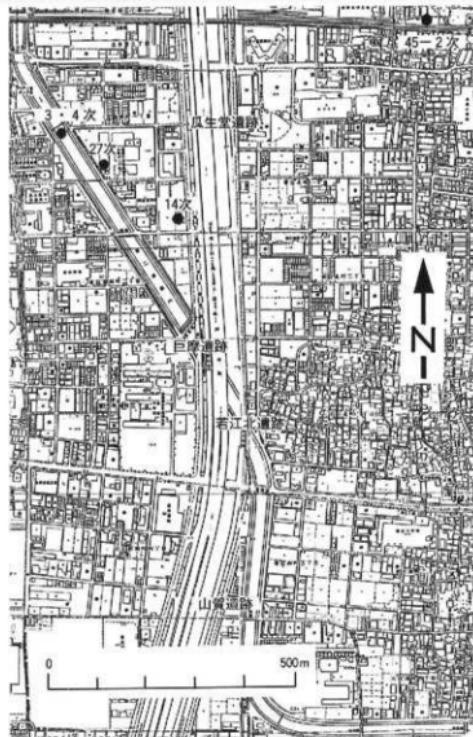


図3.146 瓜生堂遺跡内、弥生時代前期の遺物、
遺構検出の地点

両層とも古い属性のものと新しい属性のものが混在しており、層位毎の時期の新旧は見分けられなかった。ただし、下層の方がやや古いものを含む率が多いといえる。また遺物の残存が土器のみにかたよっているのは当時の潮流の影響をうけたであろうことが想像される。

これらの状況から出土土器は新しい属性をもつ土器でも山賀遺跡・鬼虎川遺跡の前期中葉の遺物と同じ時代のものに比定できるだろう。ただ鬼虎川遺跡では縄文時代晚期末の土器が共伴している。若江北遺跡では弥生時代前期前葉の土器を伴う住居跡が確認されている。若江北遺跡の先人たちは、前期中葉頃、北側へは瓜生堂遺跡に、南側へは山賀遺跡に足をのばしたと考えられる。さらに前期新段階には瓜生堂遺跡のC地点に出現している²⁰。

弥生時代中期以降

弥生時代中期の遺構としては中期初頭、中期中葉～後葉、中期後葉の3時期のものを検出した。

中期初頭

弥生時代前期～中期初頭の遺物を伴う弥生中期初頭の溝状落ち込み1を検出した。近辺の低湿地遺跡では弥生中期前葉(畿内第2様式)の顕著な遺構・遺物は少ない。

中期中葉～後葉

円形周溝1のような遺構は、瓜生堂遺跡の方形周溝墓・住居跡などの近辺に検出例が多く、台状部にはピットなどを伴っている²¹。

松山・文教遺跡では方形の台状部に周溝がめぐる遺構が住居跡の中心部で検出されており、集落の建設の際の「地鎮祭」的な祭祀用の祭壇と考えられている。吉野ヶ里遺跡では墓域跡の周辺で検出されており、同様な祭祀的な空間で祖先崇拜が目的と考えられている(1998年7月11日朝日新聞)。今回検出した円形周溝1、方形周溝1は、地理的には旧河口にあたり水に関わるものあるいは墓に関わる祭壇なども考えられる。本調査では方形周溝1・円形周溝1の規模や性格などを究明することができなかつたが、遺構の南側にあたる近鉄線の高架工事に伴う調査で明らかになることを期待している。

中期後葉

方形周溝墓1の墳丘はほぼ半分を確認できただけだが、旧状の形態をそのまま残していたと考えられる。

墓域：瓜生堂遺跡の墓域に関しては従来、集落西側の1)小坂ポンプ場周辺、2)集落北部～中央部、3)集落南部とグルーピングされており、さらに、4)1995年の第42次調査で検出された瓜生堂遺跡の西部端の8基の墓がある²²。府教委の試掘調査で検出された1・2トレンチの方形周溝墓は西方の3トレンチの弥生時代後期以前の自然流路で画されていた可能性が指摘されており²³、今回検出した墓はあらたに5)東部のグループとして考えたほうがよいかもしれない。

主体部：木棺はかなり厚く残りのよいところで5～6cmほどあり、蓋板、底板は1/3ぐらい残存していたが、側板は小片しか残存していなかった。木棺については瓜生堂遺跡の第2号方形周溝墓で検出されたものを中心にした春成・福永氏の研究があり、次のように分類されている。

- i) 一組の木棺の材質がちがう材を使っている例、
- ii) 同一方形周溝墓のなかで、材質がちがう例、
- iii) 墓域ごとに材質が異なる例

木棺の材に通例の材(多くはコウヤマキ)を使う場合とそうでない場合とで、被埋葬者が在地の人か外来者かの区別ができるという説である。今回検出した木棺

は各部材ともコウヤマキである。岡氏の説からいえば在地の人の墓かもしれない²⁾。ポンプ場内で検出された木棺は、コウヤマキですべて造られているものが多いが、他の部材にはコウヤマキのもの、コウヤマキとヒノキのもの、ヒノキだけのものがみられる。また41地区出土の木棺は蓋板にヒノキ、底板と小口1・2にモミ、側板1・2にクスノキが使われている(注19 81)。41地区は本調査地から170~180mぐらい南西に位置する。どちらも1基のみの出土であるため岡氏の説について比較検討するのは難しいが、未調査の南側半分と西側の大坂府教委の試掘調査で盛土の確認だけで終れている方形周溝墓の下層から木棺が検出される日を待たい。

時期：府教委の試掘調査では第2トレントから方形周溝墓が検出されており、遺物は弥生中期の土器棺と、方形周溝墓の盛土法面、周溝内から後期の土器が出土している。このように方形周溝墓から時期差のある土器の出土する例は巨摩遺跡でも報告されている³⁾。前例の調査担当者はこの時期差について中期の土器棺の上に弥生時代後期の方形周溝墓が築造されたか、あるいは弥生時代中期の土器棺のある方形周溝墓を弥生後期にマウンドを盛土するなどして再利用したと考えられている。後例の調査担当者は中期に築造された方形周溝墓に後期段階での埋葬の可能性はないかと疑問を残しておられる。

方形周溝墓1からは遺物が全く出土していない。築造時期は、從来のポンプ場内、近畿自動車道内の調査などから弥生時代中期後葉の時期と考えている。今回の調査地より南側の近鉄線の高架工事に伴う調査で明らかになることを期待している。また1998~9年には、1990年の大阪府教委の調査地の西側の地点を東大阪市教委により調査されており⁴⁾、その成果なども参考に検討していく必要がある。

瓜生堂遺跡は今回の調査で南北間は巨摩遺跡から全長約700m、東西間は約700mの範囲の集落に広がることが確認できた。正確には瓜生堂遺跡のような低湿地遺跡における墓域、および集落の広がりについて、当時の古環境の復原のために慎重に調査・分析された結果に基づいて明らかにしていかねばならない。

最後に、近年の低湿地の堆積過程や地震動による変形構造に関する研究がすすめられているなかで、今回の調査が少しでも役にたつことを念じている。

注・参考文献

- 1 賞大阪文化財調査研究センター 1996『巨摩・若江北遺跡調査報告－第5次－』
- 2 習東大阪文化財協会 1996『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告』・1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』・1999『植附遺跡第5次発掘調査報告』、大阪府立花園高校地歴部1970『鬼塚遺跡』『河内古代遺跡の研究』
- 3 大阪府教育委員会 賞大阪文化財センター 1984『山賀遺跡』・1984『友井東遺跡』・1985『佐堂遺跡その2』・1983『久宝寺遺跡』・1991~『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』
- 4 大阪府立花園高校地歴部 1970『瓜生堂遺跡』『河内古代遺跡の研究』・大阪府教育委員会 1967『東大阪瓜生堂遺跡の調査』
- 5 大阪府教育委員会 賐大阪府文化財センター 1987『新家遺跡』・1983『西岩田遺跡』・1985『美園遺跡』
- 6 大阪府教育委員会・賛大阪府文化財センター 1983『西岩田遺跡』p.30・31
- 7 金村浩一・別所秀高・松田順一郎 1998『低湿地遺跡研究会の資料』習東大阪文化財協会
- 8 三輪若葉・芋本隆裕 1997・3『瓜生堂遺跡試掘調査報告書』－都市計画道

- 路大阪瓢箪山線の建設事業に伴う瓜生堂遺跡第44次調査－關東大阪文化財協会・大野薫 1992『瓜生堂遺跡試掘調査』大阪府教育委員会
- 9 4と同書
- 10 浜田延充他 1997『瓜生堂遺跡の検討』『大阪の弥生遺跡Ⅰ』大阪の弥生遺跡検討会 p.98~102
- 11 吉野祐子1999『蛇』－日本の蛇信仰 講談社 水辺の仮屋一家屋を「人生通過儀礼における仮屋」＝「産屋」として考えられている。
- 12 4と同書
- 13 今回の遺物を整理するなかで通例の呼称である壺の「頸部」の部位をそのままあてはめるのが困難なものがあった。
九州の菴烟遺跡出土などの弥生前期の最古の壺は、丈高の体部から屈曲して「頸部」が内傾しながら立ち上がり、「口縁部」が屈曲して開く。さらに「体部」と「頸部」の境界、「頸部」と「口縁部」の各部位のはっきりした境界に文様帯をもっている。
今回の出土遺物の形態は、弥生前期の最古の土器の「頸部」にあたる部位と「体部」との境界がはっきりしないものか、形骸化した痕跡がみられるものかである。「頸部」の部位は「体部」の一部に同化したように考えられる。さらに「口縁部」の下位に当たるくびれ部より上部には垂直に立ち上がる部位(=頸部と呼べる部位)が認められる。一方、文様は最古の土器と同じく、「口縁部」と「頸部」、「頸部」と「体部」のそれぞれの区画帯の境界部位に施されている。形態や施しにみられる属性は弥生前期の最古から次の段階へ変遷する過渡期のものと考えられる。
今回の出土遺物には、底部から胴部の部位を体部、体部から「口縁部」下のくびれ部の間の「頸部」にあたる部位を、肩部とし、体部につづく肩部からすばまる部位より上位の「口縁部」のうち立ち上がり部を頸部、さらに外上方に開く部位を口縁部と呼称している。
- 14 大阪府教育委員会・關大阪府文化財センター 1991『美園遺跡』『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』瓶形土器の穿孔方法を4種類に分けられている。p.173~175
- 15 神戸市教育委員会・關神戸市スポーツ教育公社 1993『大開遺跡』に類例がある。図73~288
- 16 1と同書・大阪府教育委員会・關大阪府文化財センター 1984『山賀遺跡』
- 17 美園遺跡では弥生時代前期～中期初頭の遺構、包含層から160点余出土。注14と同書 p.190・瓜生堂遺跡40次調査で、弥生時代中期の遺物と共に出土した粘土塊について、担当者は、「成形前の土器の素地土である可能性が高い」との考え方で分析依頼された結果が掲載されている。粘土塊の内、1点を除く他の試料は被熱の影響(1000℃)を受けている。
・三輪若葉 1999『瓜生堂遺跡第40次発掘調査』、パリノ・サーヴェイ㈱「瓜生堂遺跡出土粘土塊の岩石学的・鉱物学的特徴」『瓜生堂・若江北・山賀遺跡』關東大阪市文化財協会 p.58・84~92
- ・石橋氏は大久保遺跡で検出された土器や焼成の遺構と焼成実験から焼粘土塊を泥窯方式による土器焼成後の壁体の一部と考えられている。本遺跡の焼粘土塊も同様のものかもしれない。石橋新二 1997・8「土器焼成に関する二・三の予察(前・後編)『みずほ』大和弥生文化の会 後編 p.59~75
- 18 松田順一郎 1996『若江北遺跡第5次調査でみられたさまざまな古地盤痕跡』『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告第5次』關大阪文化財調査研究センター

- p.141～159・松田順一郎 1997『鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作跡と地
震層序』關東大阪文化財協会他多数
- 19 類似の遺構は今までの瓜生堂遺跡調査でも確認されている。
瓜生堂遺跡調査会 1971『瓜生堂遺跡』・1973『瓜生堂遺跡Ⅱ』・1981『瓜
生堂遺跡Ⅲ』・關大阪府文化財センター 1980『瓜生堂遺跡』・松宮昌樹
1997『瓜生堂遺跡第42次発掘調査概要』『關東大阪文化財協会概要1997年度
調査1』・芋本隆裕 1988『瓜生堂遺跡発掘調査概要』關東大阪文化財協会
概報集』關東大阪文化財協会 20・21 8・19と同書
- 22 4と同書
- 23 大阪府教育委員会 關大阪府文化財センター 1984『山賀遺跡』・關東大阪
文化財協会 1997『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡21次発掘調査報告』・1998
『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』11・關大阪文化財調査研究センター
1996『巨摩・若江器や遺跡発掘調査報告第5次』・4と同書
- 24 19と同書
- 25 松宮昌樹 1997『瓜生堂遺跡第42次発掘調査概要』『關東大阪文化財協会概
要1997年度』
- 26 大野薰 1992『瓜生堂遺跡試掘調査』大阪府教育委員会
- 27 春成秀爾 1985『弥生時代畿内の親族構成』『國立歴史民俗博物館研究報告』
第5集 p.1～47・福永伸哉 1991『木棺墓と人の交流』『原始・古代日本
の墓制』山岸良二編 同成会 p.151～156
- 28 大野薰 1992『瓜生堂遺跡試掘調査』大阪府教育委員会
- 29 注1と同書・三好孝一 1996・6『巨摩遺跡中期方形周溝墓出土土器覚え書
きー1号墓出土供獻土器をめぐって』『大阪文化財研究』第10号關大阪文化
財調査研究センター p.29～31
- 30 東大阪市教育委員会 1998年『瓜生堂遺跡第46次発掘調査資料』
以上の他に、大阪府教育委員会 關大阪府文化財センター刊行図書『河内平野遺
跡群の動態』の『II』をはじめとする各書を参考にした。

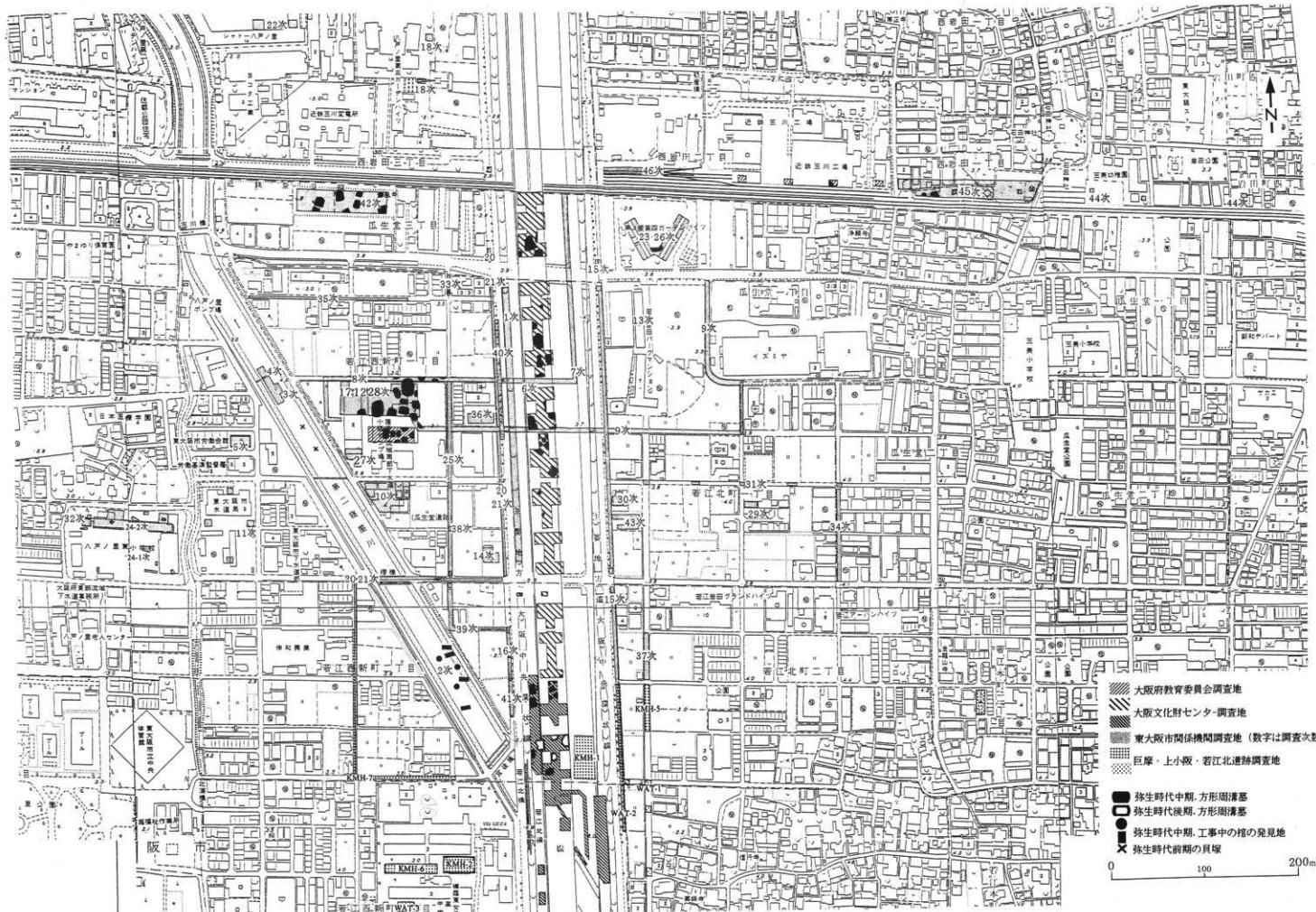


図3.147 瓜生堂遺跡(数字は調査次数)、巨摩遺跡の弥生時代中期～後期の方形周溝墓、木棺、土器棺墓などの検出地点の分布図

次数	調査名	調査地	調査面積	調査主体(者)	調査期間	備考
1	本調査 瓜生堂遺跡の発見 (A地点の調査・遺物の採集)	中央改修線内定地内興業用水道管工事現場 (A地点) 若江西新町1丁目28番地先	1500 m ²	伏田昭次と布施市立第三中学校 会クラブ「河内歴史研究会」グループ (花園地区校舎)、近畿大学付属高島地区同好会	1965.2/3 1965.2~5、6~1965.10 青銅器類発見 *	弥生土器・石器採集・興奮 1965.2~5、6~1965.10青銅器類発見 *
2	本調査 第二條鹿児町工事現場における木棺等の発見 (B地点の調査)	第二條鹿児町工事現場側面法面 若江西新町2丁目22~23番地先	100 m ²	伏田昭次・島田義明	1966.9/17	大阪府教育委員会「東大阪瓜生堂遺跡の調査」1967.4
3	本調査 第一・二條鹿児町工事現場における瓦片量の調査・測定 (C地点)	第一・二條鹿児町工事現場堀川中央部 若江西新町1丁目13番地先	24 m ²	発見者 三輪一郎(伏田中学生) 瓜生堂遺跡調査グループ	1966.11/5~11/7	大阪府教育委員会「東大阪市瓜生堂遺跡の調査」1967.4 大阪府立花園高等学校「古代遺跡の研究」1970.6
4	本調査 第二・三條鹿児町工事に伴う瓜生堂遺跡 (C地点) の発掘調査	第二・三條鹿児町工事現場堀川西部 若江西新町1丁目10番地先	675 m ²	大阪府教育委員会 瓜生堂遺跡調査グループ	1966.12/19~ 1967.1/18	(弥生時代前期の住居跡・構・遺物を検出) 大阪府教育委員会「東大阪市瓜生堂遺跡の調査」1967.4 大阪府立花園高等学校「瓜生堂遺跡」「河内古代遺跡の研究」1970.6
5	試験 市立労働会館建設に伴う瓜生堂遺跡の試掘調査	若江西新町1丁目13番地			1969	
6	試験 本調査 中央南幹線管渠整造工事に伴う瓜生堂遺跡の試掘及び発掘調査	中央改修線内中央分離帯東端(道沢排水管)と並び打合草附近より東西 若江西新町1丁目 西若3丁目~若江西新町1丁目	128 m ²	中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調 査会 伏田昭次・北野保	1971.2/24~3/25	(弥生時代前期と古墳時代の遺物が出土) 中央改修線内西岩田・瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡・中央南幹線下水管渠整造 に伴う遺跡復元実験」1971.12
7	本調査 中央南幹線管渠整造工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	中央改修線内中央分離帯東端~阿 伴川・瓜生堂遺跡の発掘調査 西若3丁目~若江西新町1丁目	1250 m ²	中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調 査会 田代克巳・中西晴人他	1971.5/4~7/24	中央改修線内西岩田瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡調査概報」1971.12 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡 資料編」1972
8	本調査 中央南幹線管渠整造工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	中央改修線西端~小阪ポンプ場北側 道路 若江西新町1丁目	1000 m ²	中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調 査会 田代克巳・中西晴人他	1971.8/23~11/23	(弥生時代中期の方形周溝墓2基(1~5号) 土堆盛2基検出 方形周溝墓と 土壙墓を検出する標を検出) 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡調査報告」1971.12
9	本調査 市公共下水部第2排水区工事に伴う瓜生堂1丁目(イヌサカ地区)と中央改 整区下水管整造工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	瓜生堂1丁目(イヌサカ地区)と中央改 整区下水管整造工事に伴う瓜生堂遺 跡の発掘調査 若江西新町1丁目17番地	2750 m ²	中央改修線内西岩田瓜生堂遺跡調 査会 田代克巳・井藤徹也	1971.12/1~1972.3/31 1972.4/1~12/16	(弥生時代中期の方形周溝墓2基(1~5号) 土堆盛2基 検出) 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡1973.3 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡 資料編」1972
10	本調査 ビル建設に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江西新町1丁目17番地	200 m ²	瓜生堂遺跡調査会 <1972.5/1改修>	1972.4/17~5/16	
11	試験 水道局介護棟建設に伴う遺跡の試掘調査	若江西新町1丁目	84 m ²	東大阪市教育委員会 伏田修	1972.9/25~10/4	
12	本調査 小阪ポンプ場増設に伴う廃 跡の発掘調査	若江西新町1丁目20番地(小阪ポン プ場内)	300 m ²	瓜生堂遺跡調査会 田代克巳・井藤徹也	1973.9/12~1974.3/31	(2号方形周溝墓の発見及び内部主体部は木棺墓6基、土堆盛6基 があること判明 新たに方形周溝墓5基(8~12号周溝墓)を検出) 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡III」1981.3
13	試験 共同住宅建設に伴う瓜生堂 遺跡の試掘調査	瓜生堂1丁目184-1		瓜生堂遺跡調査会	1973.11/1~	
14	試験 ガリソンクランクト改修に伴 う瓜生堂遺跡の試掘調査	若江西新町1丁目27-2~28-2	85 m ²	瓜生堂遺跡調査会	1973.12	
15	本調査 若狭鉄筋河内ライイン資 管敷設工事に伴う発掘調査	若江西新町1・2丁目 瓜生堂3丁目	188 m ²	東大阪市遺跡保護調査会 福永信雄・木本隆裕	1974.9/26~1975.2/16	東大阪市保護遺跡調査会「上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書」1975.1/24 「東大阪市遺跡保護調査会ニースNo.11」1975.1/24
16	本調査 上水道水管敷設工事に伴 う発掘調査	若江西新町2丁目 横枕36 上小阪653	114 m ²	東大阪市遺跡保護調査会 伏田邦洋(下村・勝田)	1975.2/4~4/8	東大阪市保護遺跡調査会「上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書」1976.8 「東大阪市遺跡保護調査会ニースNo.21」1975.6/25
17	本調査 小阪ポンプ場新設に伴う発 掘調査	小阪ポンプ場内東北角~西区域 若江西新町1丁目		瓜生堂遺跡調査会 田代克巳・井藤徹也	1975.9/12~1976.3/31	(12次調査で検出の9号方形周溝墓の内部主体部と方形周溝墓と土壤を測 る溝の追及と測定) 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡III」1981.3
18	試験 八戸ノ里第3ガーデンハイツ 新築工事に伴う弥生文化財 包蔵地の試掘調査及び追加 試掘調査	西若3丁目48~534	100 m ²	瓜生堂遺跡調査会 今村達哉・新田洋	1976.3/1~5/29	瓜生堂遺跡調査会「西若田・瓜生堂遺跡試掘調査報告書」1976.4
19	試験 ガス管理工事に伴う瓜生堂 遺跡の試掘調査		15 m ²	瓜生堂遺跡調査会	1976.4	
20	本調査 上水道水管敷設工事に伴 う瓜生堂遺跡の発掘調査	中央改修線西側歩道部 若江西新町1丁目~新家東町253番地	1500 m ²	東大阪市遺跡保護調査会 伏田邦洋・才賀金弘	1976.9/24~1977.1/20	「東大阪市遺跡保護調査会ニースNo.7・9」1977.2/21~1977.12/1 「瓜生堂遺跡・西若田遺跡発掘調査報告」(附) 東大阪市文化財協会年報 1983年度』1984.3
21	本調査 右3丁切羽瓦所管設工事に 伴う瓜生堂遺跡の発掘 調査	中央改修線西側歩道部 若江西新町5丁目~新家東町253番地	2200 m ²	東大阪市遺跡保護調査会 伏田邦洋・才賀金弘	1976.11/15~ 1977.5/30	「東大阪市遺跡保護調査会ニースNo.9」1977.12/1~、「瓜生堂遺跡・西若 田遺跡発掘調査報告」(附) 東大阪市文化財協会年報『1983年度』1984.3
22	試験 シートドアノ用の新築工 事に伴う瓜生堂遺跡の試 掘調査	御町606-1・607-1・610-1の一部 に伴う瓜生堂遺跡の試掘調 査	58 m ²	東大阪市保護遺跡調査会 宇野利明	1976.11/29~12/24, 1977.2/23~3/8	「瓜生堂遺跡・西若田遺跡発掘調査報告」(附) 東大阪市文化財協会年報 1983年度』1984.3
23	試験 八戸ノ里第1ガーデンハイツ 新築工事に伴う瓜生堂遺跡 の発掘調査	瓜生堂1丁目117~120番地		瓜生堂遺跡調査会	1977.3/1~	瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡III」1981.3
24-1	試験 坂野八戸ノ里小学校分 校建設工事に伴う弥生文化財 包蔵地の試掘調査	中小坂263(北側校舎)	12.5 m ²	東大阪市保護遺跡調査会 宇本隆裕	1977.8/1~8/13	東大阪市教育委員会「瓜生堂上層遺跡・地下遺跡発掘調査報告書」1979.3 「東大阪市保護遺跡調査会ニースNo.10」1978.10/16
24-2	調査 坂野八戸ノ里小学校分 校建設工事に伴う弥生文化財 包蔵地の試掘調査	中小坂263(北側校舎)	1000 m ²	東大阪市保護遺跡調査会 宇本隆裕	1978.1/9~3/11	東大阪市教育委員会「瓜生堂上層遺跡・地下遺跡発掘調査報告書」1979.3 「東大阪市保護遺跡調査会ニースNo.10」1978.10/16
25	本調査 市公共下水道第33号管渠 改修工事に伴う瓜生堂遺跡 の発掘調査	若江西新町1丁目21~31番地先南北 道路		瓜生堂遺跡調査会	1978.2/18	
26	本調査 八戸ノ里第1ガーデンハイツ 新築工事に伴う瓜生堂遺跡 の発掘調査	瓜生堂1丁目117~120番地	50 m ²	瓜生堂遺跡調査会	1978.4/21~8/20	(弥生時代中期の方形周溝墓・土壤・ピットを検出) 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡III」1981.3

表3.1 瓜生堂遺跡調査一覧表(1-1)

次数	調査	調査名	調査地	調査面積	調査主体(者)	調査期間	備考
27	本調査	小阪ポン工場増設工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江西新町1丁目 小阪ポン工場内西南端電気室増設部	300m ²	瓜生堂遺跡調査会 田代克己・井藤徹也	1978.8/21~12/20	瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡III」1981.3
28	本調査	小阪ポン工場増設工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江西新町1丁目 小阪ポン工場内北側敷地	2400m ²	瓜生堂遺跡調査会 田代克己・井藤徹・今村道雄・阿部幸一	1978.8/22~1979.3/28 (27・28次年度で10・13・15号方形周溝基調査) 瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡 III」1981.3 <1980年度末に瓜生堂遺跡調査会解散>	
29	試掘	瓜生堂遺跡東南の試掘調査	若江北町1丁目45-4~45-5		東大阪市教育委員会 宇本隆裕	1980.1/24~1/26	東大阪市教育委員会「瓜生堂遺跡東南の試掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要 1979年度』1980.3
30	本調査	ガソリンスタンドに伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江北町1丁目32	85m ²	(財) 東大阪市文化財協会 原田修	1981.4/23~4/24	『(財) 東大阪市文化財協会概報第1988年度』1989.3
31	本調査	公共下水道第3工区管渠敷設工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江北町1丁目東西市道部	89m ²	東大阪市保護遺跡調査会 阿部勝嗣	1981.8/10~11/17	「瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査報告」『(財) 東大阪市文化財協会年報 1983年度』1984.3
32	本調査	八ノ里堀小学校校舎増築工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	中央坂5-17-8 北側斜面西端増築部	90m ²	東大阪市教育委員会 原田修	1981.8/20~9/5	東大阪市教育委員会『山賀遺跡発掘調査報告-村瓜生堂遺跡発掘調査概要-J』1990
33	本調査	公共下水道第11工区管渠敷設工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江西新町1丁目16~18番地先南北市道部	45m ²	東大阪市遺跡保護調査会 原田修	1981.10/17~11/7	(弥生時代中期の方形周溝墓)を基とし、部分的な調査で主部は櫛掛1基を検出 「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」『(財) 東大阪市文化財協会年報 1983年度』1984.3
34	本調査	公共下水道第32工区管渠敷設工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江北町1丁目	120m ²	(財) 東大阪市文化財協会 吉村博志	1982.11/15~1983.1/13	「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」『(財) 東大阪市文化財協会年報 1983年度』1984.3 <1982.3/29 東大阪市遺跡保護調査会は財団法人東大阪市文化財協会へ>
35	本調査	公共下水道第11工区管渠敷設工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江西新町1丁目10~14	190m ²	(財) 東大阪市文化財協会 原田修・上野利明	1983.5/9~6/11	「瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査報告」『(財) 東大阪市文化財協会年報 1983年度』1984.3
36	本調査	倉庫建設に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江西新町1丁目31	283.5m ²	(財) 東大阪市文化財協会 宇本隆裕	1986.10/14~12/13	『(財) 東大阪市文化財協会概報集 1988年度』1989.3
37	本調査	下水道1~12工区管渠整備工事に伴う瓜生堂遺跡の発掘調査	若江北町2丁目	104.92m ²	(財) 東大阪市文化財協会 中西克宏	1988.8/22~10/8	『(財) 東大阪市文化財協会概報集 1988年度』1989.3
38	本調査	1989年度公共下水道第31工区管渠敷設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査	若江西新町1丁目	49m ²	(財) 東大阪市文化財協会 原田信雄	1989.11/27~1990.3/23	『(財) 東大阪市文化財協会概報集 1997年度』1998.3
39	本調査	1991年度公共下水道管渠敷設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査	若江西新町1丁目他	150m ²	(財) 東大阪市文化財協会 金村浩一	1991.8/23~10/17	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概報報告1991』1992.3 『東大阪市下水道事業関係発掘調査概報報告1994年度』1996.3
40	本調査	地中送電線埋設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査	瓜生堂3丁目~若江西新町2丁目	214m ²	(財) 東大阪市文化財協会 三輪若・藤城泰	1994.1/17~1995.8/11	『(財) 東大阪市文化財協会第40次調査』『関西電力地中送電線埋設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査』1999.3
41	本調査	公共下水道管渠敷設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査	若江西新町1~2丁目	110m ²	(財) 東大阪市文化財協会 井上伸一	1994.5/16~6/16	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概報報告1994年度』
42	本調査	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査	瓜生堂3丁目	2440m ²	(財) 東大阪市文化財協会 松昌樹	1995.5/11~9/22	(弥生時代中期後半の方形周溝墓10基とその下層の弥生中期中頃から後半遺構を検出) 「瓜生堂遺跡第42次調査報告」『東大阪埋蔵文化財発掘調査概要1995年度調査(1)』1997.3
43	本調査	倉庫建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査	若江北町1丁目33-3	95m ²	東大阪市教育委員会 下村聰文・才澤弘	1996.9/25~10/15	
44	試掘	都市計画道路大阪狭山線建設事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査	西岩田1丁目他	107m ²	(財) 東大阪市文化財協会 宇本隆裕・三輪若	1996.12~1997.3	『瓜生堂遺跡試掘調査報告』1997.3
45-1 45-2	本調査	都市計画道路大阪狭山線建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査	西岩田1丁目地先	1091m ²	(財) 東大阪市文化財協会 金村浩一・藤城泰・曾我啓子	1997.12/1~1998.3/29, 1998.7/22~12/18	本報告書
46	本調査	都市計画道路大阪狭山線建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査	西岩田1丁目地先		東大阪市教育委員会 福永信雄	1998.8/3~1999.4/6	東大阪市教育委員会『瓜生堂遺跡』第46次調査資料1999.2

表3.2 瓜生堂遺跡調査一覧表(1~2)

*
 内田昭次「大阪府内市内瓜生堂遺跡に出した青銅製剣」『古代学研究』第42・43合併号1966.3
 内市教育委員会・瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡」1966.12
 内市教育委員会主催「内市の歴史展」1965.11/12
 萩田昭次・藤井直正「大阪府内市内瓜生堂遺跡」『日本考古学会第32回年会研究発表要旨』1966.3
 内市教育委員会・瓜生堂遺跡調査グループ「瓜生堂遺跡」1966.12

第4章 古墳時代の調査成果

1 第V層

弥生時代の方形周溝墓を覆う第IV層の上位には厚さ約2mの第V層が堆積していた。大きく4層に分けて述べる。

下位のV-1層は主にオリーブ黒色粘土で構成され、薄い細砂層と繊状の互層を呈する。第IV層との層境は漸移的であるが、植物遺体が層を成していないことから異なる地層とした。自然木や加工木と微細な土器片が出土し、図示したものはない。緩やかな流水による堆積層と思われる。

中位のV-2層は調査区西部にみられる。粗砂や細砂質シルト等によって複雑に構成され、やや強い流水による堆積層と思われる。木製品と2点の土器や自然木が出土した(図2.5・4.4)。木製品の多くは4.4-2のように切断した痕跡が残るものや柱状品あるいは柱状品の破片であり、図示したものも名称に苦慮する用途不明品がほとんどである。2.5-1は一方を尖らせ一方に柄を削り出し、未加工部分には樹皮が残る。刀状木製品とすべきか。4.4-1は木刀状を呈し、4.4-3は三角形の断面を呈する。ともに加工痕は不明瞭で自然木の可能性もある。4.4-4も加工痕は明瞭ではないが、形状から柄と思われる。黒斑状に炭化している部分がある。4.4-5は鍼の未製品か槽の一部と思われる。一面にはまな板のような切りつけた痕跡と思われる細かな筋がみられる。4.4-6は何かの一部であろう。加工痕は明瞭。4.4-7は外面に竹管文を施し、弥生時代中期のものと考えられる。4.4-8の甕は外面にタタキ、内面にナデを施す。口縁外面には弱い指頭痕が残り、煤が口縁端部近くまで付着している。弥生時代後期のものと考えられる。

上位のV-3層は調査区西部にみられ、細砂質シルト等によって構成される。水平方向のラミナがみられ緩やかな流水による堆積層と思われるものの、鉄分の沈着が顕著であったり、土の粒子が非常に均質な部分があり、一部に耕作等による人間の手が加えられている可能性がある。木製品や自然木が出土した。木製品には板状品や柱状品があり、建築部材と思われるものもある(図2.5-2)。

調査区東部の上位と中位は厚さ2m以上の粗砂～砂疊層によって構成されていた(V-4層)。

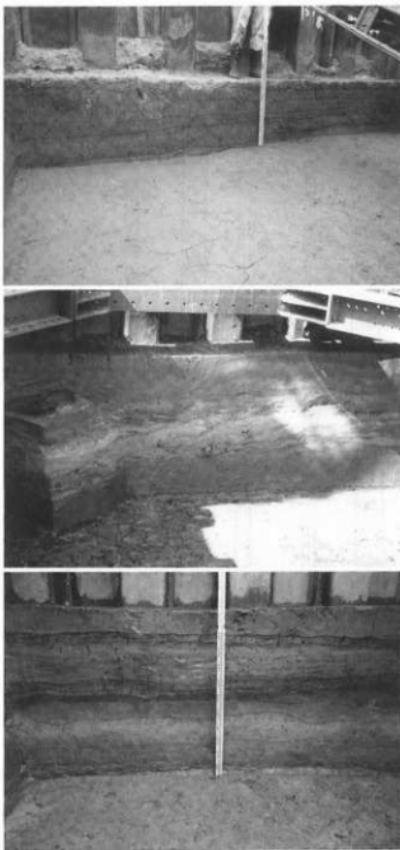


図4.1(上) 調査区南半西壁上部
上端は第Ⅳ(マサ土)層下面で約T.P.+2 mを測る。

図4.2(中) 調査区南半西壁中部
白く写る粗砂層以下はV-2層で、その上のやや黒く写る部分が河川1。左の板は河川1内のもの。矢板に切られ全体の形状等は不明。下の面は第IV層上面で約T.P.+0 mを測る。

図4.3(下) 調査区南半西壁下部
スタッフの目盛りで1m付近が約T.P.+0 mを測る第IV層上面。以下は第III層。

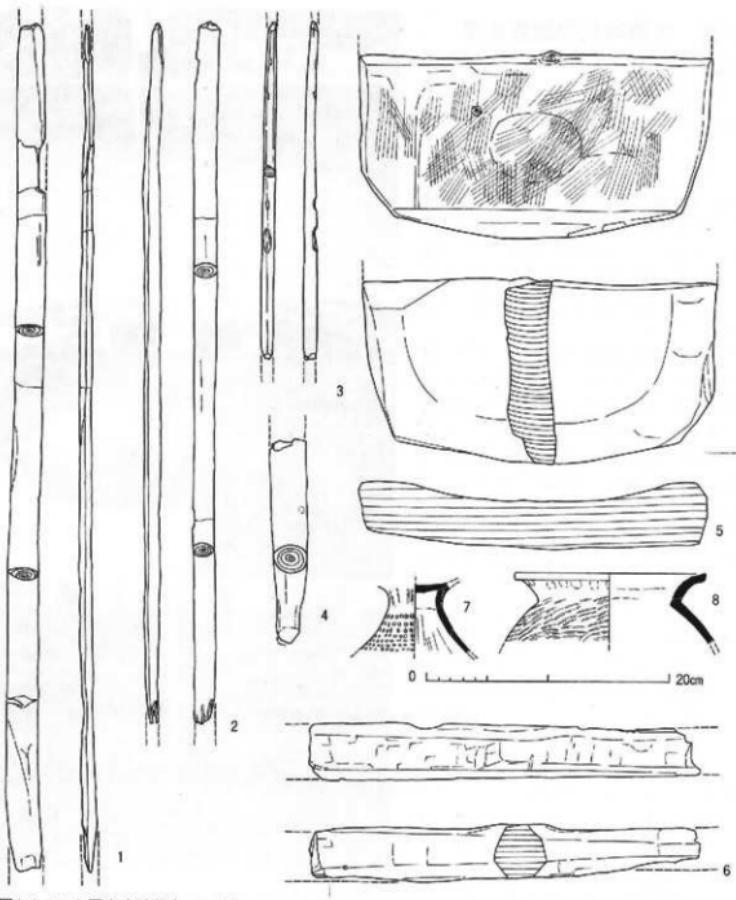


図4.4 V-2層出土遺物(S=1/4)

激しい流水による堆積層と思われる。多くの土器や土錐、少数のサヌカイト細片や原形をとどめぬ木片が出土した(図4.7)。いずれも摩耗が著しい。

2 第V層上面及び層中の遺構(図4.17)

須恵器平瓶

V-3層を掘削中にT.P.+1.5m付近から完形の須恵器平瓶が1点、横転した形で出土した(図4.8)。平瓶周辺を精査したところ鉄分が顕著に沈着する地層が浅い溝状をなしていた。造構とするには不整形であり、河川と思われたが追求ができなかった。平瓶(図2.1・4.11)は体部上半に稜線を成さず口縁部に一条の沈線がみられる。底部と体部下半にヘラケズリ、体部上半にヘラケズリ後ナデを施し、

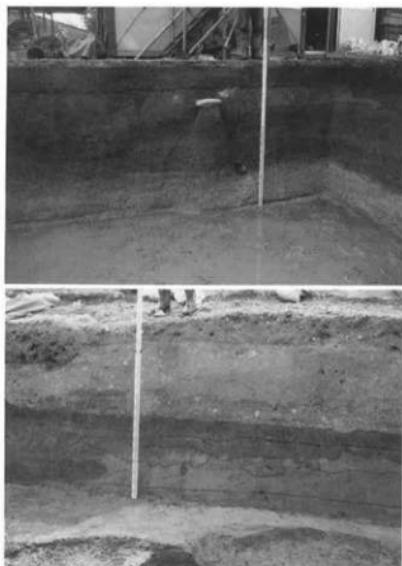
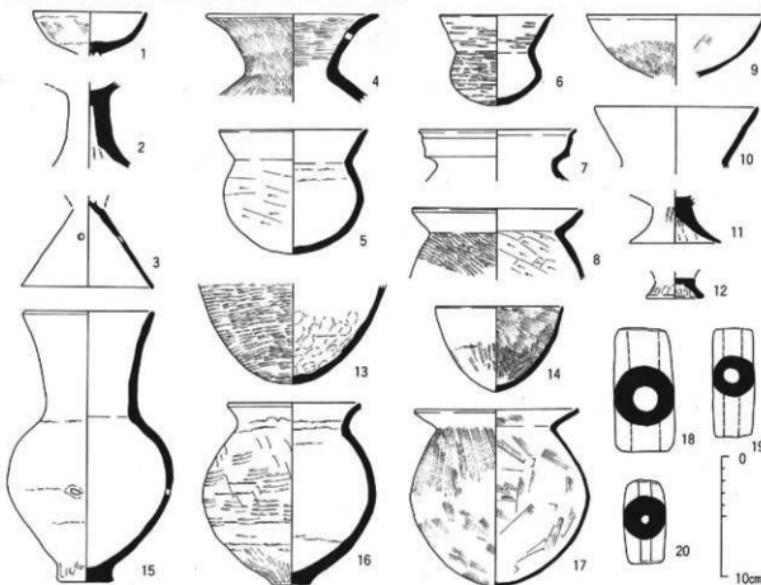


図4.5(上) 調査区東部の南壁断面(北から)
Y=-36,050m付近。土器は図4.7-15で約
T.P.+1.5mを測る。

図4.6(中) 調査区西部の南壁断面(北から)
Y=-36,100m付近。スタッフより左はV-
4層、右はV-3層。

図4.7(下) V-4層出土遺物(S=1/4)
13~14はT.P.+0.5m付近から、13~16は
T.P.+1.5m付近から出土した。18・19・20
の土錘はそれぞれ308.0g・142.2g・
111.6gを測る。



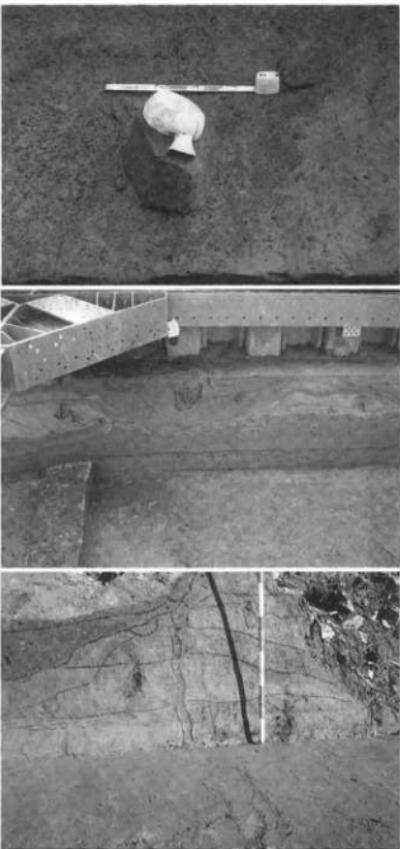


図4.8(上) 須恵器平瓶出土状況(南から)

図4.9(中) 南壁断面(北から)

河川3の断面。河川3を切り込む黒く写るものは古代のSE201。下の面は弥生時代の方形周溝墓の盛土の最上面。

図4.10(下) 北壁断面(南から)

$Y = -36,123m$ 付近の噴砂。検出したうちで最も太く幅約10cmを測る。

図4.11(左) 須恵器平瓶($S=1/4$)

頂部に小さな把手を貼り付ける。7世紀頃のものと思われる。

河川1(図4.2)

第V-2層上面で南東から北西へ流れる河川を確認した(河川1)。調査区外へのび幅約6m、深さ約0.5mを測ると思われる。河川1内からは長さ130cm以上、幅80cm以上、厚さ4cm以上を測る腐食した板状品等の木製品や自然木が出土した。当初、木棺かと思われた板材はこの河川1から出土したものである(図1.3)。

河川2

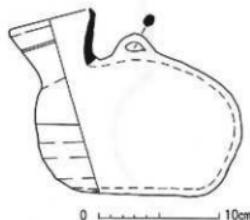
中世溝SD104の東肩付近ではV-3層のラミナが乱れていた。南壁断面ではV-2層を切り込むようであり、植物遺体層が凹状に薄く堆積していたため河川とする(河川2)。平面で確認していないため規模等は不明である。河川2内からは土師器が出土した(図4.12)。4.12-1~3の甕は体部外面にハケ、内面にケズリを施す。4.12-3は口縁部を下にして出土し(図2.2)、ほぼ完形に復元できた。4.12-4の器台は摩耗のため調整不明。4.12-5の高坏は別個体を復元的に図示している。

河川3(図4.9)

V-3層内で検出した。南から北へ流れ、幅約4.5m、深さ約1.3mを測ると思われる。出土遺物はない。断面で明瞭な切り込みは確認できなかったが、V-3層最上部にまでラミナの亂れが認められた。埋没後には古代のSE201や中世のSE102が構築される。

噴砂(図4.10)

V-3層中では方向の異なる噴砂を多数検出した。いずれもV-2層の砂が噴き出したもので、V-3層最上部に達しているものは



ない。

溝1(図4.13-16)

V-3層上面で長さ約9.3m、幅約1.5m、最深約25cmを測る削平された溝状遺構を検出した。埋土は5Y3/2オリーブ黒色細砂混砂質シルトで古墳時代中期に埋没したと思われる。須恵器壺や土師器壺等とともに、ひとつの岩を割ったと思われる15cm大の礫が南から投げ入れた状態で多く出土した。4.15-1は混入と思われる土師器小型丸底壺で、内外面にハケメがみられる。4.15-2の須恵器壺はハラケズリを受け部近くまで施す。4.15-3の土師器壺は本米、完形であったと思われる。体部外面にハケメを施すが摩耗が著しい。接合痕を残し、やや粗い作りで製塗土器に似る。

3 小結

V-4層は粗い粒子で構成され、弥生時代後期から古墳時代前期の土器を含んでいる。V-2・V-3層はV-4層に比べて細かな粒子で構成され、弥生時代後期の土器を含んでいる。堆積した時期はほぼ同時期であるが、様相は異なる。これはV-2・V-3層が後背湿地の、V-4層が自然堤防(あるいは河川)の堆積状況を示し、V-1層はそれ以前のやや異なる状況を示していると思われる。V-3層上面で古墳時代中期の遺構を検出したことから、第V層の堆積は古墳時代前期末頃には終了したと考えられる。また、検出した河川1~3は第V層が堆積していく過程で形成された後背湿地を流れる小河川と考えられる。

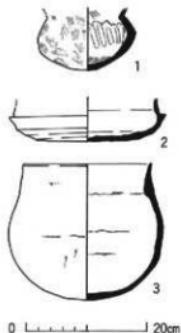


図4.15 溝1出土土器(S=1/4)

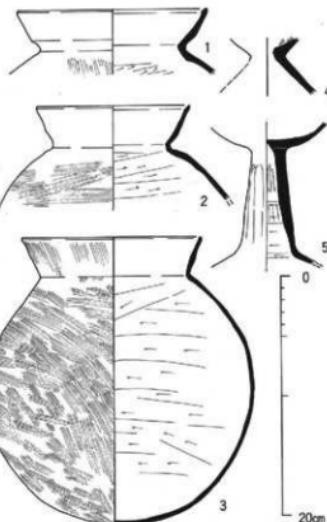


図4.12 河川2出土土器(S=1/4)

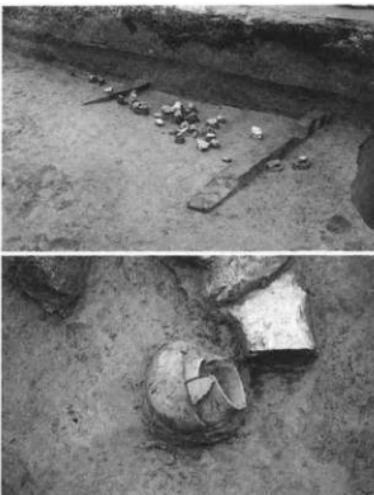


図4.13(上) 溝1南半(南東から)

図4.14(下) 溝1内土器出土状況(南西から)

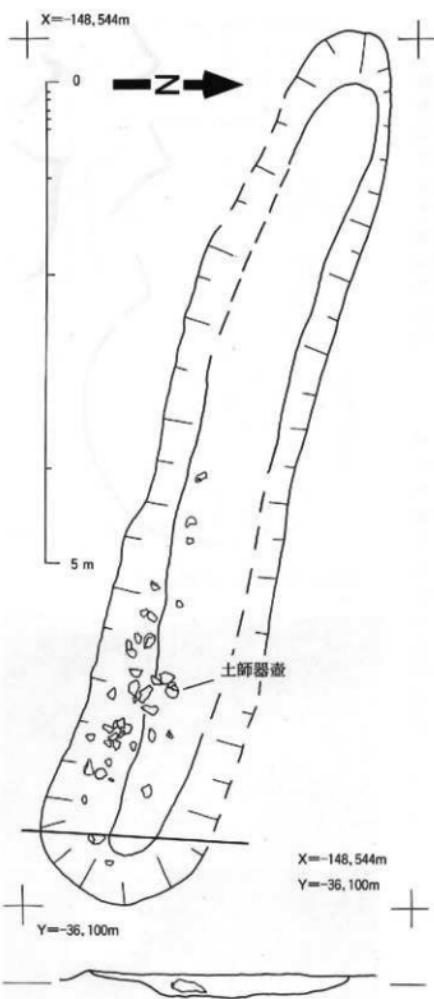


図4.16(左) 溝1平面・断面図(S=1/50)

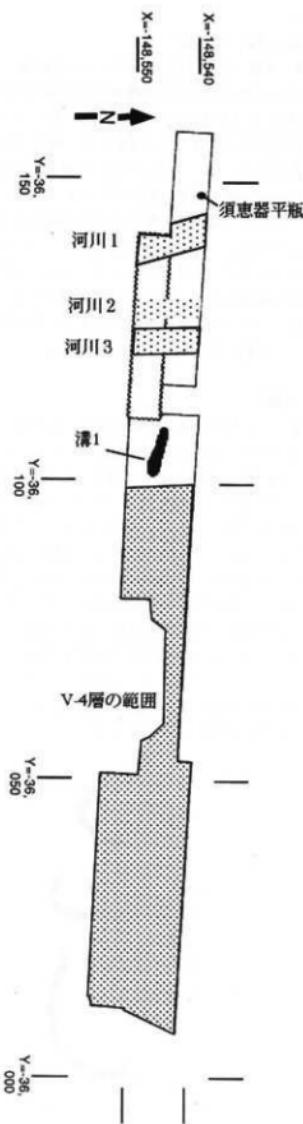


図4.17(右) 古墳時代遺構平面略図(S=1/800)

第V層の堆積によって調査区東部は流水が及ばない安定した微高地となり、後述するように古代以降に居住地として利用されるようになった。ここでは報告しないが埴輪や管玉、石棺等が出土しており、微高地上には古墳が築造されたと考えられ、溝1はこれに関係する遺構とも思われる。

7世紀頃と思われる須恵器平瓶が出土しており、調査区西部は古代に至るまで後背湿地の状態であったと思われる。しかし、V-3層の一部には人間の手が加えられている可能性もあり、平瓶が完形で出土したことも注目される。ここでは河川2が埋没する時期まで後背湿地に比較的多くの土砂が堆積したが、その後はより緩やかな堆積となり、湿地のなかで水田が営まれた可能性があるとしておきたい。

第1章 注

- 1 花園高校地歴部「瓜生堂遺跡」「河内古代遺跡の研究」1970
- 2 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡—中央南幹線下水管渠築造に伴う遺跡調査概報—』1971他
- 3 大阪府教育委員会財団法人大阪府文化財調査研究センター『瓜生堂近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1980
- 4 財団法人東大阪市文化財協会『瓜生堂遺跡試掘調査報告書—都市計画道路大阪瓢箪山線の建設事業に伴う瓜生堂遺跡第44次調査—』1997
- 5 大野薰「瓜生堂遺跡北東辺部の調査」「大阪府下埋蔵文化財研究会(25回)資料」1992大阪府教育委員会財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 6 前掲注4
- 7 財団法人大阪府文化財調査研究センター『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書—第4次—都市計画道路大阪中央環状線立体交差建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1995他
- 8 大阪府教育委員会『東大阪市瓜生堂遺跡の調査』1967
- 9 財団法人大阪府文化財調査研究センター『財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第15集東大阪市所在巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第5次—都市計画道路大阪中央環状線巨摩橋交差点南行車線跨道橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1996他
- 10 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡III』1981他
- 11 財団法人東大阪市文化財協会「II瓜生堂遺跡第42次発掘調査概報」「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1995年度調査(1)—」1997他
- 12 前掲注3
- 13 大阪府教育委員会財団法人大阪府文化財調査研究センター『西岩田近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1983他
- 14 財団法人大阪府文化財調査研究センター『財団大阪府文化財調査研究センター調査報告書第2集新家遺跡第6次発掘調査報告書—大阪府道高速東大阪線東大阪ジャンクション建設に伴う発掘調査—』1995他
- 15 財団法人東大阪市文化財協会『第5章瓜生堂遺跡第41次調査概要』『東大阪市下水道事業関係発掘調査埋蔵文概要報告—1994年度—』1996他
- 16 財団法人東大阪市文化財協会「若江遺跡第28次発掘調査概報」「財団東大阪市文化財協会概報集1988年度」1989他
- 17 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡II』1973
- 18 前掲注13

第5章 歴史時代の調査成果

本調査では第Ⅷ層(中世遺物包含層)上面から遺構検出を行い、調査区全体で多くの歴史時代の遺構や遺物を検出した。遺構は井戸(SE)・土壙(SK)・溝(SD)・掘立柱建物(SB)・ピット(SP)の順に西から東へ述べる。近世以降の遺構には二桁の、中世のものには100番代の三桁の、古代のものには200番代の三桁の番号を付した。なお、本章では近現代、近世、中世、古代の順に記述を進める。

1 近現代の調査成果・第Ⅸ(近世耕土)層上面(図5.215)

道路建設事業が本格化する直前、調査区は東から西に緩やかな傾斜を持つものの全体に平坦面を成していた。調査区西部には家屋が建っており、中央部は田畠、東部は駐車場であった。

第Ⅸ(近世耕土)層上面で積極的な遺構検出を試みていないが、4つの平坦面を確認している。西から段1・段2・段3・段4とする。段2と段3には土管が埋設され、より小さな区画に分けて利用されていたと考えられる。段1は段2より約10cm低く、段2は段3より約60cm低い。段4は段3より約70cm低くなっている。段1と段2の境には杭と板材を用いた土留めがなされていた。段2と段4ではそれぞれ1基の井戸を検出した(SE01図5.5・SE02)。ともに完掘していない。これらの井戸や平坦面は水田耕作に伴うもので、第Ⅶ(マサ土)層が盛られた1960年代後半頃に埋没したと考えられる。また、段3の東端には土手状に盛土がなされていた。近隣住民によると調査区に東接する現在の南北道路はかつて水路であり、道路が並走していたとのことである。



図5.1(最上) 平坦面1南半の近世遺構(西から)
スタッフを置いた付近が畦。奥は平坦面2。

図5.2(中上) 平坦面2西部の近世遺構(東から)

図5.3(中下) 平坦面3東部南半の近世遺構(東から)
手前に並ぶピット列からはビー玉が出土した。

図5.4(最下) 平坦面4南半の近世遺構(南から)

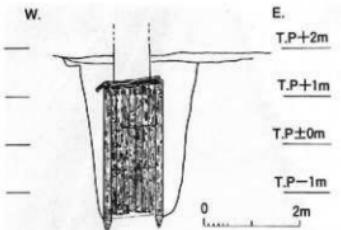


図5.5 SE01断面略図(S=1/100)

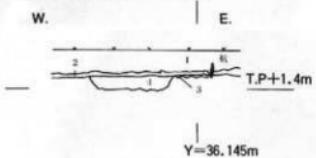
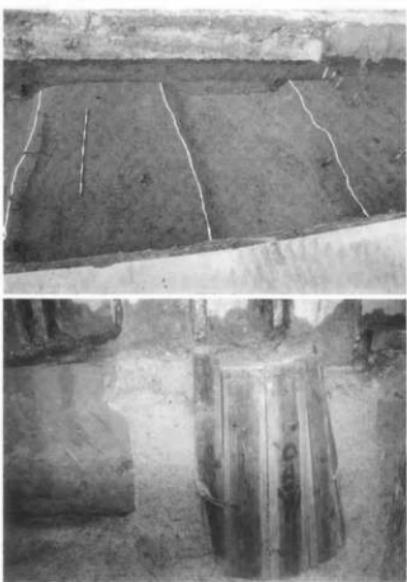


図5.6 SD01付近北壁土層図(S=1/100)



2 近世の調査成果(近代含む)・第V(中世遺物包含)層上面(図5.1~10・5.215)

近現代の段の前身と考えられる4つの平坦面を検出した。西から平坦面1・平坦面2・平坦面3・平坦面4とする。

平坦面1

ここでは第Ⅴ層が削平され、遺構はすべて古代や中世の遺構とともに第Ⅴ層上面で検出している。

SK01は一部を検出したに過ぎない。深さ50cm以上を測り、井戸の可能性がある。埋土から土師皿(図5.9-1)、唐津碗(図5.9-2)、磁器碗(図5.9-3~4)、京焼と思われる碗(図5.9-5)、陶器片口鉢(図5.9-6)、丹波播鉢(図5.9-7)、土師質焰烙(図5.9-8)、漆器椀(図5.9-9)、石製五輪塔水輪(図5.9-10)、平瓦(図5.9-11)等と少量の中世土器細片が出土した。図示した唐津碗は同類のものが2個体出土している。

SD01は幅約3m、深さ約40cmを測る(図5.6~7)。埋土は10Y4/1灰色細緻混じり細砂~中粒砂層で伊万里細片等を含む。中世の土器片が混入しているものの量は少ない。比較的精良な土を用いて一挙に埋められたものと考えられる。近現代の段1東端付近に位置し、平坦面1を近現代の段と同様な区画に分ける性格を持つと考えられる。

SD02は幅約6m、深さ約10cmを測る。中世SD103とSD104の埋りきっていない部分が溝状になったものである。磁器、陶器等の細片や煙管(図5.10)と多量の中世土器細片が出土した。

SD02より西の溝は幅40cm、深さ5cm前後と小さい。方形の土壤状のものは深さ約5cmを測る。これらは水田耕作の痕跡と考えられる。

SD02より東は平坦面3に近く、西から東にやや高くなる。3条の南北方向の溝は幅120cm、深さ7cm前後を測り、西部の溝とは形状が異なる。これらの溝は畠の歴、あるいは平坦面造成の痕跡と考えられる。

平坦面2

平坦面1とはベースとなるV-3層を掘り残

図5.7(上) SD01(南から)

右の杭は近現代段1と段2の境を土留めする杭。左の白線は中世SD101東層。

図5.8(下) SE03最下段井戸枠検出状況(北から)

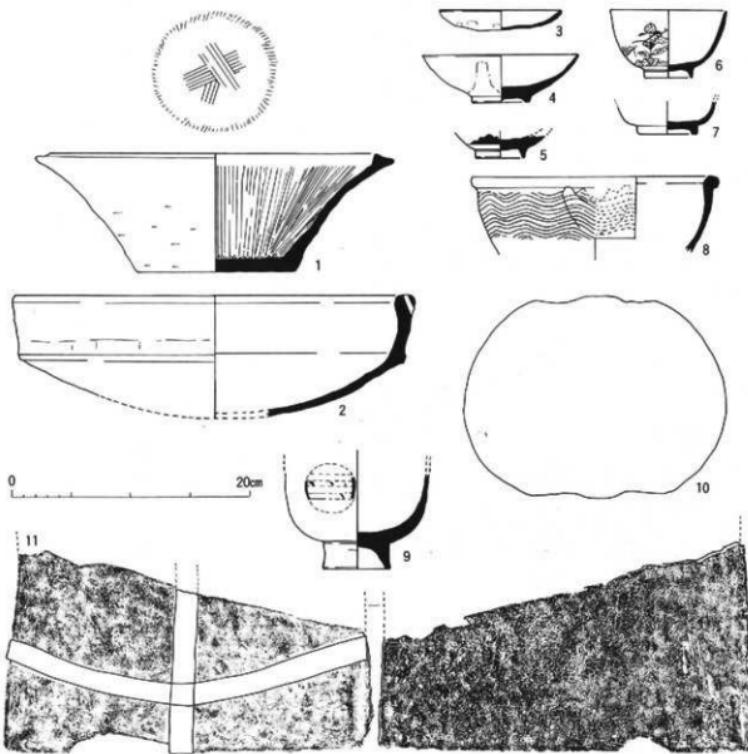


図5.9(上) SK01出土遺物(S=1/4)
 1:土師皿、2:唐津碗、3~4:磁器碗、
 5:京焼?、6:陶器片口鉢、7:丹波播
 鉢、8:土師質焰鉢、9:漆器椀、10:石
 製五輪塔水輪、11:平瓦(井戸用か?)



図5.10(左) 土器類以外の出土遺物
 瓦瓦、土鉢、土人形、煙管が第IX(近世
 耕土)層や近世遺構から出土している。
 右下の煙管は長さ12.0cmを測る。



した高さ約10cmの畔によって区画される。平坦面1と同様に第Ⅶ層が削平され、遺構はすべて古代や中世の遺構とともに第V層上面で検出している。

座標軸から東へ約60°振る幅約120cm、深さ約10cmの溝状遺構を多数検出した。遺構の底面には凸凹がみられる。東半は遺構面がV-4層で形成されているため崩れが著しい。これらは畠の歯の痕跡と考えられる。また、灌漑用と思われるSE03・SE04・SE05を検出した。SE03とSE04は桶を井戸枠とするもので、どちらの桶にも屋号と思われる同じ墨書き見られた(図5.8)。SE05は完掘していないため構造等は不明である。

平坦面3

平坦面2よりも約70cm高い。西部では東西方向の溝2条を検出した。平坦面1の溝に類似し、水田が営まれていたと思われる。南東部では土壙状や柱穴状を呈する不整形な遺構を多数検出した。柱穴状の遺構のなかには直線状に並ぶものがあり、不揃いな杭列と考えられるものがある。しかし、ほとんどは平坦面2の溝状遺構の底面の凸凹と類似しており、畠を耕作した痕跡と考えられる。平坦面3には遺構の形態から少なくとも2つの区画が存在したと考えられる。

平坦面4

平坦面3よりも約80cm低い。平坦面1と同様に第Ⅶ(中世遺物包含)層が削平され、遺構はすべて第V層上面で検出している。幅130cm、深さ7cm前後の南北方向の溝4条を検出した。平坦面1東部の溝群と類似し、畠の歯、あるいは平坦面造成の痕跡と考えられる。

図5.11(最上) 平坦面1南半の遺構(西から)
手前の切り合う溝はSD103とSD104。

図5.12(中上) 平坦面2西部の遺構(東南から)
白線のない大きな穴は近世井戸SE04。

図5.13(中下) 平坦面2東部の遺構(東から)
木組は近現代井戸SE01の枠、その左奥がSK
103。SK103を切る白線は近世の溝。右はSD108
南端。

図5.14(最下) SE102土師皿出土状況(北から)
左の土器は古代井戸SE201の枠。

3 近世～近現代の調査の小結

調査地は近世から現代まで、おもに耕作地として利用されていたことが明らかとなった。

後述する第Ⅸ(中世遺物包含)層出土遺物から、近世平坦面の造成は16世紀～17世紀前半に行われたと考えられる。第Ⅸ(近世耕土)層から土師質や瓦質のコンロ等が出土しており、1960年代後半に至るまで耕作地としての土地利用に大きな変化はなかったと考えられる。また、近世平坦面1はSD01によって二つの区画に分けられ、近現代段1と段2の二つへと区画が踏襲されていたと考えられる。このように土地区画も長期間にわたって大きな変化はなかったと考えられる。

4 中世の調査成果

近世平坦面の造成によって前代の堆積層は大きく改変され、各平坦面の状況が異なる。ここでは平坦面ごとに遺構を述べ、全体の遺構平面図は時期別に示す(図5.215～217)。

1) 平坦面1と平坦面2の遺構(図5.11～46)

遺構は古代や近世の遺構とともに第V層上面で検出している。

SE101

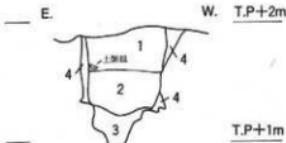
大半は調査区外にあり平面が径約80cmの円形を呈すると思われる。深さ約90cmを測る。土層観察用の西壁を除去する際に検出し、時間の都合で構造等を確認することができなかった。下位から詳細な出土状況は明らかではないが、完形の土師皿1点(図5.35-1)と本来は完形であったと思われる土師皿1点(図5.35-2)が出土した。これらは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内から他に土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。

SE102(図5.14～15・31)

平面は南北約90cm、東西約75cmの隅丸方形を呈し、深さ約100cmを測る。径約26cm、高さ20cm以上の曲物を中心のやや東に置く。曲物は施食が著しく、数個が積み上げられていたと思われるが詳細は不明である。枠内の底から約60cm上で完形の土師皿1点(図5.35-3)が口縁を上にして出土した。井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内からは他に多くの土師皿(図5.35-4・5)、瓦器碗(図5.35-6・7)等の破片が出土した。掘方から特徴的な遺物はなかった。

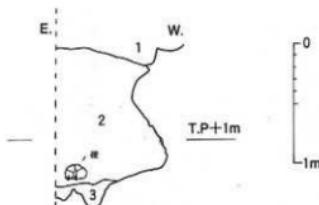
SE103

大半は調査区外にあり平面が東西約90cm、南北70cm以上の方形を呈すると思われる。深さ約75cmを測る。土層観察用の南壁を除去する際に検出し、時間の都合で構造等を確認することができなかった。枠が調査区



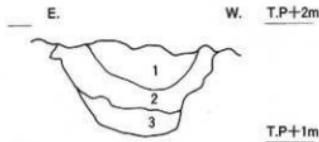
1: 7.5Y R4/2灰褐色中粒砂混砂質シルト
2: 10Y 4/1灰色中粒砂混砂質シルト～細砂
3: 10Y 3/1オリーブ褐色中粒砂混細砂
4: 2.5Y 6/6黄色細砂質シルト

図5.15 SE102断面図(S=1/40)



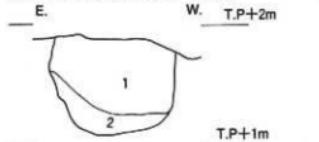
1: 近世溝 d
2: 5Y 7/6黄色細砂と N3/暗灰色細砂と中粒砂の混合土
3: 10G 4/1暗緑灰色中粒砂と N3/暗灰色シルトの混合土

図5.16 SE105断面図(S=1/40)



1: 5Y 6/4オリーブ黄色中粒砂と 7.5Y 2/1黒色砂質シルトの混合土
2: 10Y R2/1黒色粘質シルトと 5G Y5/1オリーブ灰色細砂～粗砂の混合土
3: 10G 4/1暗緑灰色粘質シルトと 5G Y5/1オリーブ灰色細砂～粗砂の混合土

図5.17 SE107断面図(S=1/40)



1: 5Y 6/4オリーブ黄色砂質シルトと 7.5Y 2/1黒色砂質シルトの混合土
2: 7.5Y 2/1黒色砂質シルトと 5G Y5/1緑灰色細砂の混合土

図5.18 SE109断面図(S=1/40)



外に位置する可能性もある。検出時に土師皿、瓦器碗、瓦質釜・甕等の細片が出土した。遺物から時期を特定できない。

SE104

大半は調査区外にあり平面が径約90cmの不整形な円形を呈すると思われる。深さ約65cmを測る。土層観察用の南壁を除去する際に検出し、時間の都合で構造等を確認することができなかった。堆積土から土師皿(図5.35-8)、瓦器碗、白磁碗等の細片が出土した。

SE105(図5.16)

平面は径約90cmの不整形な円形を呈し、深さ約120cmを測る。堆積土は分層不可能で構造は不明である。井戸枠は確認できなかったが、存在していたと思われる。底には約20cm大の罐2個と瓦片1個が置かれていた。構築時に足場として使用されたものと思われる。堆積土からは他に土師皿・小型釜、瓦器碗、瓦質甕(図5.35-9)等の細片が出土した。

SE106

ほとんどが調査区外にあり、南壁が崩落したため構造等は不明である。深さ50cm以上を測る。検出時に本来は完形であったと思われる土師皿(図5.35-10)と土師皿(図5.35-11～13)、瓦質火舍等の破片が出土した。

SE107(図5.17)

ほとんどが調査区外にあるため詳細な構造等は不明である。平面が径約120cmの不整形な円形を呈し、深さ80cm以上を測り、径約60cmの木製品を中央に置いて井戸枠としていると思われる。検出時に土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。遺物から時期を特定できない。

SE108(図5.35・5.68)

SD108に切られる。調査区の境にあるため詳細な構造等は不明である。平面はおそらく南北約150cm、東西約130cmの不整形な円形を呈し、深さ60cm以上を測る。下位から詳細な出土状況は明らかではないが、完形の瓦器碗1点(図5.35-14)が出土した。これは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。堆積土から他に土師皿(図5.35-15)、瓦器碗・皿(図5.35-16)、白磁碗(図5.35-17)等の破片が出土した。

SE109(図5.18)

近現代の井戸SE01に切られ、ほとんどが調査区の境にあるため詳細な構造等は不明である。平面はおそらく約100cm四方の隅丸方形を呈し、

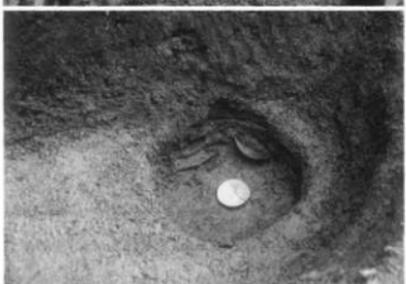
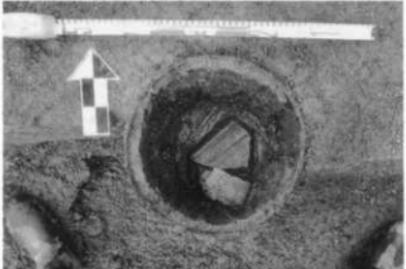
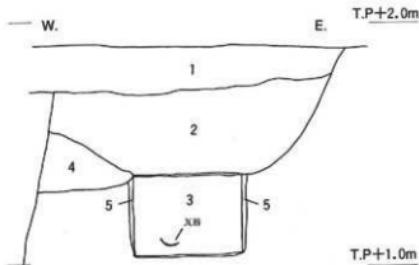


図5.19(上) SE111・SE110検出状況(北西から)
SE110(右)がSE111(左)を切っている。

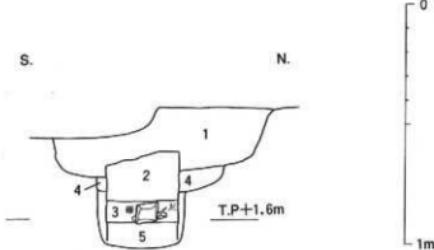
図5.20(中) SE111枠内の礪と瓦(南から)
矢印はおよその北を示す。

図5.21(下) SE113枠内遺物出土状況(北東から)
白く写る土師皿は図5.35-20。右上の土師皿(図5.35-21)
は写っている状態の通りで、奥に入り込むものではない。



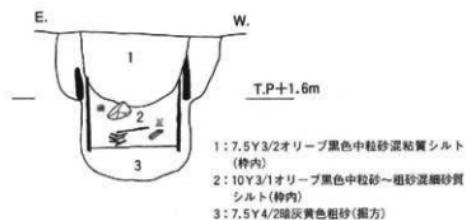
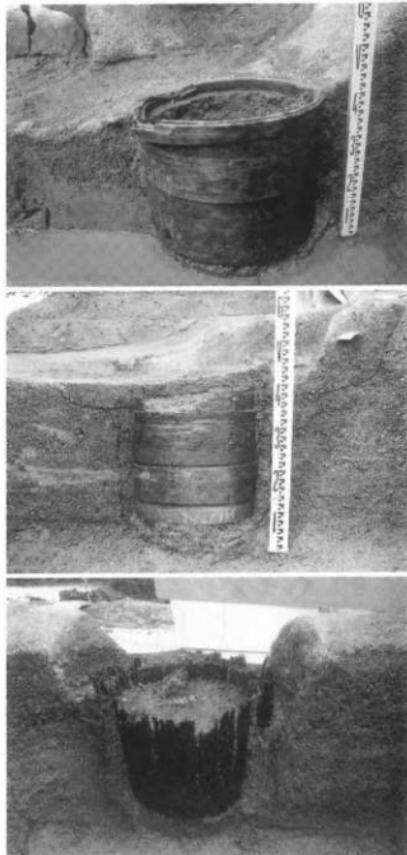
- 1: 現代渓
 2: 7.5Y3/1オリーブ黒色中粒砂混粘質シルト(埋土)
 3: 10Y3/1オリーブ黒色中粒砂混粘質シルト(枠内)
 4: 2.5Y4/1黄灰色粗砂(掘方)
 5: 2.5Y3/1黒褐色粗砂(掘方)

図5.22 S E 110断面図(S=1/20)



- 1: 5Y2/1黒色粘質シルトと5G Y4/1暗オリーブ灰色細砂の混合土 U
 2: 10Y2/1黒色中粒砂混粘質シルト(枠内)
 3: 10Y2/1黒色中粒砂混粘質シルト(枠内)
 4: 5Y3/1オリーブ黒色粘質シルト混粗砂(掘方)
 5: 5Y3/2オリーブ黒色粗砂(掘方)

図5.23 S E 111断面図(S=1/20)



- 1: 7.5Y3/2オリーブ黒色中粒砂混粘質シルト(枠内)
 2: 10Y3/1オリーブ黒色中粒砂～粗砂混細砂質シルト(枠内)
 3: 7.5Y4/2暗灰黄色粗砂(掘方)

図5.25(上) SE110井戸枠

図5.26(中) SE111井戸枠

図5.27(下) SE112井戸枠

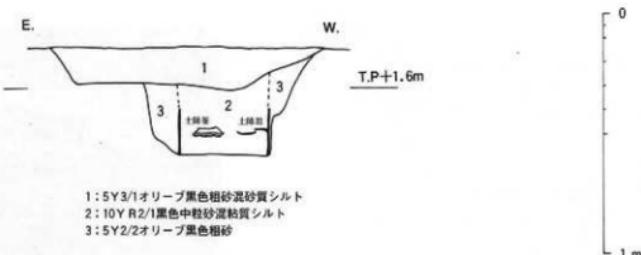


図5.28 SE113断面図(S=1/20)

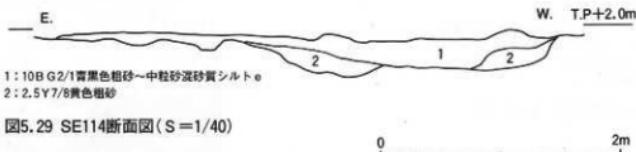


図5.29 SE114断面図(S=1/40)

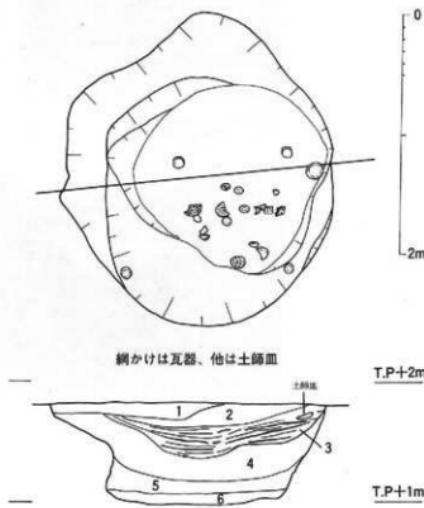


図5.30 SK103平・断面図(S=1/40)

- 1: 近世溝
- 2: 7.5Y R3/1墨褐色粗砂ブロック混合中粒砂混砂質シルト
- 3: 5G3/1暗緑灰色粘土(縄状に植物遺体層が入る)
- 4: 5G1.7/1緑黒色粘質シルト
- 5: 5G1.7/1緑黒色粘土
- 6: 10B G4/1暗青灰色細砂～中粒砂

深さ75cm以上を測る。土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。遺物から時期を特定できない。掘方の規模がSE110と同規模であり近い時期のものと思われる。

SE110(図5.19・22・25)

近現代の井戸SE01に切られ、SE111を切る。平面はおそらく約140cm四方の隅丸方形を呈し、深さ約85cmを測る。径約45cm、高さ約17cmの曲物を中央よりやや東南に置き、同じ大きさの曲物を積み上げて井戸枠としている。より上部に井戸枠が存在したと思われるが、埋土の状況から枠が抜き取られた可能性がある。枠内の底から約5cm上で完形の瓦器碗1点(図5.35-18)が口縁を上に置かれたような状態で出土した。井戸を構築した際に行われた祭祀の痕跡と考えられる。枠内からは他に石硯(図5.35-19)と瓦器碗、瓦質壺等の細片が出土した。石硯は刻まれており、玉もしくは円板の原料に転用されたと考えられる。掘方から特徴的な遺物はなく、上部の埋土から土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。

SE111(図5.19～20・23・26)

SE110に切られる。平面はおそらく約100cm四方の隅丸方形を呈し、深さ約58cmを測る。径約28cm、高さ約7cmの曲物を中心置き、径約30cm、高さ9cmの曲物を二つ積み上げ、さらに曲物を積み上げて井戸枠としている。

より上部に井戸枠が存在したと思われるが、埋土の状況から枠が抜き取られた可能性がある。枠内の底から約10cm上で約13cm大の縦1個と瓦片1個が置かれていた。その下はベースの第V層が噴き上がったように充填されおり、これらは構築時に足場として使用されたものと思われる。枠内からは他に土師皿等の細片が出土した。掘方から特徴的な遺物はなく、上部の埋土から土師皿、瓦器碗、須恵器鉢等の破片が出土した。

SE112(図5.24・27)

平面は約70cm四方の隅丸方形を呈し、深さ約60cmを測る。径約38cm、高さ30cm以上の桶を中心へ置き、径約48cm、高さ20cm以上の桶を積みあげる。枠内から10cm大の石と平瓦片が出土しており、SE121と同様に石を積んでいたものと思われる。枠内から他に土師皿、瓦器碗、須恵器鉢等の細片が出土し、掘方から特徴的な遺物はなかった。構造からSE121と近い時期のものと思われる。

SE113(図5.21・28)

平面は径約100cmの円形を呈し、深さ約45cmを測る。径約38cm、高さ20cm以上の曲物を中心よりやや北東に置き井戸枠としている。曲物は腐食が著しく、数個が積み上げられていたと思われるが詳細は不明である。より上部に井戸枠が存在したと思われるが、埋土の状況から枠が抜き取られた可能性がある。枠内の底から約8cm上で完形の土師皿1点(図5.35-20)が口縁を上に置かれたような状態で出土した。同じ高さで半分に割れた土師皿1点(図5.35-21)と土師釜の鶴片が出土している。また掘方から出土した土師皿(図5.35-22)は約3/4まで復元できた。これらは井戸を構築した際に行われた祭祀の痕跡と考えられる。枠内からは他に土師皿・釜、

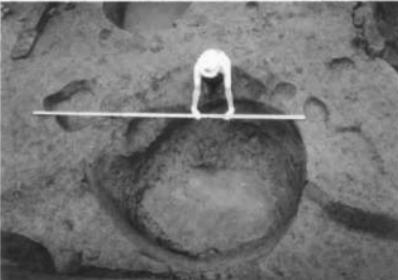


図5.31(最上) SK101他(北から)

奥右端はSE102、南北方向の溝はSD106。白線は手前で屈曲するが、この部分は近世の溝であった。

図5.32(中上) SK103遺物出土状況(南から)

図5.33(中下) SK103完掘状況(南から)

図5.34(最下) SK104他(南西から)。

中央の溝はSD105、切り合うものがSE114。その左の円形の白線は構造ではなかった。

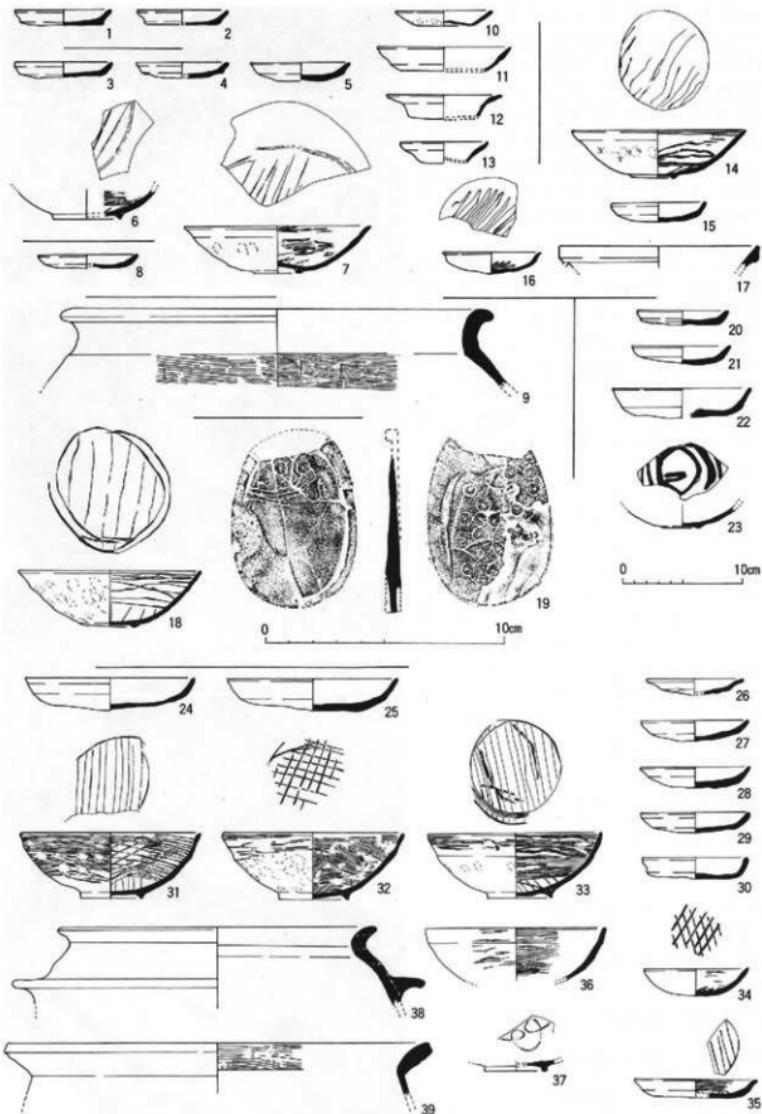


図5.35 SE101(1~2)・SE102(3~7)・SE104(8)・SE105(9)・SE106(10~13)・SE108(14~17)・SE110
(18~19)・SE113(20~23)・SK103(24~39)出土遺物(19はS=1/2、他はS=1/4)

瓦器碗(図5.35-23)、瓦質足釜、須恵器鉢等の破片が出土し、上部の埋土から土師皿・釜、瓦器碗・皿、須恵器甕等の細片が出土した。

SE114(図5.29)

ほとんどが調査区外にあるため構造等は不明である。南壁で深さ約25cmを測る。非常に浅いが、埋土の状況から構造物の存在が推測されるため井戸とした。土師皿(図5.41-1)、瓦器碗(図5.41-2)、丸平瓦等の細片が出土した。

SK101(図5.31)

平面は長軸約90cm、短軸約65cmの隅丸長方形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は2.5Y5/3黄褐色中粒砂混砂質シルトで土師皿、瓦器碗等の微細片が出土した。遺物から時期を特定できない。

SK102(図5.31)

平面は長軸約140cm、短軸約60cmの不整形な隅丸長方形を呈し、深さ約10cmを測る。埋土は2.5Y5/4黄褐色中粒砂混砂質シルトで土師皿、瓦器碗等の微細片が出土した。遺物から時期を特定できない。

SK103(図5.30・32~33)

平面は径約220cmの不整形な円形を呈し、深さ約85cmを測る。埋土は大きく4層に分けられ、2層は植物遺体や炭が纏なすように堆積していた。この纏に沿うように多くの種子とともに多数の土師皿(図5.35-24~30)や瓦器碗(図5.35-31~33)・皿(図5.35-34)が口縁を上に置かれたような状態で出土した。これらは何らかの祭祀の痕跡と考えられる。他に瓦器碗(図5.35-36~37)・皿(図5.35-35)、土師釜(図5.35-38)等の細片が、検出時に土師鍋(図5.35-39)が出土した。4層からは約12cm大の礫が1点出土している。遺物数は表に示した(表5.1=P.155)。枠を

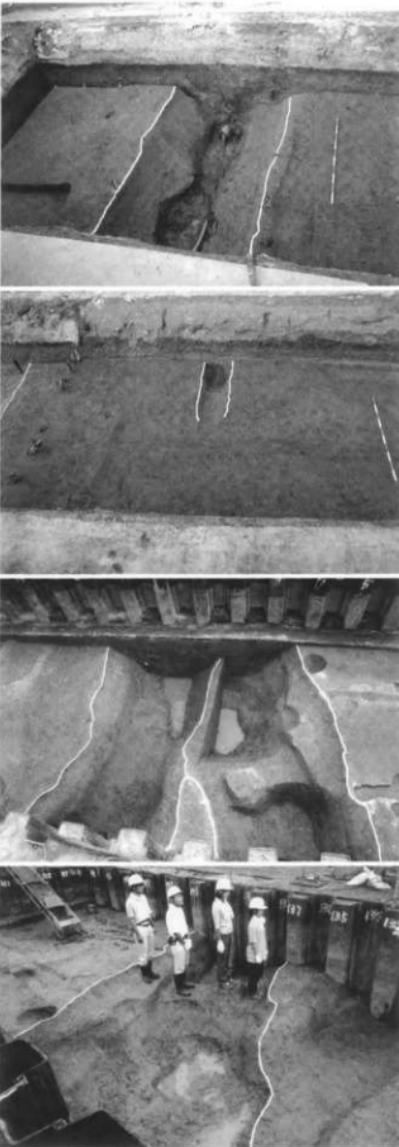


図5.36(最上) SD101(南東から)

図5.37(中上) SD102(南から)

図5.38(中下) SD104(左)とSD103(北から)

図5.39(最下) SD103の土橋を渡る(南東から)。
一列縱隊での通行は十分に可能。

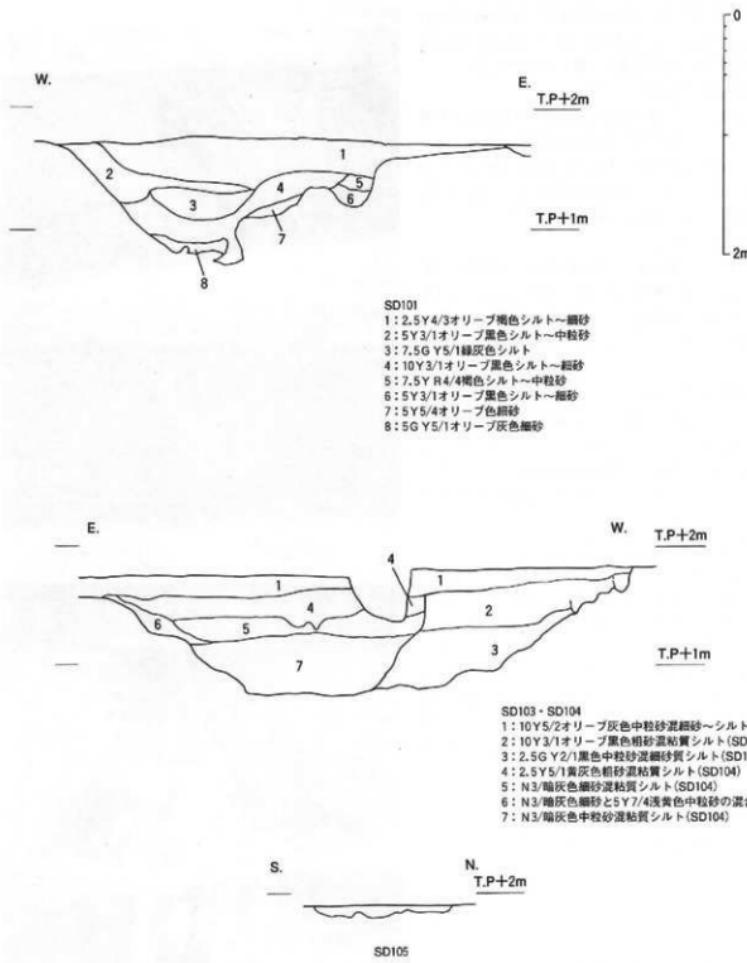


図5.40 SD101・SD103・SD104・SD105断面図 (S=1/40)

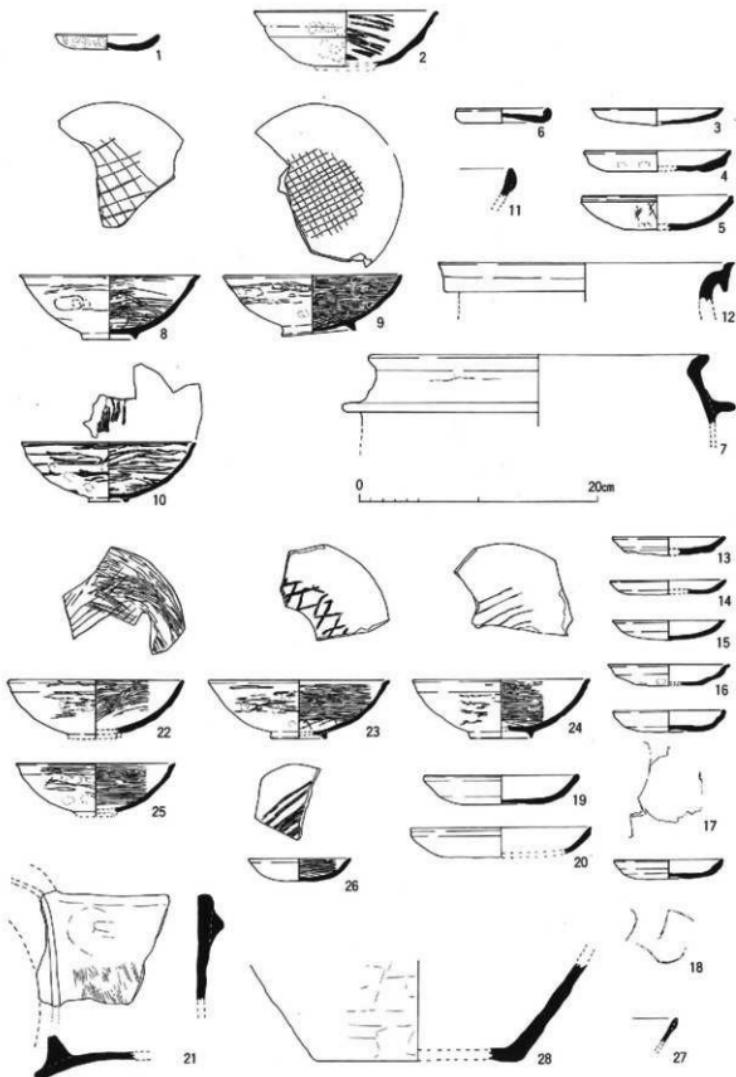


図5.41 SK101(1~2)・SD101(3~28)出土遺物(S=1/4)

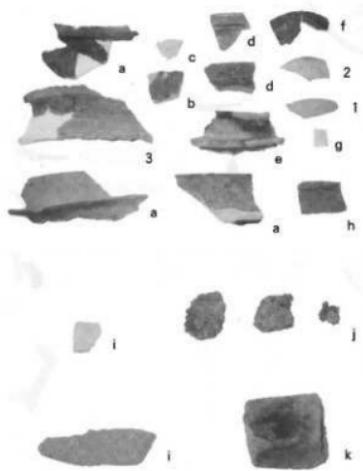


図5.42 SD103出土遺物1

a : 瓦質釜、b : 瓦質火壺、c : 土師皿、d : 常滑窯、
e : 土師釜、f : 瓦器碗、g : 白磁、h : 須恵器鉢、
i : 砧石、j : 鉄滓、k : 磚?
1~3は図5.43に対応する。

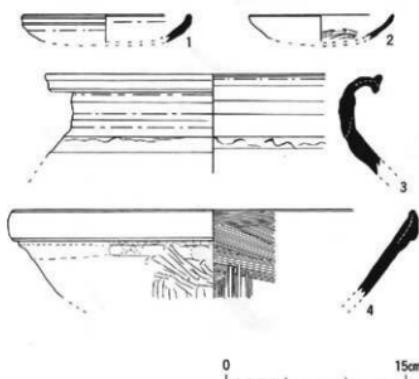


図5.43 SD103出土遺物2 (S=1/4)

抜き取られた井戸とも思われるが、SE105やSE128とは遺物の出土状況が異なることから土壌とした。

SK104(図5.34)

平面は南北約90cm、東西約110cmの不整形な隅丸方形を呈し、深さ約37cmを測る。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色中粒砂混粘質シルトで土師皿・釜、瓦器碗、瓦質甕の細片が出土した。SE101と同時期に埋められたと思われる。

SK105(図5.34)

平面は南北約1300cm、東西約100cmの隅丸方形を呈し、深さ約25cmを測る。埋土は7.5YR3/2オリーブ黒褐色粗砂混粘質シルトで土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。SE101と同時に埋められたと思われる。

SK106(図5.34)

平面は南北約100cm、東西約150cmの隅丸方形を呈し、深さ約15cmを測る。埋土は7.5YR3/2オリーブ黒褐色粗砂混粘質シルトで土師皿・釜、瓦器碗等の細片が出土した。SK103と同時に埋められたと思われる。

SD101(図5.36・40)

南北方向で断面は逆凸形を呈する。幅約260cm、深さ約100cm、長さ4m以上を測り、端を検出していない。埋土の上位から土師皿(図5.41-3~6)・釜(図5.41-7)、瓦器碗(図5.41-8~10)、白磁碗(図5.41-11)、常滑と思われる陶器壺(図5.41-12)等が、下位から土師皿(図5.41-13~20)・竈(図5.41-21)、瓦器碗(図5.41-22~25)・皿(図5.41-26)、白磁碗(図5.41-27)、常滑と思われる陶器底部(図5.41-28)等が出土した。遺物数は表に示した(表5.2=P.155)。SK103と同時にかなりの部分が埋没するものの、SD104と同時に機能していたと考えられる。

SD102(図5.37)

南北方向で断面はU字形を呈する。幅約50cm、長さ2m以上を測り、近世土壤に切られ端を検出していない。深さは南端で約3cm、北壁で約26cmを測り、調査区外では北へ向かうほど深くなるものと思われる。土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。SK103と同時に埋められたと考えられる。

SD103(図5.38~42)

SD104に切られる。南北方向であるが南で

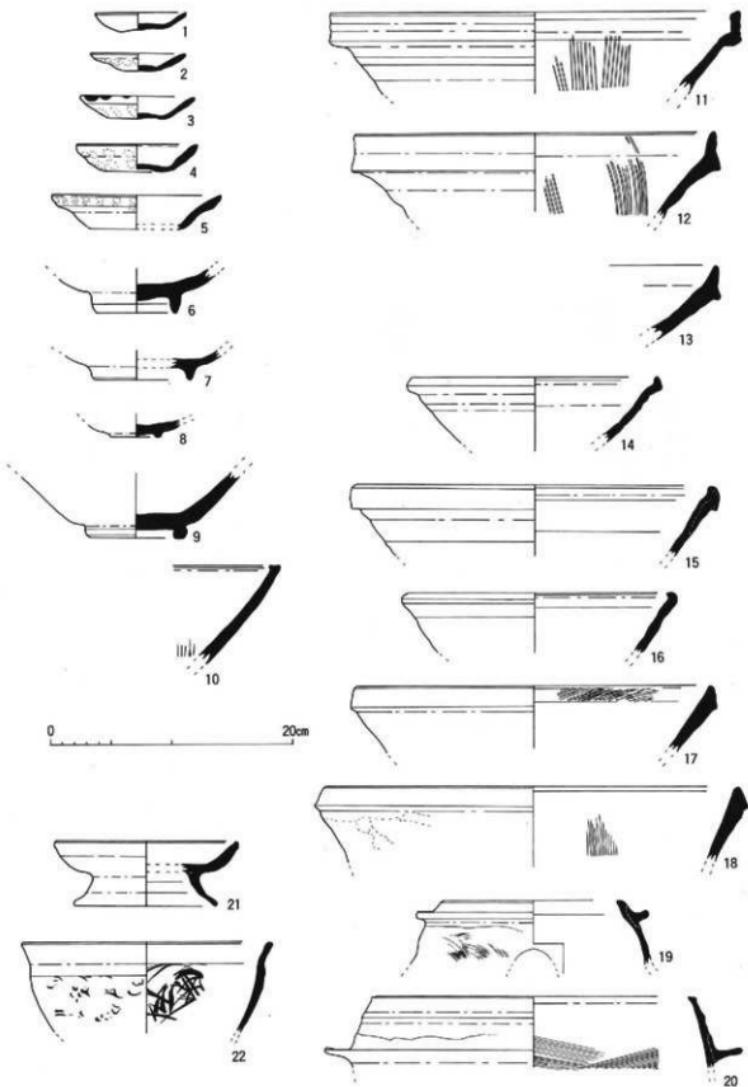


图5.44 SD104出土遗物 1 (S=1/4)

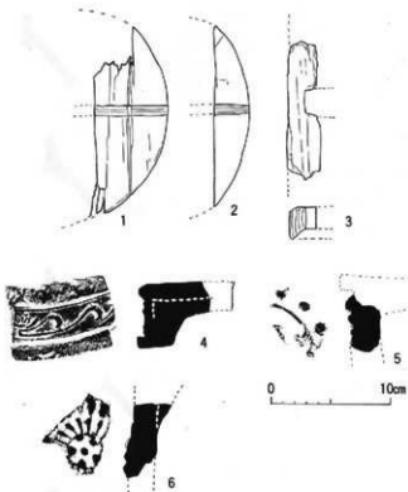


図5.45 SD104出土遺物2 (S=1/4)

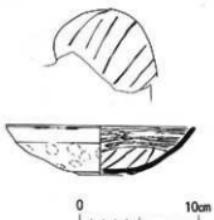


図5.46 SP101出土瓦器碗 (S=1/4)

東へ振れる。断面はゆるい逆台形を呈し、幅約2.2m、深さ約1m、長さ9m以上を測る。端を検出していない。東へ振り始める部分ではベースとなるV-3層を掘り残した高まりを検出した。中央部は幅約45cmと約80cmの溝に挟まれた約40cm大の飛び石のように掘り残す。断面は上辺約45cm、下辺約120cmを測る台形を呈する。この高まりは溝に深さ約50cmの水を溜める堰と考えられる。また、人間が一人、通行可能であり、土橋としても機能していたと思われる(図5.39)。埋土から土師皿(図5.43-1)、瓦器碗(図5.43-2)、須恵質の壺(図5.43-3)、瓦質擂鉢(図5.43-4)、軒平瓦(図5.43-5)等が出土した。遺物数は表に示した(表5.6=P.169)。SD104に作り替えられたものと考えられる。

SD104(図5.38・40)

SD103を切る。南北方向で断面はゆるい逆台形を呈する。幅約270cm、深さ約100cm、長さ9m以上を測り、端を検出していない。埋土から土師皿(図5.44-1~5)、青磁碗(図5.44-6~7)、唐津碗(図5.44-8)、瀬戸鉢(図5.44-9)・瀬戸擂鉢(図5.44-10)、上層から混入の可能性がある信楽と思われる陶器擂鉢(図5.44-11)、備前擂鉢(図5.44-12~13)、須恵器擂鉢(図5.44-14~15)、瓦質擂鉢(図5.44-17~18)・釜(図5.44-19~20)、曲物底板(図5.45-1~2)、はぞ穴を切る加工木(図5.45-3)、軒瓦(図5.45-4~6)等の破片が出土した。他に土師台付皿(図5.44-21)や瓦器鉢(図5.44-22)等の破片もある。遺物数は表に示した(表5.6=P.169)。SD103を作り替えたものと考えられる。唐津片が出土しており、完全に埋められる時期は近世平坦面の造成時であろう。

SD105(図5.34・40)

東西方向で断面は皿状を呈する。幅約113cm、深さ10cm、長さ10m以上を測り、西端を検出した。埋土は5Y2/2オリーブ黒色中粒砂混細砂～砂質シルトで土師皿、瓦器碗等の細片が少量出土した。遺物から時期を特定できないが、SD108と近い時期に埋められたと思われる。

SP101

径約15cmの不整形な円形を呈し、深さ約15cmを測る。本来は完形であったと思われる瓦器碗1点(図5.46)が出土した。

2) 平坦面3西部の遺構(図5.47~81)

平坦面3の西部(Y=-36,090m付近以西)で

は第VII(中世整地)層が認められたが、掘削ミスのため第VI層をほとんど除去した段階で遺構を検出している。西端部では第VI層・第V(平安整地)層上面で遺構を認識できず、第V層上面で遺構を検出した。また、協会試掘では平坦面2と同程度まで機械掘削して遺構を検出している。このため多くの遺構の層位的な関係を明らかにできなかった。ここでは協会試掘A地区で検出した遺構を含め、SD109(Y=-36,080m付近)以西の遺構について述べる。

SE115(図5.53・56)

平面は約190cm四方の不整形な方形を呈し、深さ約70cmを測る。埋土の状況から枠が抜き取られたと考えられ、構造は不明である。底から約5cm上で完形の瓦器碗1点(図5.60-1)が口縁を上に置かれていた。井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。埋土から他に土師皿(図5.60-2)・鍋(図5.60-4)、瓦器碗(図5.60-4)、青磁碗(図5.60-5~6)瓦質釜(図5.60-7)・甕(図5.60-8)・擂鉢・須恵鉢(図5.60-9)、常滑壺等の破片が出土した。

SE116(図5.50~51・54・57)

平面は径約200cmの不整形な円形を呈し、深さ約140cmを測る。径約50cm、高さ約100cmの桶を中央よりやや南東に置き井戸枠としている。より上部の構造は不明である。枠内から土師皿(図5.60-10)、青磁碗、瓦質甕・火舎、平瓦等の細片が、掘方から瓦器碗等の細片が出土した。

SE117(図5.50)

SE118に切られ、SE119を切る。平面は径約150cmの円形を呈し、深さ約50cmを測る。径約50cmの曲物を中央よりやや東に置く。曲物は腐食が著しく、数個が積み上げられていたと思われるが詳細は不明である。詳細な出土状況は明らかではないが、枠内の底から完形の瓦器碗2点(図5.60-11~12)が出土した。これらは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内から他に土師皿(図5.60-13)、瓦器碗、白磁碗(図5.69-1)、青磁碗(図5.96-2~4)、常滑壺(図5.60-4)、曲物底板(図5.60-15)、筒形木製品(図5.60-16)等の細片が出土した。掘方から特徴的な遺物はなかった。

SE118(図5.50・55・58)

SE117・SE119を切り、SD108に切られる。

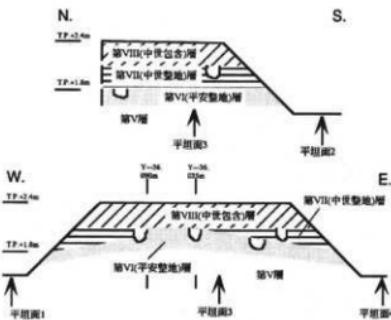


図5.47 各平坦面の層序模式図

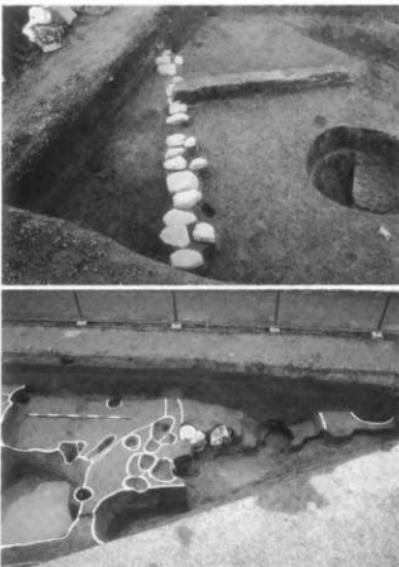


図5.48(上) 平坦面3西部の遺構(西から)

手前の大溝はSD108、奥の大きな穴はSE115。

図5.49(下) 平坦面3西部の遺構(南から)

左の水が溜まっている穴はSE115、土嚢が置かれている凸凹は協会試掘A地区。右の円形の木はSE120の曲物。



図5.50(上) 協会試掘A地区的遺構(北から)

左から SE116、SE117、SE118。

図5.51(中) SE116細部(西から)

本来は瓦が円形に巡る。下の木は曲物。

図5.52(下) SE119(北から)

手前の丸い曲物のみを検出している。

平面は南北約250cm、東西約220cmの隅丸長方形を呈し、深さ約110cmを測る。径約45cm、高さ約13cmの曲物を中央よりやや北に置き、径約45cm、高さ約10cmの曲物を積み、さらに最大で約30cm大の瓦片(図5.61-1~5)と瓦質火舍片(図5.60-17)を内径約50cmの円形に積み上げて井戸枠としている。瓦積みと曲物とには40cmの間隙があり、本来はそこにも曲物が存在したと思われる。詳細な出土状況は明らかではないが、枠内から本来は完形であったと思われる土師皿2点(図5.60-18~19)が出土している。これらは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内から他に瀬戸と思われる陶器碗(図5.60-20)、瓦質壺(図5.60-21)・擂鉢(図5.60-22)、須恵器鉢(図5.60-23)、常滑窯等の細片が、掘方から瓦器碗、瓦質釜・壺等の細片が出土した。SE106と同時期に埋められたと思われる。

SE119(図5.52)

SE117・SE118に切られ、SE118を掘削中に検出した。径約40cmを測る曲物の一部のみを残す。遺物は出土しなかった。このため構造等は不明である。SE101と同時に埋められた可能性が高い。

SE120(図5.59・63)

一部は調査区外となる。平面はおそらく約140cm四方の円に近い隅丸方形を呈し、深さ約125cmを測る。径約54cmの曲物を中央に置き、径約55cm、高さ約44cmの曲物を積み、さらに径約58cm、高さ15cm以上の桶を積み上げて井戸枠としている。より上部の構造は埋土の状況から枠が抜き取られたと考えられ不明である。枠の底から約15cm上で完形の瓦器碗2点(図5.62-1~2)が口縁を上にして出土した。付近から完形近くに復元できた瓦器碗1点(図5.62-3)も出土している。これらは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内から他に土師皿(図5.62-4~5)、瓦器碗、瓦質壺、瓦製円錠(図5.62-6)、平瓦、イヌノキ製の櫛(図5.62-7)、曲物底板(図5.62-8~12)、板状木製品(図5.62-13)、扇の可能性がある穿孔板状木製品(図5.62-14~17)等の破片が出土し、掘方から特徴的な遺物はなかった。上部の埋土からは土師皿、白磁碗(図5.70-1)、瀬戸鉢皿(図5.70-2)、須恵器鉢(図5.70-3)、備前擂鉢(図5.70-4)等の細片が出土した。第VI層上面の遺構。

SK107(図5.66~68)

SD108に切られる。平面はおそらく長軸150cm以上、短軸約105cmの隅丸平行四辺形を呈し、深

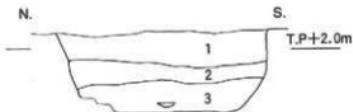
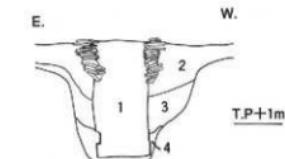


図5.53 SE115断面図 (S=1/40)



1: 7.5Y R 6/6褐色砂質シルトブロックと10Y 6/1灰色中粒砂
混砂質シルトの混合(枠内)
2: 2.5Y 7/4浅黄色砂質シルト混中粒砂(掘方)
3: 10Y R 7/4にぶい青褐色中粒砂混砂質シルト(掘方)
4: 5B G 5/1青灰色中粒砂混粘土(掘方)
5: 5B 4/1暗青灰色粗砂混粘質シルト(掘方)
6: 2.5Y 7/4浅黄色粗砂(掘方)
7: 10Y R 7/4にぶい黃褐色砂質シルト混粗砂(掘方)

図5.54 SE116断面図 (S=1/40)



1: 5B 4/1暗青灰色砂泥(枠内)
2: にぶい赤褐色中粒砂混粘土(掘方)
3: 暗青灰色中粒砂混粘土(掘方)
4: 褐灰色粗砂(掘方)

0 1m

図5.55 SE118断面図 (S=1/40)



図5.56(右上) SE115瓦器椀出土状況
瓦器碗は図5.60-1。

図5.57(中上) SE116井戸枠

図5.58(中下) SE118断面

図5.59(右下) SE120井戸枠

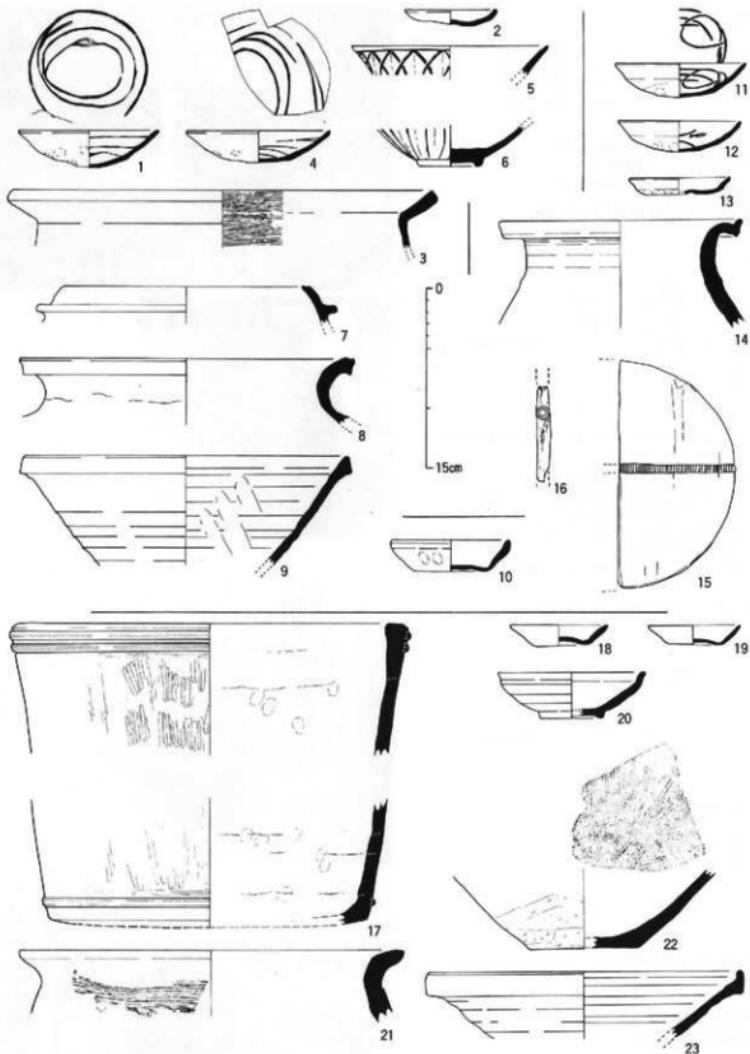


図5.60 SE115(1~9)・SE116(10)・SE117(11~16)・SE118(17~23)出土遺物(S=1/4)

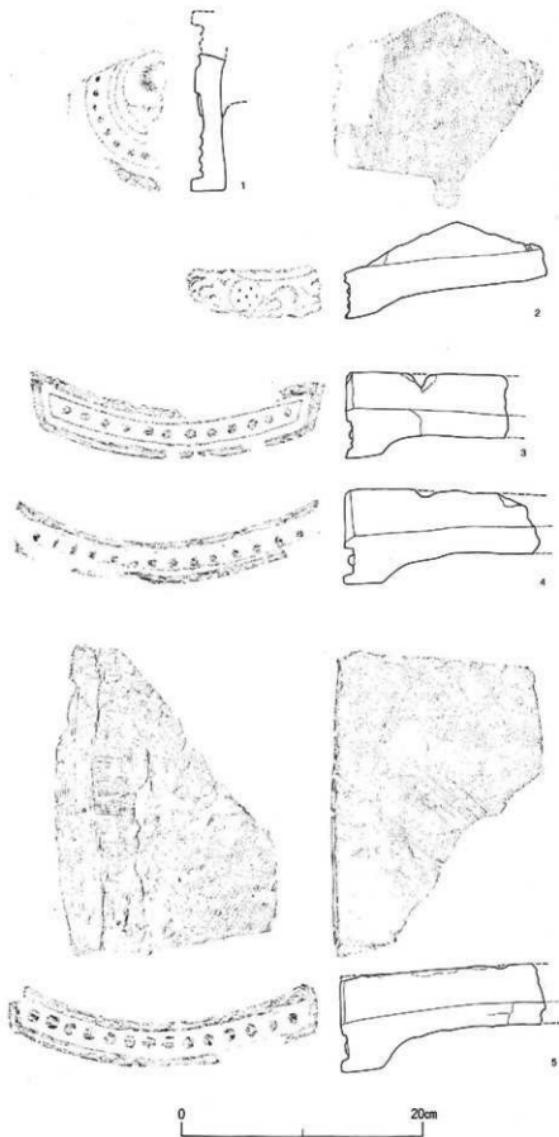


図5.61 SE118の井戸枠に転用された軒瓦 (S=1/4)

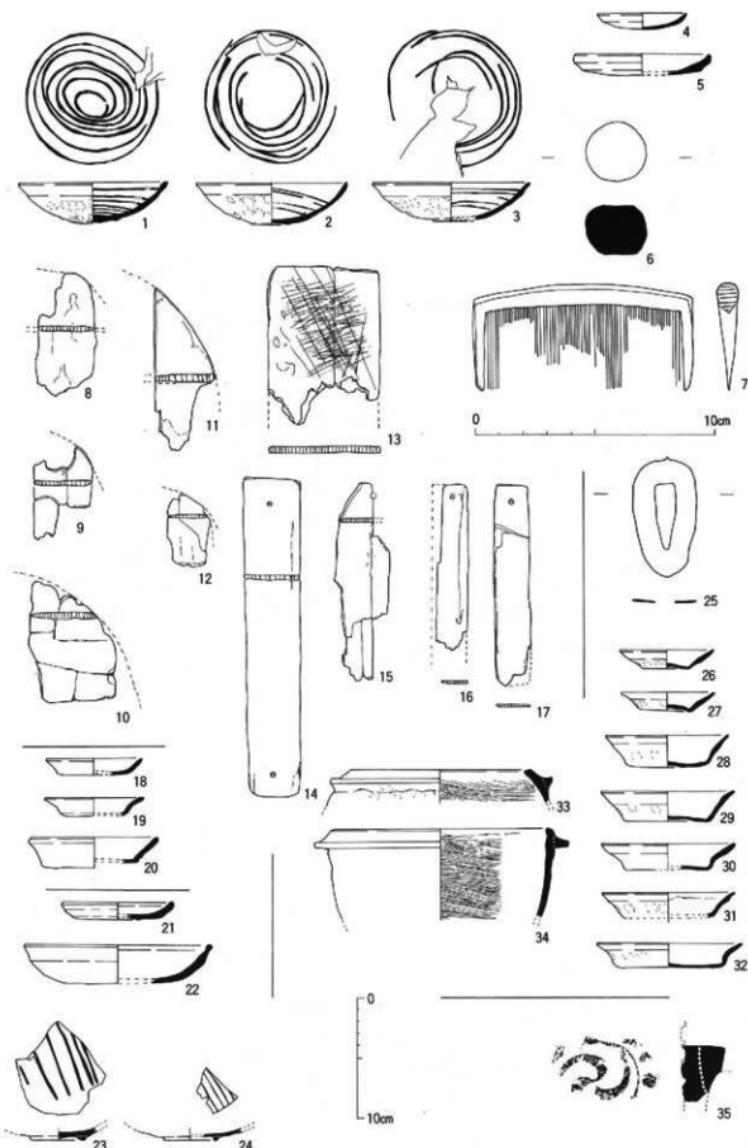
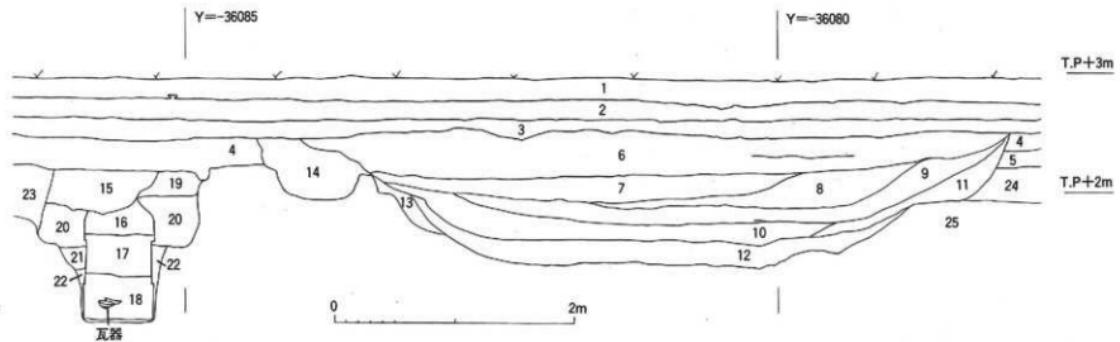


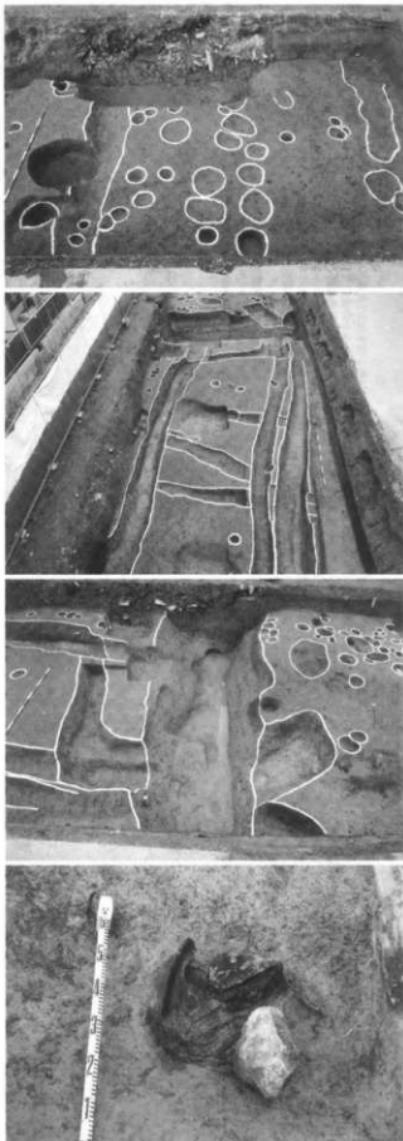
図5.62 SE120(1~17)・SK107(18~20)・SD106(21~24)・SD107(25~34)・SD108(35)出土遺物(6・7・25はS=1/2、他はS=1/4)

図5.63 調査区北壁 SE120・SD109付近土層図(S=1/40)



- 1: 表土等(第Ⅰ～Ⅳ層)
- 2: 近世～現代耕土(第Ⅴ層)
- 3: 7.5Y R3/1 黒褐色細砂混じり砂質シルト(第Ⅵ)層
- 4: 7.5Y R3/2 黒褐色中粒砂混じり砂質シルト(第Ⅶ)層
- 5: 7.5Y R2/1 黒色砂質シルト混じり中粒砂～粗砂(第Ⅷ)層
- 14: 10Y R3/2 黒褐色中粒砂混じり砂質シルト層(追構)
- 23: 7.5Y R5/6 明褐色細砂質シルト(第Ⅸ)層
- 24: 10Y R3/1 黒褐色砂質シルト混じり粗砂(第Ⅹ)層
- 25: 10Y R6/6 橙色粗砂(第Ⅺ)層

- 6: 7.5Y R3/1 黒褐色中粒砂混じり砂質シルト層(SD109)
- 7: 10Y R4/2 反黄褐色粗砂混じり砂質シルト層(SD109)
- 8: 7.5Y R3/3 噴飛色砂質シルト中粒砂混じり層(SD109)
- 9: 10Y R3/1 黒褐色砂質シルト混じり中粒砂層(SD109)
- 10: 5Y 2/1 黒色粗砂混じり砂質シルト層(SD109)
- 11: 2.5Y 3/1 黒褐色シルト混じり粗砂層(SD109)
- 12: 5B 3/1 青灰色粗砂混じり粘質シルト層(SD109)
- 13: 2.5Y 3/1 黑褐色シルト混じり粗砂層(SD109)
- 15: 10Y R3/1 黑褐色中粒砂混じり砂質シルトと 10Y R7/1 黄褐色細砂質シルトの混合土(SE120埋土)
- 16: 5Y 2/1 黒色粗砂と粘質シルトの混合層(SE120枠内)
- 17: 5Y 6/1 灰オリーブ色細砂シルト混じり層(SE120枠内)
- 18: 5G Y4/1 白オリーブ灰色細砂混じり粘質シルト層(SE120枠内)
- 19: 10Y R3/1 黑褐色中粒砂と 10Y R7/1 黄褐色細砂質シルトの混合土(SE120枠内)
- 20: 7.5Y 5/6 明褐色細砂質シルト(SE120面方)
- 21: 7.5Y 5/2 反オリーブ色細砂混じり細砂質シルト層(SE120埋方)
- 22: 5Y 7/1 白白色中粒砂層(SE120枠方)



さ約45cmを測る。底にSD108出土のものと同形の瓦質釜(c.f.図5.73-13)や罐等の大型遺物が散乱し、何らかの施設が構築されていた痕跡と考えられる。埋土は1層で、詳細な出土状況は明らかではないが、本来は完形であったと思われる土師皿、瓦器碗、連弁で飾る青磁碗、SE115出土のものと同形の瓦質釜(c.f.図5.60-7)・甕・火舍、常滑と思われる鉢?・砾石等の細片が出土した。井戸とすべき可能性があるものの、SE115やSE128等では完形の瓦器碗が出土しているのに対して、本SK107にはみられないことから土壙とした。SD107-1に接続する可能性もある。

SK108

SB104を切る。平面は南北約110cm、東西約75cmの梢円形を呈し、深さ約40cmを測る。埋土は10Y R3/2黒褐色中粒砂混砂質シルトで土師皿(図5.71-1~3)、瓦器碗(図5.71-4)、白磁碗(図5.71-5~6)、青磁碗(図5.71-7)、瓦質釜・甕(図5.71-8)・火舍(図5.71-9)等の細片が出土した。SE129と同時期に埋められたと考えられる。

SK109

試掘壙とSE116に切られる。平面はおそらく南北約86cm、東西140cm以上の隅丸長方形を呈し、深さ約50cmを測る。埋土は10Y R3/2黒褐色中粒砂混砂質シルトで土師皿、瓦器碗、SE132出土のものと同形の白磁碗(c.f.図5.143-16)、瓦質釜、須恵器鉢・甕、常滑窯等の細片が出土した。SE115出土のものと同個体と思われる瓦質釜があり、SE115と同時に埋められたと思われる。

SD106(図5.64)

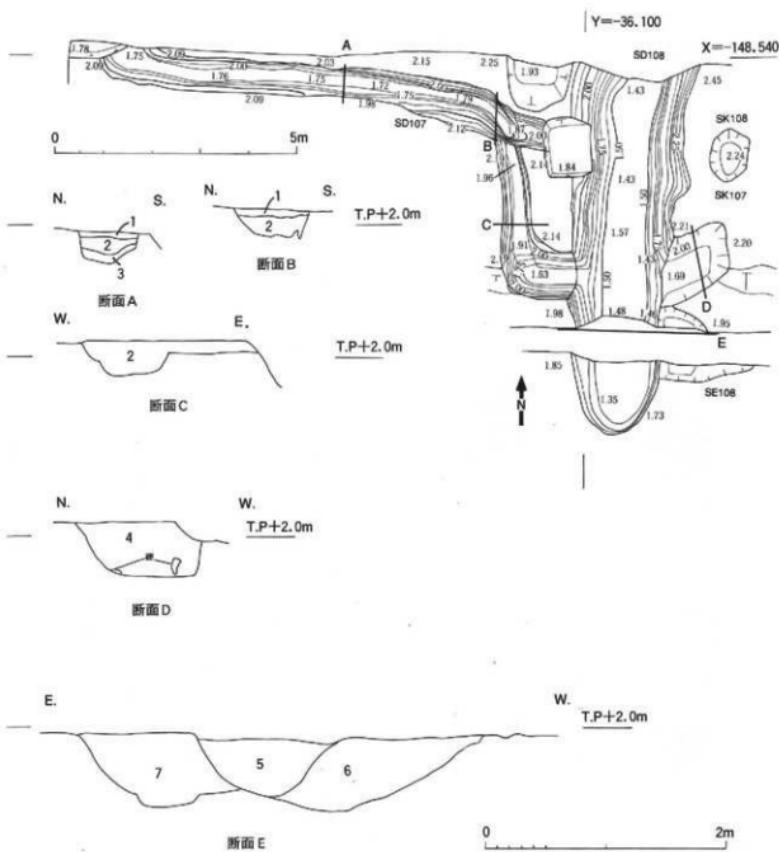
南北方向で断面は浅いU字形を呈し、幅約70

図5.64(最上) 平坦面3西端の遺構(南から)
ポールの右の溝はSD106、右端は古代溝SD225。

図5.65(中上) SD106他(西から)
左の溝がSD107、奥の横方向の溝がSD108。
右の2条の溝は古代SD202(左)とSD203。

図5.66(中下) SD108他(南から)
中央の溝がSD108。右の方形の土壙はSK107、
左のL字状の溝がSD107。

図5.67(最下) SK107底部の遺物出土状況



1: 5Y R3/1黒褐色中粒砂混じり砂質シルト層 (SD107)

2: 7.5Y R3/3暗褐色中粒砂混じり砂質シルト層 (SD107)

3: 2.5G Y2/1黒色粘質シルト細粒混じり層 (SD107)

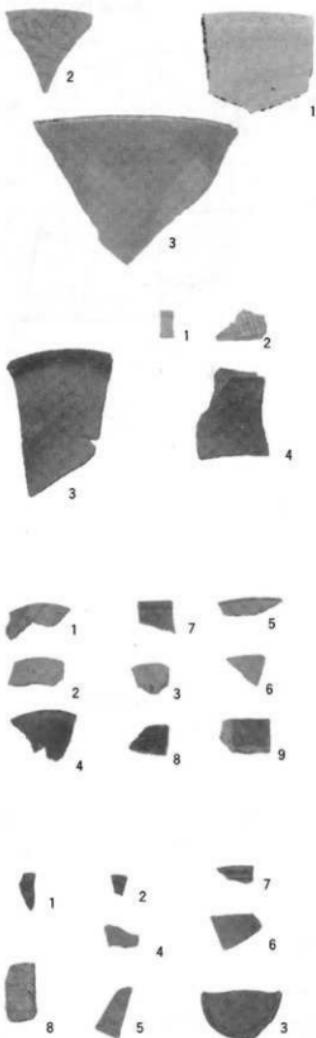
4: 5Y R3/1オリーブ色中粒砂混じり砂質シルト層 (SK107)

5: 10B G2/1青黒色粘質シルト混じり中粒砂と5B G4/1暗青灰色粘土の混合土 (SD108)

6: 7.5G Y2/1緑黒色中粒砂混じり砂質シルト層 (SD108)

7: 5G Y4/1暗オリーブ灰色中粒砂混じり砂質シルトと10G6/1緑灰色細砂の混合土 (SE108)

図5.68 SK107・SD107・SD108・SE108平面図 (S=1/100)断面図 (S=1/40)



cm、深さ約45cm、長さ8m以上を測り、端を検出している。土師皿(図62-21~22)、瓦器碗(図5.62-23~24)、丸瓦等の破片が出土した。

SD107(図5.66)

第VII層上面の遺構でSB102を切り、SD107-1と-2の2時期に分けられる。掘削は一括して行った。埋土からは多くの土師皿(図5.62-26~32)と切羽(図5.62-25)の他、土師釜、瓦器碗、青磁碗(図5.72-1~3)、白磁碗(図5.72-4~6)、瀬戸鉢(図5.72-7)、瓦質釜(図5.62-33~34)・壺・擂鉢、須恵器鉢、常滑窯、砥石(図5.72-8)、丸平瓦等の細片が出土した。遺物数は表に示した(表5.3=P.155)。

SD107からは完形、あるいは本来完形であったと思われる土師皿が20点出土している。掘削ミスのため包含層として取り上げたもの18点を合わせると38点にのぼる。これは今回の調査で検出した遺構の中で最多であり、至近に中心的な建物が存在すると考えられる。SB106が最も近いが規模が小さい。建物は調査区の北に存在するのであろうか。

SD107-1

SD108に切られる。東南端は南北約100cm、東西約150cm、深さ約50cmを測る隅丸長方形の土壠状を呈する。土壠状の東北隅から北へ約270cmのび、SD108西肩から約120cm西で西へ約80°曲げ、約850cmのびて調査区北壁となる。北壁付近ではおそらく北へ約90°曲げ、全体の平面はクランク状を呈すると思われる。

東南端の東にはSD108を挟んでSK107が位置する。SD107東南端とSK107はほぼ同じ深さを測り、平面ではSD107に統くようである。しかし、出土遺物は異なる。仮にSK107が井戸であり、遺物が掘方に相当する地層から出土したものとす

図5.69(最上) SE117出土磁器(S=1/1)

1~2: 青磁碗、3: 白磁碗

図5.70(中上) SE120上部埋土出土土器

1: 白磁碗、2: 瀬戸卸皿、3: 須恵器鉢、

4: 備前擂鉢

図5.71(中下) SK108出土土器

1~3: 土師皿、4: 瓦器碗、5~6: 白磁碗、

7: 青磁碗、8~9: 瓦質火舎

図5.72(最下) SD107出土磁器と砥石

1~3: 青磁碗、4~6: 白磁碗、7: 瀬戸鉢?、

8: 砥石(縦4.7cm)

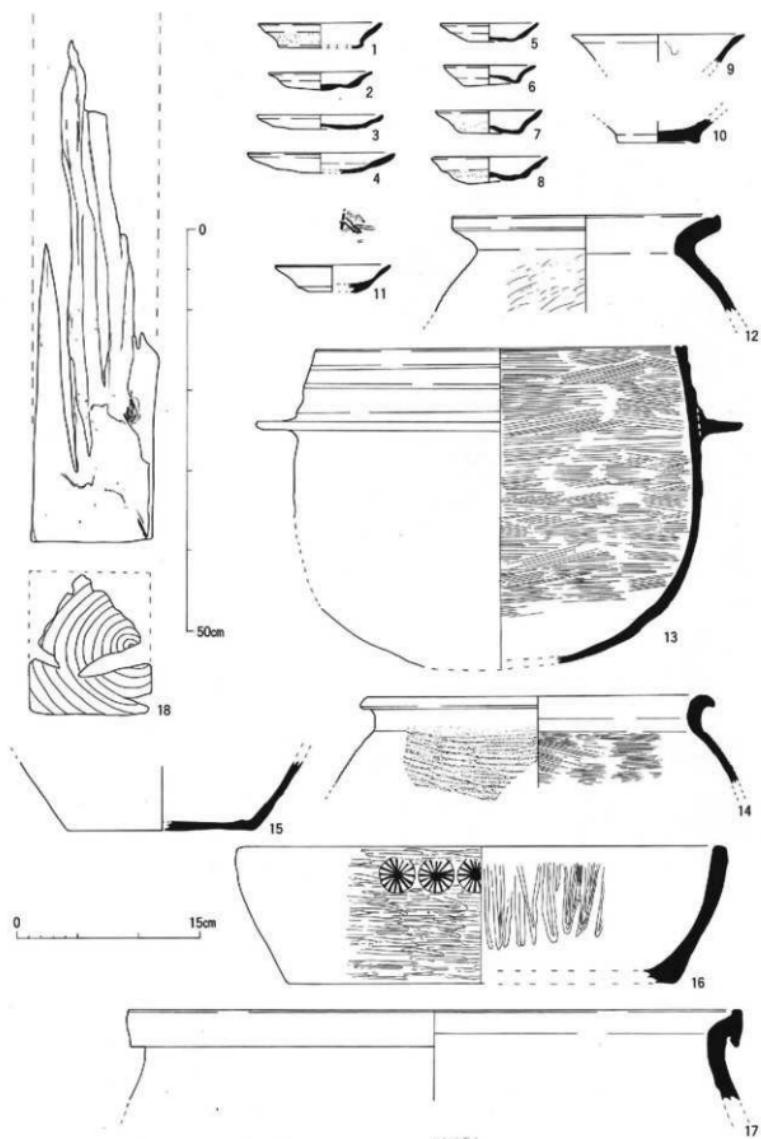


図5.73 SD108出土遺物 2 (18はS=1/6、他はS=1/4)



図5.74(上) SD109他(西から)

ボールを置く段差は協会試掘A地区、左はSE120。奥の溝がSD109。

図5.75(中) SD109遺物出土状況(東から)
埋土には完形の瓦器梶をはじめ多種多量の遺物が含まれる。

図5.76(下) SD109付近北壁断面(南から)

るならば、SD107-1はSK107から水を引く施設とも想像される。が、SK107が井戸である可能性は低く、SD107とSK107は異なる遺構とする。

SD107-1の南北方向の部分は深さ約30cm、東西方向の部分では深さ約55cmを測る。水が流れた場合、東西部分と東南端には水深約25cmの水が溜まることになる。したがって南北部分は水を溜める堰の機能を持つと考えられる。

SD107-2

SD107-1の東西部分を約120cm延長した、SD108に接続するL字状の溝と考えられる。接続部分は擾乱に切られ明らかではない。延長部分は深さ約25cmを測り、SD107-1の南北部分と同様、SD107-2に深さ約30cmの水を溜める堰の機能を持つと考えられる。また、延長部分はSD108に深さ約50cmの水を溜め、かつ余剰な水を排水する施設と思われる。SD107-1を改変しSD108と同時に埋められたと考えられる。

SD108(図5.66・68)

SE108・SE118・SK107・SB102・SB104を切る。南北方向で断面はゆるい逆台形を呈し、底は凸凹がみられ不整形である。幅約230cm、深さ約90cm、長さ8m以上を測り、南端を検出している。埋土から土師皿(図5.73-1~8)、白磁碗(図5.73-9~10)、青磁皿(図5.73-11)、須恵器壺(図5.73-12)、瓦質釜(図5.73-13)・壺(図5.73-14)・火舍(図5.73-15~16)、常滑窯(図5.73-17)、柱状木製品(図5.73-18)、軒瓦(図5.62-35)等が出土した。遺物数は表に示した(表5.3=P.155)。第Ⅸ層上面の遺構でSK107より後に掘削され、SD107とともに機能し、SE118と同時期に埋められたと思われる。

SD109(図5.63・74~78)

SE118を切る。南北方向で断面はゆるい逆台形を呈し、底は平らである。幅約590cm、深さ約105cm、長さ4m以上を測る。南端は調査区の境に位置するため検出していないが、X=-148,547mより南にはのびない。埋土から土師皿(図5.77-1~2)、青花碗(図5.77-3)、青磁碗(図5.77-4)、天目茶碗(図5.77-5)、瓦質火舍(図5.77-6~9)・釜(図5.77-10~11)・擂鉢(図5.77-12)・壺(図5.77-13~14)、備前擂鉢(図5.77-15)・壺(図5.77-16)、須恵器鉢(図5.77-17)、菱形の文様を刻む箱の一部と思われるヒノキ科(アヌロ等)製の板状木製品(図5.78-1)、軒瓦(図5.78-2~4)等が出土した。遺物数は表に示した(表

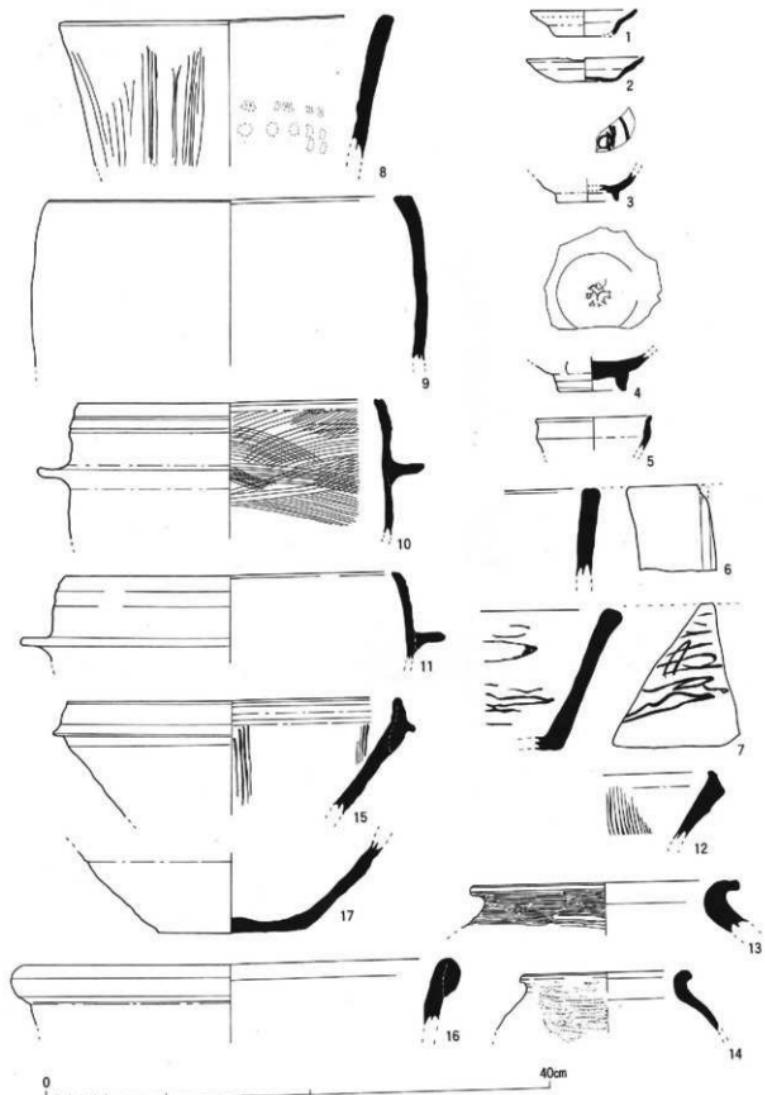


図5.77 SD109出土遺物1 (S=1/4)

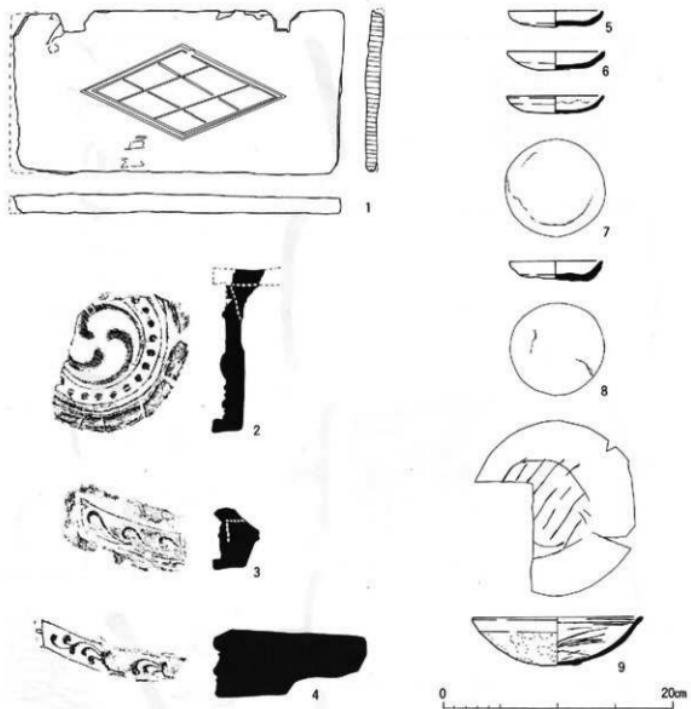


図5.78 SD109出土遺物2 (S=1/4)

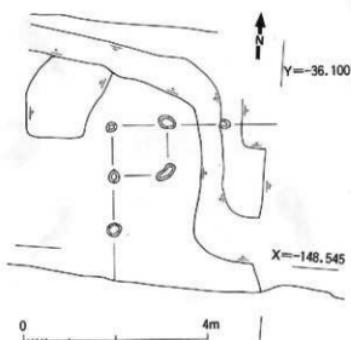


図5.79 掘立柱建物SB103平面図 (S=1/100)

5.6=P.169)。SE102と同時期の土師皿(図5.78-5~8)、瓦器碗(図5.78-9)等も含まれる、第3層上面の遺構でSD104と同時期に機能し、埋められたと思われる。

SB101(図5.80)

東西3間、南北3間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約55°東へ振る。東西約4.2m、南北約4.0mを測り、やや歪む。柱間寸法はばらつきがあるものの約130cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最も深いもので深さ約30cmを測る。特徴的な遺物が出土せず、遺物から時期を特定できない。

SB102(図5.80)

SD107とSD108に切られる。東西3間、南北3間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約55°東へ振る。東西約2.9m、南北約2.7mを測り、や

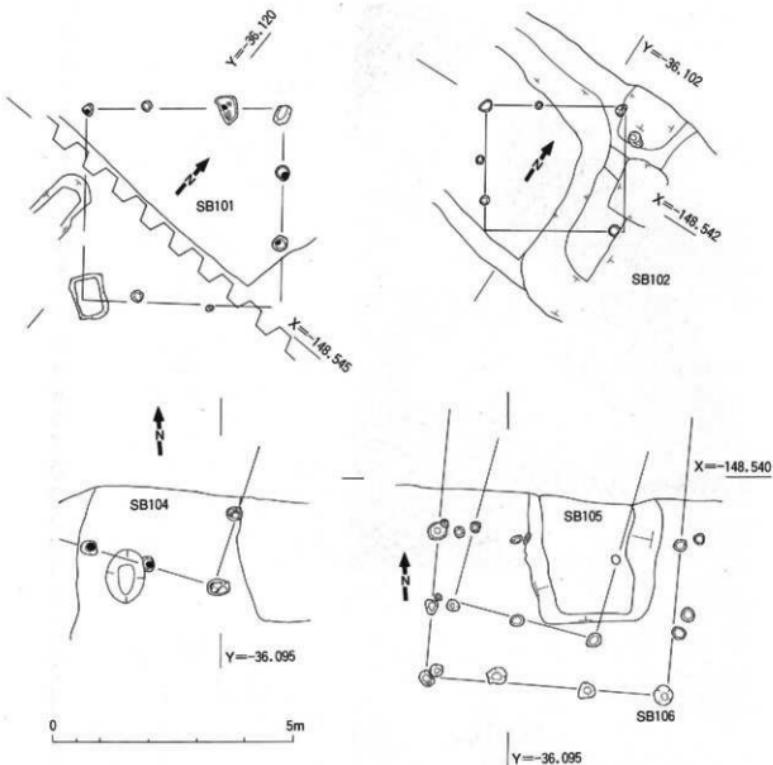


図5.80 挖立柱建物 SB101~102・104~105平面図 (S=1/100)

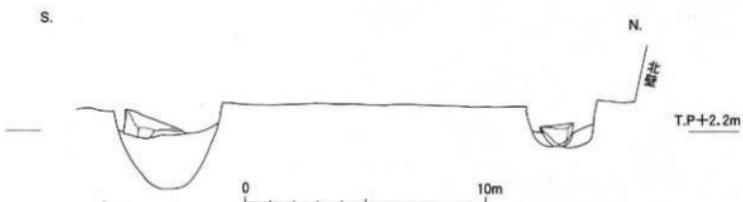


図5.81 SB104東辺柱穴断面図 (S=1/20)



や垂む。柱間寸法はばらつきがあるものの約100cmを測る。柱穴は概ね径約15cmの円形を呈し、最も深いもので深さ約20cmを測る。特徴的な遺物が出土せず、遺物から時期を特定できない。

SB103(図5.79)

SD107とSD108に切られる。東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約6°西へ振る。東西南北それぞれ2.2m以上を測り、柱間寸法は約110cmを測る。柱穴の平面形は径約20cmの円形や長さ約40cmを測る指円形等さまざまである。最も深いもので深さ約10cmを測る。特徴的な遺物が出土せず、遺物から時期を特定できない。

SB104(図5.80・5.81)

SK108とSD108に切られ、調査区外へのびる。東西2間以上、南北1間以上の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約16°東へ振る。東西2.7m以上、南北1.6m以上を測る。柱間寸法はばらつきがあるものの約140cmを測る。柱穴は概ね一辺約30cmの隅丸方形を呈し、最深約20cmを測る。東辺のものは約20cm大の礫を据えている。土師皿、外面にヘラ磨きがない瓦器碗、須恵器鉢細片等が出土し、SE120と同時期に存在していたと思われる。

SB105(図5.80)

調査区外へのびる。東西2間、南北1間以上の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約16°東へ振る。東西約3.0m、南北1.7m以上を測る。柱間寸法はばらつきがあるものの約160cmを測る。柱穴は概ね径約25cmの円形を呈し、最深約50cmを測る。低い高台を持つ瓦器碗細片等が出土したが、遺物から時期を特定できない。



図5.82(最上) SE121付近(東から)
中央の石組がSE121、ポンプを据えているのはSD111。

図5.83(中上) SK111付近(東から)
奥の大きな穴がSK111、左の円形がSK112。

図5.84(中下) SE121井戸枠上部(南から)

図5.85(最下) SE121井戸枠下部(南から)

SB106(図5.80)

調査区外へのびる。東西3間、南北2間以上の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約4°東へ振る。組み合う位置に小柱穴がある。東西約4.9m、南北3.2m以上を測る。柱間寸法はばらつきがあるものの約160cmを測る。柱穴は概ね径約35cmの円形を呈し、最深約60cmを測る。柱穴には隣接するものがあり、立て替えられた可能性がある。土師皿、瓦器碗細片等が出土し、SD108と同時期に存在していたと思われる。

3) 平坦面3中央部の遺構(図5.82~115)

平坦面3の中央部($Y = -36,090\text{m} \sim Y = -36,035\text{m}$ 付近)には第VII(中世整地)層が認められず、ほとんどの遺構は第VI(平安整地)層上面で検出した。SD114より南西では異なる整地層の下面でSX101を、上面でそれ以外の遺構を検出している。ここではSE124($Y = -36,035\text{m}$ 付近)以西の遺構について述べる。

SE121(図5.84~85・89)

SK110とSD110に切られ、SD111を切る。一部は調査区外となる。平面はおそらく約220cm四方の隅丸方形を呈し、深さ約150cmを測る。径約46cm、高さ約50cmの桶を中央のやや西に置き、径約47cm、高さ30cm以上の桶を積み、さらに最大で30cm大の石と瓦片を内径約30cmの円形に積み上げて井戸枠としている。石には割った痕跡が明瞭に残るものは少なく、すでにその大きさであったものを選んで使っているように感じられる。砥石や石製品の一部と思われるもの、熱を受けて変色したものの、煤が多量に付着しているものもある。多くは枠内に転落していた。枠内から他に土師皿(図5.109-1)・釜(図5.109-2)・青磁碗、瓦質釜・擂鉢・火舎・砥石等の細片が出土した。掘方からは土師皿、瓦器碗(図5.109-3)、瓦質擂鉢等の細片が出土した。

SE122(図5.86)

ほとんどが調査区外にあるため詳細な構造等は不明である。平面が径約180cmの不整形な円形を呈し、深さ40cm以上を測り、径約25cmの木製品を中心に置いて井戸枠としていると思われる。検出時に土師皿、瓦器碗(図5.109-4)、瓦質釜等の細片と瓦製円盤(図5.109-5)が出土した。



図5.86(上) 平坦面3中央部南半の状況(西から)
中央の大きな円形の穴がSE123、右の南壁にかかるものがSE122。白線を引かない溝はSD114。

図5.87(中) SE123断面(西から)

図5.88(下) SE123枠内遺物出土状況(西から)

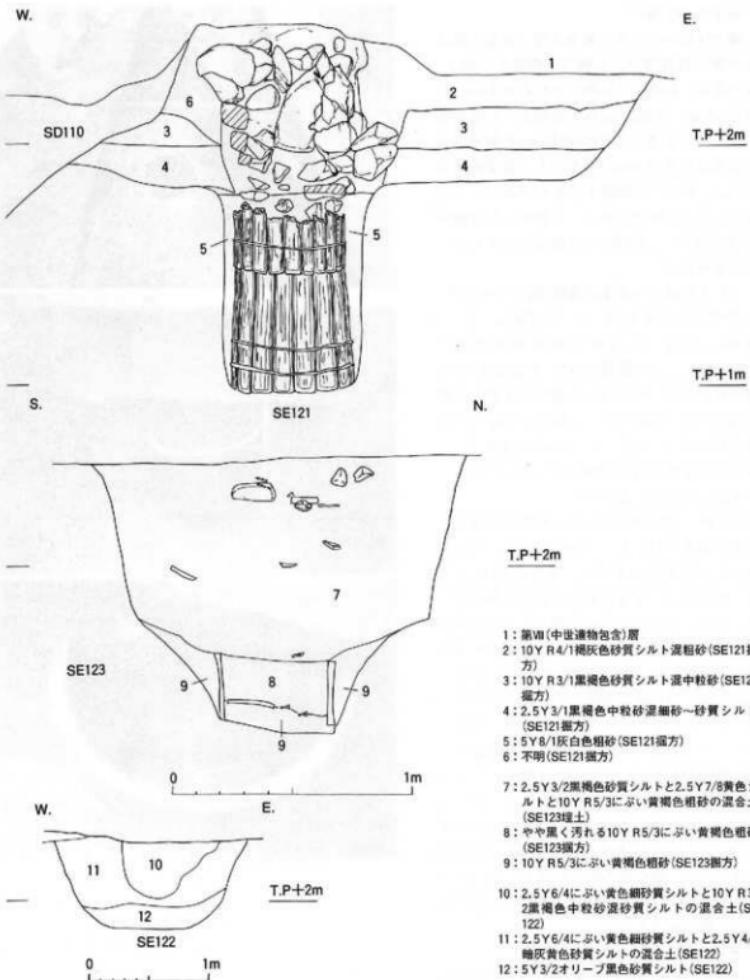
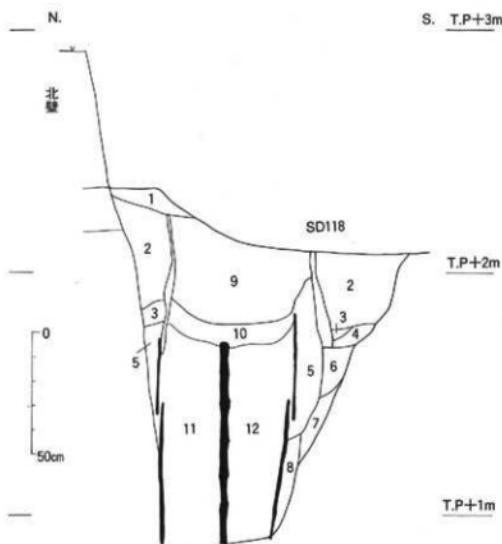


図5.89 SE121・SE123断面図(S=1/20)SE122断面図(S=1/40)
SE121 SE123 SE122



- 1:2と9の混合(SE124埋土)
 2:10Y R2/1黒色中粒砂混砂質シルトと2.5Y7/8黄色シルトの混合(SE124掘方)
 3:10Y R5/1褐灰色砂質シルト混中粒砂(SE124掘方)
 4:よごれた第V層(SE124掘方)
 5:5B G4/1暗青灰色粗砂混粘質シルト(SE124掘方)
 6:黒く汚れた第V層(SE124掘方)
 7:よごれた第V層(SE124掘方)
 8:10B G4/1暗青灰色シルト混粗砂(SE124掘方)
 9:7.5Y R8/8黄褐色細砂質シルト(SE124枠内)
 10:7.5G Y5/1綠灰色粘土(SE124枠内)
 11:10B G4/1暗青灰色粘土(SE124枠内)
 12:竹

図5.90 SE124断面図(S=1/20)



図5.91(上) SE124井戸枠検出状況(西から)

図5.92(中) SE124断面(西から)

図5.93(下) SE124枠内の竹検出状況(西から)

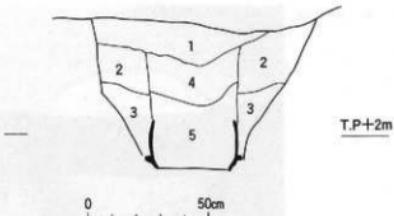


図5.94 SE125断面図 (S=1/20)

1:2.5Y5/1青灰色中粒砂混砂質シルト(SE125埋土)
2:2.5Y6/2灰青色砂質シルト混粗砂(SE125掘方)
3:2.5Y7/6明青褐色砂質シルト混中粒砂(SE125構方)
4:2.5Y5/2暗青灰色砂質シルト混中粒砂(SE125構内)
5:2.5Y5/3黄褐色中粒砂混砂質シルト(SE125構内)

SE123(図5.87~89)

平面は南北約160cm、東西約180cmの不整形な円形を呈し、深さ約115cmを測る。土師質焼成の瓦質井戸枠(図5.109-6)を中心置く。枠内から別個体の瓦質井戸枠が出土しており、少なくとも2段に積まれていたと考えられる。埋土の状況から、より上部の枠が抜き取られたと考えられ、全体の構造は不明である。枠内からは他に瓦質釜等の細片が出土し、掘方からは土師器の微細片が出土したのみである。上部の埋土から土師皿、瓦器碗(図5.109-7)、瓦質釜・鋤鉢・火舎、須恵器鉢(図5.109-8)、常滑甕、砥石、平瓦等の破片が出土した。

SE124(図5.90~93)

平面は約130cm四方の隅丸方形を呈し、深さ約150cmを測る。径約53cm、高さ約58cmの桶を中央に置き、径約56cm、高さ40cm以上の桶を積み上げて井戸枠としている。さらに径約58cm、高さ55cm以上の桶を積むと考えられるが、この桶は腐食し土層に痕跡を残すのみで詳細は不明である。枠内中央には竹が立てられた状態で埋められていた。約30cmを残して上部は腐食していた。井戸を埋める際に井戸神が出されるよう籠を抜いた竹を通路にするという祭祀行為と考えられる。枠内の埋土は非常に精良で瓦器碗と須恵器の細片を少量含むのみで、意識的に精良な土を用いて埋めたと考えられる。掘方からは土師皿細片等が、検出時に土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。遺物から時期を特定できない。

SE125(図5.94~97)

平面は径約90cm円形を呈し、深さ約60cmを測る。瓦質釜(図5.95)を口縁を下にして中央に置き、径約45cmの木製品を積み上げて井戸枠としている。木製品は腐食し土層に痕跡を残すのみで詳細は不明である。より上部の構造は埋土の状況から枠が抜き取られたと考えられ不明である。枠内の底には10cm大の罐数個と砥石

1個、瓦質甕の体部片と須恵器鉢の体部片と底部片が釜の中に詰め込むように置かれていた。構築時に足場として使用されたものか、湧水をろ過するためのものと思われる。枠内からは他に土師皿等の微細片が出土した。掘方から瓦器碗等の細片が、上部の埋土から土師皿、瓦器碗、常滑甕等の細片が出土した。枠内の遺物量は少なく、意識的に精良な土を用いて埋めたと考えられる。

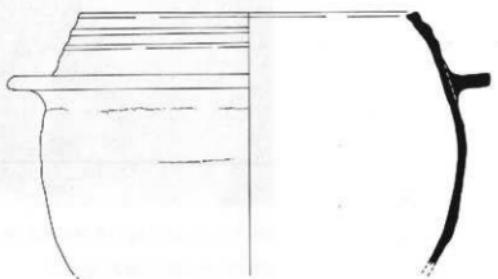


図5.95 SE125井戸枠に転用された瓦質釜 (S=1/4)

SK110

SE121とSD110を切る。平面は南北約70cm、東西約60cmの不整形な楕円形を呈し、深さ約36cmを測る。埋土は2.5Y3/1黒褐色中粒砂混粘質シルトで土師皿(図5.109-9~11)、瓦質鉢等の細片が出土した。

SK111(図5.83)

平面は南北約180cm、東西約200cmの不整形な隅丸方形を呈し、深さ約67cmを測る。埋土は10YR4/2灰黄色中粒砂混砂質シルトで中国製と思われる磁器(図5.109-12)、土師皿(図5.109-13~14)、瓦器碗(図5.109-15)、瓦質釜・甕・擂鉢等の細片が出土した。

SK112(図5.83)

平面は南北約120cm、東西約130cmの不整形な円形を呈し、深さ約63cmを測る。埋土は10YR4/2灰黄色中粒砂混砂質シルトで土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。下部は径約60cmの正円を呈し、桶等が据えられていた可能性がある。しかし、土器の出土状況や断面から構造物の痕跡が認められなかったため土壤とした。遺物から時期を特定できないが、SE129と同時期に埋められた可能性が高い。

SK113

SB108を切る。平面は長軸340cm以上、短軸約204cmの隅丸長方形を呈し、深さ約25cmを測る。埋土は10YR4/2灰黄色中粒砂混砂質シルトで土師皿、瓦器碗等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

SK114

平面は南北約6m、東西約290cmの不整形な隅丸長方形を呈し、深さ約25cmを測る。埋土は10YR4/2灰黄色中粒砂混砂質シルトで土師皿(図5.109-16~17)、鉢?(図5.109-18)、瓦器碗(図5.109-19~20)、青磁碗、瓦質釜・甕・火舎、須恵器鉢(図5.109-21)等が出土した。

SK115

SB109を切る。大半は調査区外にあり平面が東西80cm以上、南北約200cmの方形を呈すると思われる。深さ約12cmを測る。南は東西50cm以上、南北約90cmの方形に約10cm深くなる。埋土は7.5YR3/2黒褐色中粒砂混砂質シルトで土師皿、瓦器碗等の細片が出土した。SE129と同時に埋められたと思われる。

南の重複する土壤は深さ約15cmを測る。平面ではSK115を切るようと思われたが断面で



図5.96(上) SE125断面(南から)

図5.97(中) SE125枠内遺物出土状況(南から)

図5.98(下) SK117底部の礫出土状況(東から)

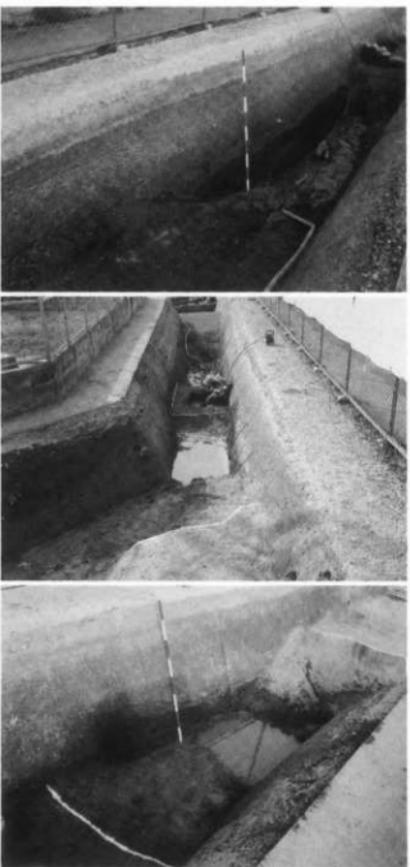


図5.99(上) SD110断面(南西から)

図5.100(中) SD111(東から)

白線を引いているのがSD111、石組みはSE121。

図5.101(下) SD111(南西から)

は確認できなかった。土師皿、瓦器碗、瓦質釜・壺等の細片が出土し、SK115と近い時期に埋められたと思われる。

SK116

SD113-2を切る。平面は一辺約160cmの方形を呈し、深さ約15cmを測る。埋土は10Y R4/2灰黄色中粒砂混砂質シルトで、土師皿、瓦器碗等の細片が出土しが、遺物から時期を特定できない。

SK117(図5.98)

一部は調査区外となり、SD114に切られる。平面はおそらく径約400cmの円形を呈すると思われる。深さ約80cmを測る。底から約5cm上の中央に約20cm大の礫が4個、径約50cmの円形をなすような状態で出土した(図5.98)。礫の内側と外側ではわずかに堆積層の違いが認められたが、一部にすぎず土壤とした。井戸の可能性もある。埋土は数層に分層され、上位からは土師皿(図5.109-22~23)、瓦器碗、青磁碗(図5.109-24)、須恵質壺・壺、瓦質釜・壺・擂鉢、常滑壺等の細片が出土し、下位からは土師皿(図5.109-25)、瀬戸碗等の細片と砾石が出土した。SD111と同時期に埋められたと思われる。

SK118

平面は東西約140cm、南北約100cmの隅丸長方形を呈し、深さ約11cmを測る。埋土は7.5Y R3/2黒褐色中粒砂混砂質シルトで、土師皿、瓦器碗等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

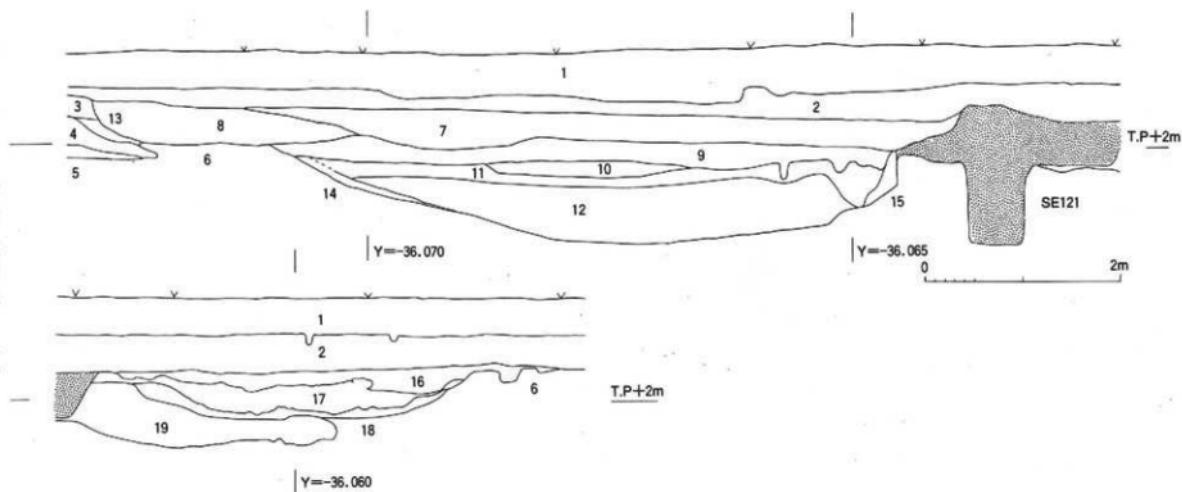
SD110(図5.99・102)

南北方向で断面はゆるやかな逆台形を呈し、幅約7m、深さ約110cm、長さ2m以上を測る。端を検出していない。西肩のラインでは座標軸から約20°東へ振るが、検出している長さが短く、方位は確定できない。下位からは土師皿(図5.109-26)、瓦器碗、青磁碗(図5.109-27)、瓦質釜・壺・擂鉢、常滑壺、備前擂鉢、丸平瓦等の細片が、上位からは志野と思われる皿(図5.109-28)、唐津碗(図5.109-29)、青花碗(図5.109-30)等の細片が出土している。第Ⅳ(中世整地)層上面の遺構でSD118と同時期に機能したと思われる。完全に埋められる時期は近世平坦面の造成時であろう。

SD111(図5.100~103)

SE121・SK110・SD114に切られる。南北方向で断面は皿状を呈し、幅約470cm、深さ約70

図5.102 SD110・SD111付近北壁土層図 (S=1/50)

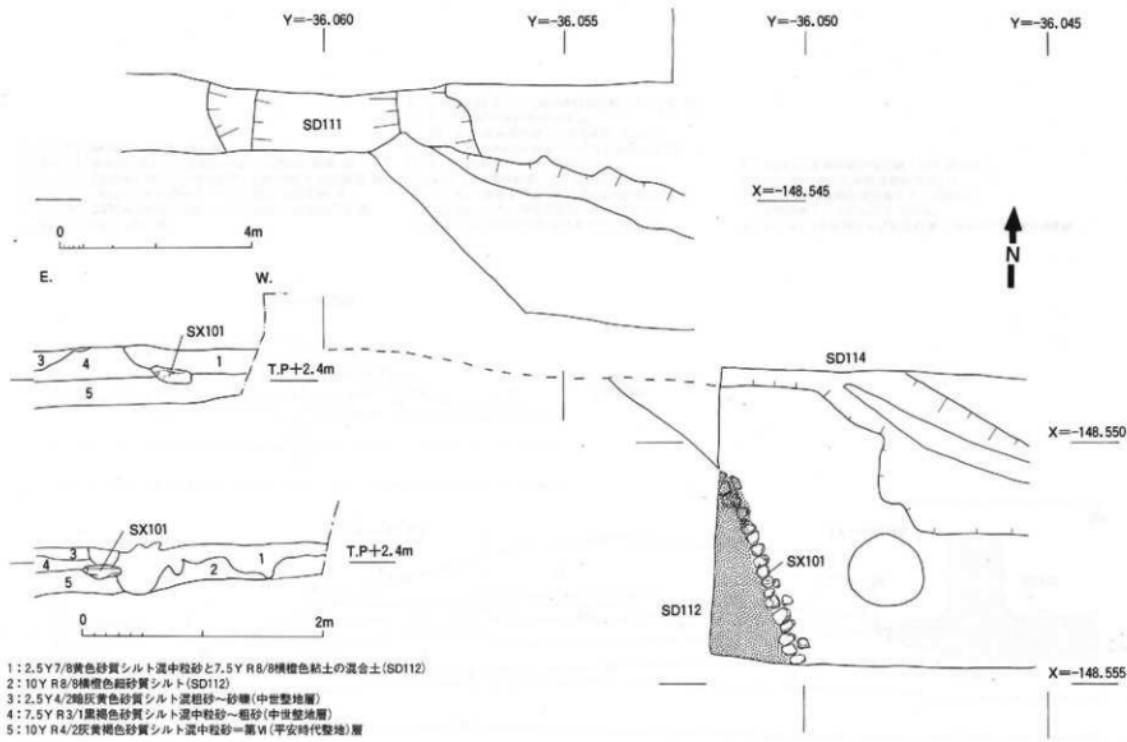


1: 黄土～近世耕土(第IX)層
 2: 7.5Y R3/2黒褐色中粒砂混砂質シルト＝第VII(中世遺物包含)層
 3: 7.5Y R3/1黒褐色中粒砂混砂質シルト＝第VI(中世整地)層
 4: 7.5Y R3/1黒褐色砂質シルト混充砂～粗砂＝第V(中世整地)層
 5: 10Y R3/1黒褐色砂質シルト混粗砂＝第VI(平安時代整地)層
 6: 10Y R4/4褐色粗砂～砂礫＝第V層

7: 7.5Y R4/2灰褐色粗砂混砂質シルト(SD110)
 8: 10Y R5/4にせい黄褐色粗砂～砂礫(SD110)
 9: 10Y R3/3暗褐色砂質シルト中粒砂(SD110)
 10: 2.5Y 5/3黄褐色砂質シルト中粒砂(SD110)
 11: 5Y 4/1灰色粗砂～中粒砂(SD110)
 12: 10G Y4/1暗綠灰色砂質シルト混中粒砂(SD110)
 13: 10Y R3/1黒褐色砂質シルト混粗砂(SD110)
 14: 2.5Y 4/2暗灰褐色粗砂(SD110)
 15: 2.5Y 3/3暗オリーブ褐色細砂混砂質シルト(SD110)

16: 10Y R4/2灰褐色中粒砂混砂質シルトと7.5Y R8/8模様
 色細砂質シルトの混合土(SD111)
 17: 7.5Y R8/8模様橙色細砂質シルト(SD111)
 18: 10Y R4/1褐色粗砂混細砂(SD111)
 19: 5B G2/1青黑色粗砂混砂質シルト(SD111)

図5.103 SD111他平面図(S=1/100)・断面図(S=1/40)



- 1:2.5Y 7/8黄色砂質シルト混中粒砂と7.5Y R 8/8褐色粘土の混合土(SD112)
 2:10Y R 8/8褐色細砂質シルト(SD112)
 3:2.5Y 4/2暗灰黄色砂質シルト混粗砂～砂糖(中世整地層)
 4:7.5Y R 3/1黒褐色砂質シルト混中粒砂～粗砂(中世整地層)
 5:10Y R 4/2灰黄褐色砂質シルト混中粒砂＝第VI(平安時代整地)層

cm、長さ14m以上を測る。端を検出していない。北部の西肩は座標軸から約25°西へ、東肩は約15°西へ振り、下場では正南北の方位をとる。検出している長さが短く、方位を確定できない。上位からは土師皿(図5.109-31~33)、青花碗、瓦質擂鉢・火舍、陶器擂鉢等の細片が、下位からは土師皿(図5.109-34~35)、瓦器碗、瓦質甕等の細片が出土した。下位から出土した土器のほとんどはSD106と同時期のものであり、その頃に掘削された可能性がある。SD114を掘削する際に埋められたと考えられる。

SD112(図5.103)

ほとんどは調査区外に位置し全体の規模や形状は不明である。深さ約30cmを測り、土壌もしくは落ち込みである可能性が高い。埋土は2層に分かれ、少量の古代土器細片が出土した。埋められた時期は不明である。SD111の一部かと思われたが埋土や出土遺物が異なる。

SX101(図5.103~107)

SD114より南には厚さ約20cmの整地層がみられた。微量の土師皿や瓦器の微細片、少量の古代土器細片を含み、意識的に精良な土を用いたと考えられる。この整地層の下面に列を成して石が据えられていた。

石列(SX101)は約15~30cm大、厚さ15cm前後の石を概ね一列に長さ4.5m以上、SD112東肩に沿うように並べるもので、座標軸から約25°西へ振る方位をとる。両端とも調査区外にのび、北は調査区外で西に掘れていくようである。上面は約2cmの範囲内で面を揃え、両側面は面を揃えない。二段以上に積み上げた痕跡や掘方、裏込等は認められなかった。建物基壇の縁辺部とも思われたが、ベース面に礫を置くものであった。上面のみ面を揃えていることから、石敷の通路として機能していたと考えられる。方位が同じことからSD113-1と同時期のものと考えられる。

SD113(図5.108・110~112)

SD113-1と-2の2時期に分けられる。出土遺物のほとんどが古代土器である点が他の溝とは大きく異なる。

SD113-1

南北方向で座標軸から約35°西へ振る方位をとる。幅約60~170cm、深さ約15~47cm、長さ8m以上を測る。北端は調査区の境に位置すると思われ、平面で検出していない。南半はSD113



図5.104(上) SX101全景(南東から)

図5.105(中) SX101南半東側面(東から)

図5.106(下) SX101南半西側面(西から)

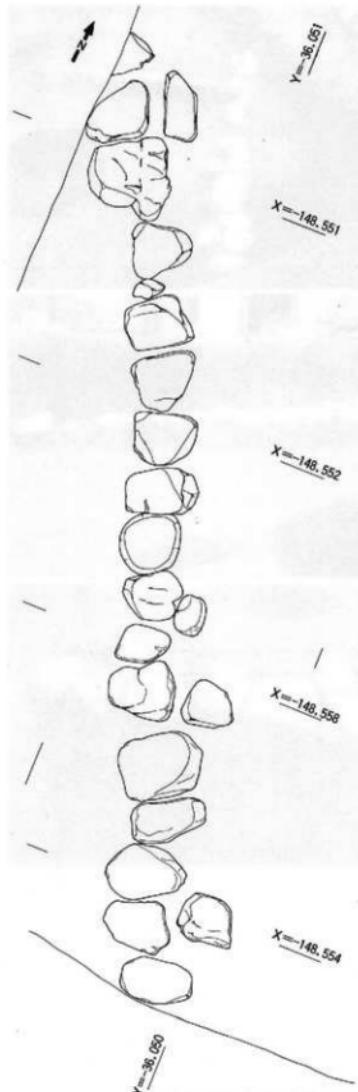


図5.107 SX101平面図(S=1/20)

-2と重複し、調査区外にのびる。埋土は数層に分けられるが、一挙に埋められたものと思われる。少量の土師皿、瓦器碗の微細片と多くの古代土器の破片が出土した。土層断面では確認していないが、SD113-2に先行すると思われる。

SD113-2

SD114・SK116・SB114に切られる。東西方向から南東へ曲がる。南東部分は座標軸から約35°西へ振る方位をとる。断面はゆるい逆台形を呈し、南東部分が深い。幅約50~130cm、深さ約15~30cm、長さ10m以上を測る。西端はSD114に切られ不明、南端は調査区外にのびる。埋土は5Y8/6黄色細砂質シルトと10Y R5/2灰褐色砂質シルトと第VI(平安整地)層の混合土で、一挙に埋められたものと思われる。少量の土師皿、瓦器碗の微細片と多くの古代土器の破片が出土した。埋土の上面からは完形の土師皿1点(図5.115-1)と瓦器碗1点(図5.115-2)が近接して、口縁を上に置かれたような状態で出土した。

SB107(図5.113)

調査区外へのびる。東西3間、南北2間以上の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約45°東へ振る。東西3.1m以上、南北3m以上を測る。柱間寸法はばらつきがあるものの約160cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深で約28cmを測る。土師皿、瓦器碗細片等が出土したが、遺物から時期を特定できない。

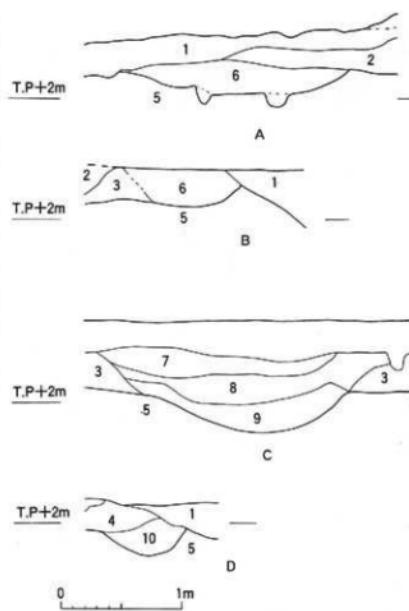
SB108(図5.113)

SK113に切られ、西北隅は調査区外となる。東西2間、南北2間と思われる東面庇付掘立柱建物で、主軸は座標軸から約33°東へ振る。庇を含め東西5.1m、南北3.3mを測る。柱穴は概ね径約30cmの円形を呈し、最深で約27cmを測る。南辺等いくつかには約15cm大の礫を据えている。径約50cmを測るものは柱の抜き取り穴と考えられ、組み合う位置に柱穴が検出されないのは据えられていた礫が撤去されたためと思われる。東西の柱間寸法は約210cmを、南北はばらつきがあるものの約190cmと140cmを測る。土師皿、瓦器碗(図5.115-3)、白磁碗等の細片が出土した。SD113-2と同時期のものと思われる。

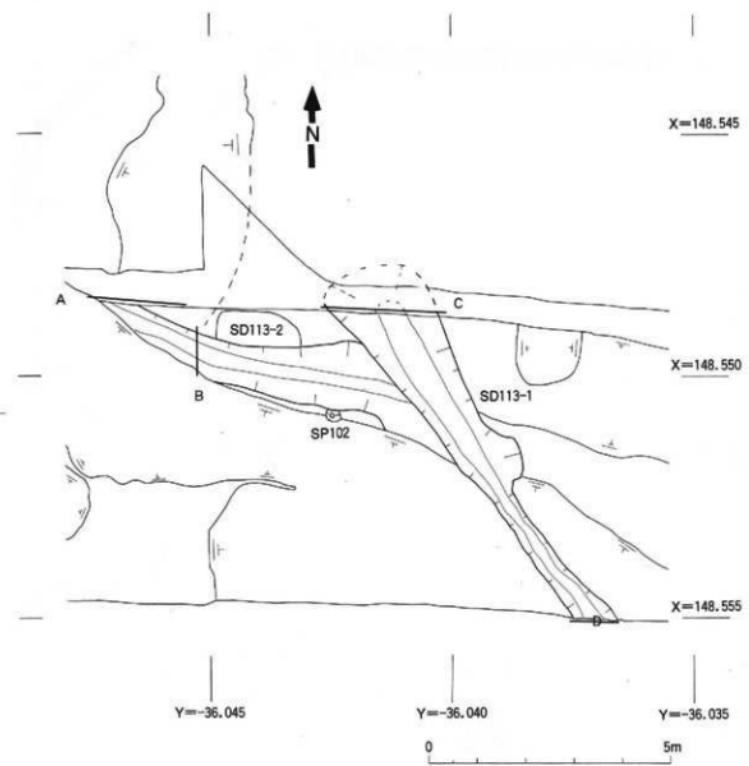
SB109(図5.113)

SK115に切られ、調査区外へのびる。東西1間以上、南北2間の東面庇付掘立柱建物で、主軸は座標軸から約5°東へ振る。庇を含め東西2.3m以上、南北約3.6mを測る。北辺には雨落ち溝と思われる幅約30cm、深さ約5cmの東西方向の溝を伴う。柱間寸法は約180cmを測り、庇は約80cmを測る。主柱穴は概ね一辺約30cmの隅丸方形を呈し、最深で約20cmを測る。補助的な柱穴は径約20cmの円形を呈し、最深で約10cmを測る。いくつかの柱穴に

図5.108 SD113平面図(S=1/100)・断面図(S=1/40)



- 1: SD114
- 2: SK114
- 3: 第VI(平安時代楚地)層
- 4: 第VII(中世整地)層
- 5: 第V層
- 6: 2.5Y7/8黄色中粒砂～粗砂混粘質シルト (SD113-2)
- 7: 10YR5/1褐色細粒砂混粘質シルト (SD113-1)
- 8: 2.5Y7/6暗黃褐色中粒砂混粘質シルト (SD113-1)
- 9: 2.5Y6/1黃灰色中粒砂混粘質シルト (SD113-1)
- 10: 5Y6/6オリーブ色中粒砂混粘質シルト (SD113-2)



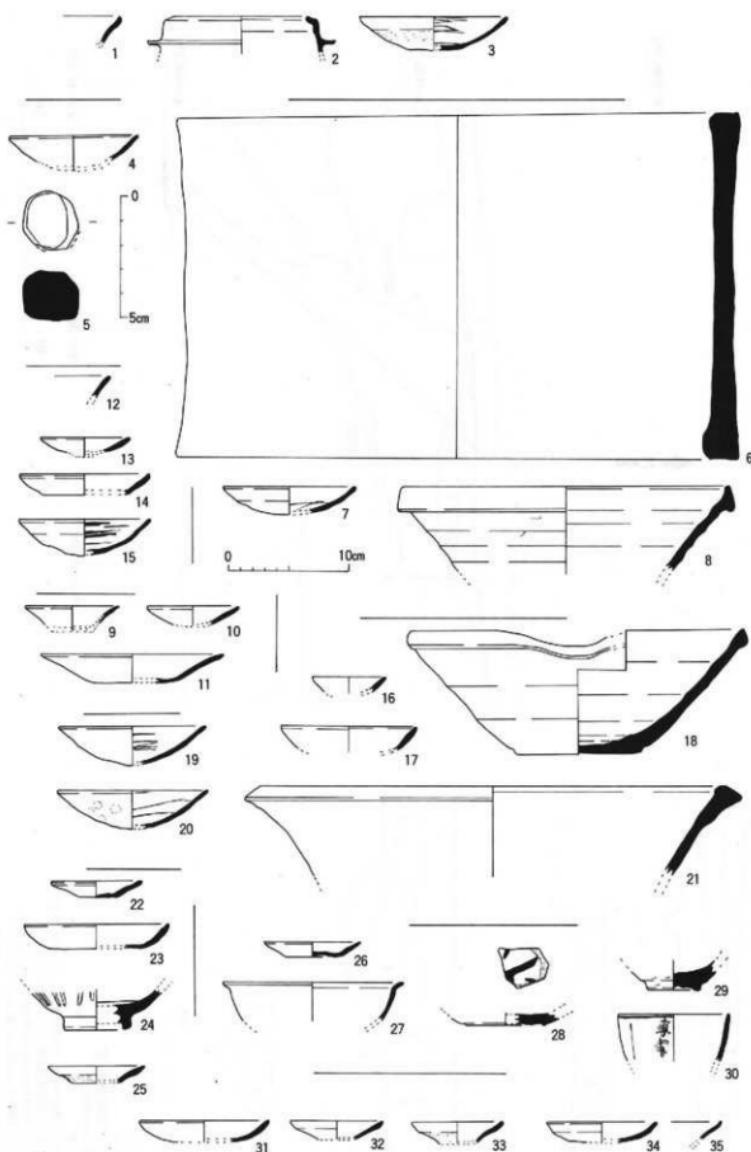


図5.109 SE121(1~3)・SE122(4~5)・SE123(6~8)・SK110(9~11)・SK111(12~15)・SK114(16~21)・
SK117(22~25)・SD110(26~30)・SD111(31~35)出土遺物(5はS=1/2、他はS=1/4)

は約12cm大の礫を据えている。土師皿、瓦器碗等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

SB110(図5.113)

SE123を切り、調査区外へのびる。東西3間、南北2間以上の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約5°西へ振る。中央の組み合う位置に柱穴があり、北辺中央の柱穴を見落としている可能性が高い。東西約2.4m、南北1.8m以上を測る。柱間寸法は約90cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深で約20cmを測る。土師皿、瓦器碗、瓦質釜・甕、備前等の細片が出土し、SE126と同時期のものと考えられる。

SB111(図5.113)

SE123に切られ、北西隅は調査区外となる。東西2間、南北4間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約35°西へ振る。東西約1.9m、南北約3.5mを測り、やや歪む。柱間寸法はばらつきがあるものの約90cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深で約15cmを測る。土師皿、瓦器碗等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

SB112(図5.113)

SE123に切られ、調査区外へのびる。東西2間、南北3間以上の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約37°東へ振る。東西約2.4m、南北3.7m以上を測る。柱間寸法はばらつきがあるものの約120cmを測る。柱穴は概ね径約15cmの円形を呈し、最深で約13cmを測る。特徴的な遺物が出土せず、遺物から時期を特定できない。

SB113(図5.113)

東西1間、南北1間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約31°西へ振る。柱間寸法は約180cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深で約10cmを測る。より大きな建物となる可能性があるが、組み合う柱穴はみられなかつた。特徴的な遺物が出土せず、遺物から時期を特定できない。

SB114(図5.114)

SD113-2を切り、調査区の境へのびる。SB116と重複する柱穴があるが、切り合いは不明。東西2間、南北3間の東面底付掘立柱建物で、主軸は座標軸から約42°東へ振る。庇を含め東西約3.8m、南北4.1mを測る。柱間寸法はばらつきがあるものの約140cmを測り、庇は約100

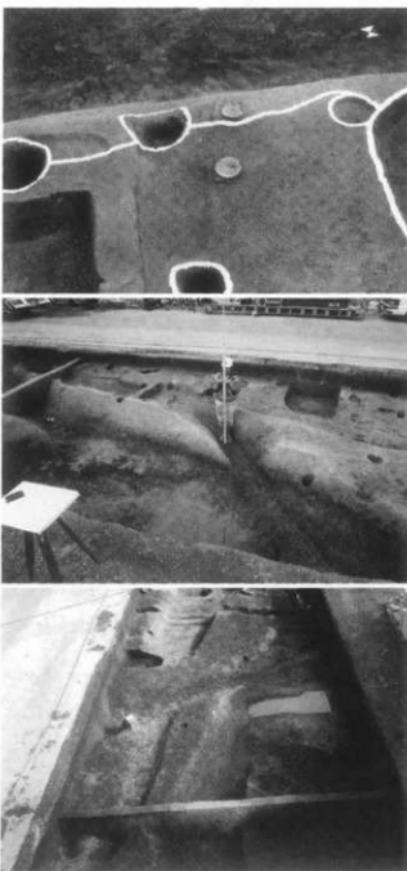


図5.110(上) SD113-2土器出土状況(北から)
上は土師皿(図5.115-1)、下は瓦器碗(図5.115-2)。

図5.111(中) SD113-2(南から)

図5.112(下) SD113-1(西から)

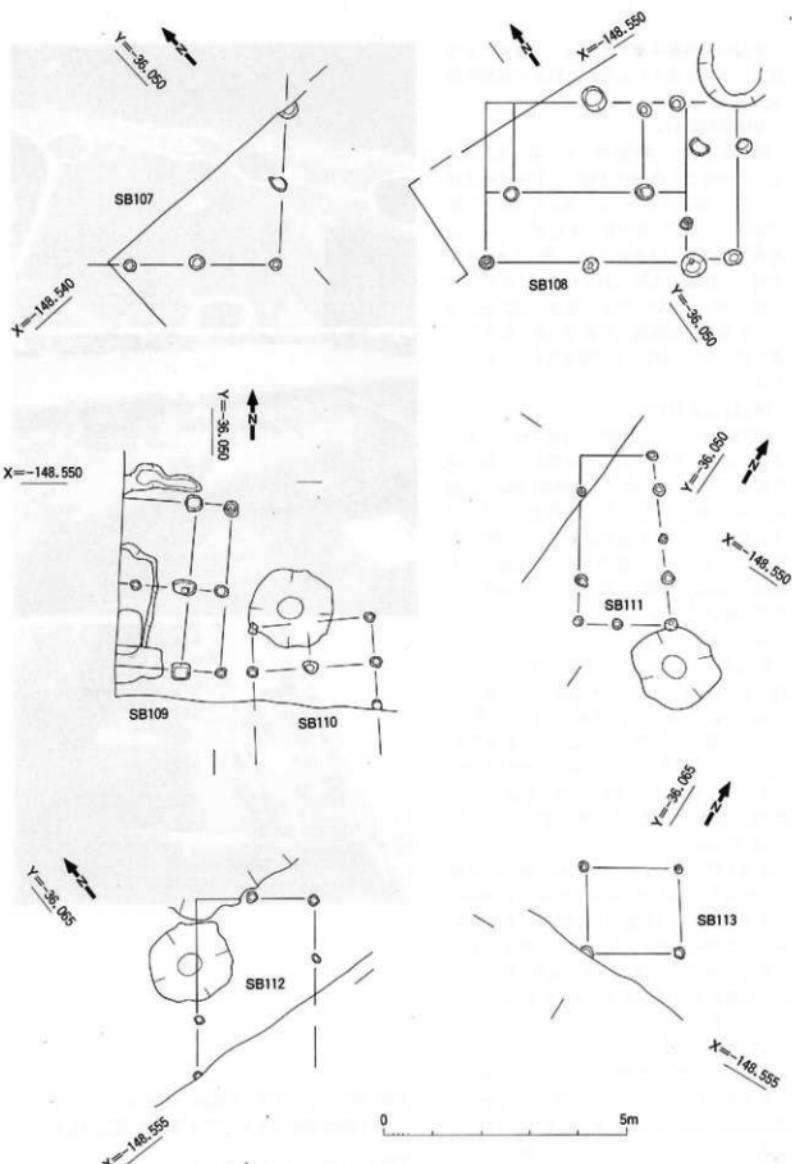


図5.113 据立柱建物 SB107～113平面図 ($S = 1/100$)

cmを測る。柱穴は概ね径約30cmの円形を呈し、最深で約23cmを測る。土師皿、瓦器碗等の細片が出土し、SE118と同時期のものと考えられる。

SB115(図5.114)

東西1間、南北3間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約33°東へ振る。東西約1.4m、南北約4.3mを測り、やや歪む。柱間寸法は約140cmを測る。柱穴は概ね径約40cmの円形を呈し、最深で約30cmを測る。土師皿、瓦器碗等の細片が出土し、SE127と同時期のものと思われる。

SB116(図5.114)

SB114と重複する柱穴があるが、切り合ひは不明。東西2間、南北2間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約32°東へ振る。東西約2.5m、南北約2.9mを測り、やや歪む。南北の柱間寸法は約140cmを測り、東西は約90cmと約140cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深で約24cmを測る。土師皿、瓦器碗、瓦質釜等の細片が出土し、SE127と同時期のものと考えられる。

SP102(図5.108)

SD113-2と重複するが切り合ひは不明。径約28cmの円形を呈し、深さ約30cmを測る。完形に復元できた土師皿1点(図5.115-4)が出土した。

4) 平坦面3東部の遺構(図5.116~149)

平坦面3の東部(Y=-36,035m付近以東)では第Ⅳ(中世整地)層が認められた。第Ⅳ層は北から南、西から東へ厚く堆積していた。ここでは第Ⅳ(中世遺物包含)層下面、第Ⅴ層上面、第Ⅵ(平安整地)層上面の順に遺構を述べる。なお、協会試掘では平坦面2と同程度まで機械掘削しており、協会試掘B地区では1基の井戸らしきものを検出

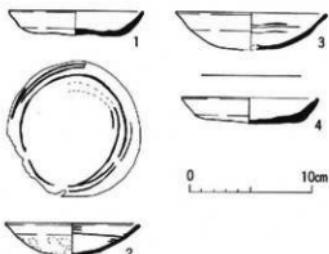


図5.115 SD113-2(1~2)・SB107柱穴(3)・
SP102(4)出土遺物(S=1/4)

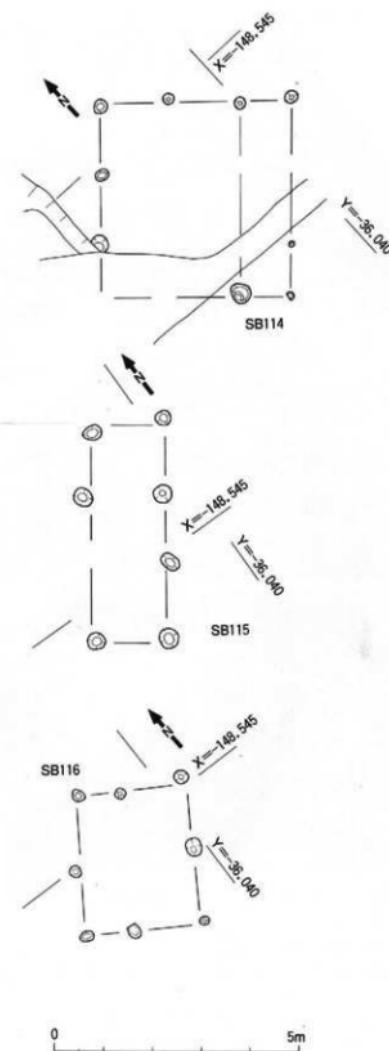


図5.114 掘立柱建物 SB114~116平面図(S=1/100)

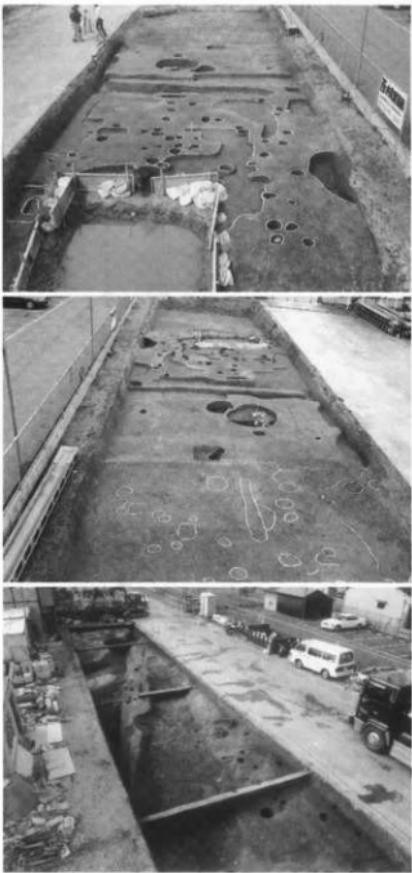


図5.116(上) 平坦面3東部北半の第VII層上面の状況
(東から)

遺構検出は第VII層上面で行っており、白線を引いた遺構
は第VII層下面のものと第VII層上面のものが混在している。

図5.117(中) 平坦面3東部北半の第VII層上面の状況
(西から)

図5.118(下) 平坦面3東部南半の第VII層上面の状況
(東南から)

したにすぎない。

a) 第Ⅷ(中世遺物包含)層下面の遺構(図5.125)
北半で南北方向の溝をいくつかと1基の土壙を検出した。溝には土壙とすべき不整形なものもある。南半では合流し、検出できなかった。概ね幅約100cm、最深約15cmを測る。ほとんどは掘削ミスのため掘りすぎている。土壙(SK 119)の大半は調査区外にあり東西約250cm、南北90cm以上の円形を呈するとと思われる。深さ約40cmを測る。完形の土師皿1点が口縁を上に置かれたような状態で出土した(図5.128-1)。構造物は認められず、性格は不明である。これらは耕作の痕跡と考えられ、第Ⅷ層下面で検出したことから16~17世紀頃のものと思われる。

b) 第Ⅷ(中世整地)層上面の遺構(図5.125)
SE126(図5.119~120・126)

SE127を切る。平面は約200cmの不整形な円形を呈し、深さ約90cmを測る。桶を中央より南に置き、最大で30cm大の石を内径約35cmの円形に積み上げて井戸枠としている。桶は腐食が著しく詳細は不明である。石には割った痕跡が明瞭に残るものは少なく、すでにその大きさであったものを選んで使っているように感じられる。石製品の一部と思われるものや然を受けて変色したもの、煤が多量に付着しているものもある。多くは枠内に転落していた。枠内の下位から詳細な出土状況は明らかではないが、完形に復元された土師皿1点(図5.128-2)が出土した。井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内から他に土師皿、瓦器碗、瓦質釜・擂鉢等の細片が出土した。掘方からは土師皿・釜、瓦器碗・壺、瓦質釜・小型釜・壺・擂鉢(図5.128-3)・井戸枠・平瓦等の細片が出土した。井戸枠はSE123と同様の形態で土師質焼成である。枠内の遺物量は少なく、意識的に精良な土を用いて埋めたと考えられる。

SE127(図5.121・126)

SE126に切られる。平面は径約120cm四方の隅丸方形を呈し、深さ約76cmを測る。径約30cmの木製品を中心より北西に置き、瓦質釜(図5.128-4)を積み上げて井戸枠としている。木製品は腐食し土層に痕跡を残すのみで詳細は不明。より上部の構造は埋土の状況から枠が抜き取られたと考えられ不明である。枠内から土師皿(図5.128-5)、須恵器鉢等の細片が出土し、掘方から特徴的な遺物はなかった。上部の埋土からは

土師皿・釜、瓦器碗、青磁碗、須恵器鉢、白磁碗、瓦質釜等の細片が出土した。

SK120(図5.122)

SD118に切られ、全体の形状等は不明である。東西260cm以上、南北150cm以上、深さ30cm以上を測る。土師皿(図5.128-6)、瓦質釜(図5.128-7)・甕・火舎、須恵器鉢、丸平瓦等の破片が出土した。

SK121

SD118に切られ、全体の規模等は不明である。深さ30cm以上を測る。ほぼ完形の土師皿1点(図5.128-8)と、土師皿(図5.128-9~11)、瓦器碗(図5.128-12)、瓦質釜・甕・火舎、須恵器鉢(図5.128-13)、滑石製石鍋等の細片が出土した。

SD114(図5.127)

SD111・SK117・SD113-2を切る。東西方向から南東へ振れ、南北方向に曲がる。南東部分は座標軸から約55°西へ振る方位をとる。断面はゆるい逆台形を呈し、南北部分が深い。幅約200~500cm、深さ約30~100cm、長さ24m以上を測る。端を検出していない。埋土から土師皿(図5.128-14~18)、白磁碗(図5.128-19)、青磁碗(図5.128-20~21)、瓦質甕(図5.128-22)・釜(図5.128-23)・擂鉢(図5.128-24~25)、備前擂鉢(図5.128-26)、瓦質井戸枠、砥石等が出土した。遺物数は表に示した(表5.6=P.169)。

SD115

ほとんどが調査区外にあり、規模等は不明である。SD114の南東部分と同様に座標軸から約55°西へ振る方位をとる。深さ50cm以上を測る。土師皿、瓦質釜・甕・擂鉢・火舎、丸平瓦等の細片が出土した。SD114と同時期に埋められたものと考えられる。

SD116

SD114とSD115を接続し、SD114と同様に座標軸から約55°西へ振る方位をとる。断面は半円形を呈し幅約60cm、深さ約22cm、長さ約4.5mを測る。土師皿(図5.129-1~2)、瓦質釜、丸平瓦等の細片が出土した。SD114と同時期に埋められたものと考えられる。

SX102(図5.123)

SD114の南北部分東肩とSD115の西肩との間は約250cmを測り、最厚約15cmの黄褐色細砂質シルトが堆積していた。この層中にはレベルを描えた土師皿(図5.129-3~4)、瓦質釜(図5.129-5)や平瓦等の遺物群が幅約80cm、長さ

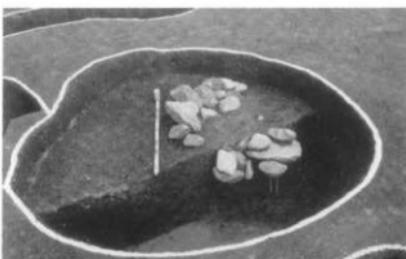


図5.119(上) SE126上部(南から)

図5.120(中) SE126井戸枠(東から)

図5.121(下) SE127井戸枠(東から)

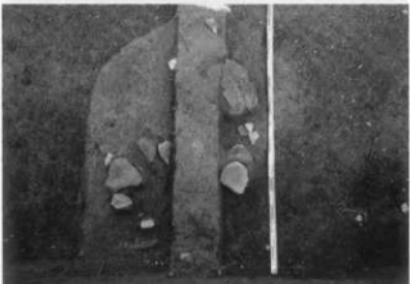


図5.122(上) SK120遺物出土状況(北から)

図5.123(中) SX102遺物出土状況(南から)

図5.124(下) SD117東部のSD114との接続部(北から)

1m以上の南北方向に散在する。遺物群以外には少量の土師器や須恵器の細片を含むのみであり、意識的に精良な土を用いた盛土と考えられる。南壁断面ではこれを明確に捉えていない。

SD117(図5.124)

SD118に切られる。SD114と接続し、平面はT字状を呈する。SD114と同様に座標軸から約55°西へ振る方位をとる。断面はゆるい台形を呈し、幅55cm以上、深さ約14cm、長さ約11.5mを測る。SD114と接続する部分には最大約40cm大の礫が据えられていた。溝に礫の面を揃え、掘方はなく、2段以上に積み上げられていたものかは不明である。SX102と同一の黄褐色細砂質シルトによって埋められ、土師皿、瓦質釜等の細片が出土した。SD114に水を流すものと考えられるが、詳細は不明である。

SD114・SD115・SD116・SX102は同時期に機能していた一體のものと考えられる。すなわち、SD114とSD115は一つの溝であり、SD116とSX102はベースとなる第Ⅶ層を掘り残した高まりと考えられる。この構造はSD103に酷似する。したがってSD116とSX102はSD114とSD115に一定の深さの水を溜める堰であり、土橋としても機能していたと思われる。SX102の遺物群はこれを補強するためにシルト層とともに据えられたものと考えられる。SD117はSX102と同一層で埋められており、堰(土橋)=SX102を補強する際に埋められたものと思われる。

SD118(図5.127)

SK120・SK121・SD117を切る。南東方向で座標軸から約55°西へ振る方位をとる。断面はゆるい逆台形を呈し、底は平らである。幅約360cm、深さ約40cm、長さ24m以上を測る。西端を検出した。埋土から土師皿(図5.129-6~12)、青磁碗(図5.129-13~16)、白磁碗(図5.129-17)、瓦質甕(図5.129-18~19)・火舎(図5.129-20~21)・擂鉢(図5.129-22~23)、檜前臺(図5.129-24)、瀬戸鉢?(図5.129-25)・鉢皿(図5.129-26)、瓦製円盤(図5.129-27)、巴文軒瓦(図5.230)等が出土した。遺物数は表に示した(表5.6=P.169)。

SB117(図5.130)

SB118を切る。東西2間以上、南北3間以上の掘立柱建物と思われる。主軸は座標軸から約5°東へ振る。東西2.6m以上、南北3.6m以上を測り、やや歪む。柱間寸法はばらつきがある

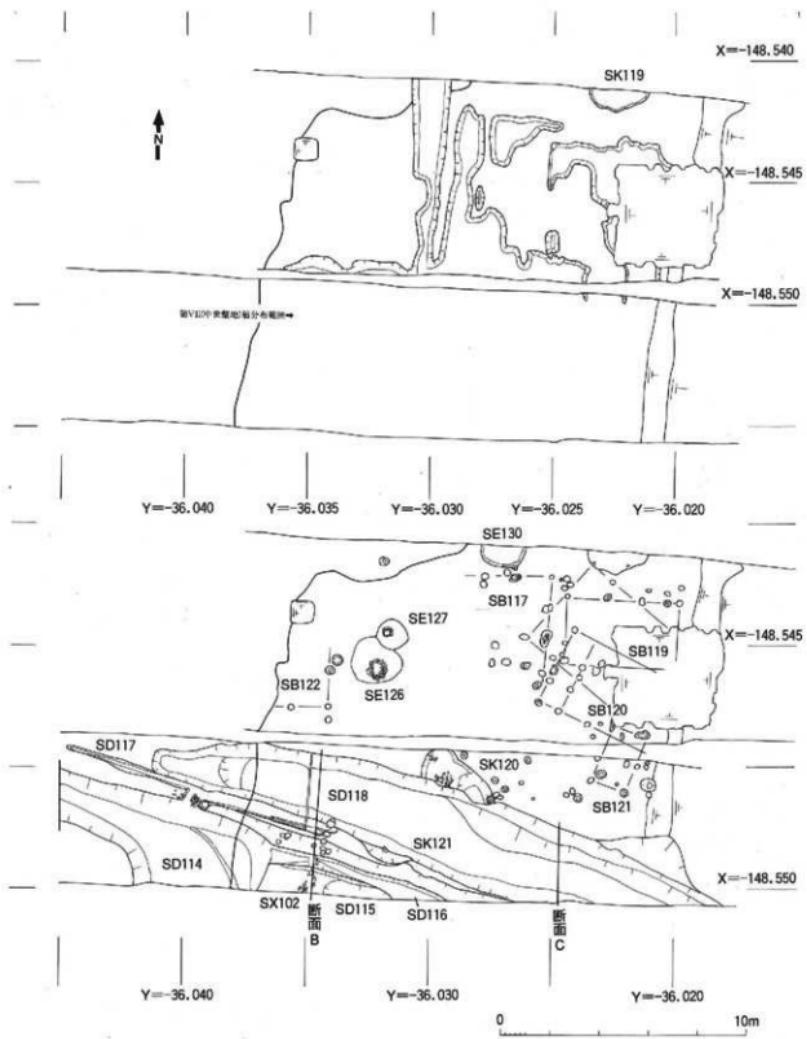
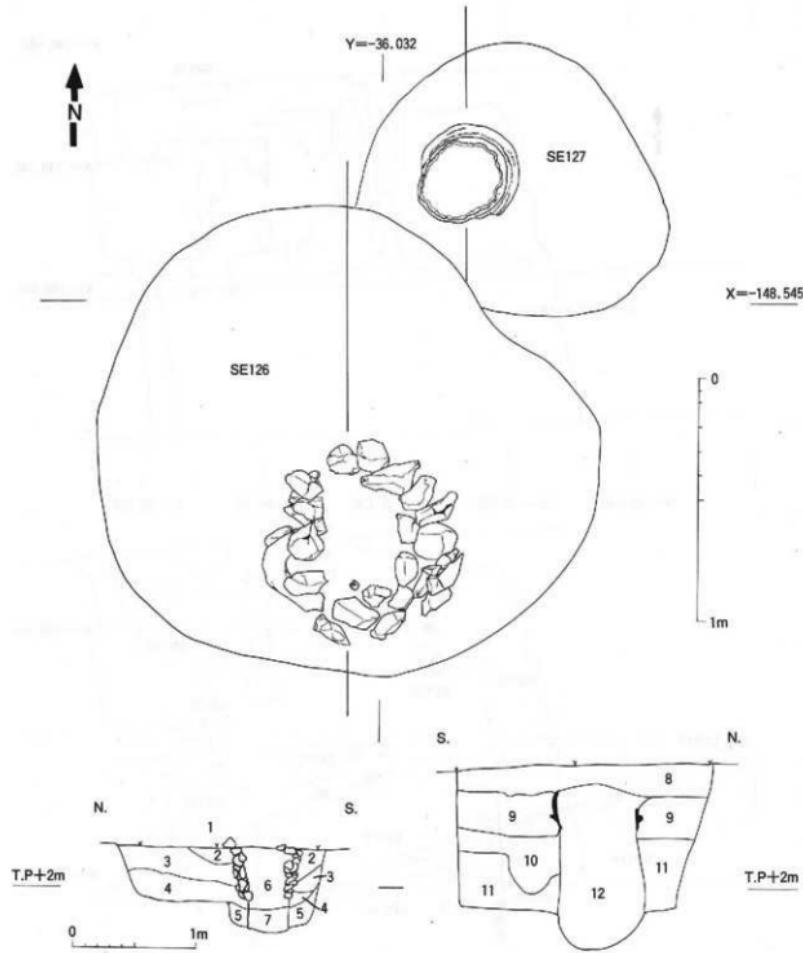


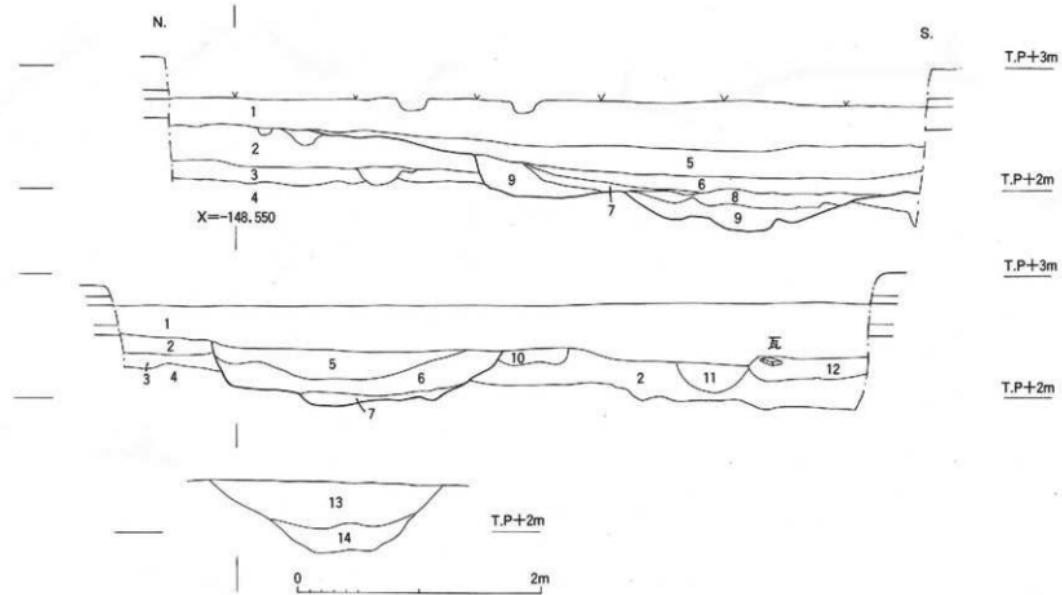
図5.125 (上)第VII層下面遺構平面図 ($S=1/200$)・(下)第VII層上面遺構平面図 ($S=1/200$)



- 1: 第VII(中世遺物含む)層
 2: 5Y5/2灰オリーブ色中粒砂混細砂と2.5Y5/4黄褐色細砂質シルトの
 混合土 (SE126側方)
 3: 2.5Y4/3オリーブ褐色中粒砂混シルト (SE126側方)
 4: 5Y4/4灰色中粒砂混粘質シルト (SE126側方)
 5: 10Y R4/1褐色中粒砂混シルト (SE126側方)
 6: 不明 (SE126側内)
 7: 10Y R4/1褐色中粒砂混粘質シルト (SE126側内)
 8: 2.5Y3/3暗オリーブ褐色中粒砂混砂質シルト (SE127堆土)
 9: 2.5Y3/2黒褐色細砂～砂質シルト (SE127堆方)
 10: 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト (SE127堆方)
 11: 10Y R3/2黒褐色シルト～中粒砂 (SE127堆方)
 12: 2.5Y3/2黒褐色細砂～シルト (SE127堆方)

図5.126 SE126・SE127平面図 (S=1/20)・断面図 (S=1/40)

図5.127 SD114断面図 (S=1/40)



1:第VII(中世遺物包含)層
2:第VI(中世墓地)層
3:第VI(平安時代整地)層
4:第V層
5:7.YR5/4にぶい褐色中粒砂混シルト(SD118)
6:7.YR4/3褐色中粒砂混砂質シルト(SD118)
7:5.YR4/1灰色粗砂混砂質シルト(SD118)

8:5.YR4/1開灰色シルト(SD118)
9:10YR8/8黄褐色粘土～シルトと10YR6/1褐色細砂の混合土(SD118)
10:10YR7/8黄褐色細砂質シルト中粒砂层(SD117)
11:10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混砂質シルトと第VII層の混合土(SD116)
12:10YR7/8黄褐色細砂質シルト中粒砂层(SX102)
13:10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂混砂質シルト(SD114)
14:2.5YS/1黃灰色中粒砂混細砂質シルト(SD114)

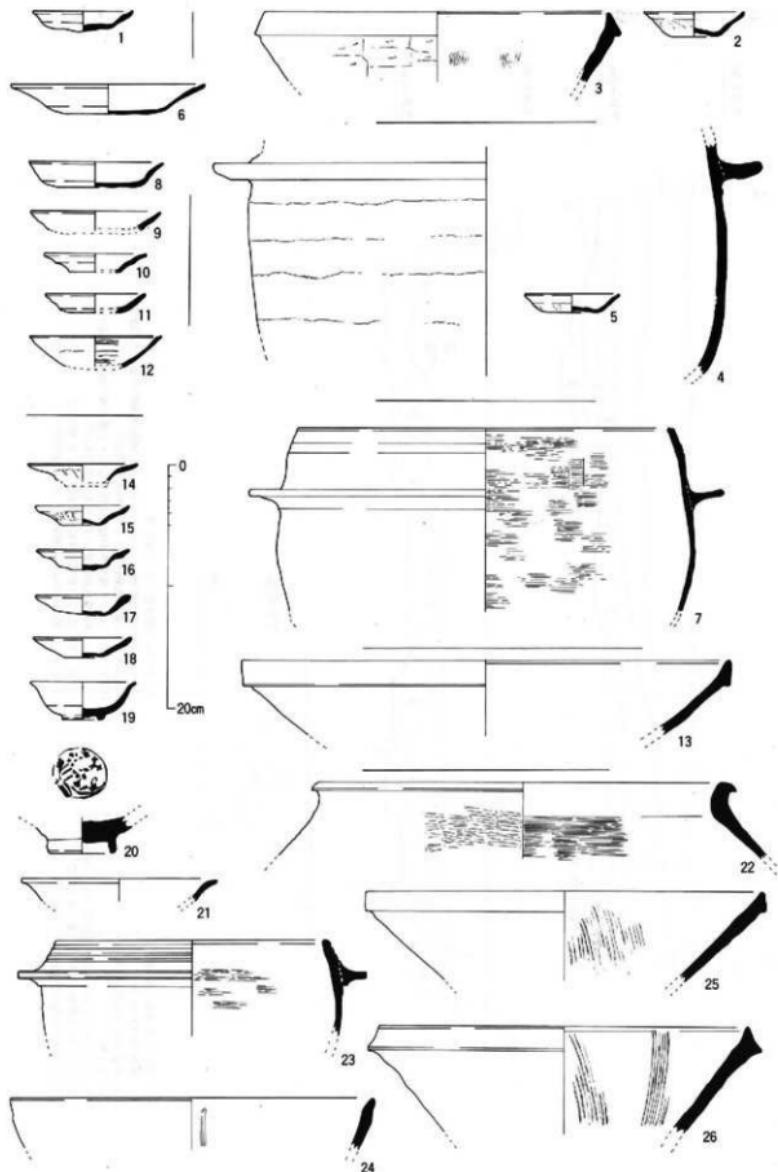


図5.128 SK119(1)・SE126(2~3)・SE127(4~5)・SK120(6~7)・SK121(8~13)・SD114(14~26)出土
物(S=1/4)

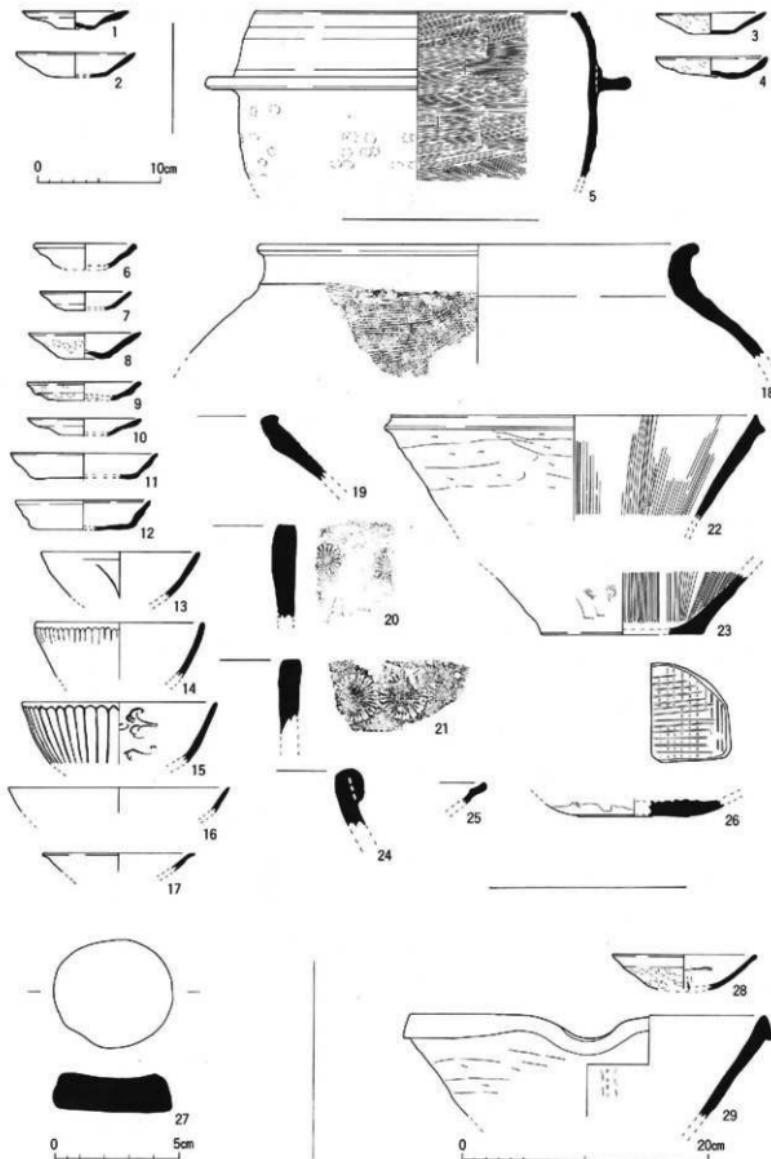


図5.129 SD116(1~2)・SX102(3~5)・SD118(6~27)・SB122(28~29)出土遺物(27はS=1/2、他はS=1/4)

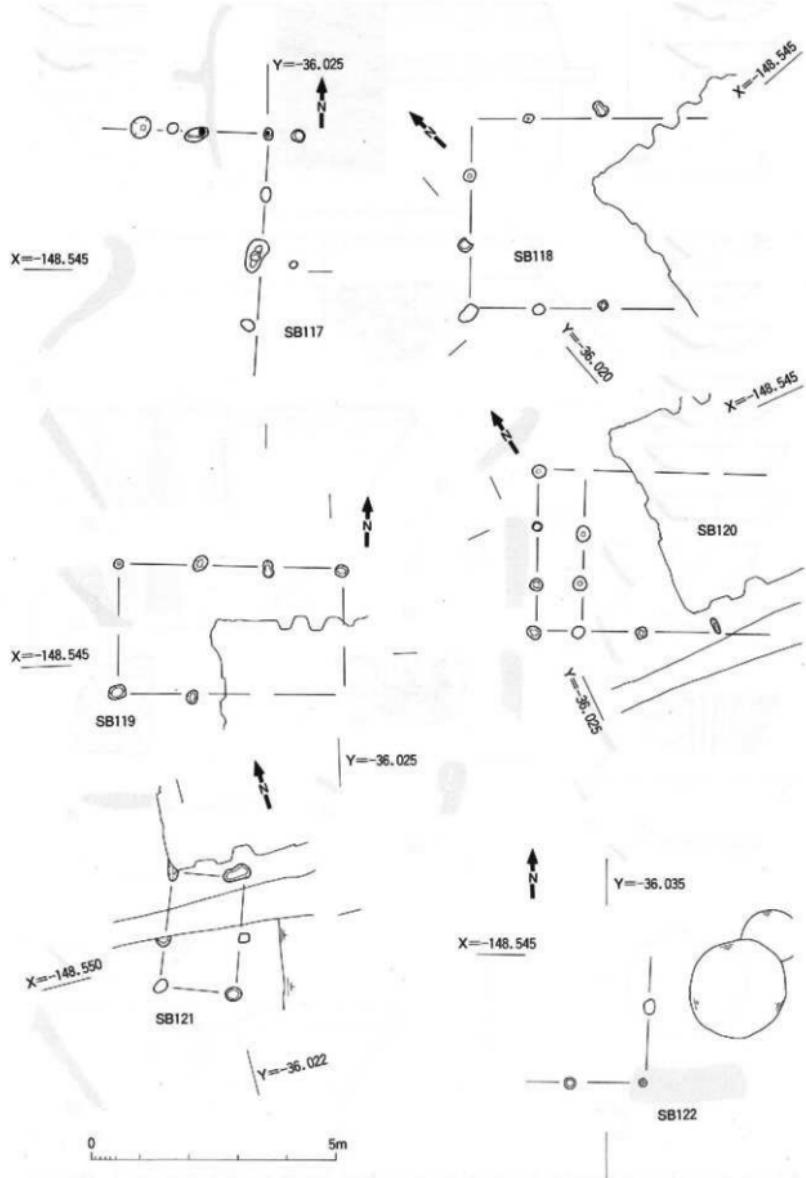


図5.130 据立柱建物 SB117～122平面図 (S=1/100)

ものの約120cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深で約20cmを測る。約15cm大の砾を据えるものもある。東へ約70cmずれた位置にも柱穴があり、立て替えられた可能性がある。土師皿等の細片が出土した。

SB118(図5.130)

試掘壕・SK119・SB117に切られる。SB119と重複するが、関係は不明である。東西3間以上、南北3間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約39°東へ振る。東西2.8m以上、南北約3.8mを測る。柱間寸法は約140cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深約25cmを測る。土師皿等の細片が出土した。

SB119(図5.130)

試掘壕に切られる。SB118と重複するが、関係は不明である。東西3間、南北2間と思われる掘立柱建物で、主軸は座標軸から約4°東へ振る。東西約452m、南北約2.6mを測る。東西の柱間寸法はばらつきがあるものの約140cmを測り、南北は約130cmを測ると思われる。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深約15cmを測る。東北端には約13cm大の砾を据えている。土師皿等の細片が出土した。

SB120(図5.130)

試掘壕に切られ調査区の境へのびる。東西2間以上、南北3間の西面庇付掘立柱建物で、主軸は座標軸から約25°東へ振る。庇を含め東西3.7m以上、南北約3.3mを測る。東西の柱間寸法は約140cmを測り、南北と庇は約110cmを測る。柱穴は概ね径約20cmの円形を呈し、最深約30cmを測る。土師皿等の細片が出土した。

SB121(図5.130)

東西1間、南北2間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約20°東へ振る。東西約1.4m、南北約2.6mを測り、やや歪む。東西の柱間寸法は約430cmを測り、南北は約130cmを測る。柱穴は概ね径約25cmの円形を呈し、最深で約25cmを測る。土師皿等の細片が出土した。

SB122(図5.130)

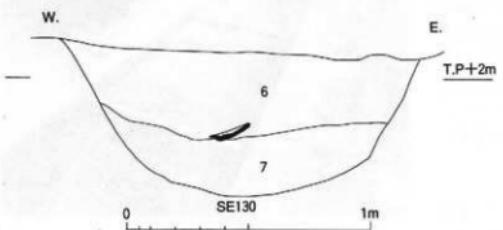
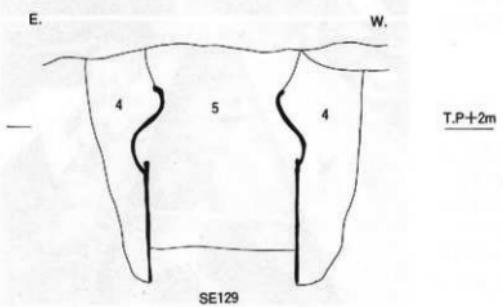
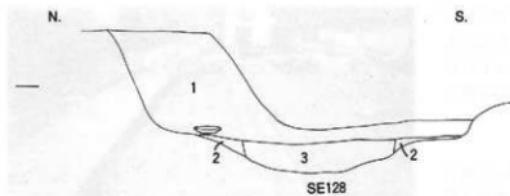
東西、南北1間以上の掘立柱建物で、3基の東南隅柱穴を検出したに過ぎない。このため全体の規模や形状は不明である。主軸は座標軸に沿う。柱間寸法は約140cmを測る。柱穴は一辺20cm前後の方形もしくは隅丸方形を呈し、最深約15cmを測る。土師皿、瓦器碗(図5.129)



図5.131(上) 平坦面3 東部北半の第VI層上面遺構
(西から)

図5.132(中) 平坦面3 東部南半の第VI層上面遺構
(西から)

図5.133(下) 平坦面3 東部南半の第VI層上面遺構
(東から)



1:2.5Y2/1黒色砂質シルトと2.5Y7/3淡黄色粗砂の混合土(SE128埋土)
2:2.5Y7/3淡黄色粗砂(SE128埋方)
3:2.5Y2/1黒色砂質シルト(SE128枠内)

4:2.5Y3/1黒褐色砂質シルト混中粗砂(SE129埋方)
5:2.5Y5/3黄褐色細砂混砂質シルト(SE129枠内)

6:2.5Y4/2暗灰黄色中粒砂混砂質シルト(SE130)
7:2.5Y3/2黒褐色砂質シルト混粗砂(SE130)

図5.134 SE128・SE129・SE130断面図(S=1/20)

-28)、瓦質擂鉢(図5.129-29)等が出土した。

c.) 第VI(平安整地)層上面の遺構
SE128(図5.134~135)

SD118に切られる。平面は約170cm四方の円に近い隅丸方形を呈し、深さ約65cmを測る。中央に径約60cmの枠の痕跡がみられた。埋土の状況から枠が抜き取られたと考えられ、構造物は不明である。底から約25cm上で完形の瓦器碗1点(図143-1)が口縁を上に置かれていた。井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。埋土からは他に土師皿(図143-2)、瓦器碗、瓦質釜・甕、須恵器鉢、常滑窯等の細片が出土した。

SE129(図5.134・136)

大半が調査区の境にあり、平面は径約110cmの円形を呈すると思われる。深さ約100cmを測る。径約60cm、高さ約50cmの桶を中央に置き、底部を打ち欠いた常滑窯(図5.143-3)を積み上げて井戸枠としている。さらに木製品を積むと考えられるが、木製品は腐食し土層に痕跡を残すのみで詳細は不明である。常滑窯は体部片や底部片が出土しており、構築中に打ち欠いたものと考えられる。枠内の下位から詳細な出土状況は明らかではないが、完形の土師皿2点(図5.143-4~5)と完形の瓦器碗1点(図5.143-6)、本来は完形であったと思われる瓦器碗1点(図5.143-7)、1/4程度の破片(図5.143-8)、完形の小型水注(図5.143-9)が出土した。これらは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内から他に土師皿・甕、瓦器碗、青磁碗、瓦質釜・甕、須恵器鉢、須恵壺(図

種類	破片数	百分率	備考
土師小皿	144	完形10	
土師大皿	10	完形2	
土師皿小計	154	59.69%	
瓦器碗和泉型	81	完形2	
瓦器碗大和型	2		
瓦器碗小計	83		
瓦器皿	2	完形1	
瓦器小計	85	32.95%	
白磁碗	2	0.78%	
土師釜	17	6.59%	
土器合計	258	100.00%	
その他		供膳具小計	
衛(不明)	1	241	93.41%
孫子(縁)	153	調理具小計	
稚子(支?)	23	17	6.59%
稚子(エゴノキ?)	3	貯蔵具小計	
壁土	20	0	0.00%
自然石	2		

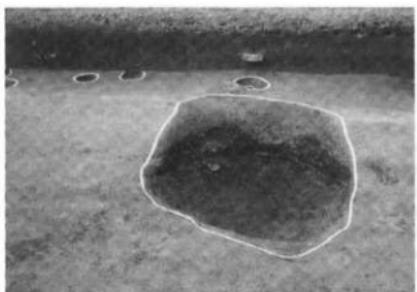
表5.1 SK103出土遺物一覧

種類	破片数	百分率	備考	SD107	SD108	備考
				百分率	備考	
土師小皿	208		完形4	124		完形2
土師大皿	7			1		
土師皿小計	215	70.72%		125	37.43%	
白磁	4			2		
青磁	3			4		
鉢器小計	7	2.30%		6	1.80%	
瓦質鍋	0			2		
瓦質釜	27			57		
瓦質三足釜	16			34		
瓦質鍋・釜小計	43			93		
瓦質甕	18			19		
瓦質火皿	1			12		
瓦質桶鉢	2			11		
瓦質小計	64	21.05%		135	40.42%	
須恵器甕	0			4		
須恵器鉢	13			33		
須恵器小計	13	4.28%		37	11.08%	
常滑甕・壺	1			29		
備前焼鉢	0			1		
廐戸顛片	1			1		
陶器顛片	3			0		
陶器小計	5	1.64%		31	9.28%	
土器合計	304	100.00%		334	100.00%	
その他		食膳具小計			食膳具小計	
井戸枠	0	222	73.03%	1	131	39.22%
瓦壺	17	調理具小計		59	調理具小計	
自然石	4	60	19.74%	24	151	45.21%
焼石	1	貯蔵具小計		3	貯蔵具小計	
硯石	1	22	7.24%	0	52	15.57%
壁土	0			4		
加工石	1			0		
切削	1			0		
犬右上腕骨	0			4		
犬右踵骨	0			1		
土師小皿	88			158		
土師大皿	0			3		
瓦器碗和泉型	316			165		
瓦器碗大和型	0			1		
瓦器皿	1			0		
土師釜	17			49		
土師小型釜	1			0		

表5.3 SD107・SD108出土遺物一覧

種類	破片数	百分率	備考
瓦盤	7	263	86.80%
鐵滓	1	調理具小計	
対右上腕骨	1	39	12.87%
牛右上腕骨	1	貯蔵具小計	
		1	0.33%
へそ皿	1		
瓦器高台盤	4		
瓦質足釜	4		
瓦質桶鉢	1		
瓦質甕	1		
常滑甕	2		
備前焼鉢	1		
陶器顛片	3		

表5.2 SD101出土遺物一覧



5.143-10)等の細片が、掘方から瓦器碗、瓦質
擂鉢・壺等の細片が出土した。検出時には土師
皿・釜・小型鉢、瓦器碗、瓦質釜、須恵器鉢、平瓦
等の細片が出土している。

SE130(図5.134)

大半は調査区外にあり平面が約180cm四方の
隅丸方形を呈すると思われる。深さ約60cmを測る。
埋土の状況から枠が抜き取られたと考えられ、
構造物は不明である。枠が調査区外に位置
する可能性もある。底から約20cm上で完形の瓦
器碗1点(図5.143-11)が口縁を上に置かれていた。
井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡
と考えられる。埋土からは他に土師皿・釜、瓦
器碗、瓦質釜(図5.143-12)・壺等の細片が出土
した。

SE131(図5.137~139)

SD301に切られる。平面は南北約94cm、東西
約50cmの方形を呈し、深さ約30cmを測る。1個の
瓦質釜(図5.143-13)を中心より西に置く。枠
内から別個体の瓦質釜片が出土しており、本来
はさらに釜が積まれていたと考えられる。枠内
からは他に土師皿(図5.143-14)、瓦器碗等の細
片が出土し、掘方から特徴的な遺物はなかった。

SE132(図5.139~140)

平面は約100cm四方の円に近い隅丸方形を呈
し、深さ約60cmを測る。径約40cmの曲物を中央
に置く。曲物は腐食が著しく、数個が積み上げ
られていたと思われるが詳細は不明である。枠
内の底から約30cm上で完形の瓦器碗1点(図
5.143-15)が口縁を斜めにして出土した。井戸
を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えら
れる。また、底からは完形近くに復元できた瓦
器碗2点と白磁碗(図5.143-16)が出土している。
白磁碗は口縁の2/3を欠き、口縁を上に置かれた
ような状態で出土した。井戸を構築した際に

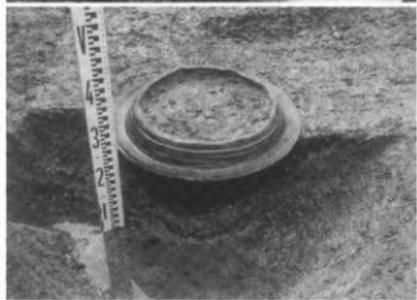
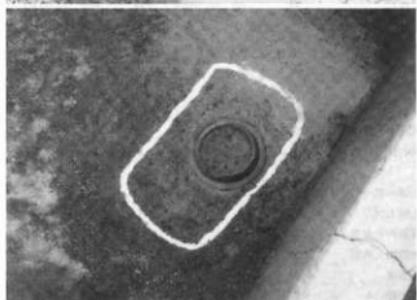
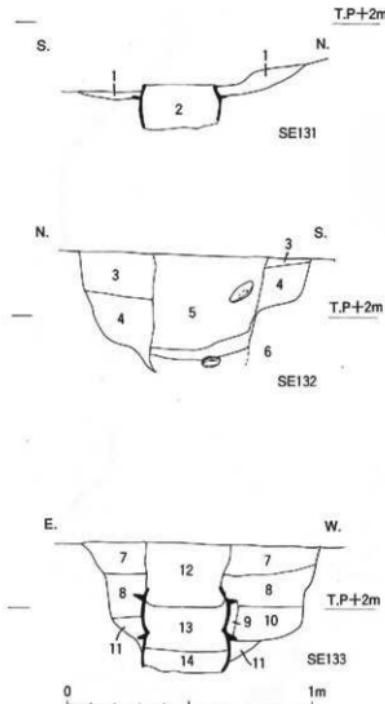


図5.135(最上) SE128土器出土状況(南から)
土器は瓦器碗(図5.143-1)。

図5.136(中上) SE129断面(北から)
水系はT.P.+2.2m。

図5.137(中下) SE131検出状況(北西から)

図5.138(最下) SE131断面(東から)



1 : 7.5Y R2/1黒色中粒砂混砂質シルト (SE131側方)
2 : やや汚れた第V層 (SE131枠内)

3 : 2.5Y5/1黄灰色中粒砂混砂質シルト (SE132側方)

4 : 7.5Y R2/1黒色中粒砂混シルト (SE132側方)

5 : 10Y R3/1黒褐色中粒砂混砂質シルトと2.5Y R7/8橙色シルトの混合土 (SE132枠内)

6 : 2.5Y2/1黒色細砂混シルト炭泥 (SE132枠内)

7 : 7.5Y R3/1黒褐色中粒砂混砂質シルト (SE133側方)

8 : 5Y R3/2暗赤褐色中粒砂混砂質シルト (SE133側方)

9 : 2.5Y6/2灰黄色中粒砂混砂質シルト (SE133側方)

10 : 2.5Y5/1黄灰色中粒砂混砂質シルト (SE133側方)

11 : 2.5Y6/4にぶい黄色シルト混粗砂 (SE133側方)

12 : 10Y R7/8黄橙色砂質シルト (SE133側方)

13 : 7.5Y R2/2黒褐色砂質シルト混中粒砂～粗砂 (SE133枠内)

14 : 2.5Y6/4にぶい黄色シルト混粗砂 (SE133枠内)

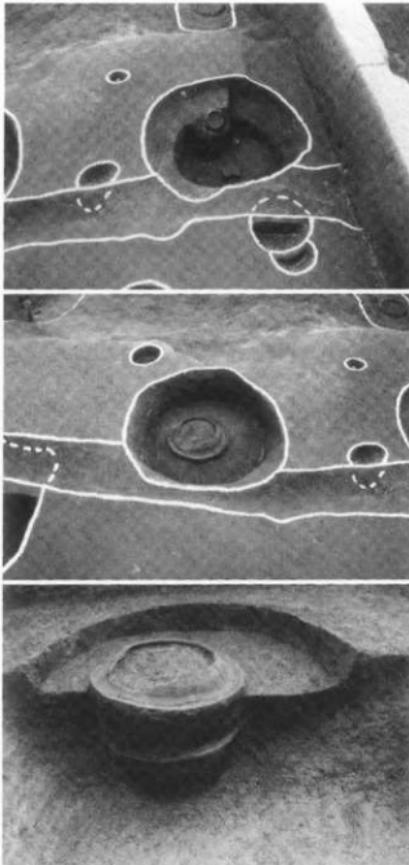


図5.139(左) SE131・SE132・SE133断面図 (S=1/20)

図5.140(上) SE132土器出土状況(北から)

土器は瓦器類(図5.143-15)

図5.141(中) SE133上部(北から)

図5.142(下) SE133断面(北から)

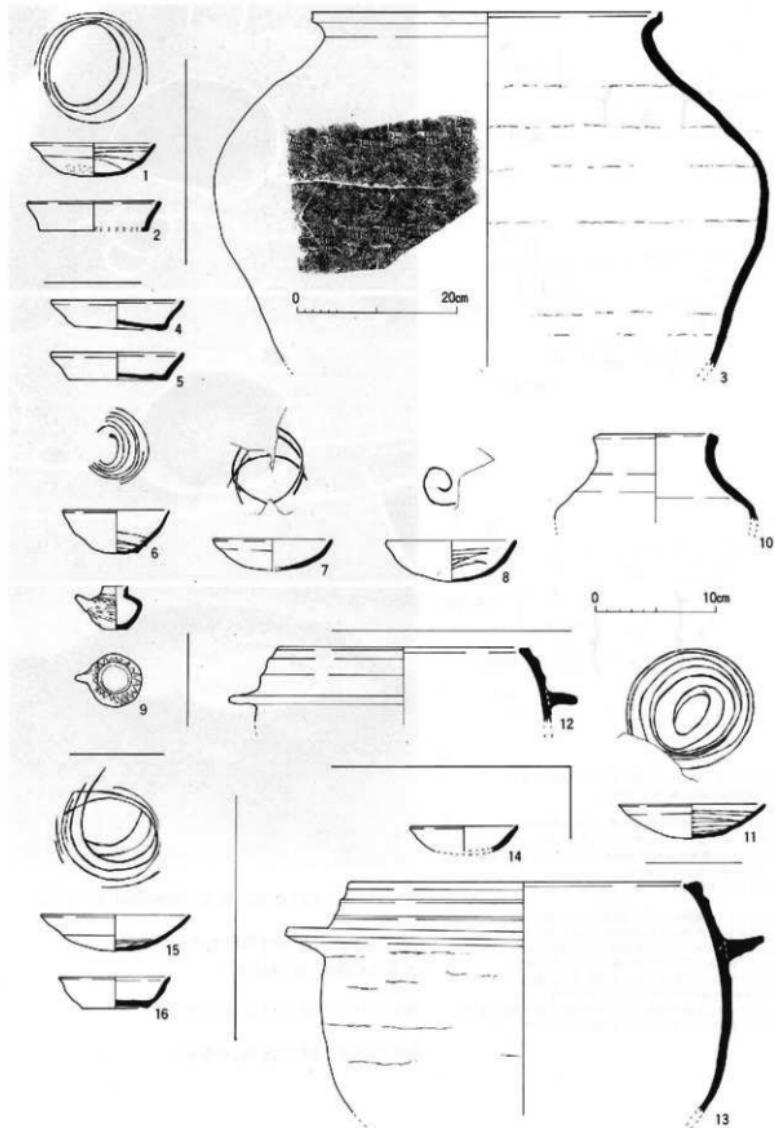


図5.143 SE128(1~2)・SE129(3~10)・SE130(11~12)・SE131(13~14)・SE132(15~16)出土遺物(3はS=1/6、他はS=1/4)

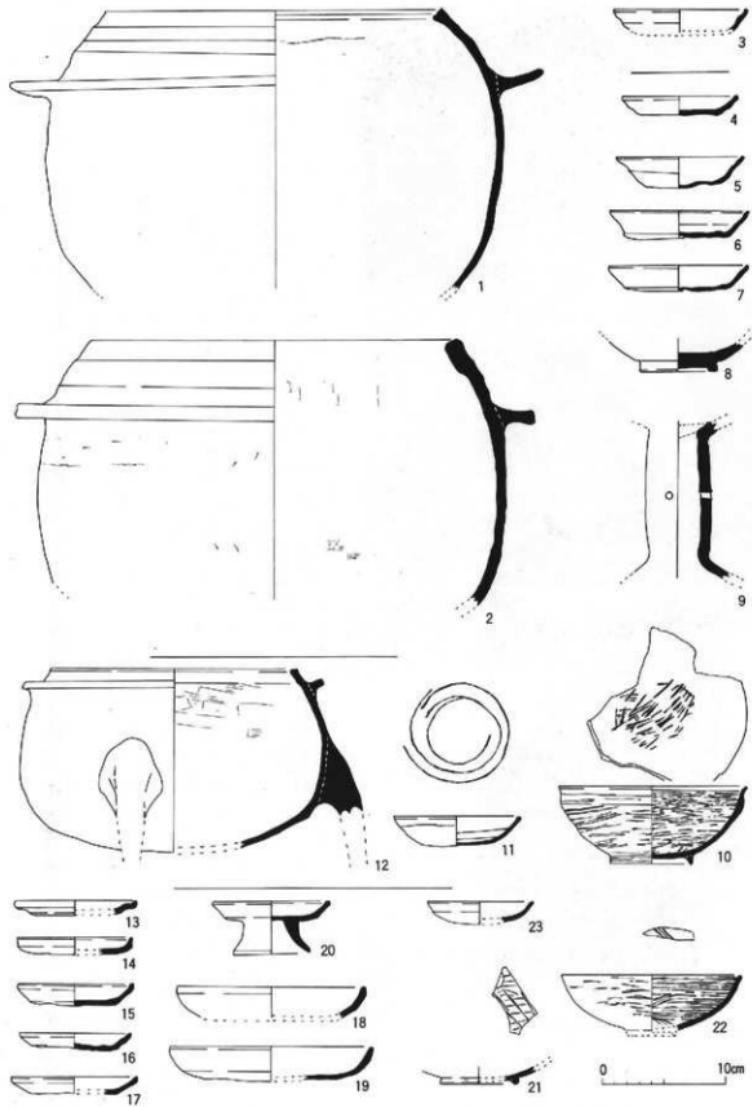


図5.144 SE133(1~3)・SD120(4~12)・SD121(13~23)出土遺物 (S=1/4)

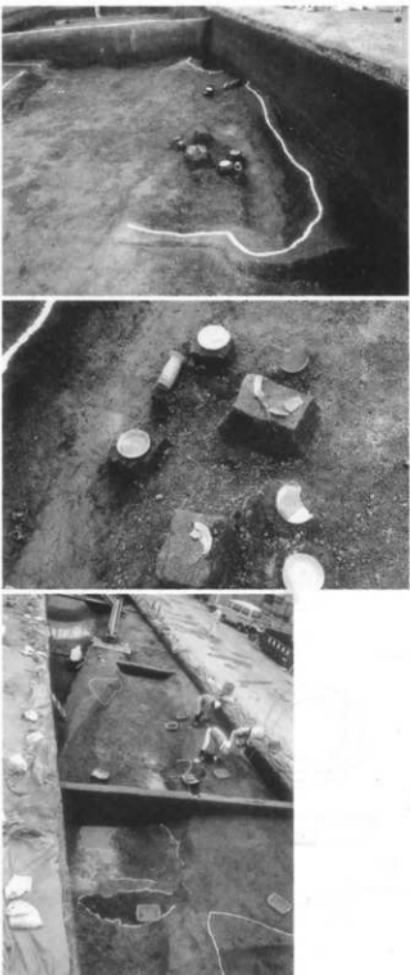


図5.145(上) SD120全景(北西から)

図5.146(中) SD120土器出土状況細部(東から)

図5.147(下) 平坦面3東部南半の調査風景(南東から)

水が溜まっている奥、手箕が置かれている付近がSD120。

行われた祭祀の痕跡とも考えられるが、枠内から他に多くの土師皿、瓦器碗、青磁碗、平瓦等の細片が出土しており、断定できない。掘方から特徴的な遺物はなかった。

SE133(図5.139・141~142)

平面は約100cm四方の不整形な隅丸方形を呈し、深さ約65cmを測る。2個の瓦質釜を中心にして置き、径約33cmの木製品を積み上げて井戸枠としている。上から図5.144-1、図5.144-2の順に積まれ、-2は焼成が土師質を呈する。木製品は腐食し土層に痕跡を残すのみで詳細は不明である。枠内からは土師皿(図144-3)・釜、瓦器碗等の細片、掘方から瓦器碗等の細片が出土した。枠内の遺物量は少なく、意識的に精良な土を用いて埋めたと考えられる。

SK122

試掘 sondageによる地すべりのため全体の規模等は不明である。南北70cm以上、東西約190cmの方形を呈すると思われ、深さ約40cmを測る。埋土は10Y R3/2黒褐色粗砂混砂質シルトで、土師皿、瓦器碗、青磁碗等の細片が出土した。

SD119

西端は南北約110cmの土壤状を呈する。東西方向で断面はゆるい逆台形を呈する。幅約40cm、深さ約25cm、長さ約5mを測り、両端を検出している。土師皿、瓦器碗等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

SD120(図5.145~148)

SD118に切られ、全体の規模等は不明である。東西方向で幅150cm以上、深さ約30cm、長さ4.5m以上を測る。完形の土師皿(図5.144-4~7)や瓦器碗等(図5.144-11)が口縁を上や下に向けた状態で出土した。これらは投棄されたものと考えられる。他に青磁碗(図5.144-8)、瓦器碗(図5.144-10)、瓦質釜(図5.144-12)・壺等と混入と思われる弥生土器高杯(図5.144-9)が出土している。遺物数は表に示した(表5.4)。

SD121

大半は調査区外にあり全体の規模等は不明である。東西方向で幅60cm以上、深さ約40cm、長さ7.3m以上を測り、西端を検出している。土と同量の土師皿(図5.144-13~19)・脚付皿(図5.144-20)、瓦器碗(図5.144-21~22)・皿等(図5.144-23)の細片が埋められていた。これらは投棄されたものと考えられる。土壤の可能性もあるが、形状から溝とした。遺物数は表に示し

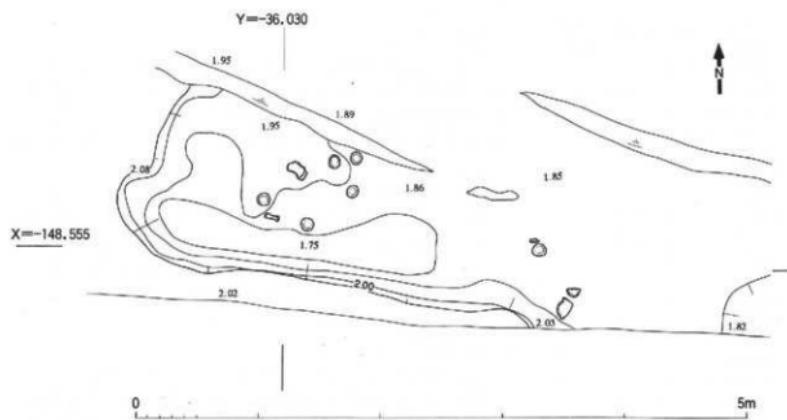


図5.148 SD120土器出土状況平面図 ($S = 1/40$)

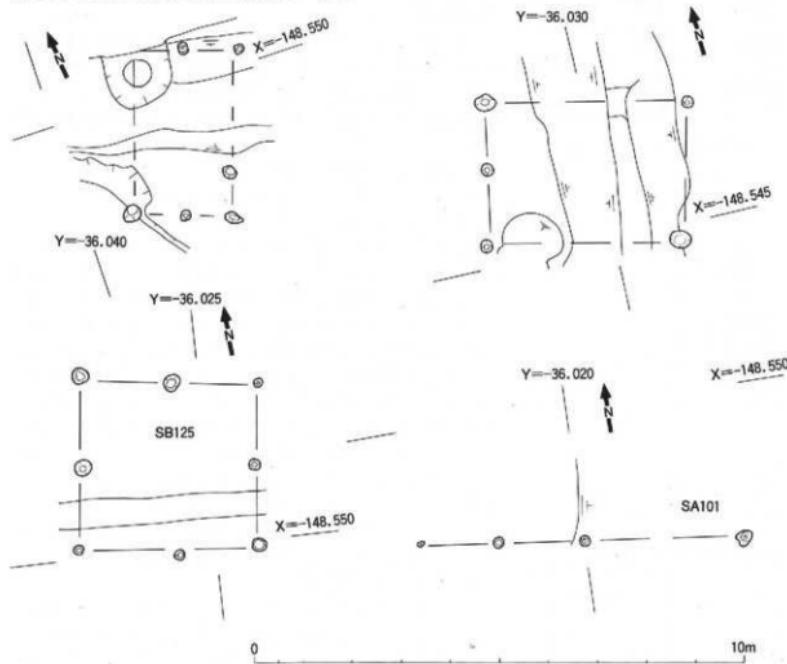


図5.149 挖立柱建物 SB123~125・柵列 SA101平面図 ($S = 1/100$)

種類	破片数	百分率	備考
土師小皿	105		完形1
土師大皿	13		完形5
土師皿小計	118	28.16%	
瓦器碗と皿型	244		完形8
瓦器碗大和型	2		
瓦器皿小計	246	58.71%	
白磁皿	1		
青磁碗	7		
陶器器小計	8	1.91%	
土師釜	2	0.48%	
瓦質釜	18		
瓦質釜	6		完形1
瓦質釜小計	24		
瓦質甕	6		
瓦質小計	30	7.16%	
須恵器甕	3		
須恵器鉢	6		
須恵器小計	9	2.15%	
常滑甕	6	1.43%	
土器合計	419	100.00%	
その他			食勝具小計
瓦瓶	14	372	88.78%
鉄(無片)	1		調理具小計
砥石	1	32	7.64%
瓦製円盤	2		貯蔵具小計
砾土	3	15	3.58%

表5.4 SD120出土遺物一覧

種類	破片数	百分率	備考
土師小皿	194		
土師大皿	18		
土師台付鉢	1		
土師皿小計	213	75.00%	
瓦器碗と皿型	65		
瓦器碗大和型	4		
瓦器碗小計	69		
瓦器皿	1		
瓦器小計	70	24.65%	
白磁	0		
青磁	0		
磁器小計	0	0.00%	
土師釜	1	0.35%	
土器合計	284	100.00%	
その他			供膳具小計
瓦瓶	1	283	99.65%
砾土	6		調理具小計
		1	0.35%
		0	0.00%

表5.5 SD121出土遺物一覧

た(表5.5)。

SB123(図5.149)

東西2間、南北間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約20°東へ振る。東西約1.9m、南北約3.5mを測る。柱間寸法はばらつきがあるものの約90cmを測る。柱穴は概ね径20~30cmの円形を呈し、最深約28cmを測る。土師皿、瓦器碗等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

SB124(図5.149)

東西3間、南北2間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約12°東へ振る。東西約4.1m、南北約2.9mを測る。柱間寸法はばらつきがあるものの約140cmを測る。柱穴は概ね径20~40cmの円形を呈し、最深約21cmを測る。土師皿、瓦器碗等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

SB125(図5.149)

東西2間、南北2間の掘立柱建物で、主軸は座標軸から約5°東へ振る。東西約3.6m、南北約3.6mを測る。東西の柱間寸法は約180cmを測る。柱穴は概ね径20~30cmの円形を呈し、最深約12cmを測る。土師皿、瓦器碗等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

SA101(図5.149)

一列に並ぶ柱穴を検出し、組み合うものがないため欄列とした。東西方向の4間、長さ約6.6mを測る。座標軸から約7°東へ振り、柱間寸法は約160cmを測る。柱穴は概ね径約18cmの円形を呈し、最深約14cmを測る。特徴的な遺物が出土せず、遺物から時期を特定できない。

5) 平坦面4の遺構(図5.150~164)

遺構はすべて第V層上面で近世の遺構と同面で検出している。

SE134(図5.152~154)

SD118に切られる。平面は南北おそらく約300cm、東西約230cmの楕円形を呈し、深さ約105cmを測る。径約38cm、高さ約33cmの曲物を中心にして置き、径約48cm、高さ45cm以上の桶を積み上げて井戸枠としている。より上部に井戸枠が存在したと思われるが、埋土の状況から枠が抜き取られた可能性がある。枠内の底から約45cm上で完形の土師皿1点(図5.164-1)が口縁を斜めにして出土し、約55cm上で完形の土師皿1点(図5.164-2)と本来は完形であったと思われる土師皿1点(図5.164-3)が転落または攪乱によって移動した状態で出土した。これらは西方に集中しており、井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内からは他に土師皿(図5.164-4)、瓦器碗等の細片が、掘方から土師皿、瓦器碗等の細片が、検出時に瓦質釜・甕・搖鉢、青磁碗等の細片が出土した。枠内の遺物量は少なく、意識的に精良な土を用いて埋めたと考えられる。

SE135(図5.154・156~157)

平面は約120cm四方の隅丸方形を呈し、深さ約90cmを測る。径約43cm、高さ75cm以上の桶を中心にして置き、径約60cm、高さ30cm以上の桶を積み上げて井戸枠としている。枠内の底から約30cm上で完形の土師皿1点(図5.164-5)が口縁を上に置かれていた。付近から本来は完形であったと思われる土師皿1点(図5.164-6)と用途不明石製品

(図5.164-8)が出土している。これらは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内からは他に土師皿(図5.164-7)、瓦器碗、白磁、瓦質釜・鍋等の細片と曲物底板(図5.164-9～10)、軒平瓦(図5.164-11)が出土し、掘方から特徴的な遺物はなかった。枠内の遺物量は少なく、意識的に精良な土を用いて埋めたと考えられる。

SE136(図5.15・5.154・160～161)

平面は南北約120cm、東西約90cmの梢円形を呈し、深さ約60cmを測る。径約27cm、高さ約15cmの曲物を中央に置き、3個の瓦質釜を積み上げて井戸枠としている。上から図5.164-12、図5.164-13、図5.164-14の順に積まれていた。枠内から別個体の瓦質釜が出土しており、本来はさらに釜が積まれていたと考えられる。曲物は腐食が著しい。枠内からは他に土師皿、瓦器碗等の微細片、掘方から瓦器碗、土師釜等の細片が出土した。枠内の遺物量は少なく、意識的に精良な土を用いて埋めたと考えられる。

SE137(図5.155・162)

平面は径約130cmの円形を呈し、深さ約80cmを測る。径約38cm、高さ38cm以上の曲物を中央に置く。曲物は腐食が著しく詳細は不明である。上に同様な曲物を積むと考えられるが、これは腐食し土層に痕跡を残すのみであった。枠内の底には10cm大の縁1個と平瓦片2個が置かれていた。構築時に足場として使用されたものと思われる。枠内から他に土師皿と瓦器碗(図5.164-15)等の細片が出土した。瓦器碗には接合不能であるが同一個体と思われるものがある。SE132のように井戸を構築した際に行われた祭祀の痕



図5.150(最上) 平坦面4北半の遺構検出状況
(南から)

ポールの左はSK123、その上はSE137、木枠は近現代の井戸 SE02。

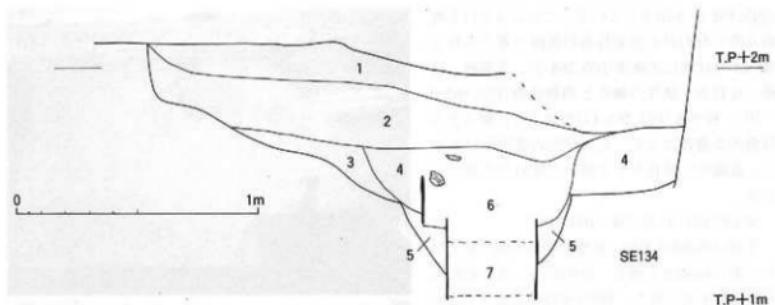
図5.151(中上) 平坦面4南半の遺構(南から)
右の釜がSE136、その左の木枠がSE135。
さらに左はSE134。

図5.152(中下) SE134上部(西から)

堀方に板材が1本だけ直立てていた。

図5.153(最下) SE134枠の上部(南東から)

白く写る土師皿は移動したものと思われる。



1: 10Y R4/2灰黄褐色中粒砂混砂質シルト
(SE134埋土)

2: 10Y3/1黒褐色シルトと7.5Y R2/1黒色
シルトと2.5Y8/8黄色粗砂の混合(SE
135埋土)

3: 5Y2/1黒色砂質シルトと5G Y5/1オリーブ
灰色シルトと2.5Y8/8黄色粗砂の混合
(SE134埋方)

4: 5Y2/1黒色細砂質シルトと7.5G Y4/1中
粒砂の混合(SE134埋方)

5: 2.5Y8/8黄色～5Y8/4淡黄色粗砂(SE
134埋方)

6: 5Y2/1黒色細砂質シルトと7.5G Y4/1暗
緑色細砂～中粒砂の混合(SE134埋内)

7: 10B G2/1青黒色中粒砂～粗砂混シルト
(SE134埋内)

8: 7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルトと細砂
の混合(SE134埋方)

9: 10Y3/1オリーブ黒色シルトと7.5Y6/2
灰オリーブ色細砂～中粒砂の混合(SE
135埋方)

10: 7.5Y8/2灰白色粗砂(SE135埋方)

11: 10Y8/1灰白色粗砂(SE135埋方)

12: 7.5Y4/1灰色砂質シルト混細砂(SE135
埋内)

13: 10Y4/1灰色中粒砂混砂質シルト(SE135
埋内)

14: N3/暗色細砂混シルト(SE135埋内)

15: 2.5Y7/1灰白色細砂～中粒砂粗砂混(SE
135埋内)

16: 10Y2/1黒色細砂質シルト中粒砂混(SE
136埋方)

17: 5G Y4/1暗オリーブ灰色細砂シルト混
(SE136埋方)

18: 10G4/1暗緑灰色細砂(SE136埋方)

19: 2.5G Y5/1オリーブ灰色細砂(SE136埋
方)

20: 5G Y6/1暗オリーブ灰色細砂(SE136埋
方)

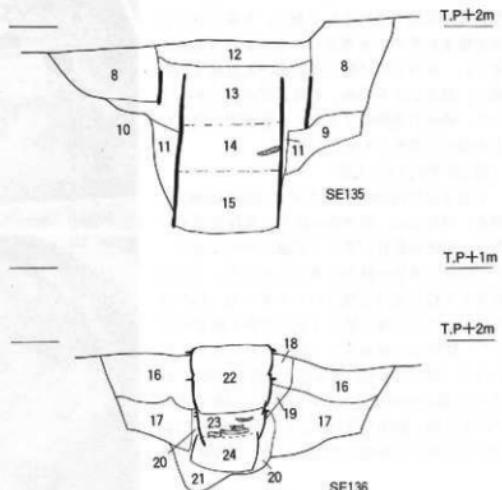
21: 10Y8/1灰白色粗砂(SE136埋方)

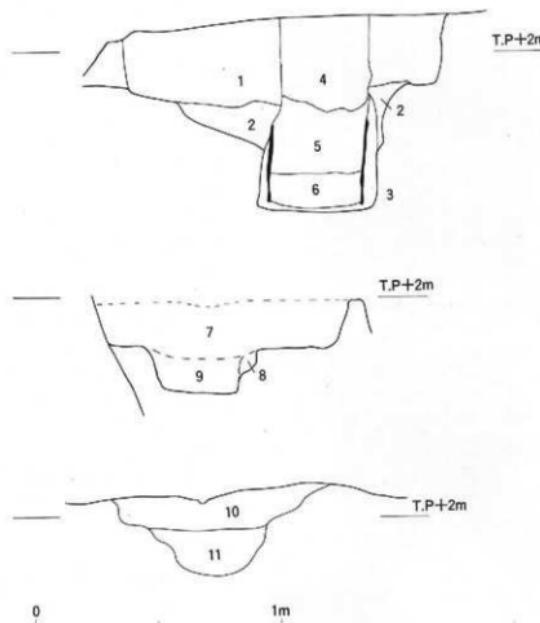
22: 10Y5/1灰色細砂～中粒砂シルト混(SE
136埋内)

23: 2.5G Y5/1灰色細砂～中粒砂シルト混
(SE136埋内)

24: 2.5G Y7/1暗オリーブ灰色細砂～中粒砂
(SE136埋内)

図5.154 SE134・SE135・SE136断面図 (S=1/20)





- 1: 7.5Y 2/2オリーブ黒色細砂混砂質シルト(SE137縫方)
 2: 10Y R 4/3にぶい黄褐色シルト混中粒砂(SE137縫方)
 3: 2.5Y 4/1青灰色細砂シルト混(SE137縫方)
 4: 10Y R 3/1黒褐色細砂混粘質シルト(SE137縫内)
 5: 5B G 2/1青黒色細砂混粘質シルト(SE137縫内)
 6: 10B G 5/1青灰色細砂(SE137縫内)

 7: 7.5Y 3/1オリーブ黒色中粒砂混砂質シルト(SE138縫土)
 8: 7.5Y R 2/1黒色中粒砂混シルト(SE138縫方)
 9: 2.5Y 4/1青灰色細砂質シルト中粒砂混(SE138縫内)
 10: 7.5Y 5/2段オリーブ色彩質シルト中粒砂混と7.5Y 4/2灰色シルトの混合土(SE139縫土)
 11: 5G Y 4/1段オリーブ灰色シルト混細砂(SE139埋土)

図5.155 SE137・SE138・SE139断面図(S=1/20)



跡とも考えられるが、断定できない。掘方からは瓦器碗、瓦質釜・壺等の細片が出土している。

SE138(図5.155)

平面は南北約110cm、東西約80cmの不整形な梢円形を呈し、深さ約35cmを測る。径約33cmの曲物を中央に置く。曲物は腐食が著しく詳細は不明である。枠内から土師皿(図5.164-16)、瓦器碗、瓦質釜等の細片が出土し、掘方から特徴的な遺物はなかった。

SE139(図5.155・163)

大半が調査区の境にあり、平面は径約150cmの不整形な円形を呈すると思われる。深さ80cmを測る。桶の一部と考えられる板材が出土したことから、径約60cmの桶を中央に置いて井戸枠としていたものと思われる。埋土からは他に土師皿等の細片が出土したが、遺物から時期を特定できない。

SK123

平面は一辺約80cmの方形を呈し、深さ約3cmを測る。土師皿等の細片が出土した。遺物から時期を特定できない。

SK124

調査区の東北隅に位置し、大半は調査区外となる。湧水のため、深さ約40cmで掘削を中止した。このため詳細は不明である。径約6mの円形を呈するものであろうか。瓦器碗、瓦質釜、平瓦等の細片が出土した。遺物から時期を特定できない。

6) その他の中世遺物(図5.165~169)

平坦面3東部の第Ⅲ(中世遺物包含)層からは5枚の貨幣が出土した(図5.165)。本調査で出土した中世の貨幣はこの5枚がすべてである。他に瀬戸の鉢(図166-1)、唐津と思われる皿(図166

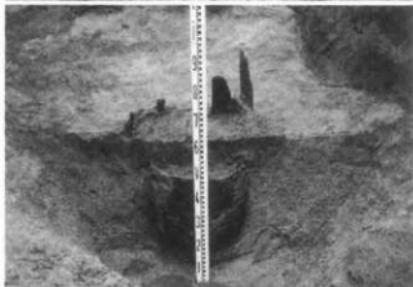


図5.156(最上) SE134上部の枠(北から)

図5.157(中上) SE134下部の枠(西から)

図5.158(中下) SE135上部の枠(北から)

図5.159(最下) SE135下部枠内の遺物出土状況
(北から)

枠内に見える板材は上部の枠が落ち込んだものと思われる。

-2・3)、青白磁蓋(図166-4)、青磁碗(図166-5)、瓦質花瓶(図166-6)、重量62.5gを測る瓦質土錘(図166-7)、備前壺(図166-8)、土師質犬形土製品(図166-9)、均整唐草文軒平瓦(図166-10)、巴文軒丸瓦(図166-11)、鬼瓦(図166-12)等が多数出土している。また、SD104の最上部から巻き上げられたと思われる美濃皿(図5.166-13)が近世溝SD02から、連珠文軒平瓦(図166-14)と巴文軒丸瓦(図166-15)が平坦面2の近世溝状遺構から出土している。

第Ⅲ(中世遺物包含)層出土遺物は検出された遺構を反映して、時期に幅をもっているが、最も新しい遺物として犬形土製品等があげられる。これらは16世紀のいわゆる織豊期に属するものと考えられ、第Ⅲ層が堆積した時期、すなわち近世平坦面の造成時期を示すものと考えられる。

第Ⅳ(中世整地)層は中世以前の土器や須恵器等を多量に含み、完形近くに復元できたものも数点ある(図5.169・5.168-2他)。図示した瓦器碗(図5.168-1)以外の中世遺物は微細な小片であった。

5 中世の調査の小結

中世の遺構は12世紀から15世紀までの建物や井戸等があり、調査地に集落が形成されていたことが明らかとなった。13世紀後半以降は建物や井戸等のセットである、いわゆる屋敷地によって集落が構成されており、SD104等の溝は屋敷地を方形に区画する溝の一部と考えられる。また、12世紀頃の軒瓦が出土しており、調査地あるいは周辺に寺院が存在していた可能性が高い。

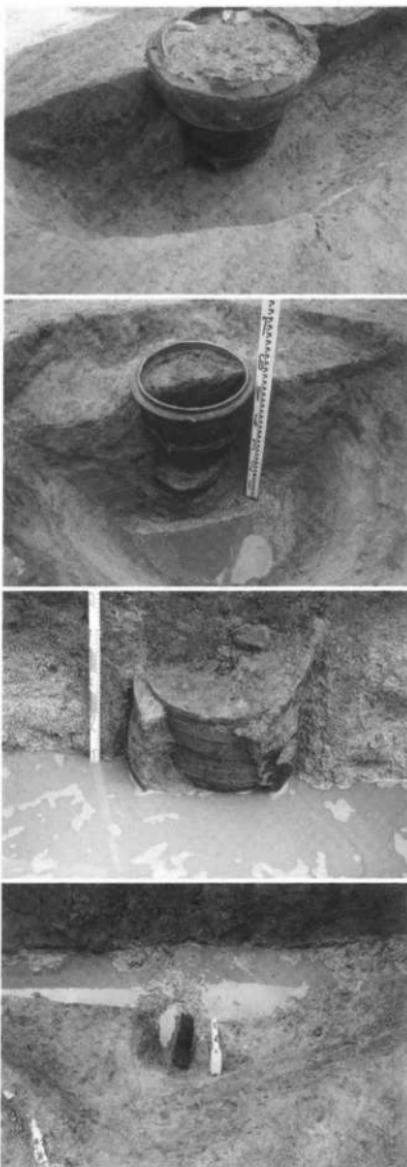


図5.160(最上) SE136上部の枠(東から)
平面の検出状況は図1.5を参照。

図5.161(中上) SE136下部の枠(東から)
上部は釜を下部は曲物を使用している。

図5.162(中下) SE137の枠(西から)
枠は曲物を使用している。

図5.163(最下) SE139の板材出土状況(東から)
板材は井戸枠の痕跡と考えられる。

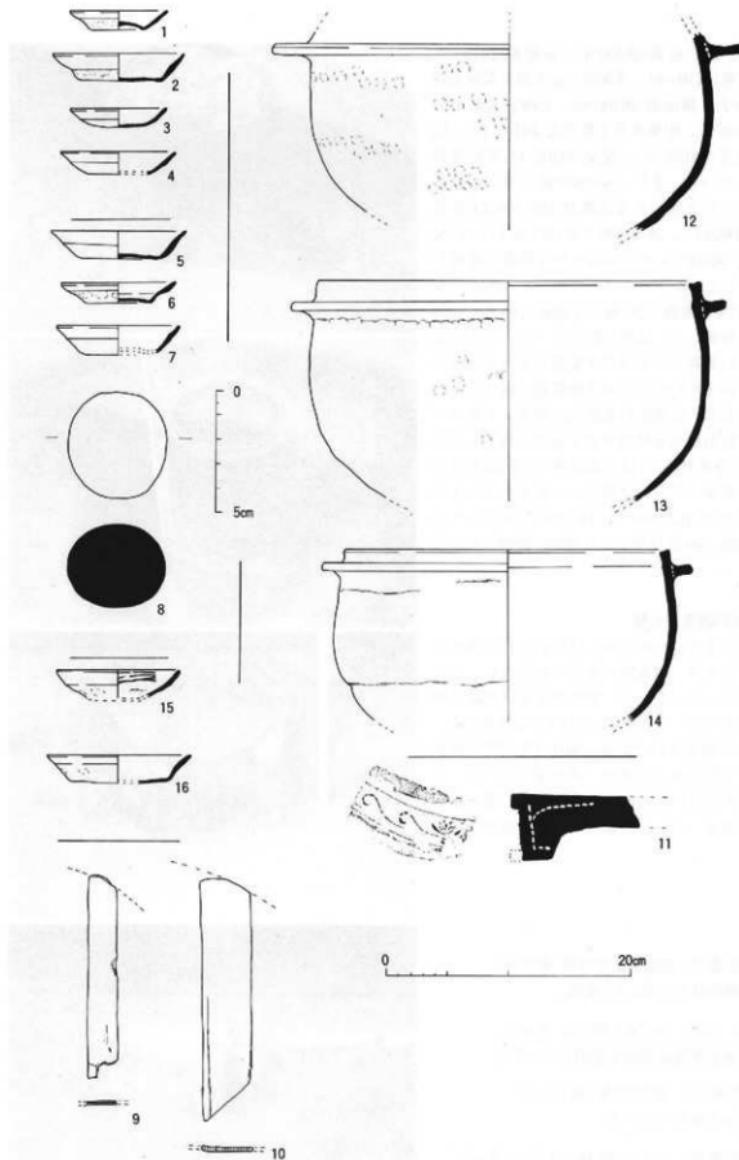


図5.164 SE134(1~4)・SE135(5~11)・SE136(12~14)・SE137(15)・SE138(16)出土遺物(8はS=1/2、他はS=1/4)

種類	SD103			SD104			備考	SD109			SD114			SD118		
	破片数	備考	破片数	百分率	破片数	百分率		破片数	百分率	備考	破片数	備考	破片数	百分率	備考	
土師小皿	108		120	★	215	★		175	台形1	41	★					
土師へそ小皿	19		36	31.58%	完形1	93	23.08%	完形1		351	完形2	174	36.63%			
土師大皿	9		4	★	8	★		4		2	★					
土師へそ大皿	1		5	4.39%		0	0.00%	1		0						
瓦器側面型	147		112	★	276	★		260		407	★					
瓦器輪大和型	10		2	★	2	★		4		0	★					
瓦器紐	6		1	★	5	★完形1		1		0	★					
白磁	2		1		4			9		2						
青磁	0		2		6			16		8						
天日茶碗	0		0		1			2		0						
陶磁器小計	2		3	2.63%		11	2.73%		27		10	2.11%				
土師釜	60		45	★	121	★		44		7	★					
土師小型釜	0		1	0.88%		0	0.00%	0		0						
瓦質盤	0		0		0			2		1						
瓦質釜	33		11		90			198		174						
瓦質三星釜	18		24		25			30		5						
瓦質鍋・釜小計	51		35		115			230		180						
瓦質甕	10		7		65			48		30						
瓦質火舟	6		7		22			38		10						
瓦質すり鉢	2		6		25			81		47						
瓦質小計	69		55	48.25%		227	56.33%		397		267	56.21%				
須恵器腰	7		2		11			7		0						
須恵器縫	25		15		60			56		20						
須恵器小計	32		17	★	71	★		63		20	★					
常滑腰・蓋	12		7	6.14%		34	8.44%		54		19	4.00%				
備前すり鉢	1		3		12			7		1						
備前腰・蓋	0		2		18			0		0						
備前小計	1		5	4.39%		30	7.44%		7		1	0.21%				
瀬戸御皿	0		0		0			0		2						
瀬戸捲輪	0		1		0			0		0						
瀬戸鉢	0		0		0			3		2						
瀬戸瓶	0		2	1.75%		0	0.00%	3		4	0.84%					
唐津	0		0	0.00%		1	0.25%	0		0						
陶器縫片	0		0		7	1.74%		3		0						
土器合計	476		114	100.00%		403	100.00%		1394		475	100.00%				
その他			食器具小計					食器具小計					食器具小計			
井戸杵	0		0	44	38.60%	0	104	25.81%	2		0	184	38.74%			
瓦類	59		51	調理具小計		223	調理具小計		201		101	調理具小計				
種子	2		0	53	46.49%	1	174	43.18%	3		0	242	50.95%			
自然石	10		14	貯蔵具小計		35	貯蔵具小計		15		14	貯蔵具小計				
焼石	2		1	16	14.04%	3	124	30.77%	2		4	49	10.32%			
結晶片岩(温石?)	0		0		0			0		2						
鏡石	3		2		4			1		5						
磁土	6		4		0			8		0						
鐵滓	1		0		0			6		5						
陶製円盤	0		0		0			1		0						
羽口	2		0		0			0		0						
骨(籠)	0		1		0			0		0						

表5.6 SD103・SD104・SD109・SD114・SD118出土遺物一覧

主体となる時期と異なるものも項目に含めた。★は合計破片数から除外したことと示す。14世紀中頃以降の土師皿はへそ皿と称す。釜・甕は体部の細片を数えているため実数よりも多いと思われる。三足釜は釜体を含まない。SD103とSD114は時期分類が不可能なため破片数のみを示した。供膳具とは碗・皿を調理具とは鍋・釜・竈・火舎・鉢・擂鉢等を貯蔵具とは蓋・壺を示す。

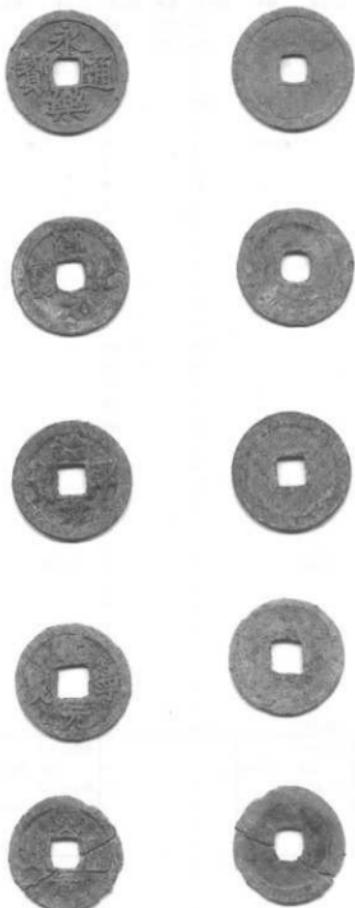


図5.165 第VII(中世遺物包含)層出土の中世貨幣(S=1/1)
上から順に永樂通寶、淳化元寶、治平元寶、熙寧元寶、
熙寧元寶(篆書)。右は裏面。

6 古代の調査成果・第VI(平安時代整地)層上面(図5.217)

中世同様、平坦面ごとに主要な遺構を述べる。

1) 平坦面1と平坦面2の遺構(図5.170~179) SE201(図5.170~173)

中世 SE102・SD106に切られる。平面は南北約130cm、東西約150cmの楕円形を呈し、深さ約85cmを測る。径約40cm、高さ15cm以上の曲物と径約31cm、高さ15cm以上を中央に置く。さらに最大で約30cmの大土器片を内径約40cmの円形に積み上げて井戸枠としているが、東北部を除いて枠内に崩れ落ちていた。枠内には土師器鉢(図5.174-1)1個体、土師器甕(図5.174-2)1個体、土師器羽釜1個体と須恵器甕(図5.174-3~5)10個体以上を使用していると思われる。また、須恵器甕にはSE202の枠内から出土したものと接合できたものがある。枠内の下位から、詳細な出土状況は明らかではないが、櫛(図5.176-1)、ケンボナシ製の刀子(図5.176-2)、ヒノキ製の簀串(図5.176-3)が出土した。これらは井戸を埋める際に用いられた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内からは他に切断された自然木(図5.176-4)や土師器、須恵器、製塙土器(図5.176-5~6)の細片が出土し、検出時には土師器、須恵器(図5.176-7~9)、製塙土器(図5.176-10)、丸瓦(図5.176-11)の細片が出土した。掘方からは微細な土器片が出土している。枠内から出土した土師器甕にはSE202の枠内から出土したものと同形のものがあり、SE202と近い時期の遺構と考えられる。なお本 SE201は古墳時代の河川2と重複して構築されている。

SE202(図5.177・177~179)

平面は一辺約130cmの不整形な台形を呈し、深さ約78cmを測る。径約38cm、高さ約30cmのヒノキ製の曲物をほぼ中央に置く。さらに木製品を積み上げると思われるが、木製品は腐食し土層に痕跡を残すのみで詳細は不明である。枠内

種類	初 鋸	備考
永樂通寶	永樂6(1408)年	明
淳化元寶	淳化元(990)年	北宋
治平元寶	治平元(1064)年	北宋
熙寧元寶	熙寧元(1068)年	北宋
熙寧元寶(篆書)	熙寧元(1068)年	北宋

第VII(中世遺物包含)層出土貨幣一覧

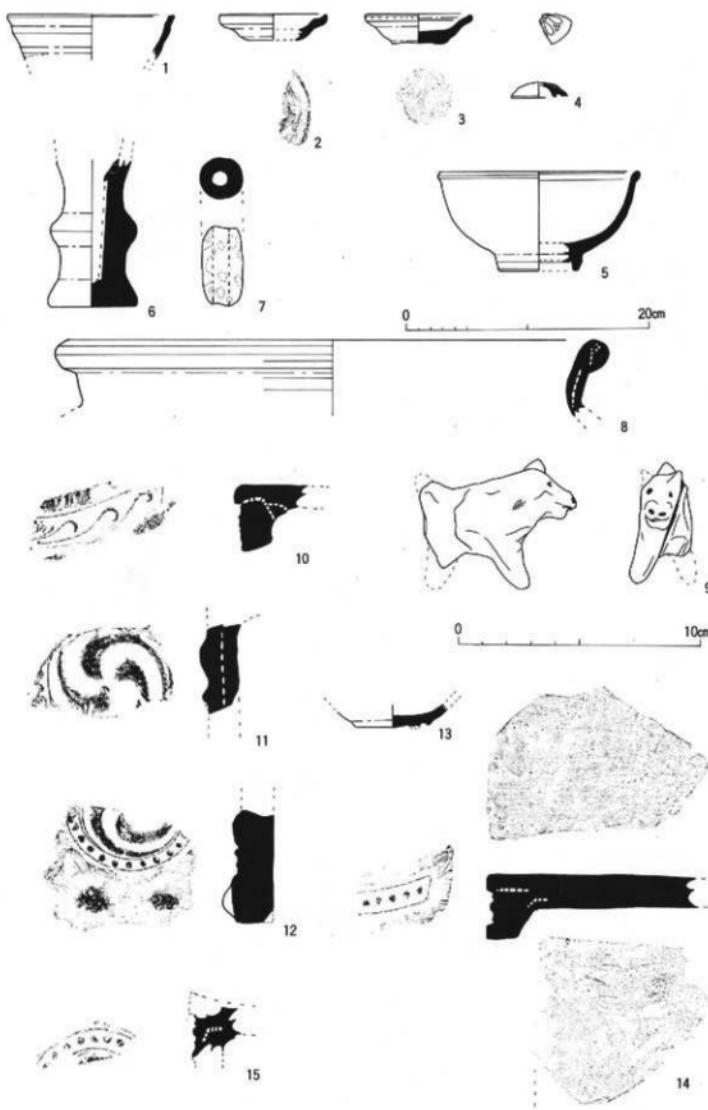


図5.166 その他の中世遺物(9はS=1/2、他はS=1/4)
1~12: 第VII(中世遺物包含)層、13: 近世溝SD02、14~15: 平坦面2の近世溝状遺構出土

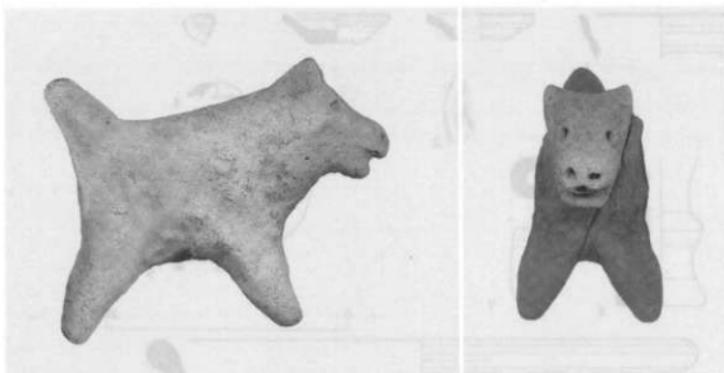


図5.167 第VII(中世遺物包含)層出土の大型土製品(5.166-9)
スキャナーで画像を取り込み、AdobePhotoShopで復元している。



図5.168 第VII(中世整地)層出土土器(S=1/4)



図5.169 第VII(中世整地)層出土遺物
中央の瓦器碗は図5.170-1、他は図5.211。

の底から約20cm上で完形の土師器碗3点(図5.176-12~14)が口縁を上に置かれたような状況で出土した。砥石(図5.176-15)と須恵器甕片を伴う。さらに約20cm上で口縁部を約1/3欠く土師器碗1点(図5.176-16)が口縁を上に置かれたような状況で出土した。この碗には別個体の同形態の碗の口縁部が欠損部を補うように重ねられていた。これらは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内からは他に土師器、須恵器、製塙土器(図5.176-17)、丸瓦の細片が出土した。掘方から特徴的な遺物はなかった。SE201と近い時期の遺構と考えられる。

SK201

平面は南北約110cm、東西約100cmの隅丸方形を呈し、深さ約36cmを測る。埋土は5G Y2/1黒色中粒砂～細砂混細砂質シルトで土師器、須恵器(図5.176-18)、製塙土器(図5.176-19~21)の細片が出土した。遺物から時期は特定できない。なお、付近に3基の土壤を検出したが、いずれも本SK201よりも小規模で特徴的な遺物はなかった。

SK202

中世 SK113に切られ、大半が調査区外にあり、詳細な規模等は不明である。深さ20cm以上を測る。埋土は5B4/1暗青灰色細砂混中粒砂で土師器碗の破片(図5.176-22)等が出土した。

2) 平坦面3 西部の遺構(図5.180~186)

SD201

南北方向で座標軸に沿う。断面は浅い皿状を呈し、南端を検出している。幅約80cm、深さ約25cm、長さ4.5m以上を測り、調査区外にのびる。土師器、須恵器(図5.186-1~3)、製塙土器の細片が出土した。遺物から時期は特定できない。

SD202・203(図5.180~183)

中近世の遺構に切られ、調査区の境にのびる。SD204・205と207・206を切る。ともに東西方向の溝で断面は台形を呈し、やや蛇行する。検出した両端を結ぶと座標軸から約10°東へ振る方位をとる。幅約40~90cm、深さ約30cm、長さ9m以上を測り、端を検出していない。SD202の検出した西端は東端より約12cm深く、SD203の西端は東端より約11cm深い。SD203からは土師器碗(図5.182-1)・甕(図5.182-2)、黒色土器A類碗(図5.182-3~4)、灰釉陶器(図5.182-5~6)、

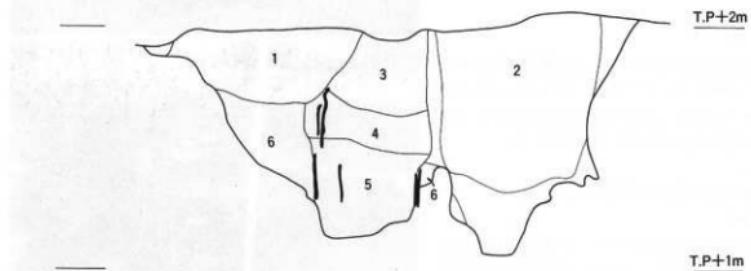
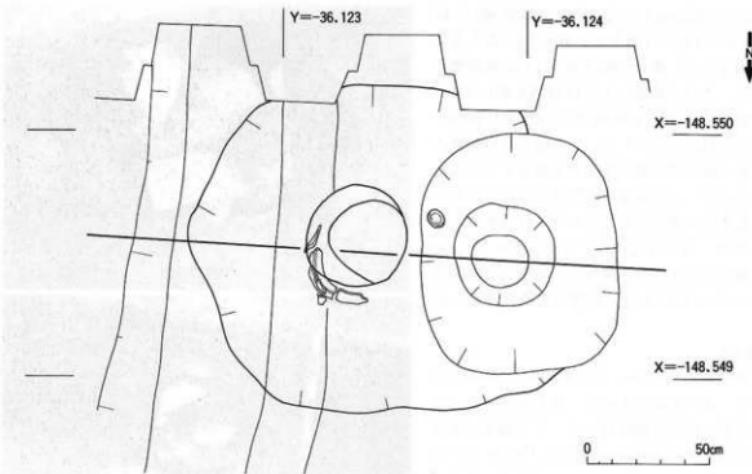


図5.170(上) SE201井戸枠を上方から見る(北から)

図5.171(中) SE201井戸枠検出状況(北から)

図5.172(下) SE201断面(北から)

右は中世井戸 SE102



- 1: 中世 SD106
- 2: 中世 SE102
- 3: 5Y3/2オリーブ黒色中粒砂混砂質シルト (SE201枠内)
- 4: 10Y3/1オリーブ黒色砂質シルト細砂～中粒砂混 (SE201枠内)
- 5: 10B G2/1青黒色細砂混砂泥 (SE201枠内)
- 6: 5B G4/1暗青灰色中粒砂混細砂質シルトと5B G6/1青灰白色シルトの混合 (SE201枠内)

図5.173 SE201平面図・断面図 (S=1/20)

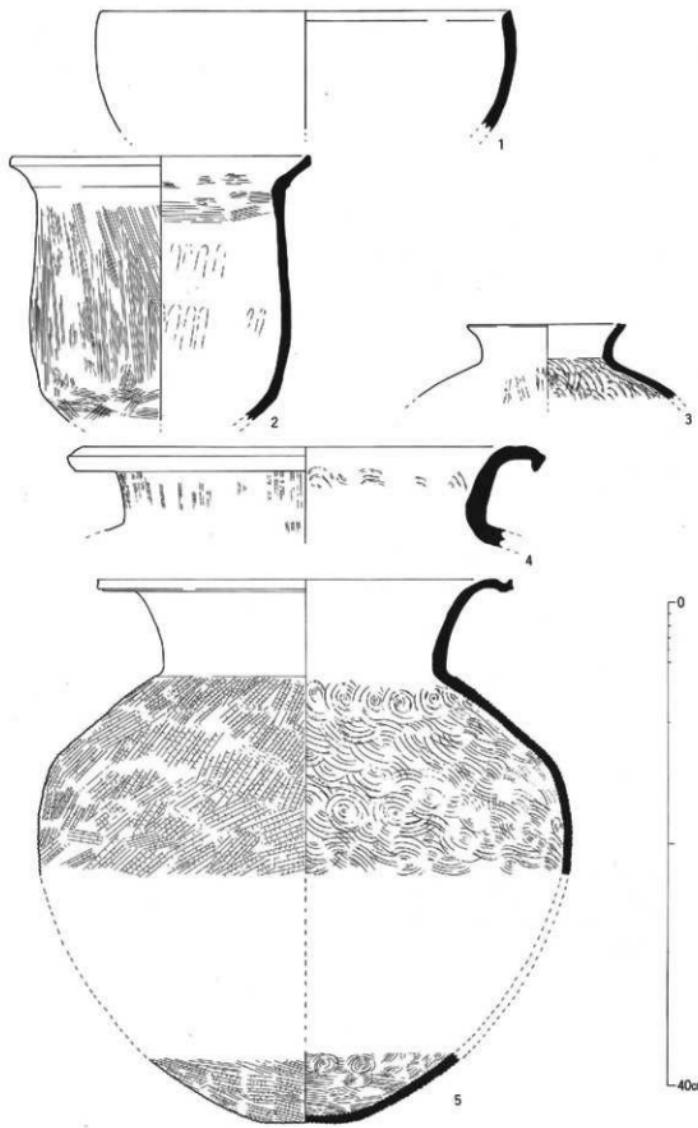


図5.174 SE201井戸枠に転用されていた土器 ($S=1/4$)

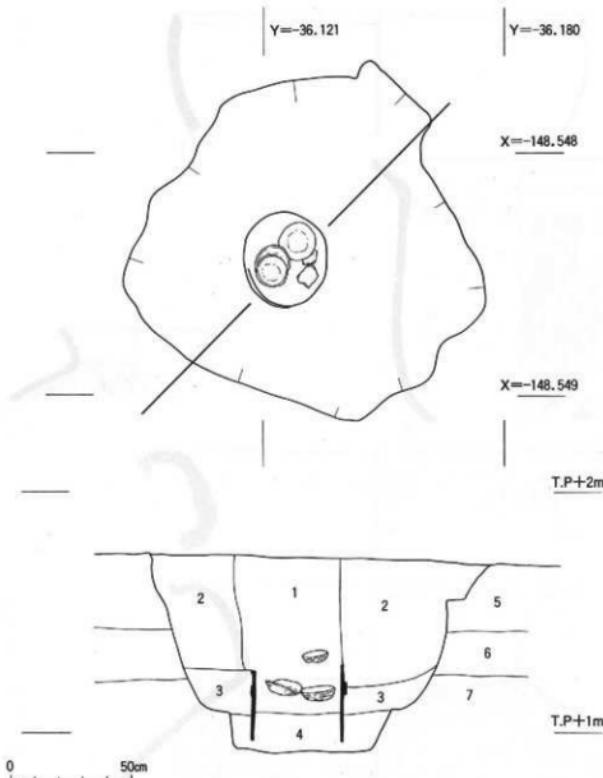


図5.175 SE202平面図・断面図 (S=1/20)

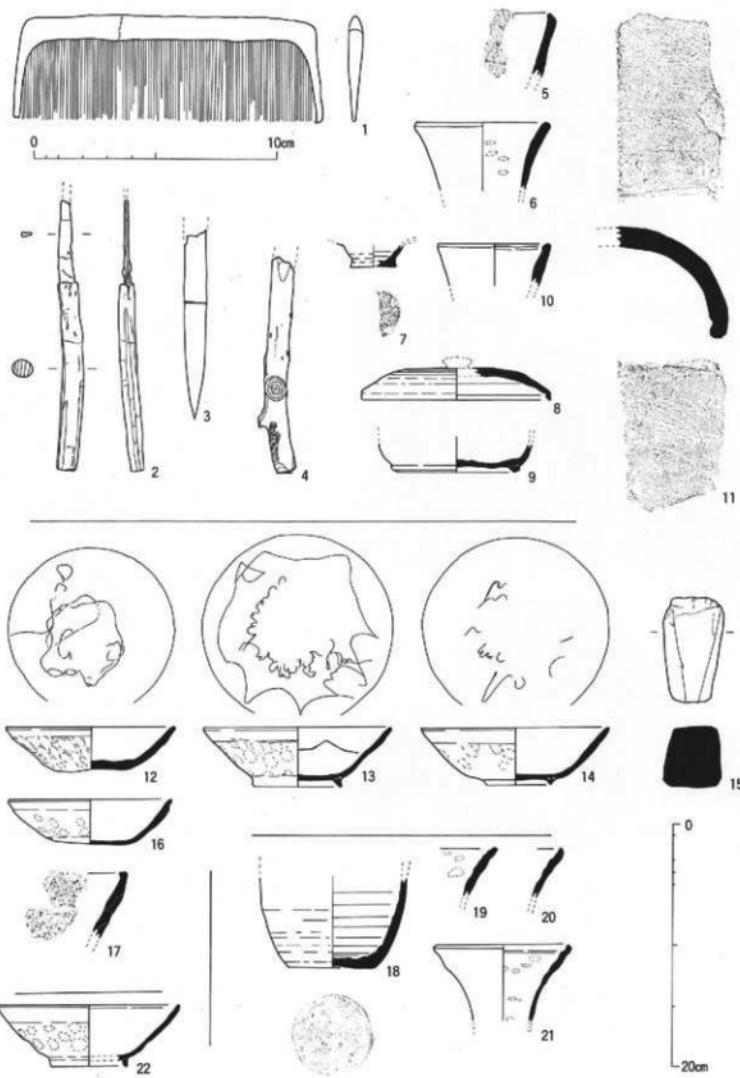


図5.176 SE201(1~11)・SE202(12~17)・SK201(18~21)・SK202(22)出土遺物(1はS=1/2、他はS=1/4)

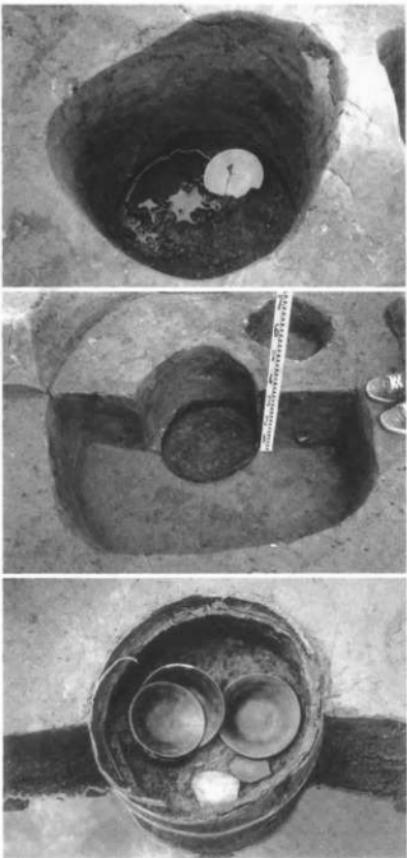


図5.177(上) SE202枠内上部土師器碗出土状況(東から
最も上に置かれた土師器碗(図5.176-16)である。

図5.178(中) SE202井戸枠検出状況(北東から)

図5.179(下) SE202枠内下部土師器碗(図5.176-12~14)
出土状況(北東から)

手前に白くみえるものは礎石(図5.174-15)

須恵器壺(図5.182-7)が、SD202からは黒色土器A類碗(図5.182-8~9)の破片が出土している。遺物の数量は表に示した(表5.7=P.180)。

SD204・205(図5.183)

中近世の造構やSD202・203に切られ、調査区外にのびる。ともに南北方向の溝でSD202-203と直交する方位をとり、断面は台形を呈する。幅約30~50cm、深さ約26~32cm、長さ4m以上を測り、端を検出していない。SD204の南端は北端より約17cm深い。ともに土師器、須恵器、黒色土器A類、製塙土器の細片が出土している。

SD206(図5.181・184)

中近世造構やSD203に切られ、調査区の境にのびる。東西方向の溝で断面はU字形を呈し、やや蛇行する。検出した両端を結ぶと座標軸から約16°東へ振る方位をとる。幅約40cm、深さ約15cm、長さ11m以上を測る。東端は中世溝SD100に切られ、Y=-36,098mより東にはのびない。検出した西端は東端より約11cm深い。土師器、須恵器、製塙土器の細片が出土している。

SD207(図5.183)

中近世造構やSD202・203に切られ、調査区外にのびる。やや蛇行する南北方向の溝でSD206と直交するかのような方位をとり、断面はU字形を呈する。幅約40~60cm、深さ約10cm、長さ5m以上を測り、端を検出していない。南端は北端より約8cm深い。土師器、須恵器、綠釉陶器、製塙土器の細片が出土している。

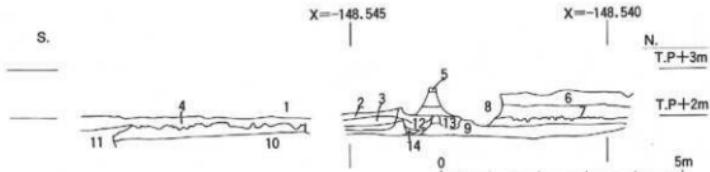
SD201(図5.185)

南北に並ぶ3個の柱穴を検出したにすぎないが、西が平坦面1となり、南北2間の掘立柱建物が削平されたと考えられる。建物は座標軸に沿う方位をとり、南北約4.4mを測り、柱間寸法は約220cmを測る。柱穴はおそらく一辺約50cmの隅丸方形を呈し、最深約60cmを測る。土師器、須恵器、黒色土器A類、製塙土器の細片が出土している。遺物から時期は特定できない。

3) 平坦面3東部の造構(図5.187~206)

SE203(図5.187~188)

調査区の境にのび、平面は約190cm四方の円に近い隅丸方形を呈すると思われる。深さ約90cmを測る。一辺約54cmの方形の木製品を中央に置き井戸枠としている。木製品は腐食し土層に痕跡を残すのみで詳細は不明である。より上部



- 1: 壤土・産乱・マサ土(第Ⅱ・第Ⅲ層)
 2: 2.5Y 4/1黄灰色シルト混中粒砂(近世～現代耕土・第X層)
 3: 10G 4/1暗緑灰色シルト～細砂(近世～現代耕土・第X層)
 4: 10G 4/1暗緑灰色シルト～細砂(近世耕土・第X層)
 5: 2.5Y 4/1黄灰色細砂～粘質シルト(中世遺物包含層・第VII層)
 6: 10Y R 4/3に似る黄褐色中粒砂混細砂シルト～シルト(中世遺物包含層・第VII層)
 7: 10Y R 3/3暗褐色中粒砂混細砂シルト～細砂(近世耕土・第X層)
 8: 2.5Y 5/3褐色中粒砂混細砂シルト～細砂(平安時代整地層・第VI層)
 9: 2.5Y 5/2暗黄色細砂(平安層)
 10: 25Y 3/1黄灰色粘質シルト～シルト(第V層)
 11: 近世 SE05
 12: SD023
 13: SD202
 14: SD206

図5.180 SD202・SD203・SD206付近西壁土層図(S=1/100)



- 1: 2.5G Y4/1暗オリーブ灰色中粒砂混シルト～細砂(SD201)
 2: 2.5Y 4/2暗黃色中粒砂混細砂質シルト(SD204)
 3: 7.5Y 3/2オーリーブ黒色中粒砂混シルト～細砂(SD203)
 4: 7.5Y 3/2オーリーブ黒色中粒砂混細砂～細砂と2.5Y 5/3黃褐色極細砂の混合(SD205)
 5: N4灰色中粒砂混粘質シルト～細砂(SD206)
 6: 7.5Y 3/2オーリーブ黒色中粒砂混細砂質シルト(SD206)
 7: 2.5Y 5/2暗黄色細砂とN4/4灰色シルトの混合(SD206)
 8: 10Y R 4/1褐色中粒砂混極細砂～細砂(SD202)

図5.181 SD201・SD204・SD203・SD206・SD202断面図(S=1/40)

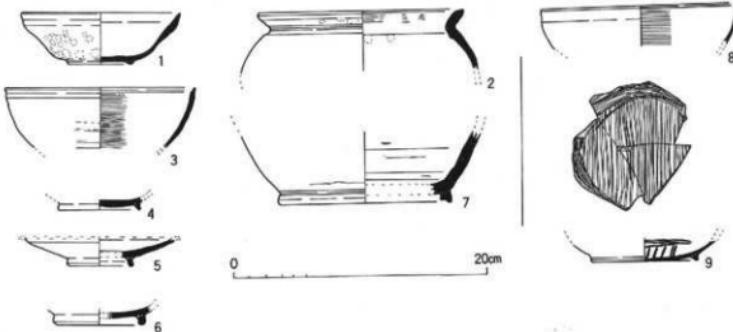


図5.182 SD202(8~9)・203(1~7)出土遺物(S=1/4)



に井戸枠が存在したと思われるが、埋土の状況から枠が抜き取られた可能性がある。枠内の底から完形の土師器壺1点(図5.194-1)と土師器皿1点(図5.194-2)が口縁を上に置かれたような状況で出土した。さらに完形近く復元できた土師器壺(図5.194-3)、土師器壺(図5.194-4)、半分まで復元できた土師器壺(図5.194-5)が転落または搅乱によって移動した状態で出土している。皿と壺の口縁部は打ち欠かれており、これらは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。枠内からは他に製塩土器の破片(図5.194-6~8)、須恵器細片が、掘方から土師器、製塩土器等の細片が出土した。

SE204(図5.189~198)

平面は約300cm四方の円に近い隅丸方形を呈し、深さ約150cmを測る。外径約63cm、高さ約38cmの一木を削り抜いたもの(図5.190-1)を中心よりやや北に置き、高さ25~30cmの板(図5.190-2~4)を一辺約75cmの方形に2段、合欠きはざで組み上げて井戸枠としている。方形の枠の周囲には長さ10~58cmの板を乱雑に打ち込んで補強している(図5.191)。そのいくつか(図5.191-

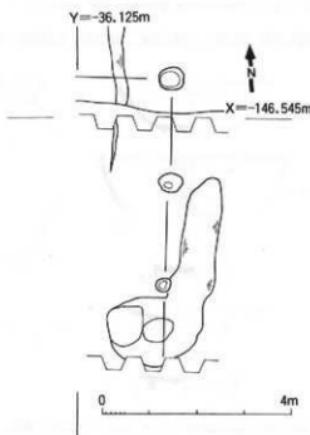
	SD202	SD203
綠釉陶器 瓢	1 0.67 %	0 0 %
綠釉陶器小計	1 0.67 %	0 0 %
灰釉陶器 皿	0 0 %	1 0.67 %
灰釉陶器小計	0 0 %	1 0.59 %
黑色土器A 瓢	11 7.33 %	8 5.33 %
黑色土器B 不明細片	0 0 %	1 0.67 %
黑色土器小計	11 7.33 %	9 5.29 %
土師器 壺・碗・皿	72 48 %	71 41.8 %
生駒西龍釜	11	20
甕	1	1
南河内型甕	17	31
煮炊具小計	29 19.3 %	52 30.6 %
鉢	1 0.67 %	0 0 %
不明細片	18 12 %	14 8.24 %
土師器小計	120 80 %	137 80.6 %
須恵器 壺	9 6 %	7 4.12 %
壺・甕	9 6 %	16 9.41 %
須恵器小計	18 12 %	23 13.5 %
土器合計	150 100 %	170 100 %
丸平瓦	1	3
製塩土器	0	5
壁土	5	5

表5.7 SD202・SD203出土遺物破片数一覧表

図5.183(上) SD202・203・207・204・205検出状況(西から)

図5.184(中) SD206検出状況(西から)

図5.185(下) SB201平面図(S=1/100)



1~2)にはほぞ穴が切られ、転用品と考えられる。さらに上部に井戸枠が存在したと思われるが、埋土の状況から枠が抜き取られた可能性がある。

下部井戸枠(図5.190-1)の側面には2個の突起を対称に切り残す。突起は長辺約10cm、短辺約7cmの梢円形を呈し、厚さ約3cmを測る。運搬もしくは据え付けの縄を掛けるための突起であろう。最上段の板(図5.190-2)の断面は薄鉢状を呈し、腐食によるものではなく本来の形状を残している可能性がある。

枠内のある点から約40cm上で完形の土師器皿1点(図5.194-9)が口縁を上にして下部井戸枠の上端に置かれたような状況で出土した。これは井戸を埋める際に行われた祭祀行為の痕跡と考えられる。

底から約70~90cm上(上部井戸枠上段内)では腐食した板が集中していた。長さ約55cm、幅約10cm、厚さ約3cmの長方形を呈するものが数点あり、井戸枠の板に近い大きさをもつ。ほぞ等の加工痕がまったく残っていないため断定できないが、井戸枠が転落、もしくは落とし込まれた可能性がある。これらとともに腐食の著しい曲物底板(図5.194-10)、用途不明の木製品(図5.194-11)が出土している。陽物であろうか。

枠内からは他に土師器(図5.194-12~14)、須恵器、黒色土器A類・B類、製塙土器の細片が、掘方から同様な土器類と丸平瓦の細片が出土した。埋土からは土師器(図5.194-15~16)、須恵器、黒色土器A類(図5.194-17~19)、綠釉陶器、灰釉陶器、製塙土器、丸平瓦の細片等が出土している。

本SE204には南に南北方向の溝(SD208)が接続する。SD208は座標軸に沿う方位をとり、断面は緩やかなV字形を呈する。幅約75cm、深さ約32cm、長さ5.6m以上を測り、端は中世SD118に切られ検出していない。検出している南端と北端の高さはほぼ等しい。SE204から約4.7m南ではSD208に東西方向の溝(SD209)が接続する。SD209はやや蛇行するもののSD208と直交する方位をとり、断面はU字形を呈する。SE205を切る。幅約40cm、深さ約5cm、長さ5.5m以上を測り、東端は平坦面4に切られ検出していない。検出している東端は西端より約4cm深く、接続部ではSD208がSD209より約10cm深い。SD208から土師器(図5.194-20)、須恵器、黒色土

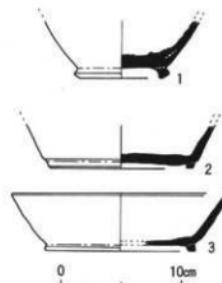


図5.186 SD201出土遺物(S=1/4)



図5.187 SE203枠内遺物出土状況(北から)

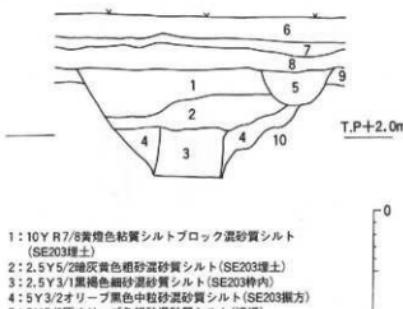
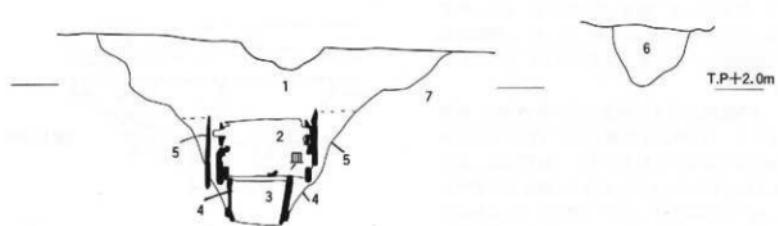
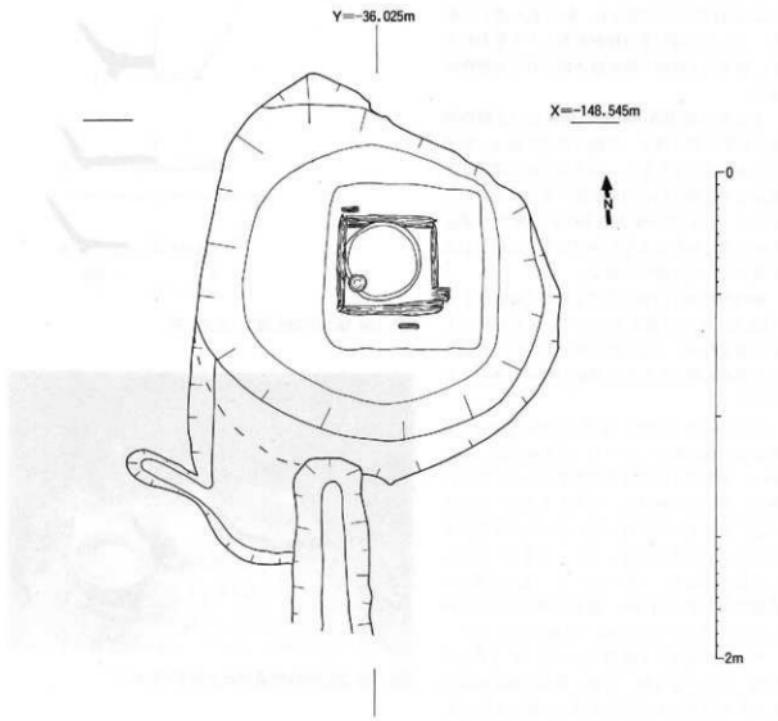


図5.188 SE203断面図(S=1/40)



- 1: 2.5Y3/1黒褐色細砂混砂質シルト(SE204埋土)
- 2: 2.5Y3/1黒褐色細砂混砂質シルト(SE204枠内)
- 3: 2.5Y6/1黄灰色中粒砂～粗砂(SE204枠内)
- 4: 肉桂色V-3層(SE204枠内)
- 5: 2.5Y3/1黒褐色細砂混砂質シルト(SE204枠内)
- 6: 10YR3/1黒褐色細砂質シルト中粒砂混(SE204枠内)
- 7: 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂(V-3層)

図5.189 SE204平面図・断面図(S=1/20)

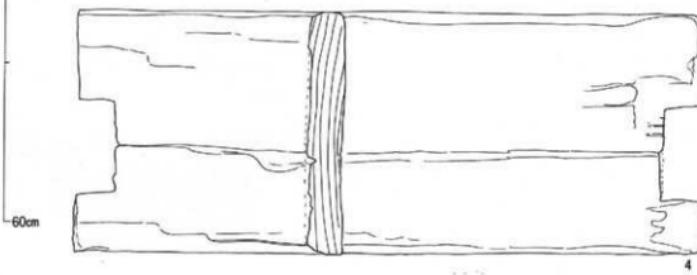
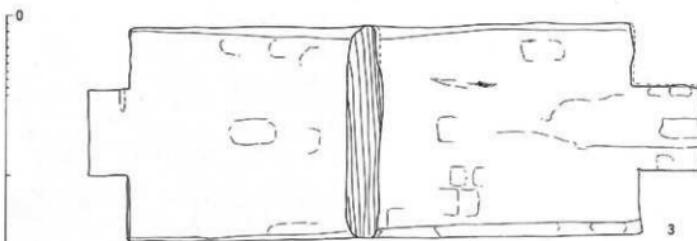
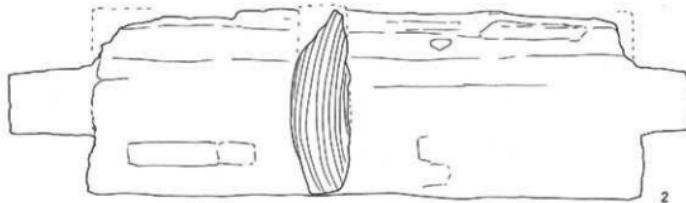


図5.190 SE204井戸桿(S=1/6)

1：下部井戸桿 2：上部上段東井戸桿 3：上部下段東井戸桿 4：上部下段南井戸桿

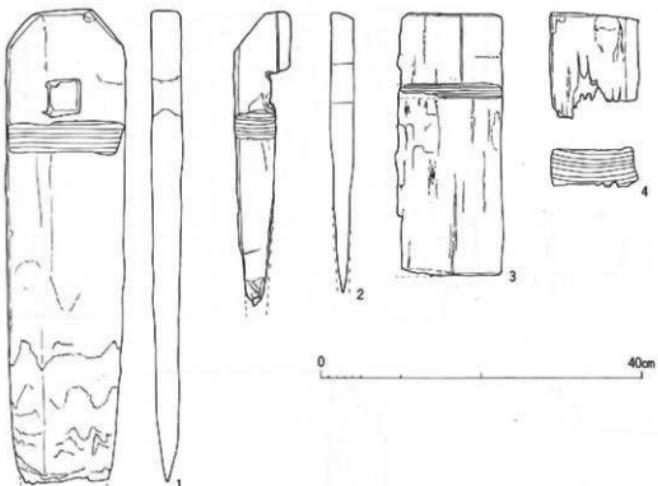


図5.191(上) SE204上部井戸枠の周囲に打ち込まれた板($S=1/6$)

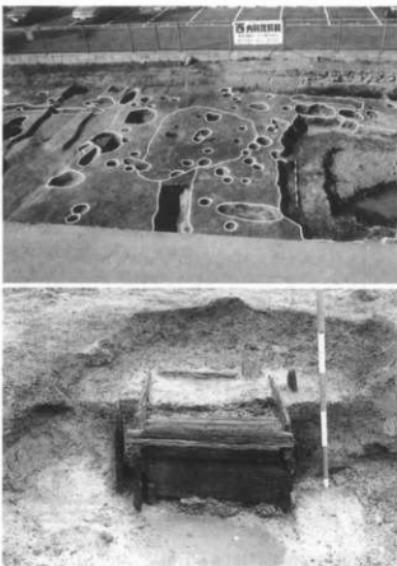
1はスギ製、2はネズコ製。

図5.192(中) SE204検出状況(南から)

写真中央の大きな隅丸三角がSE204、南の南北方向の溝はSD208。

ポールの右、一段低い方形のものは協会試掘B地区。周囲の白線は土壤として調査を行ったが、試掘によって周囲の地層が落ち込んだものと考えられる。

図5.193(下) SE204上部井戸枠(西から)



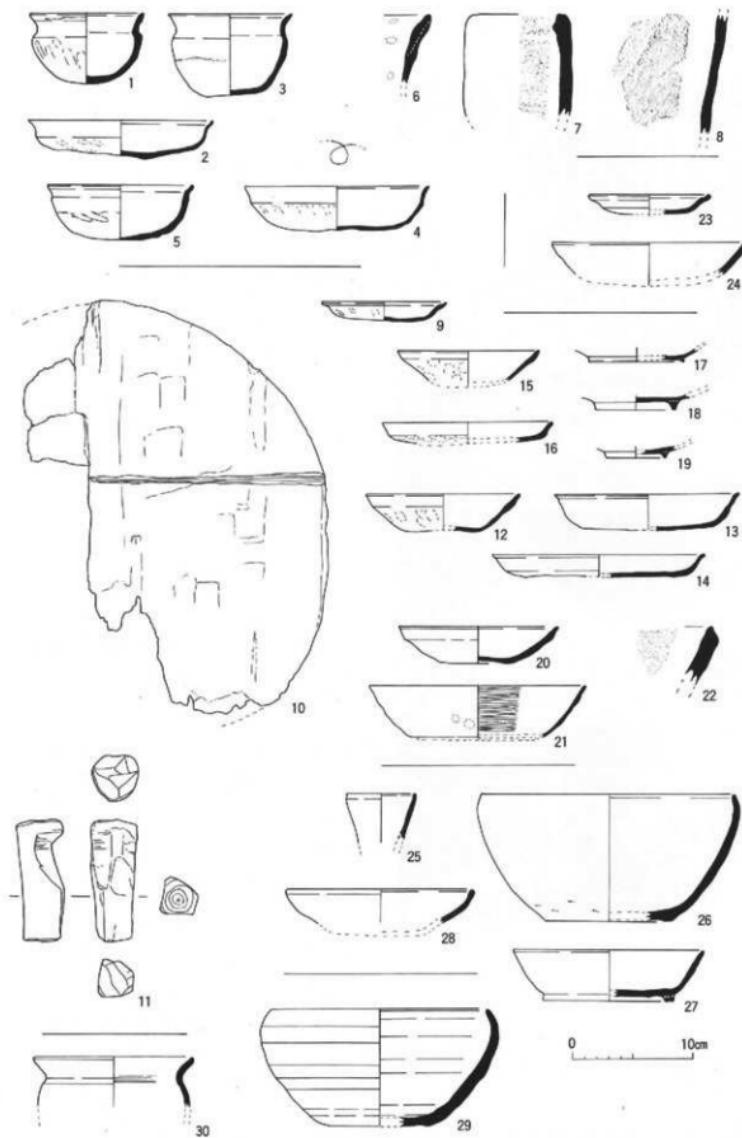


図5.194 SE203(1~8)・SE204(9~19)・SD208(20~24)・SE205(25~28)・SK204(25~28)・SK206(29)・
SK208(30)出土遺物(S=1/4)



図5.195(上) SE204枠内土師器皿(5.194-9)出土状況(北から)
図5.196(中) SE204下部井戸枠(西から)

図5.197(下) SE204下部井戸枠を取り上げた直後
突起は左右対称に付く。この後、水漬保管中に縦に
8分割に割けた。

器A類(図5.194-21)、製塙土器(図5.194-22)の
細片が出土している。SD209からは同様な土器
類と綠釉陶器の細片が出土した。

SD208・SD209はSE204から取水した水を引
く施設の一部と考えられ、同時に埋められたも
のと思われる。

SK205(図5.199~201)

SD209に切られる。平面は約120cm四方の円
に近い隅丸方形を呈し、深さ約65cmを測る。径
約38cmの木製品を中心置く。本製品は腐食し
土層に痕跡を残すのみで、数個が積み上げられ
ていたと思われるが詳細は不明である。枠内か
ら土師器(図5.194-23)、須恵器、製塙土器の細
片が出土し、掘方から土師器碗(図5.194-24)等
の細片が出土した。

SK203

中世 SD114等に切られ、全体の形状等は不
明である。深さ約15cmを測る。埋土は10Y R4
/2灰黄色中粒砂混砂質シルトで土師器、須恵
器の細片が出土した。遺物から時期は特定でき
ない。

SK204

平面は南北約150cm、東西約180cmの楕円形を
呈し、深さ約64cmを測る。埋土は上(2.5Y4/1
黄灰色粗砂混砂質シルト)下(2.5Y3/1黑褐色
砂質シルト混中粒砂)2層に分かれる。須恵器壺
(図5.194-25)・鉢(図5.194-26)・坏(図5.194-
27)等の破片と土師器(図5.194-28)、製塙土器
の細片が出土した。

SK205

大半は調査区の境にあり、おそらく平面は径
約140cmの円形を呈すると思われる。深さ約42
cmを測る。埋土は2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
混中粒砂で土師器、須恵器の細片が出土した。
遺物から時期は特定できない。

SK206

平面は径約120cmの円形を呈し、深さ約50cm
を測る。埋土は2.5Y3/1黒褐色砂質シルト混
中粒砂で土師器細片、須恵器鉢(図5.194-29)
の破片が出土した。

SK207

平面は南北約110cm、東西約100cmの隅丸方形
を呈し、深さ約40cmを測る。埋土は2.5Y3/1
黒褐色砂質シルト混中粒砂で土師器、須恵器の
細片が出土した。遺物から時期は特定できない。

SK208

平面は南北約60~76cm、東西約130cmの不整形な隅丸方形を呈し、深さ約35cmを測る。埋土は2.5Y3/1墨褐色砂質シルト混中粒砂で土師器壺(図5.194-30)、須恵器、製塙土器の細片が出土した。なお、北に隣接する不整形な溝状の土壤は深さ約10cmを測る。

SB202(図5.202~206)

中世 SE126等に切られる。東西3間、南北2間の掘立柱建物で、座標軸に沿う方位をとる。東西約5.4m、南北約3.9mを測り、柱間寸法はばらつきがあるものの約180cmを測る。柱穴は径約50~70cmの円形や梢円形を呈し、最深約45cmを測る。一つを除いて時間の都合で柱痕跡は確認していない。土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器の細片が出土している。

北西隅の柱穴には黒色土器A類皿(図5.202-1)で蓋をした土師器壺(図5.202-2)が横に寝かせた状態で埋納されていた。壺は柱穴の中央より西、やや北に置かれ口縁を東へ向ける。壺の内部は底から約5cmまで10Y R3/1暗褐色細砂質シルトが堆積し他は空洞であった。細砂質シルトは精良で、わずかに微細な炭化物を含むほか砂粒や土器等の固形物は含まない。錫等の金属製品の痕跡も見られなかった。皿は摩耗が著しく、壺の外側には煤が付着していることから、日常生活で使用されていたものと考えられる。これらは柱からはずれた掘方内に埋納されたと思われ、建物を建築する際に使用された地鎮具と考えられる。内部に堆積していた細砂質シルトの科学的分析は行っていないが、有機質の内容物が変化したものと思われる。

SB202の北では組み合う位置に1基のピットを検出している。建物の柱穴と同様な形状で深さ約20cmを測る。口縁を約1/5欠く土師器皿(図5.202-3)が口縁を上にして置かれたような状況で出土した。

4) 平坦面4の遺構(図5.207~209)

SE206(図1.4・図5.207~208)

大半は調査区外にあり、中世 SK124に切られる。このため全体の形状等は不明である。深さ約60cmを測る。内径約31cm、高さ約45cmの円筒埴輪の胴部(図5.208-2)を置き、井戸枠としている。埴輪の透かし孔は土師器壺の体部片で塞がれていた。より上部に井戸枠が存在したと思われるが、埋土の状況から枠が抜き取られた可能性がある。枠内から土師器、須恵器の細片が



図5.198(上) SE204下部井戸枠の突起細部

図5.199(中) SE205棟出状況(南西から)
大きな丸は左から中世 SE132、中世 SE
133、SE205。
東西方向の溝は SD209。

図5.200(下) SE205掘削状況(北から)
左の石は堀方内のもの。

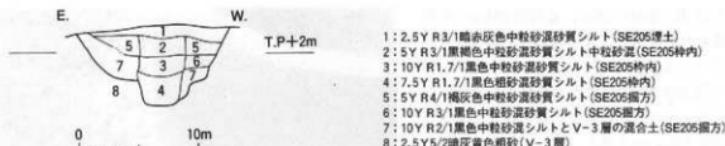


図5-201 SE450断面図(S=1/40)

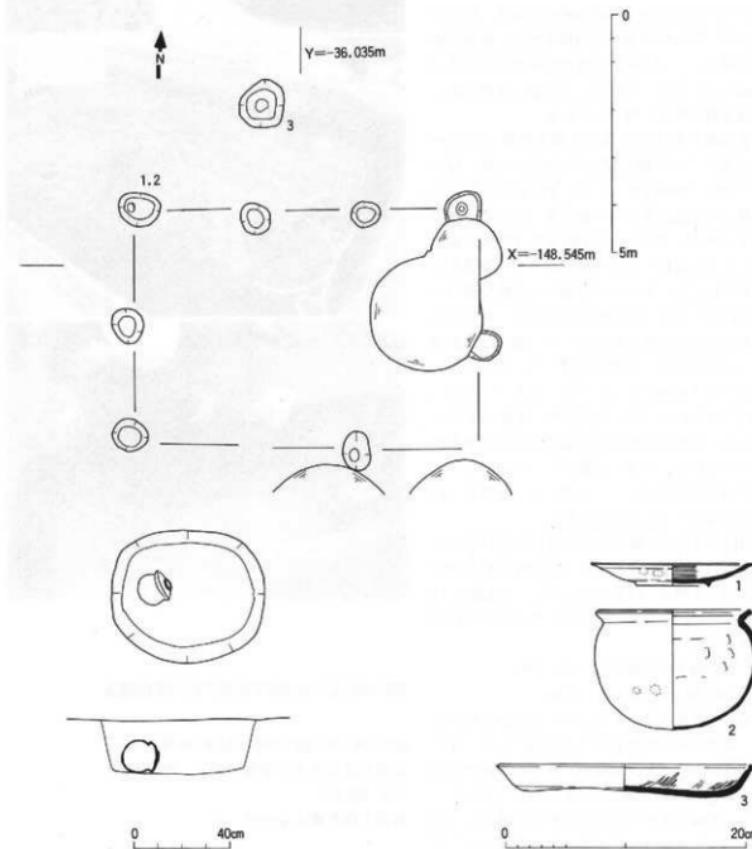


図5.202 SB202平面図($S=1/100$)・北西隅柱穴土器出土状況($S=1/20$)・出土遺物($S=1/4$)

出土し、掘方から特徴的な遺物は無かった。埋土からは土師器壊の細片(図5.208-1)が出土した。

SD210

大半は調査区外にあり、全体の形状等は不明である。座標軸から約22°東へ振る方位をとり、深さ40cm以上を測る。埋土は他の遺構とは異なり、流水による堆積層から成る。一部では地震による変形構造とも思われる踏み込み状の凸凹が観察された。第V-3層に相当する堆積層の一部とも思われるが、ごく一部を調査したに過ぎず、判然としない。流路の可能性もあるが、溝とした。土師器(図209-1~6)、須恵器(図209-1~6)、黒色土器A類、平瓦(図209-1)の破片等が出土した。

5) その他の古代遺物(図5.210~213)

第VI(平安時代整地)層からは古墳時代の土器や埴輪とともに土師器(図5.210-1~11)、須恵器(図5.210-12~17)、土錘(図5.210-18)、丸平瓦(図5.210-19)等が出土した。土錘は土師質で重量54.4gを測る。本来はV-4層に含まれていたものか、第VI層上面では黒色土器A類耳皿(図5.211-1)や金銅製帶金具(図5.211-2)等が出土している。

中世以降の遺構や包含層から多くの古代の遺物が出土している。

第VII(中世整地)層からは完形や1/2程度に復元できた土師器(図5.211-3~13)や須恵器(図5.211-14~16)、黒色土器A類(図5.211-17)等(図5.169)が出土している。

貨幣は中世SB105柱穴から出土した万年通寶(初鑄760年)(図5.213上)、第Ⅲ(中世遺物包)層から出土した神功開寶(初鑄765年)(図5.213下)の2枚がある。

軒瓦は中世SD103から偏行唐草文が1点出土



図5.203(最上) SB202付近(南から)

図5.204(中上) SB202北西隅柱穴の土器出土状況(北から)

図5.205(中下) SB202北西隅柱穴断面(南から)

図5.206(最下) SB202北西隅柱穴出土壺の内部に堆積していた細砂質シルト

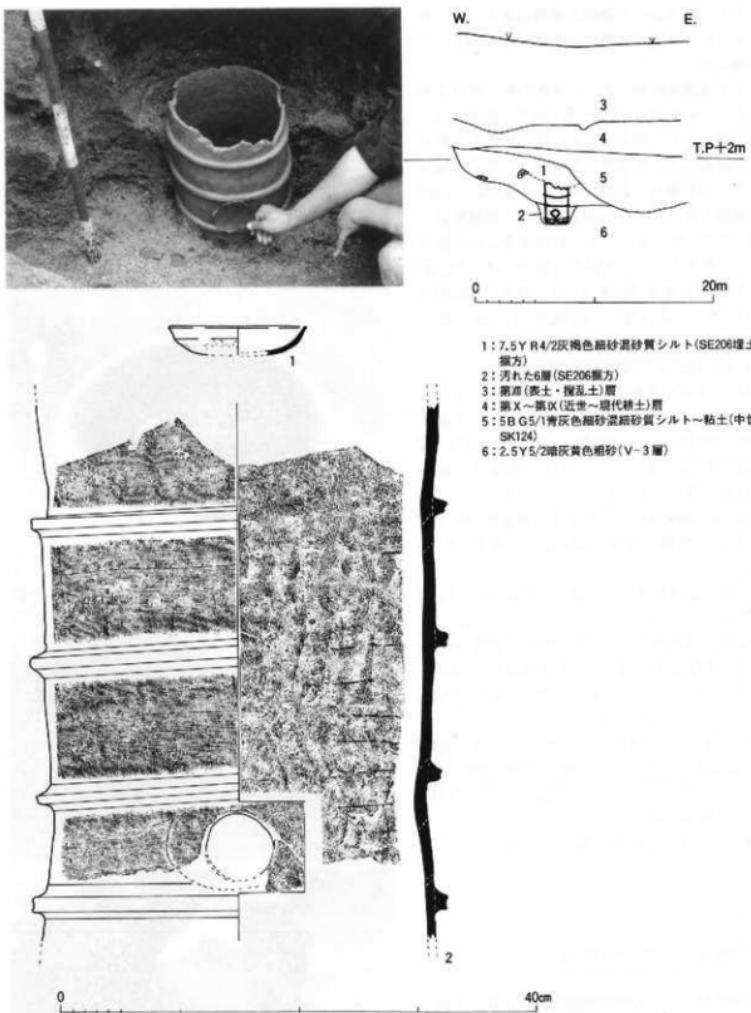


図5.207(左上) SE206井戸枠(南から)

手で添える土器は埴輪の透かしを塞いでいた土師器壺体部片

図5.208(右上・下) SE206断面図(S=1/40)・出土遺物(S=1/4)

した(図5.211-18)。調査地南方の約1kmの若江遺跡に出土例がある。

観には須恵器円面鏡(図5.211-19)と、須恵器碗の内面を転用したもの(図5.211-20)があり、ともに第Ⅳ(中世遺物包含)層から出土した。

縁釉陶器、灰釉陶器、黒色土器B類、製塙土器についても出土位置を問わずに述べる。

縁釉陶器はすべてを合わせて22点出土した。ほとんどは細片で、碗、皿、鉢、壺等がある(図5.211-21-26)。

灰釉陶器もほとんどが細片で、出土総数は20点を数える。皿、壺等がある(図5.211-27-35)。

黒色土器B類は8点前後が出土したに過ぎない。碗、皿、耳皿等があり、ほとんどが細片(図5.211-36-38)。

製塙土器は出土総数1073点を数え、重量にして10,204kgを測る。ほとんどが細片であり、器形が推測されるものは少ない。主に調整によって大きく三つに分類される。

1) 内面がなでによって調整されるもの。356点

を数え重量3273.8gを測る。碗状の薄手のもの(図5.212-1)、口縁端部を丸く收める厚手のもの(図5.212-2~3)、口縁がラッパ状にひらく薄手のもの(図5.212-4~8)等がある。

2) 内面がはけによって調整されるもの。貝殻によって調整されるものを含む。37点を数え重量253.9gを測る。すべて細片で図示できるものはない。

3) 内面に布目を残すもの。335点を数え重量4006gを測る。布目には粗密があり、絞り目状の縦筋が見られるものもある(図5.212-11)。口縁端部をへら切りし、平坦面をつくるもの(図5.212-9)、口縁内面に一条の丸い突起を巡らせるもの(図5.212-10)、口縁端部を尖らせるもの(図5.212-11~16)等がある。

これらは大阪湾沿岸から九州北部にかけての瀬戸内海沿岸各地よりもたらされたと考えられる。なお、他に摩耗によって調整を観察できないものが345点、重量2670.3gである。

7 古代の調査の小結

古代の造構は9世紀から10世紀までの建物や井戸等があり、調査地に集落が形成されていた

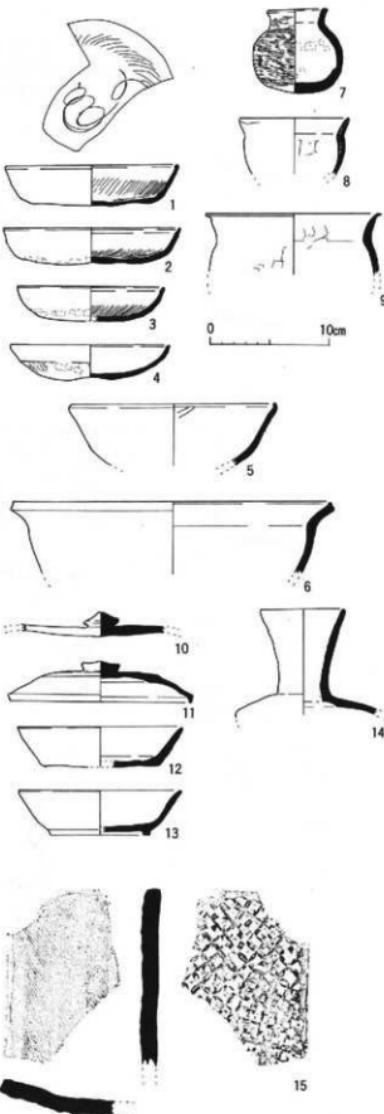


図5.209 SD210出土遺物(S=1/4)



図5.210 第VI(平安時代整地)層出土遺物(S=1/4)

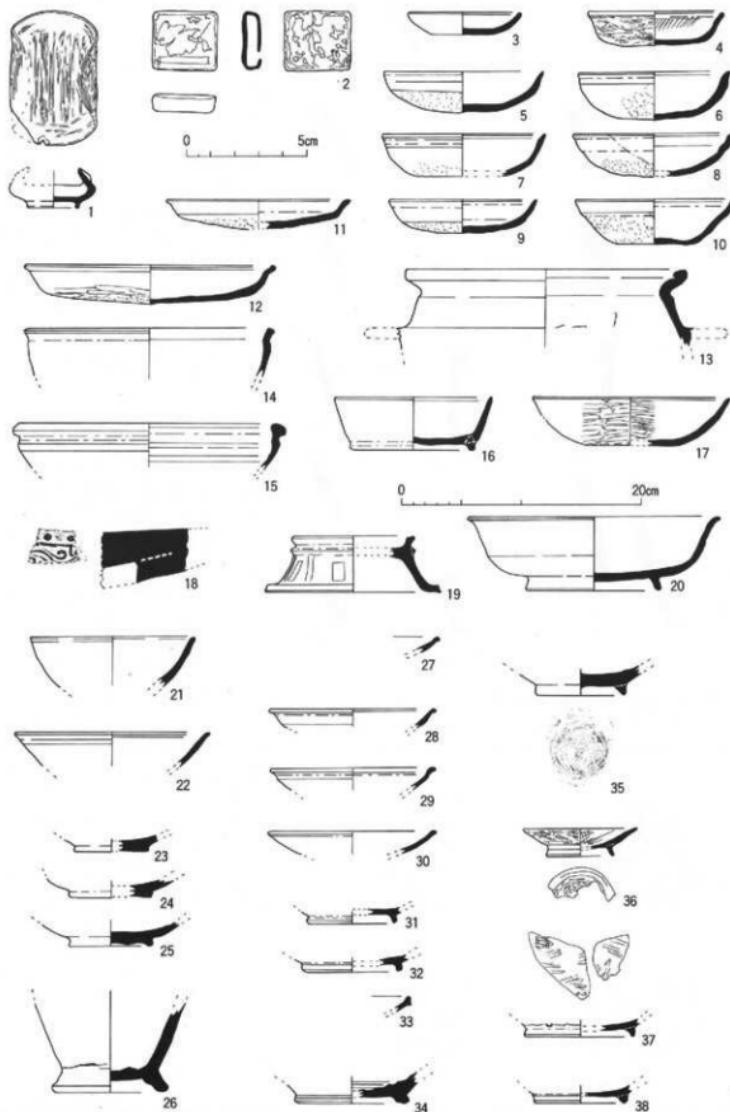


図5.211 第VI(平安時代整地)層上面(1~2)・第VII(中世整地)層(3~17)・第VIII(中世遺物包含)層(19~20)
出土遺物(2はS=1/2、他はS=1/4)
緑釉陶器(21~26)・灰釉陶器(27~35)・黒色土器B類(36~38)



図5.212 製塩土器(S=1/4)一部再掲
4=194-6・5=176-19・6=176-20・7=176-21・8=176-6・
10=194-7・14=176-5・15=176-17・16=194-22

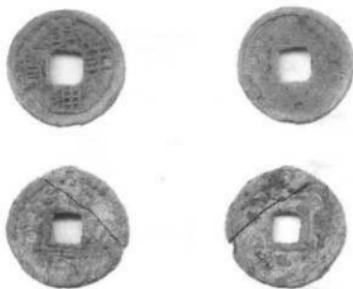


図5.213 古代貨幣(S=1/1)
上は万年通寶、下は神功開寶。右は裏面。

ことが明らかとなった。建物は2棟を検出したにすぎず、その配置は不明であるが、約86m離れた2棟の建物やSE204に接続するSD208が国土座標軸に沿う点が注目される。

8 歴史時代のまとめ(図5.214~229)

1)はじめに

今回の瓜生堂遺跡第45次発掘調査では縄文時代から現代に至る遺構や遺物が発見され予想以上の成果が得られた。ここでは調査区全体で検出された歴史時代集落等について想像を交えつつ述べる。その前に今回の調査で明らかとなった点も含めて再度、位置と地理的環境等について触れておきたい。

今回の調査地は『和名類聚抄』によれば旧大和川の分流路である長瀬川と玉串川に挟まれた河内国若江郡に位置する。若江郡には弓削郷、刑部郷、新治郷、錦部郷、巨麻郷、川俣郷、余部郷の名が知られ、調査地周辺の郷名は余部郷とも思われるが、断定できない。

周辺には一辺が約109mの正方形を呈する区画で構成される条里地割が遺存し、この条里地割はほぼ正南北の方位をとっている。条里の想定はいくつかなされているが、文献にみえる条里の呼称については手がかりの少なさのため不明な点が多い。ここでは『布施市史』の想定を拡大解釈した条里地割の復元を用い、呼称はこれに従うこととした。解釈の理由は1)条里の想定は地図に遺存する地割にもとづく。調査地周辺の近代的な地図で最も古いものは1899(明治32)年に大日本帝国陸地測量部が発行した「生駒山」と「八尾」であるため(以下仮設地形図)、これと条里想定図を見比べた。2)近世西岩田村の南辺を通る東西道路と坪界線は一致し、近世瓜生堂村の中央を通る東西道路と坪界線は一致する。この間の坪界線はこれを2等分した位置に引いた。3)西岩田村西辺と瓜生堂村西辺を結ぶ南北道路と坪界線はほぼ一致する。西岩田村南辺道路の屈曲部と瓜生堂村の東辺を結ぶラインは坪界線とはほぼ一致し、その南

には条里方向に沿う南北水路が存在する等である。すると、調査地は荒本里の東隣の里(以下E里と仮称)で九条25・36坪に位置することになる(図5.214)。

協会試掘が行われるまで、今回の調査地には歴史時代集落の存在は予想されず、遺跡の範囲外でもあった。調査地のすぐ北には行政的に周知されている岩田遺跡が存在するにもかかわらずである。なぜであろうか。

1973年、調査地の北方約200mに位置する岩田西小学校建設に伴う試掘調査が行われ、土師器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、平瓦、埴輪等が出土し、溝やピットを検出した³。この調査(岩田遺跡第1次発掘調査)によって周辺は岩田遺跡として周知されることとなったものの、その後、本格的な発掘調査は実施されず、小規模な建設工事に伴う試掘・立会調査が行われたにとどまっている⁴。それらの調査で遺構や遺物を確認した地点を図に示した(図5.214)。なお、図中の五輪塔出土土地点とは昭和初め頃の用水路工事の際に一石五輪塔や石仏が出土した地点である⁵。すると遺構や遺物を確認した地点が遺跡範囲の西半に集中していることが明瞭である。今回の立会調査(第6章)でも溝状遺構が確認されたNo10地区より東では遺物をほとんど得ていない。従って歴史時代集落は岩田遺跡東部には広がっていないと考えられる。また、本調査区より西方の府試掘第2トレンチでは溝が検出され瓦器等が出土している。調査区西端で検出したSD101から多くの土器が出土しており、集落が調査区より西へ広がっていることをうかがわせる。

ところで、弥生時代後期から古墳時代前期までの旧大和川の分主流路である「若江分主流路」が八尾市中田遺跡、小阪合遺跡、東郷遺跡、壹振遺跡、東大阪市若江遺跡をへて、今回の調査地を通り、岩田遺跡へ向かうことが指摘されている⁶。その「跡」は現在の地表面でも堤状の微高地をなし、近世には多くの集落が位置している⁷。今回の中調査で「若江分主流路」の中心はV-4層として検出しており、その幅は東西約85mを測る。「分主流跡」は調査地周辺で、東西約200mを測り、ほぼ正南北の方向をとると思われる。

平野部において集落が自然堤防等の微高地に位置することは近世のみならず、古代や中世にも多く認められる事実である。今回「分主流跡」上で歴史時代集落が検出されたこともその1例に含まれる。つまり、先に述べた歴史時代集落の範囲は「分主流跡」の位置にはほぼ一致するのである。このように現在では「若江分主流跡」の存在が認識されているが、岩田遺跡発見当時は報告書に「旧楠根川、玉串川の氾濫原であり、古代より現在に至るまで低湿地として有名な場所である」と記され、調査地周辺の微地形が認識されていなかった。このため調査地点と石田神社⁸と岩田墓地⁹を含めるように遺跡範囲が決定されたと思われる。

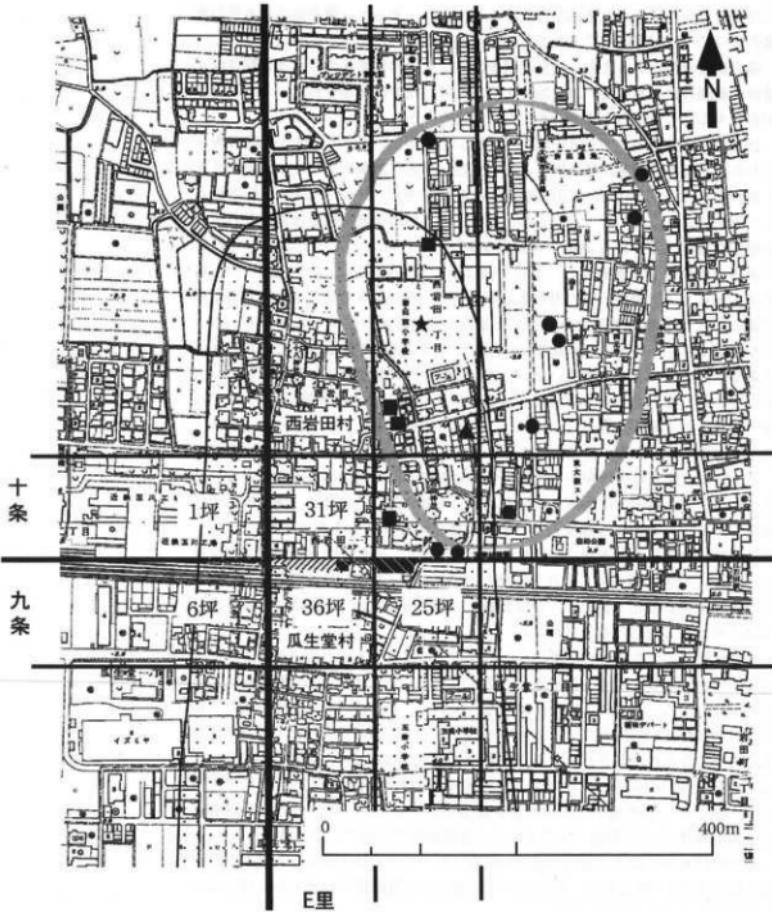
歴史時代集落に関する遺構や遺物が埋蔵されている可能性があると思われる範囲を図に示した(図5.214)。行政でいう周知される遺跡範囲に速やかに図示した範囲が含まれることを願いたい。

2) 古代から現代に至る調査地の変遷

ここでは主に調査区全体で検出された歴史時代集落の変遷を古代から順に述べる(図5.215~217)。なお、掘立柱建物のうち現場作業中に復元できたものはSB107のみで、他は整理作業中に図上で復元している。層位や遺物から時期を特定できない遺構も多く、周辺遺構の方位等から時期を決定した。中世後半期については細分しすぎたきらいがある。

古墳時代

すでに述べたように古墳時代前半には「若江分主流路」が流れていた。V-3層上面の擾乱等からは鳥足文や繩墨文がみられる陶質土器等が出土しており「分主流路」がこの頃まで続いていた可能性がある。SE206の井戸枠に転用されていた円



周知されている岩田遺跡の範囲

- 試掘・立会調査で遺物や遺構が未確認の地点
 - 試掘・立会調査で遺物や遺構が確認された地点
 - ★ 岩田遺跡第1次発掘調査地点
 - ▲ (およその)五輪塔出土地点
- | | |
|--|--------------|
| | 今回の調査地点 |
| | V-4層検出範囲 |
| | 歴史時代集落遺跡推定範囲 |

図5.214 調査地周辺の条里地割の想定・歴史時代集落推定範囲 (S=1/5000)

筒埴輪はたてはけ後にB種よこはけを施す須恵質焼成で、5世紀後半のものと思われる⁶。第VI(平安時代整地)層等から多量の埴輪や石棺片、管玉等が出土していることから調査地には古墳が存在していたと思われる。これらの遺物は未整理であり、出土遺物の時期を明示することはできない。整理の進展によって変更が生じると思われるが、5世紀中頃に「分流路跡」は安定し、その上に古墳が築造されていたとしたい。

8世紀初頭～前半頃

この時期の遺構はSD210のみであり、そのSD210も自然流路である可能性が高い。第VI(平安時代整地)層から同時期の遺物が出土するものの建物や井戸等の遺構は検出されなかった。このため周辺に集落の存在が予想されるが、調査地には集落が形成されていなかったと考えられる。

9世紀頃＝集落出現

この時期の遺構は井戸3基等を検出した。この時期に初めて調査地に歴史時代集落が形成されたと考えられる。SK201・SK203・SK205・SK207・SK208・SD201・SB201等は古代に属する遺構であるが、この時期のものは不明である。

10世紀頃

この時期の遺構は井戸2基等がある。井戸が調査区の東部に集中することから集落範囲は前代に比して縮小したものと考えられる。半分程度に縮小するであろうか。SK201・SK203・SK205・SK207・SK208・SD201・SB201等は古代に属する遺構であるが、この時期のものは不明である。

11世紀頃＝古代集落廃絶

この時期の遺構や遺物はほとんど確認されなかった。このため、古代集落は10世紀後半には廃絶したと思われる。

12世紀前半頃＝寺院創建

この時期の遺構は溝3条等を検出した。SB102・SX101・SD113-1は後代に属する可能性がある。SB101とSB102は中世遺物が出土しないことから最も古い時期と考えた。遺構は少ないが、遺物は後世の遺構や堆積層に含まれ調査区全域で出土し、瓦類の出土が注目される。遺構から出土する土器類は供膳具が多く、SD121では99.65%を占め、そのうち土師皿が75.27%を占めている(表5.5)。これは一般集落とは異なる様相を示す。これらの点から調査地もしくは隣接地にこの頃に創建された寺院が存在したと考えられる。

13世紀前半頃＝中世集落形成

この時期の遺構は井戸8基等を検出した。SB102・SX101・SD113-1は前代に属する可能性がある。SB101はSD102が至近に位置することから時期が異なると考えた。前代に掘削されたSD101は大部分が埋りながらも引き続き溝として機能していたものと考えられる。井戸は調査区西南部に集中し、東部では検出されなかった。遺物は後世の遺構や堆積層に含まれ調査区全域で出土しているものの西部に多い。出土土器には調理具や貯蔵具が比較的多く含まれ一般集落的な様相を呈する。調査区の西部に中世集落が形成されたと考えられる。調査区東部の遺構はSX101とSD113-1のみであり、西部と東部では様相が異なる。SX101は特異な遺構であり調査区の東部付近には前代に創建された寺院が存在したと思われる。

13世紀中～末頃＝区画出現

この時期の遺構は井戸6基等を検出した。SE107・SB123・SB124・SA101は次代に属する可能性がある。西部では12世紀前半頃に掘削されたSD101が引き続き機能し、新たにSD103が掘削されたと思われる。SE120とSB104は同時期のもので、SE115とSB103に作り替えられたと思われる。中央部はSD109やSD110

等によって不明な点が多いが、SD109に先行する溝が存在したと思われる。東部ではSD113-1がSD113-2に改変され、SD111が掘削されたと思われる。これらの溝等によって区画された敷地が出現し、内部に井戸や掘立柱建物等が配置される形をとるが、区画の形状はやや不整形である。

14世紀前半頃

この時期の遺構は井戸11基等を検出した。SE107・SB123・SB124・SA101は前代に属する可能性がある。前代に出現した区画が継続し、井戸を作り替える等の改修が加えられる。

14世紀後半頃=区画の明瞭化

溝を新たに掘りなおし、敷地の低い部分に盛土がなされるが、基本的な区画は踏襲される。SD105・SK123は後代に属する可能性がある。SD103はSD104に、SD113-2はSD114に作り替えられる。区画は明瞭さを増し、五つの区画が想定される。

区画1は東をSD104に区切られる。遺構は検出されなかった。調査範囲が一部に過ぎないためであろうか。区画2は西をSD104に、東はSD109に先行する溝によって区切られるものと思われる。北半で井戸を1基、南半で井戸を2基を検出しておらず、区画内の北と南で性格が異なる可能性が高い。また、西部で遺構を検出していない点が区画3と異なる。区画3は南をSD114とSD115に、西をSD110に先行する溝によって区切られるものと思われる。西部で建物(SB107)、土壌(SK111)、廃棄物処理用と思われる土壌(SK113)が一つの単位を成しているよう、内部は溝や横列等の明瞭な区画施設を持たないものの小区画に分割されていたと考えられる。区画4は北と東をSD114に区切られる。ほとんどが調査範囲外となるが、区画3と同様に建物や井戸が配置されていたと思われる。区画3よりも小規模のものと思われる。区画5は西をSD114に北をSD115に区切られる。ほとんどが調査区外となるため、区画の存在が推定されるのみである。区画3よりも小規模のものと思われる。

15世紀前半頃

溝の掘り直しや区画の改変がみられるものの、基本的な区画は踏襲される。SD105・SK123は前代に、SK124は後代に属する可能性がある。

区画1は前代と同様である。区画2にはSD108が掘削される。これによって区画2の中にSB105とSE116をさらに区切る小区画が形成されたこととなる。区画3は南をSD114とSD115から作り替えられたSD118に、西を作り替えられたSD110によって区切られるものと思われる。前代と同様に、内部は溝や横列等の明瞭な区画施設を持たないものの小区画に分割されていたと考えられる。

SD114とSD115はSD118に作り替えられ、区画4と区画5は統合されたと考えられる。これを区画6とする。区画6はおそらく区画3と同規模で、同様に内部は溝や横列等の明瞭な区画施設を持たないものの小区画に分割されていたと考えられる。

15世紀中頃=区画2の消滅

SK124は前代に属する可能性がある。調査区西部に井戸等がみられず、東部にのみ集落が存在する。前代の区画が踏襲されるが、区画2の内部に遺構は検出されなかった。このため土地区画は存在するものの区画2は消滅したと考えられる。他の区画は前代と同様な状況である。

15世紀後半頃=中世集落の廃絶と耕地化

井戸等の諸施設は撤去され、溝のみが残る。区画する溝は大部分が埋まりながらも溝として機能していたと思われる。中世集落はこの頃に廃絶したと考えられ

る。廃絶後すぐに調査地は耕地となつたと思われる。

16~17世紀頃=平坦面造成

区画する溝はすべて完全に埋められ、四つの平坦面が造成される。調査区全体が耕地となっている。SD01の掘削はこの時期に遡る可能性がある。

18~19世紀頃

この時期の遺構は井戸3基とSD01等を検出した。調査区全体が耕地となっている。調査区の東部は中世の区画を踏襲していると思われる。

19~20世紀頃=道路建設と耕地の廃絶

耕地の一部には家屋が建設され、これに伴う給排水施設等が構築される。20世紀末に道路建設によつて耕地は廃絶する。

3) 瓜生堂遺跡の古代集落について

今回検出した古代集落は9世紀前半から10世紀後半まで存在し、

中世集落へ連続しないと考えられる。SE206が調査区の東端付近に位置し、東方の立会調査(第6章)で遺物が出土していることから集落の東限は立会調査No10地区付近までと思われる。西限はSE201付近より西で遺構を検出していないことからY=-36,140付近までと思われる。調査区東半では遺構面が北から南へ低くなり、南端で古代遺構を検出していないことから調査区は集落の南限に位置すると思われる。さらに岩田遺跡第1次発掘調査で古代の土器類が出土している(図5.219)。以上の点から集落の規模は東西南北約300mに及ぶと考えられる。集落は井戸と建物が近接してセットを成すようあり、遺物には施釉陶器、製塙土器、砥石、円面鏡、貨幣、帶金具(図5.220)、瓦類等がある。10世紀の建物は国土座標軸に沿う方向をとる。瓦類や円面鏡等が出土しているが、その量は少なく、寺院あるいは官衙が存在したとは思われない。1点だけ出土した軒瓦である唐草文軒平瓦(図5.221)は、調査地の南方約1kmに位置する若江遺跡に類似がある¹¹⁾。若江遺跡では古代から中世にかけての瓦類が出土しており、遺構は確認されていないものの文献に若江寺と記載される寺院が遺跡内に存在したと推定されている。今回検出した古代集落はこの若江寺あるいは若江遺跡と深い関係のある官人が居住した集落と思われる。また、第VI(平安時代整地)層から埴輪が大量に出土することから集落建設時に古墳を破壊していると考えられる。

ところで、これまで瓜生堂遺跡ではふたつの古代集落が確認されていた(図5.222)。ひとつは調査地から西南約500mの第二寝屋川(旧備根川)右岸に位置する¹²⁾。この瓜生堂遺跡中央部(中環付近)に位置する集落(以下集落I)は東西南北約300mの範囲に広がると思われる。集落Iは8世紀に存在したもので「あまり長期間営まれていないようである」。近畿自動車道建設に伴う調査では国土座

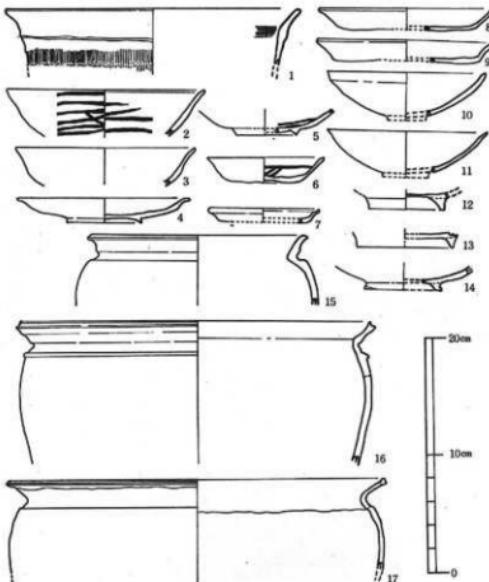


図5.219 岩田遺跡第1次発掘調査出土土器
(S=1/4)注2文献より
古代土器

1:土師器釜、4:灰釉陶器皿、8~9:土師器皿、10~12:土師器碗、11・13~14:黒色土器A類碗、15~17:土師器甕

1は甕と報告されているが鋤が脱落した釜と思われる。4は口径14.2cm、器高約2cmを測る。

中世土器

2~3・5~6:瓦器碗、
7:土師皿

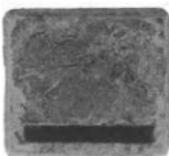


図5.220(上) 帯金具(S=1/1)



図5.221(中) 唐草文軒平瓦
(S=1/1)



図5.222(下) 古代集落位置図
(S=1/25000)

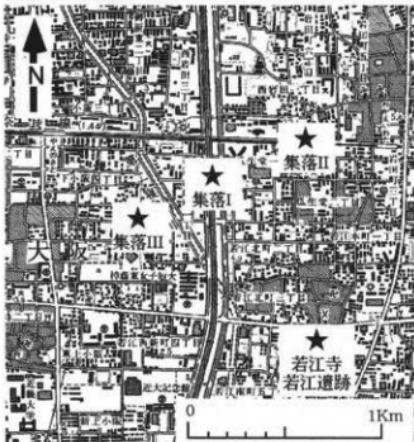
軸に沿わない方位をとる掘立柱建物7棟が検出されているが、井戸は近接しない¹²。報告書では深く言及されていないが、「布目のある平瓦の破片」が出土しており、今回検出した古代集落(以下集落II)と同様に、若江寺あるいは若江遺跡と深い関係のある官人が居住した集落と思われる。もうひとつの集落は調査地から西南約1kmの八戸ノ里東小学校建設に伴う瓜生堂遺跡第24次発掘調査で検出されている¹³。この集落(以下集落III)は第二寝屋川(旧楠根川)左岸に位置し、東西南北100m以上の「かなりの範囲にひろがる集落跡」と思われる。集落IIIの「上限は8世紀末ないし9世紀初めに、下限を10世紀末」におくことができ、国土座標軸に沿わない方位をとる複数の掘立柱建物に1基の井戸が近接してセットを成している。造構は多量の埴輪を含む整地層の上面に構築されており、集落建設時に古墳を破壊している可能性が高い。施釉陶器、製塙土器、瓦類等の出土は報告されていないが、集落IIと共通する点が多い。

これら瓜生堂遺跡の古代集落を概観すると三つの画期が認められる。

第一の画期は集落Iが出現する8世紀前半である。古墳時代中期の集落が集落Iと同地点で検出されているものの遺跡内では7世紀の集落が検出されていない。古墳時代とは異なる律令にともづく新たな土地開発が瓜生堂遺跡で開始された時期と考えられる。

第二の画期は集落Iが廃絶し、集落II・集落IIIが出現する8世紀後半~9世紀前半である。集落Iと集落IIがともに若江寺あるいは若江遺跡と関係があると思われることや第二寝屋川(旧楠根川)右岸に位置することから、単に集落Iが消滅したというよりも、集落Iが集落IIへ移動した可能性もある。また、集落II・集落IIIが古墳を破壊して建設されていることは集落Iとは異なる要素を感じさせ、集落Iから集落IIへ連続しないとも思われる。いずれにせよ、集落Iが廃絶後に耕地化されたと思われることや集落IIが灌漑施設を整備しにくい微高地に位置すること等から集落Iの廃絶と集落II・集落IIIの出現は耕作地と居住地を含めた耕地拡大を目的とする土地再開発行為の一部として捉えられる。

第三の画期は集落II・集落IIIが廃絶する10



世紀後半である。遺跡内で11世紀の集落は確認されておらず、12世紀の集落までに時間的な空白がある。また、この時期は古代から中世への転換期と考えられ、多くの集落が消滅する時期でもある。律令による土地開発および耕地經營が終了した時期と考えられる。

なお、集落Ⅱでは建物配置等を復元するには至らなかったが、10世紀に入ると集落規模が縮小する傾向がうかがわれた。東大阪市内の同時期の集落として神並遺跡があげられるが、神並遺跡にも10世紀に集落規模が縮小する傾向がうかがわれる¹⁵。これが何を示すものか現時点では不明であり、今後の課題である。

4) 中世(後期)集落について(図5.229)

今回検出した中世集落は12世紀前半から15世紀中頃まで存在したと考えられる。集落の初源は寺院と深い関係があると思われ、古代集落から継続するものではない。13世紀中～末頃からは溝によって区画された敷地が形成される。これは近畿地方各地に見られる集村化がこの集落にも及んだものと言えよう。近畿地方の中世集落の多くは15～16世紀に消滅し、近世集落と重複する形で、それ以降の集落が出現すると言わされている¹⁶。今回検出された中世集落が近世西岩田村の前身である可能性は非常に高いと思われる。今回の調査では二つの区画の一部を調査し、三つの区画の存在を知り得たに過ぎず、区画全体を調査できたものは無い。ここでは時期にこだわらず、一部を調査できた区画2と区画3の特徴を例挙し、集村の様相を想像する。なお、区画の呼称は14世紀後半頃のものを使用する。

区画2の規模

区画2の西を区画するSD104の西肩と東を区画するSD109の東肩の間は約55mを測る。この数値は半町=54.5mの近似値である。SD107-2の北肩とSD105の南肩の間は約10.5mを測り、1/10町=6歩の近似値を示す。この条里制の最低単位を用いて、SD105が北へのびることから単純に北へ6歩のばし、SE106の存在から同様に南へのばせば、区画2の南北は少なくとも32mを測ると考えられる。区画2には検出した遺構の中で最多数の完形あるいは完形であったと思われる土師皿が出土したSD107が存在し、中世集落の中心区画と考えられる。広瀬和雄氏は近畿地方の中世集落を検討し、集村を構成する屋敷地の面積はそこに居住する人達の階層を表現するとしている。そして、集村の中で大きいものを領主居館と呼び、近畿地方では半町四方=50～60m四方のものが最も検出例が多いとしている¹⁷。区画2は広瀬氏の言う領主居館と考えられ、区画する溝を含む半町四方の方形を呈するものと思われる。区画2の中のSD108による小区画が正方形と仮定し、小区画の北辺が区画2の北辺と重複するとして区画2の位置を想定した。その溝を含まない敷地面積は約2200m²と思われる。

区画2を区画する施設

隣接する区画3とは溝を共有せず、東を区画するSD109の至近にSE118が構築されており、溝には土壌等の施設は伴ないと考えられる。

区画2の特徴

区画2では13世紀前半頃のSE119以来、SE120→SE117→SE118→SE116と約4m四方の範囲で、ほとんど位置を変えずに連続と井戸が築かれている。区画2内の主要施設の位置は集落の初源から大きな変更がなかったのであろう。このことは集落の長の地位に集落の初源から廃絶まで変更がなく、その地位は世襲によつて継続されたものと想像される。SD107から出土した切羽(図5.223)は長の性格を示すものであろうか。

区画3の規模

南を区画するSD118と調査区に東接する南北道路(以下道路A)は直交する。



図5.223 切羽 (S=1/1)



図5.224 融着した平瓦 (S=1/2)

窓枠片とも思われるが、須恵器等の土器片が融着しており焼成後に融着したと考えられる。

長さ約13cm、幅約10cmを測る。

特に調査区東部では中世の区画が近世の耕地区画に反映されており、道路Aは中世からの地割を踏襲していると考えられる。そして区画3の西を区画するSD110の東肩と道路A中央の間は約55mを測り、道路Aの下に区画3の東を区画する溝が埋もれていると考えられる。道路Aの北は石田神社に突き当たり東西道路となる。道路Aの突き当たりの北西にある家屋は神社と番地が異なるため、本来の地割は道路Aよりも約10m延長されると思われる。この延長点とSD118と道路Aの交点との間は約50mを測る。したがって、区画3は溝を含まない半町四方の方形と想定される。

区画3を区画する施設

区画2と同様に溝の至近に井戸等が構築されており、溝に土塁等の施設は伴わないと考えられる。区画3の南の区画と溝を共有しているが、区画2とは共有しない。

区画3の特徴

区画3の内部は建物、井戸、廐棄物処理用と思われる土壤等を一つの単位に配置され、溝や柵列等の明瞭な区画施設を持たない小区画に分割されていたと考えられる。

一見すると、区画2と同様な井戸の継続がみられる(SE132→SE133もしくはSE131→SE134→SE135)が、その範囲は約7m四方にわたり、やや広く、長期にわたる継続とは思われない。むしろ、SE132→SE133もしくはSE131、SE134→SE135、SE127→SE126という2時期ごとに位置を変える傾向が強い。区画2とは対称的であり、居住者の世代交代の都度にその地位に変更があった可能性が高い。

その他の区画

区画3のSD118から南へ約50mには東西水路(以下水路B)が存在し、区画4と5の南を区画する溝を踏襲している可能性が高い。区画4の西はSD110を延長させ、区画5の東は道路Aとすると、区画4と5はそれぞれ、南北4/5町、東西1/4町の規模をもつ長方形を呈すると思われる。また、区画4の東南端付近で水路Bが東西方向に変わることから区画2の南に連なる区画が存在するとも思われる。

今回の立会調査で中世の溝状造構を確認している。造構は道路Aから約50m東に位置し、区画3の東にさらに区画が想定できる(以下区画C)。ここでは東を溝状造構、西を道路A、南をSD118の延長、北を石田神社に囲まれた半町四方の規模をもつ方形を呈すると考えた。

石田神社

こうみると現在の石田神社境内が各区画に連なる位置にあたることに気づく。

奈良県田原本町に所在する法貴寺遺跡で行われた発掘調査は大和の中世集落の代表的な事例となっている¹⁰。その調査では方形に区画された屋敷地、現在の法貴寺千万院を中世に遡る寺地、現在の池坐朝霧黄帷比充神社を中世に遡る背面地等が検出され、調査担当者である今尾文昭氏は集村には屋敷地や寺社地等が計画的に配置されたと指摘している¹¹。また、浦西勉氏は「お堂と鎮守」というものが集村の核として無視できない」と発言している¹²。

石田神社が今回検出した集落の鎮守であった可能性は非常に高いと思われる。

瓜生堂

調査区全体から多くの瓦類が出土した。その量は膨大と言えるものではないが、中世の一般の住居に瓦が使用されたとは考えにくく、至近に寺院が存在したと考

えられる。瓦類のうち軒瓦は細片を含め6種10点の軒平瓦、8種10点の軒丸瓦、鬼瓦1点が出土した(図5.226~228)。軒平瓦のうち最も多い4点が出土した均整唐草文を瓦当に飾るもの(図5.227、5.45-4・5.72-3・5.164-11・5.166-10)は調査地の南方約1kmに位置したと推定されている若江寺に出土例が無く、この寺院が若江寺の影響下に無いことを示すと思われる。多くは12世紀頃のものと思われ、いずれも14世紀後半以降の遺構や包含層から出土した。瓦類には火を受け赤く変色したものや煤が付着しているものがあり、熱によって焼成後に融着したと思われる平瓦も1点出土している(図5.224)。これらのことから寺院は12世紀に創建され14世紀頃に火災によって廃絶したと思われる。また、拳大~人頭大の礫が多数出土しており、これらにも火を受け赤く変色したものや煤が付着しているものが多い。角張った方形を呈するものや河原石のように丸く摩滅したものは少ない。瓦類と同様に14世紀後半以降の遺構や包含層から多く出土する傾向があり、この寺院に関係するものと思われる。あるいはこれらが寺院の基壇に使用された石材で寺院の基壇が乱石積みであったことを示すものであろうか。

13世紀前半頃の調査区東半に井戸等が検出されず、特異なSX101が存在することから、この寺院が現在の石田神社境内に位置していた可能性が高い。神社と寺院が一体となることは神仏習合の例からもめずらしいことではなく、同位置に存在していた可能性がある。遺跡名称でもある瓜生堂の地名はこの寺院に由来するものであろう。

以上のように今回検出した中世(後期)集落は半町四方の広瀬氏の言う領主居館とそれより規模の小さな敷地を持つ住居群、神社および寺院等によって構成される近畿地方で一般的にみられる集落の一例と思われる。

5) 検出された遺構と条里地割(図5.229)

はじめに述べたように調査地周辺にはほぼ正南北方位をとる条里地割が復元されている。ここでは検出された遺構と条里地割の関係を述べる。

調査区西半で検出した南北方向の溝相互の距離を計測し、条里の最低単位である1/10町 = 6歩 = 10.9mの近似値を示すものを抽出した(図5.225)。するとSD104東肩とSD104西肩で食い違う大きくふたつの溝群に分かれた。

ひとつの溝群(以下溝群A)はSD101溝心・SD102溝心・SD104東肩でそれぞれ約10.9mを測るものである。この間隔を西へ延長すると調査区の西に隣接する近世西岩田村と近世瓜生堂村を結ぶ現在も使用されている道路に重複する。SD101とSD102は12世紀前半頃のものであり、SD104に先行する同時期の溝が存在したとすれば、すべて12世紀前半頃のものと考えられる。大野薫氏は河内平野における正方型条里型水田の形成を9~10世紀とし、11~12世紀に広範囲に完成している²¹。この条里型水田が完成する時期と溝の時期は一致し、この(以下溝群A)はこの時期の条里遺構と考えられる。

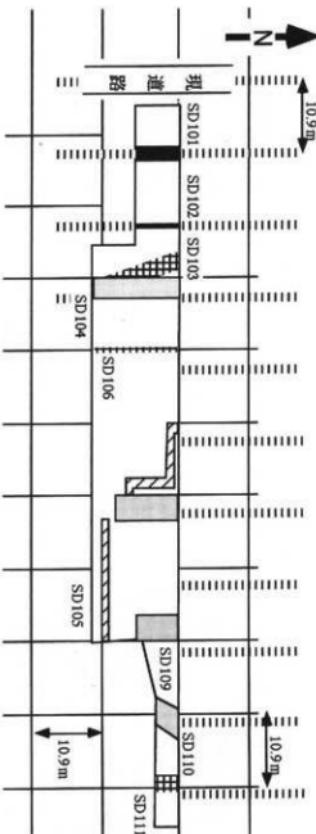


図5.225 溝模式図



图72-4



图61-2

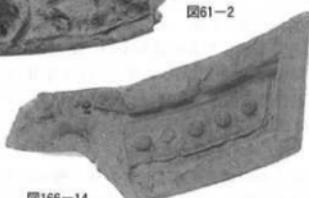


图166-14



图61-3

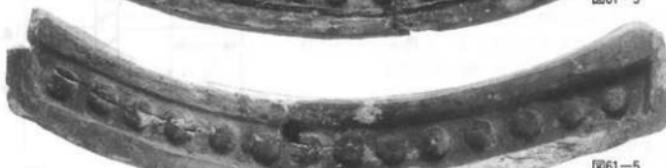


图61-5



图61-4

图5.226 中世軒平瓦 ($S = 1/2$)



図166-10



図72-3



図45-4



図164-11



図166-15



図45-5



図61-1

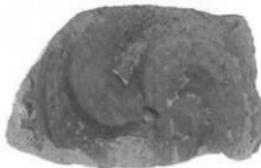


図166-11

図5.227 中世軒瓦 ($S=1/2$)

5.166-15と5.61-1、5.45-5と5.166-11はそれぞれ同類と思われる。



图78-2



图230-1



图62-35



图230-2



图230-3



图45-6

图5.228 中世軒丸瓦(S=1/2)

もうひとつの溝群はSD104西肩・SD106東肩・SD107北端屈曲部・SD108西肩・SD109東肩・SD111東肩でそれぞれ約10.9m・10.9m・10.9m・21.8m・21.8mを測る。この溝群は時期差から13世紀中～14世紀前半頃のSD106・SD111(以下溝群B)と14世紀後半頃以降のSD107・SD108・SD109(以下溝群C)に分けられる。溝群Bの時期にはSD104の前身と考えられるSD103が存在する。SD103は調査区の南半でSD104と重複し北半で西へ振れているが、溝群Bに含まれる可能性が高い。溝群Bは溝群Cに比してその形状がやや不整形であり、小規模なSD106が含まれる。服部昌之氏は若江郡東北部の条里地割の軒線が真北より僅かに東に偏り東南部や西北部と相違していることを指摘し、「条里地割による耕地整備の時期ないし技術における地区別の差異を示すもの」としている²。前川要氏は調査地南方約1kmに位置する若江遺跡の南西部の現地表面に見える条里を14・5世紀に設定された真北より約5°東に振れる新しい条里であるとしている³。前川氏が言う新しい条里的時期と溝群Cの時期は一致し、溝群Cは新しい条里的遺構と考えらる。ただし、溝群Bの存在からこの条里は13世紀中～末頃には施行されていた可能性がある。11～12世紀の条里型水田が完成する時期の条里遺構である溝群Aは調査区の西端、すなわち「若江分流路跡」の西端でのみ確認された。これに対して新しい条里的遺構である溝群B・Cは微高地である「若江分流路跡」上に及んでいる。条里地割が西から東へ、低地から微高地へ広がっていく状況をみることができる。平野の微細地形の克服、特に微高地の削平による耕作地の平坦化は13世紀前後に行われると指摘されている⁴。今回は耕地の区画に関する遺構ではないが、この点も新しい条里が13世紀中～末頃には施行されていた可能性を補強すると考えられる。なお、今回の調査では調査範囲が狭く、南北方向の溝の方位を計測できる資料は得られず、溝が東へ振っているのかどうかすら判別がつかなかった。

以上のように詳細を明らかにできなかつたものの時期と基準の異なるふたつの中世の条里地割を確認した。新しい条里地割の施行は耕作地の再編成だけでなく集落に区画が出現する時期と重なることから居住地を含めた土地再開発行為の一部として捉えられる。

ところで、SD101がSD102に比して規模が大きいことからSD101溝心を里界線とすべきとも思われるが、はじめに述べた条里地割の復元に現時点で修整を加える資料は得られなかつた。資料が得られなかつたと言うよりも里界線を検出された南北溝のどこに設定しても整合的な要素が見い出され、決定ができない。ここではSD111東肩が現道路から東へ約109mに位置すること等からはじめに述べた条里地割は今回の発掘調査によって再確認されたとしておきたい。また、13世紀前半頃の井戸は調査区の南西部に集中する。大阪府堺市に所在する日置莊遺跡では12～13世紀前半の集落が「条里的交差点に近い位置または条里線に近い位置で配されていることが復原」されている⁵。はじめに述べた条里地割は坪界線を調査区北壁付近に想定されている。すると、南西部の井戸の集中は九条E里36坪の北部に集中していることとなる。このこともはじめに述べた条里地割の復元を肯定すると考えられる。

6) 「若江分流路跡」と条里地割

今回検出した中世集落は九条E里25・36坪を中心にひろがると思われる。36坪では正方形を呈すると思われる区画2を検出し、25坪では東に振れる区画3を検出した。25坪には正方位をとるSD121やSB119が存在し、坪内がまったく条里に関連がないとは言い難い。しかし、条里とは土地を基盤の目のように規則正しく区画するものである。これでは25坪が基盤の目のように区画されていたとは言

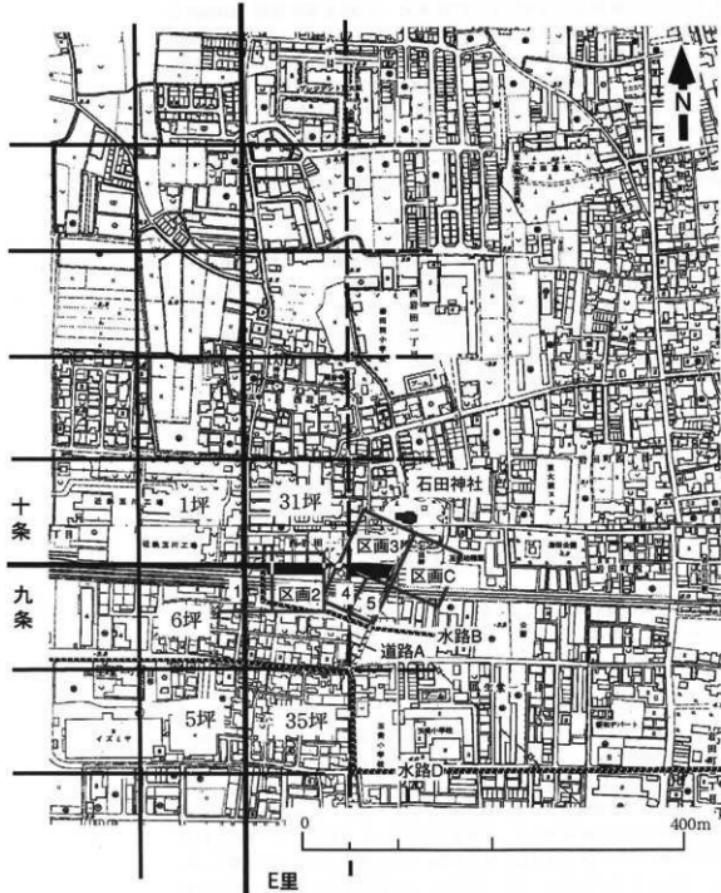


図5.229 中世(後期)集落の各区画と調査地周辺の条里地割の想定(S=1/5000)

えない。従って、調査地周辺では36坪東辺の坪界線より東には中世の条里地割が及んでいなかったと考えられる。

条里地割が及んでいなかった理由は調査地周辺の地形に因ると考えられる。

旧大川は調査地周辺では現在の長瀬川と玉串川を主要な流れとしている。その流れは大和川が付け替えられた宝永元(1704)年に至るまで土砂を供給し、河内平野を形成してきた。平野には自然堤防や後背湿地が形成され、主に自然堤防は集落や畠、後背湿地は水田として利用されたと思われる。

瓜生堂遺跡の大部分は西を長瀬川によって形成された自然堤防と東の「若江分

「流路」によって形成された自然堤防もしくは「跡」によって抉まれた後背湿地と言える。ここには1965(昭和40)年に第二寝屋川に作り替えられた楠根川が流れしており、東西の自然堤防が発達するにつれて排水河川の性格を強めていったと思われる^g。もちろん楠根川には人の手が加えられ、近世には人工河川と呼んで差し支えないほど屈曲した流れとなっている^g。水田には用排水路が不可欠で、特に湿地の水田化には排水が重要となる。瓜生堂遺跡の大部分には天然の巨大排水路である楠根川が存在し、水田化には最適地であったと考えられる。水田開発そのものは弥生時代から行われていたであろうが、8世紀に遺跡中央部に集落が出現することから大規模な水田開発はこれ以降に進められたと思われる。その進展に伴って瓜生堂遺跡の大部分は開発が集約化し、それを具現化した条里地割が12世紀には施行されたと考えられる。

これに対して「跡」の東方、本調査区から玉串川に至る地域は西を「若江分流路」によって形成された自然堤防と東の玉串川によって形成された自然堤防によって抉まれた低湿地と言える。協会試掘や今回の立会調査では集落に伴う遺構や遺物を検出せず、堆積時期不明の耕土層を確認し、それより下層は粘土層等が堆積していた。この粘土層等が「跡」の東方が湿地であったことを示すものと思われる。「跡」西方の低地には天然の巨大排水路である楠根川が存在したが、この地域には排水路が無く水田化には不適地であったと考えられる。この地域に開発が及んだのは「跡」東半に及ぶ集落が出現する9世紀頃と考えられる。そして10世紀のSB202やSD208が正南北の方位をとる点から条里地割が施行されていた可能性があり、開発が早急かつ大規模なものであったことをうかがわせる。開発には大規模排水路の掘削が不可欠であろうが、その排水路が短期間に機能を失い排水不良となったことが失敗の原因と想像される。そのため条里地割が施行されたとしても一時的なものであったと思われる^g。その後、12世紀頃に寺院が「跡」東半に創建された可能性があり、この地域の開発は続けられていたであろう。が、13世紀前半の集落が「跡」西半に位置することから本格的なものではなかったと思われる。今回の調査では「跡」上に溝で区画された区画群を検出した。区画群は「跡」を東西に横断するように分布する。つまり、「跡」を横断するように縦横に溝が掘削されていたと言える。区画群は「跡」東方から「跡」西方へ排水する性格をあわせもつと考えられる。13世紀中～末頃より区画群＝排水路が掘削され、14世紀後半に完成することによって集約的な水田経営に着手可能な状態になったのである。また、仮製地形図にみえる近世瓜生堂村を東西に通る水路(水路D)も排水路として機能していたと考えられる。この水路は区画群やその後身である水路Bよりも大規模な可能性がある。この掘削時期を示す資料はないものの、境界線に沿うことから区画群と同時期に掘削されたと思われる。これらの排水路が完成し、湿地の水田化が進行するまでこの地域には集約的な水田経営の具現化である条里地割の施行は行われなかつたと考えられる。

ところで、微高地の水田化には湿地とは逆に灌漑用水が不可欠である。「跡」は現在も堤状を呈し、かつては周辺に比してかなりの高さをもっていたと思われる。このような高地に灌漑用水を完全に整備するには広範囲にわたる微高地の削平を伴う大規模な土木工事が必要となろう。今回の調査では16～17世紀頃に造成された近世の平坦面を検出した。これが微高地を削平した遺構と考えられる。もちろん水田が存在しなかつたわけではなかろうが、大部分は集落や畠であったと思われる。従って、灌漑用水の整備と微高地の平坦化を伴い「跡」の全面が集約された水田となつた時期は16～17世紀頃であると考えられる。SD01東肩と近世平坦面3の西端の間が約21.8mを測ることから新たな地割の存在が考えられ、こ

の地割が「跡」東方を含めた調査地周辺に施工された可能性がある。

7) おわりに

以上、先学諸氏の研究成果を都合良く援用し、あえて想像を述べた。

今回の調査地の南方約1kmに位置する若江遺跡は16世紀に若江城が存在したことが知られている。それは条里地割に沿う14世紀末には存在した方形区画を改変したものと思われる⁶。若江遺跡第59次発掘調査で検出された16世紀の若江城本丸を囲む西堀の東脣はSD104の東脣を南へ延長したラインに沿い、若江遺跡第44次発掘調査で検出された本丸を囲む東堀の西脣と西堀の東脣は約131mを測る。これは1町(109m)と1/4町=12歩(21.8m)を合わせた数値に近い。また、若江遺跡で数多く検出されている溝は今回検出した区画群と同様に「若江分流路跡」を横断する排水路的性格が強い。これらは地形に規制された偶然とも思われるが、今後の資料の増加と過去の発掘調査成果の再検討を待って改めて検討することしたい。それによって若江郡東北部の歴史時代の状況を解明する糸口が見えるであろう。

末尾ではあるが、「若江分流路」をはじめとする河道の変遷や「跡」東方の排水路等については上司、同僚である松田順一郎、別所秀高の両氏に教示を受けた。記して謝意を表したい。

注

- 1 大越勝秋原図「若江・渋川郡地方の条里想定図」「布施市史」1962布施市史編纂委員会
- 2 「岩田遺跡」「東大阪市遺跡保護調査会年報1」1975東大阪市遺跡保護調査会
- 3 試掘・立会調査の結果は東大阪市教育委員会文化財課菅原章太氏に教示を得た。
- 4 一石五輪塔には「1527(大永7)年丁亥十一月」の年号がある。
「8. 岩田・斐江地域」「—わが街再発見—東大阪市の歴史と文化財1」1989
東大阪市教育委員会
- 5 「岩田の鯨橋址地蔵」「—わが街再発見—東大阪市の石造仏2(中地域)」1997
東大阪市教育委員会
- 6 松田順一郎「山賀遺跡第9次発掘調査報告—調査地点の堆積環境の変化と耕作地遺構の形成—」「東大阪市文化財協会ニュース」Vol.6, No.4 1996財團法人東大阪市文化財協会
松田順一郎「第7章瓜生堂40次調査地における河川堆積作用の変化」「瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘調査報告書—電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告」「1999財團法人東大阪市文化財協会
- 7 筆者も微高地と近世集落の分布に触れたことがある。
- 8 金村浩一「瓜生堂遺跡周辺の歴史地理的環境—古代～中世の河内国若江郡北部について—」「光陰如矢—荻田昭次先生古稀記念論集—」1999光陰如矢刊行会
- 9 前掲注2
- 10 いわた神社と読む。式内社である。境内の字名は宮の前。境内に掲示されている御由緒略記によれば仲哀天皇(足仲彦尊)・応神天皇(譽田別尊)・神功皇后(息長足姫尊)を祭る。後に天照大神と天児屋根命が祭神に加わったともいう。1923(大正12)年刊行の『中河内郡誌』等には神社の北方約1町には幸神(さいのかみ)塚と無名塚と呼ばれる、共に高さ約5尺の円錐形の塚が二つあったと伝えられている。塚の双方に亘る船に似た巨大な大石があり、これを氏神を葬るものとし、石田君の始祖である五十日足彌命の御墓とする説も

ある。岩田の名はこれに由来すると思われる。

【中河内郡誌】1972名著版

- 9 行基が開いたと伝えられる河内七墓のひとつ。河内七墓とは東大阪市の長瀬・岩田・額田と八尾市の晒・恩智・垣内・神立の七つの墓で、これらに詣ると死に際に下の世話をかけないと言う。藤井直正氏は江戸時代中頃に民間仏教を母胎として生まれたとする。なお、荻田昭次氏は八尾市の墓を晒・恩智・垣内・神立とし、藤井氏は晒・恩智・植松・神立としている。
- 荻田昭次「河内七墓と行基」『長瀬農業協同組合創業90周年記念誌統・郷土をたずねて』1993長瀬農業協同組合
- 藤井直正「長瀬墓地と法明上人馬御廟」「郷土史のたのしみ」1997財団法人東大阪市文化財協会
- 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2号・第3号1978・1979
日本考古学会
- 『若江遺跡発掘調査報告書 I 遺物編』1983財団法人東大阪市文化財協会
- 『瓜生堂遺跡Ⅱ』1973瓜生堂遺跡調査会
「瓜生堂遺跡・西岩田遺跡発掘調査概報」「瓜生堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報」『衛東大阪市文化財協会年報1983年度』1984財団法人東大阪市文化財協会他
- 『瓜生堂近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1980大阪府教育委員会財団法人大阪文化財センター
- 『瓜生堂上層遺跡』『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報20 瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡発掘調査報告』1979 東大阪市遺跡保護調査会
- 『神並遺跡Ⅲ』1988東大阪市教育委員会財団法人東大阪市文化財協会
- 広瀬和雄「中世への胎動」「岩波講座日本考古学6」1986岩波書店
- 広瀬和雄「中世農村の考古学的研究」「大和古中近研究会資料Ⅲ中世集落と灌溉」1999シンポジウム「中世集落と灌溉」実行委員会編
- 「法貴寺遺跡発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報1986年度」1989奈良県立橿原考古学研究所
- 今尾文昭「灌溉と環濠屋敷」「大和古中近研究会資料Ⅲ中世集落と灌溉」1999シンポジウム「中世集落と灌溉」実行委員会編
- 「討論」「大和古中近研究会資料Ⅲ中世集落と灌溉」1999シンポジウム「中世集落と灌溉」実行委員会編
- 大野薰「河内平野の古代中世条里遺構」「ヒストリア」第145号1994大阪歴史学会
- 服部昌之「第3項 河内平野における条里制遺構」第Ⅲ章 河内平野遺跡群を取り巻く環境『河内平野遺跡群の動態 I 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—プロローグ編—』1987大阪府教育委員会財団法人大阪文化財センター
- 前川要「河内における中世若江城惣構えの復元的研究」「光陰如矢—荻田昭次先生古稀記念論集—」1999光陰如矢刊行会
- 金田章裕「微地形と中世村落」1993吉川弘文館
- 山川均「中世集落と耕地開発」「大和古中近研究会資料Ⅲ中世集落と灌溉」1999シンポジウム「中世集落と灌溉」実行委員会編
- 龜柄俊夫「第6章 日置莊遺跡の遺構変遷」「大阪府堺市・南河内郡美原町所在日置莊遺跡—近畿自動車道松原さみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—」1995大阪府教育委員会財団法人大阪文化財センター

- 26 日下雅義「第1節中河内の地理的・歴史的環境」第Ⅲ章河内平野遺跡群を取り巻く環境『河内平野遺跡群の動態 I 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—プロローグ編—』1987大阪府教育委員会財団法人大阪文化財センター
- 27 李本隆裕は人工河川と断定している。
李本隆裕「若江遺跡第42次発掘調査概要」『關東大阪市文化財協会概報集—1997年度—』1998財団法人東大阪市文化財協会
- 28 中村直弘氏は1000年前後の気候変化と耕地の荒廃との関係に言及している。
中村直弘「自然環境の変化から見た平安時代の耕地の荒廃」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol. 4, No 3 1989財団法人東大阪市文化財協会
- 29 前掲注23

参考文献

- 鶴谷和彦「織豊期の犬形土製品—出土遺跡の集成と資料の紹介を中心に—」『関西近世考古学研究 I』1991関西近世考古学研究会
- 岩本正二「7～9世紀の土器製塩」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集文化財論叢』1983同朋舎出版
- 積山洋「律令制期の製塩土器と塩の流通—攝河泉出土資料を中心に—」『ヒストリア』第141号1993大阪歴史学会
- 山中章「古代宮都の「製塩」土器小考」『杉山信三先生米寿記念論集平安京歴史研究』1993杉山信三先生米寿記念論集刊行会
- 「大阪市天王寺区細谷工遺跡発掘調査報告 I」1999財団法人大阪市文化財協会
古代の土器研究会編『古代の土器I都城の土器集成』1992古代の土器研究会
- 古代の土器研究会編『古代の土器II都城の土器集成 II』1993古代の土器研究会
- 一瀬和夫「河内平野南縁部の平安時代土器器編年試表」「南河内遺跡群発掘調査概要・II」1989大阪府教育委員会
- 上田謙「北岡遺跡出土平安時代土師器について」「石川流域遺跡群発掘調査報告 藤井寺市文化財調査報告第9集」1993藤井寺市教育委員会
- 中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』1995真陽社
- 鍋柄俊夫「第2章平安京出土土師器の諸問題」「古代学研究所研究報告第4輯平安京出土土器の研究」1994財团法人古代学協会
- 森島康雄「中河内の羽釜」「中近世土器の基礎研究VI」1990日本中世土器研究会
- 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」「奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集文化財論叢」1983同朋舎出版 他

付 協会試掘遺構等対照表

1996(平成8)年度に財團法人東大阪市文化財協会によって行われた試掘調査は報告書が刊行されている(財團法人東大阪市文化財協会『瓜生堂遺跡試掘調査報告書—都市計画道路大阪瓢箪山線の建設事業に伴う瓜生堂遺跡第44次調査—』1997)。すでに述べたようにその遺構や遺物を本書に呼称を変更し再掲しているため、ここに対照表を付す。

協会試掘(44次)

遺構

A地区 SE01	→	SE117
A地区 SE02	→	SE118
A地区 SE03	→	SE116
A地区 SE04	→	SE119
B地区 SE05	→	不掲載

遺物

図8-1	→	図5.60-13 (土師皿)
図8-2	→	不掲載 (土師皿)
図8-3	→	不掲載 (瓦器碗)
図8-4	→	図5.60-12 (瓦器碗)
図8-5	→	不掲載 (瓦器碗)
図8-6	→	図5.60-11 (瓦器碗)
図8-7	→	図5.60-14 (常滑壺)
図12-1	→	図5.60-18 (土師皿)
図12-2	→	図5.60-19 (土師皿)
図12-3	→	図5.60-22 (瓦質擂鉢)
図12-4	→	図5.60-21 (瓦質壺)
図12-5	→	図5.60-17 (瓦質火舎)
図15	→	図5.61 (軒瓦)

本書 (45次)

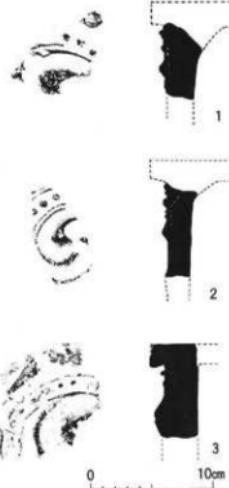


図5.230 SD118出土軒丸瓦 (S=1/4)

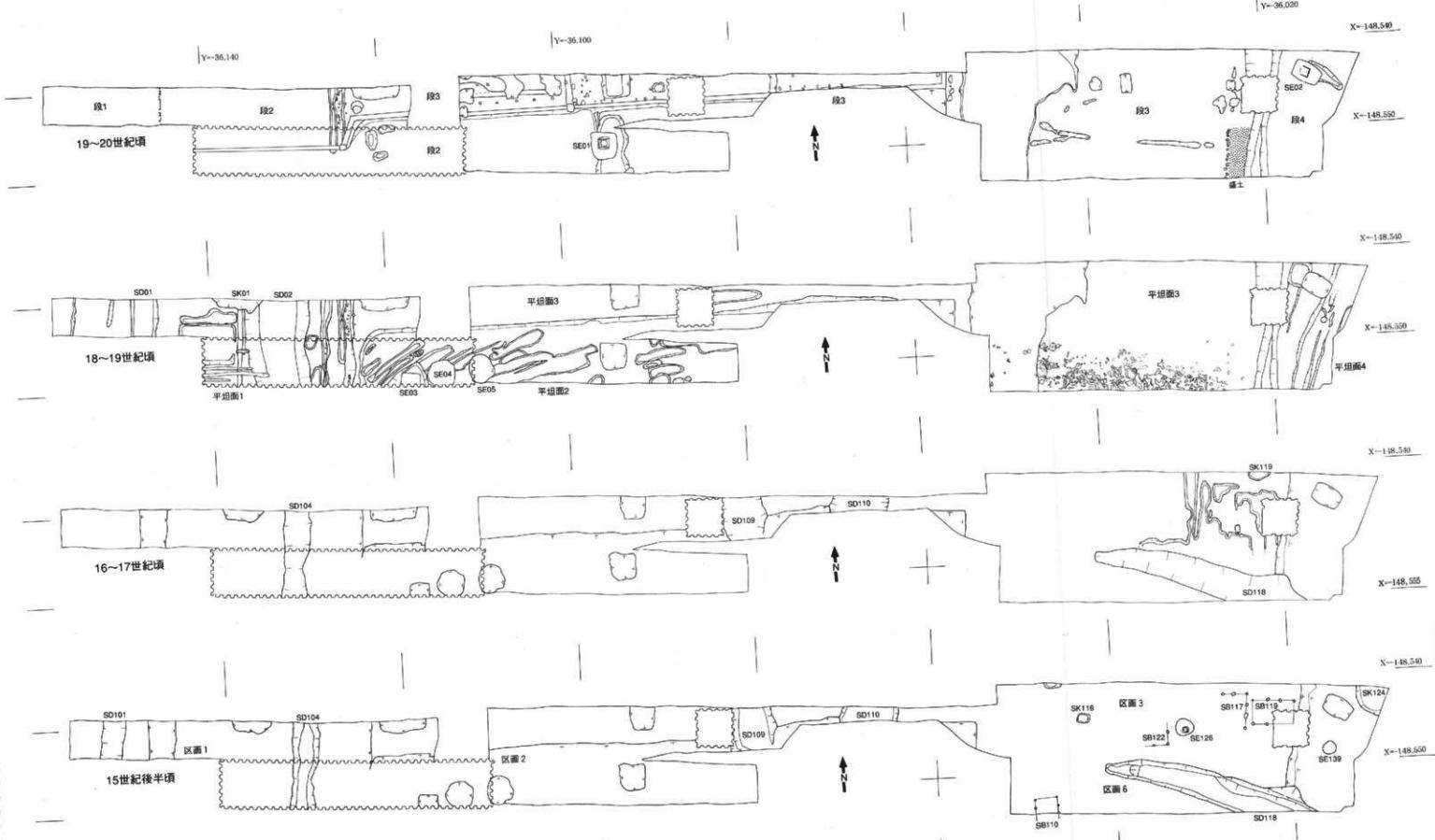


図5-215 歴史時代(現代～中世)遺構変遷図(S=1/400)

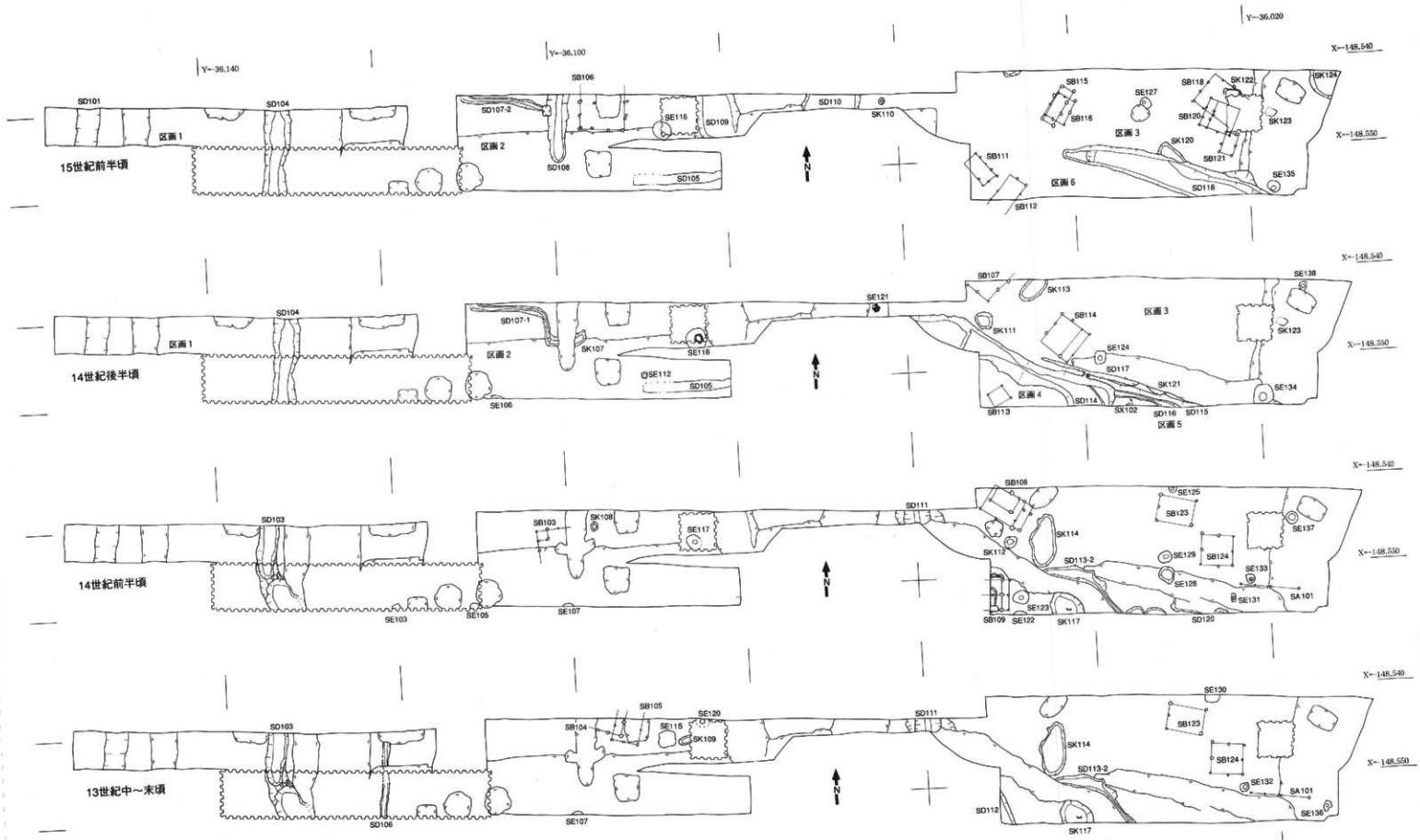


図5.216 歴史時代(中世)遺構変遷図(S=1/400)

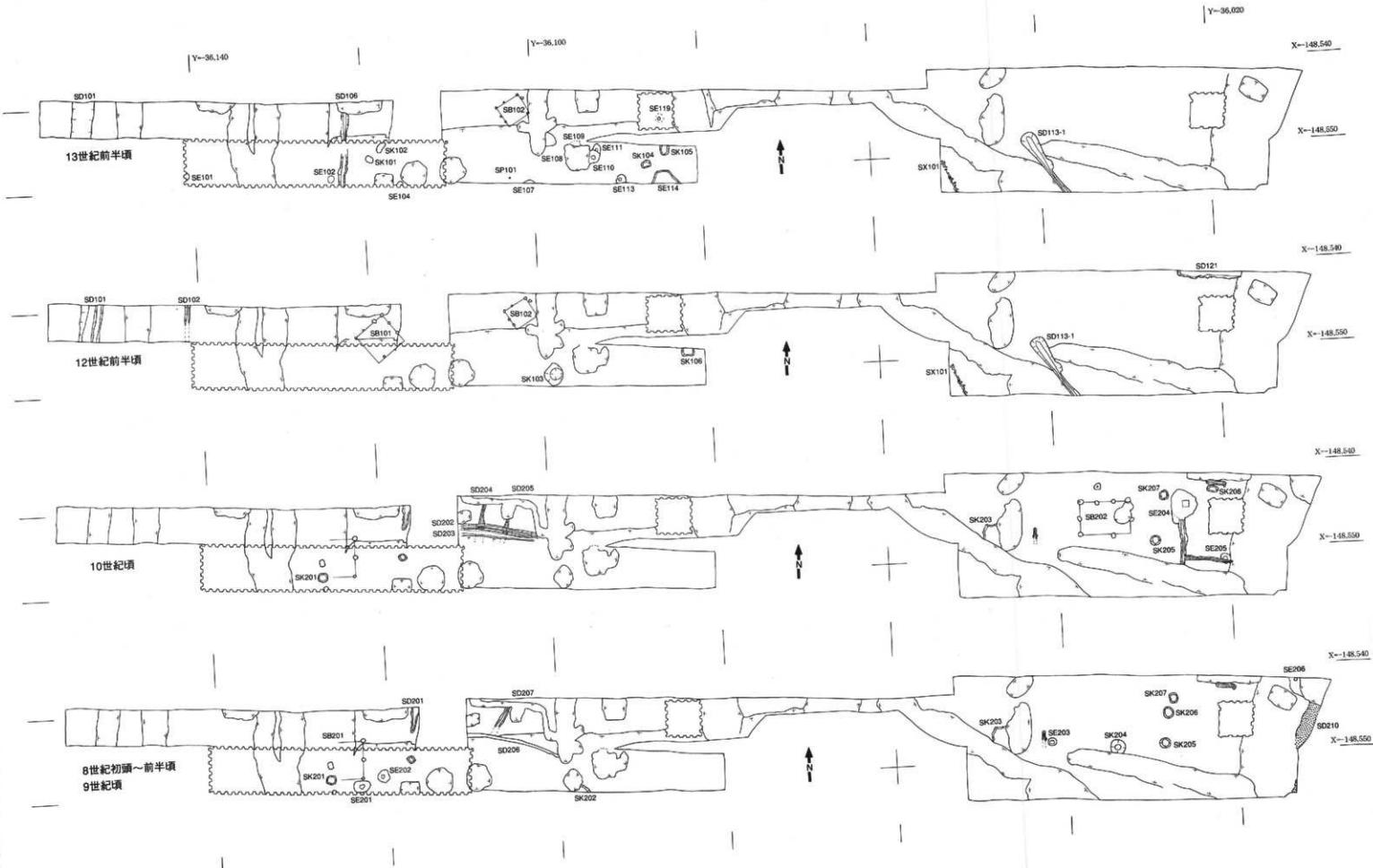


図5.217 歴史時代(中世～古代)遺構変遷図(S=1/400)

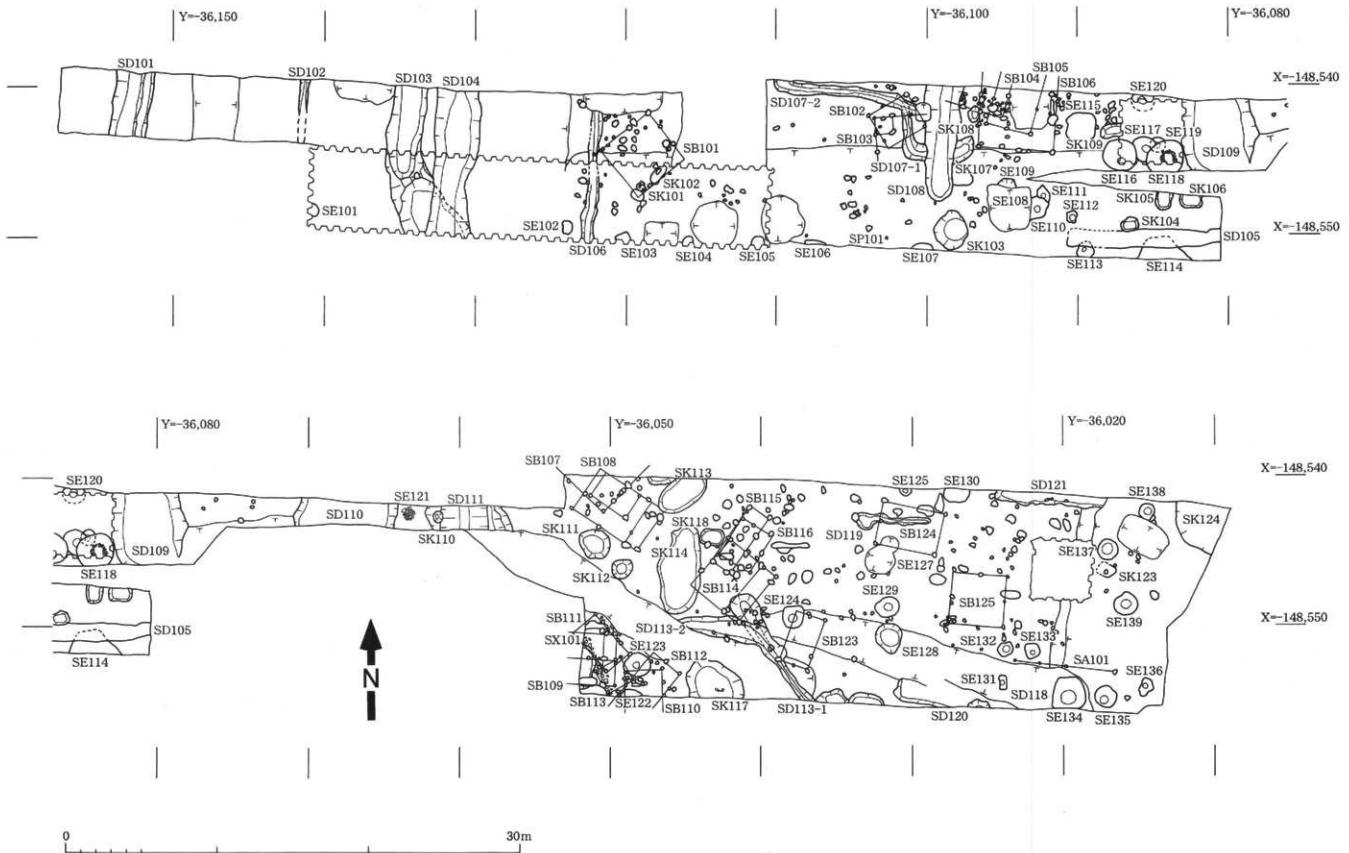


図6.218 V層上面・VI層上面・VII層上面中世遺構平面図(S=1/250)